序言

本書の輪郭—科学的立場—感情の影響—感情は科学に対して無縁でなければならない—社会生理学の若干の原理の要約—富の分配—社会的ヒエラルヒー—エリートの継起—エリートの凋落—貴族階級はたえず更新されなければならない—エリート周流の単なる遅滞が社会に対して致命的な影響を及ぼす—エリートは社会の外から来ることもありうるし、社会の内部で作り出されることもある—エリートは原理的に農民階級から出、厳しい選択の産物である—エリートの周流現象は人々の意識にどのように表われるか—一般に客観的現象と主観的現象とは異なる—歴史と社会学については、社会学から歴史が推論されなければならない—人々は非常にしばしば彼らを行動にかり立てる諸力を意識しない—人々の行動の大多数はその起源を理性のうちに見出さない—しかし人々はその行動が理性に基づいていると想像することを好む—彼らは想像上の原因を発見する—我々はすべての問題を客観的視点及び主観的視点から論ずる—史的唯物論—その欠陥—波動的律動的運動—例—感情の顕著に可変的な形態とはるかに持続的な内容とを混同してはならない—他のエリートを権力から追放しようとするエリートはしばしば自らを被抑圧者の擁護者であるとする—しかし権力に到達するやいなや今度は自らが被抑圧者を抑圧する—この点についての幻想—人道主義的感情の侵入はしばしばあるエリートの凋落を告げる徴候である—権利は力によって実現される—エリートの継起についての具体的事例—社会主義的感情の起源—下層階級の感情—上流階級の感情—科学的観念

本書はもっぱら科学的目的において書かれている。ある学説ないしは動向を擁護しようとする意図、あるいは他の学説ないしは動向を攻撃しようとする意図は本書には関係がない。私は誰かを説得しようとは望みさえしない。私は真実を客観的に探求しようという願望をもっているだけである。

科学は事物、事象のあいだの関係を確定し、そうした関係が呈示する斉一性（ユニフォルミテ）(uniformité)を発見することにのみ専念する。人々が原因と呼ぶところのものの研究は、もしそれによって他の事実と一定の関係のうちにある或る事実が意味されているのであれば、科学に属し、斉一性という先のカテゴリーに含まれる。しかし人々が第一原因と呼んできたところのもの、そして一般に経験の範囲を越えるあらゆる実体は、そのこと自体によって科学の領域の外部にある。

人はしばしば自由主義的経済学、キリスト教的経済学、カトリック的経済学、社会主義的経済学、等について語ろうとする。科学的見地からすればこれは意味をなさない。科学的命題は真か偽であって、それ以外に、自由主義的であるとか社会主義的であるとかといった、別種の条件を満足させることはできない。カトリック的条件、あるいは無神論的条件を導入することによって天体力学の方程式を積分しようとすることは全くの愚行であろう。

しかしたとえこのような付随的性格が科学的理論によって絶対的に追放されたとしても、逆にこれらの科学的理論を研究する人々の内部においては、それらに事欠くことは決してないであろう。

人は全くの理性的存在ではなく、感情と信念の存在でもあり、最高度に理性的な人でさえ、多分明瞭には意識することさえなく、若干の問題については、少なくとも解決が科学

の範囲を越えるような問題については、偏見を免れることはできないであろう。カトリック的天文学や無神論的天文学は存在しないが、カトリックの天文学者や無神論の天文学者は存在する。

科学は、科学的研究、あるいは同じことになるが、実験的研究の範囲外に逃れる問題について感情が提供する解決のなかには、何ら見るべきものをもたない。科学は自らの領域から外に出ようとするたびに、単なる言葉の遊びだけをつくり出してきた。同じように感情も科学的研究の中にはその場所をもたない。そして、不幸にして余りにしばしば起ったことであるが、感情が科学の領域に侵入しようとしたときには、それは深刻に真実の探求を妨げ、誤謬と空想的概念の尽きざる源泉であった。直角三角形の平方の定理を「一七八九年の不滅の原理」によって、あるいは「祖国の未来への信念」によって証明しようと欲することは全く馬鹿げたことであろう。我々の社会において富の配分が従う法則を証明するために、社会主義的信念に訴えるのも同じことである。カトリックの信仰は結局のところ、天文学と地質学が到達した結果に同意した。同じようにマルクス主義者の信念と倫理主義者の信念も経済科学によってもたらされる結果と折れ合うべく努力している。このことについては原典解釈がすばらしい材料を提供している。マルクスが決して価値についての理論を作り上げようとはしていなかったことは既に発見されている。これに積極的意思を少々加えればさらに多くの類似の発見をすることができるであろう。これらは科学があまり気にしない事柄である。

物理諸科学への感情の侵入は常にそれらの進歩を遅らせ、時には進歩を全く■停めて■しまった。これらの科学がこうした有害な作用をほぼ全面的に免かれてからまだ余り年月は経過しておらず、今日それらがなしとげた全く異常な飛躍が始まったのはそれ以降のことである。社会諸科学の場合には逆に全く感情に従属したままにとどまっており(1)、その影響は、物理諸科学の場合と同様有害であり、十九世紀後半においては「倫理主義的」感情の再昂進と社会主義的信念の成長とのために増大しさえした。

(1) L・ドゥ・ソシュール(L. de Saussure)氏の「社会学における科学的立場」*Le point de vue scientifique en sociologie* (*Revue scientifique*, 12 janvier 1901) はこの点について非常に適切に次のように述べている。「社会学的諸科学は今日まだ原初的な局面にとどまっている。起源が最近であるため、社会学的諸科学は、感情的立場からも、功利主義的立場からも自由になっていない。」しかし彼は、社会学の若干の著作は、不幸にしていまだ余りに稀ではあるが、そうしたものから自由になり始めていることをつけ加えるべきであっただろう。実証主義によって開始されて以降宗教的・社会主義的感情の影響下にあり続けている一反動が実際に存在していることは事実である。他方、政治経済学の純粋に科学的な意味における進歩はかなりなものである。F・L・エッジワース(F. L. Edgeworth)の『数学的心理学』*Mathematical psychics*, マフェオ・パンタレオーニ(Maffeo Pantaleoni)の『純粋経済学の原理』*Principii di economia pura*, アーヴィング・フィッシャー(Irving Fisher)の『価値と価格についての数学的研究』*Mathematical investigation in the theories of values and price* 等はもっぱら科学的見地において書かれている。これと類似の一つの試みが私の『政治経済学講義』*Cours d'economie politique* である。一八九六年に出版された第一巻において私は次のように述べた。「政治経済学の論議全体において主要な部分はオフェリミテ

（訳注：ophélimité パレートによる造語、さしあたり、主観的効用と解してよい）の科学と効用の科学によって形成されている。これら二つの科学を分離することはまだ適当でない公算が大である。しかしながらこれら二つの科学と、これまでこれらに詰め込まれてきた道徳的ならびに法的な付属物とをもはや混同しなくなる時点がいまや到来したように我々には思われる。」

L・ドゥ・ソシュール氏が感情的ならびに功利主義的観点を科学から追放するのには正当な理由がある。これは私が既に政治経済学についてしようとしたことであり、さらに私は■ここで■社会学の一小部分についてこの試みをあらためて行ないたい。

G・ネグリ（G. Negri, *L'imperatore Giuliano l'apostata*）氏が次のように述べるのは正しい。「批判的気質を有する人間は、彼が物理現象を見たり、化学者が物体を分析したり、天文学者が星の軌道を測定したりするのと同じ純理的超越をもって道徳的事象を見ることができる。ある種の事柄は感情であり、別種の事柄は理性である。人間の判断を妨げる混乱の真の原因は、人々が理性以外のものは用いてはならないところに感情を用いるということにある。これは致命的な誤まりではあるが、理性が全宇宙を包含していると信じたり、あるいは、短見のために、理性は感情が絶対的かつ抗し難く支配しているところに、知られざる仲間の大群を置き忘れてきていることを理解できなかったりする思想家以上に致命的ではない。」

この現象は容易に説明されうる。人は天文学や物理学、あるいは化学の問題において感情を捨象することの方が、彼の社会的利害や情熱に関係する問題においてよりもはるかに容易である。オーギュスタン・コーシー（Augustin Cauchy）は熱烈なカトリックであり王党派であった。彼がこうした感情を、数学が彼に負うているすばらしい発見の中に、混入させずにいることはきわめて容易であったと想定してまちがいはないであろう。しかし彼が社会的あるいは政治的研究に専心していたのであれば、こうした感情から免れることはるかに難しかったであろう。

社会現象において理性と感情とにそれぞれの分を認めること、それぞれに十分に限定された作用範囲を割り当てること、これはいずれか一方を軽視しようとすることでは決してない。科学の著作をものするに当って私は自然にまた必然的に推論（レゾンヌマン）の領域とどまるのであるが、だからといってこのことは私が感情と信念の領域の存在を否定することを意味しない。読者は逆に、私がある人々には多分過剰と思われるほどに、それらを拡張しているのを見るであろう。私が避けたいと思うのは、長広舌であり、これは社会科学において現在も頻繁に行なわれており、そうした長広舌においては推論が感情と混じり合い、奇妙な合金をつくり出す。

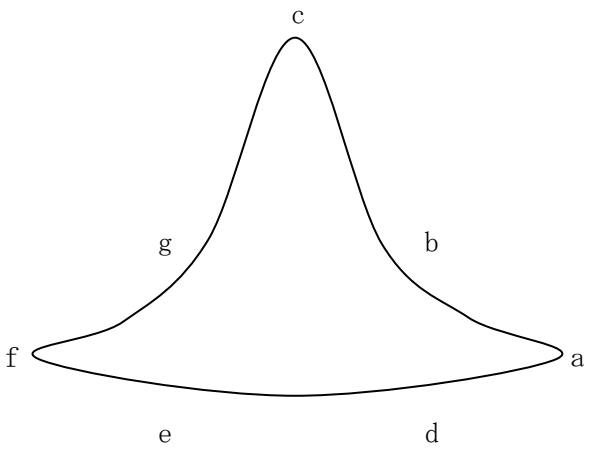
長広舌を避けることは容易なことではない。我々はそれぞれが自己の内部に秘密の敵を持っており、これは我々がこのような道をたどるのを妨げようとし、事実の論理的演繹の中に我々自身の感情を混入させるのを抑制しようとする努力を妨げようとする。このような欠陥を一般的に指摘するに際しては私は自身もこのような欠陥を免れていないことを十分に承知している。私の感情は自由の方向に向かって私をいざなう。それゆえ私はそうした感情に反抗するように心掛けたが、しかしそうすることによって、私が限界を越え、自由のための議論に重みをかけすぎることを恐れて逆にそれに然るべく十分な重みをかけないということも起こりうる。同じく自分の共有しない感情を過小評価ことを恐れて遂にそれらを過大評価するということも起こりうる。いずれにしてもこうした誤謬の源泉が存在

しないと完全には確信できず、この点を読者に告げておくことは私の義務であると考えている。

本書に含まれている批判的研究は、既に私の著書『政治経済学講義』[1]において部分的に説明されている社会生理学のいくつかの原理を既知の事柄と想定している。新たな研究によって導入されたいくつかの追加事項とともに、その原理をここで要約しておくことは有益であろう。

（1）ローザンヌ、一八九六及び一八九七年、ルージュ出版（Lausanne,1896 et 1897, Rouge, editeur.）この著作は本書では省略して、『講義』*Cours*という題名で引用されるであろう。

富の配分曲線は我々の社会においては時代の経過のなかで全く僅かしか変化しない。社会的ピラミッドと呼ばれているものは実際には一種の独楽（こま）のようなものであって、それについての左の図はある観念を与えてくれるであろう。



金持ちはこの図の頂上を占め、貧乏人は底のところに位置している。曲線のabcgfの部分だけは統計データによってよく知られており、adefの部分は推測だけである。我々はオットー・アモン（Otto Ammon）によって示され、我々にも十分に蓋然性があると思われる形を採用した。

曲線の形は偶然に帰せられるべきものではない。この点は確かである[1]。この形は恐らくは人々の生理学的ならびに心理学的諸特性の配分に依存するのであろう。他方部分的にはこの形を、純粋経済学の理論に、すなわち人々の選択に（この選択はまさに生理学的ならびに心理学的特性と関連しているのであるが）、そして生産が遭遇する障害に、結びつけることもできる。

（1）これの証明は数学によってのみ可能である。この証明は『講義』第二巻§ 962 にある。

人々をその富に従って層毎に配分して考えれば、図abcgfedは社会有機体の外形を表わしている。述べたばかりのことであるが、この形はほとんど変化しない。この形は平均においてもかなり短期間についてもほとんど定常と想定することができる。しかし、社会集団（l'angrégat social）を構成する諸分子は静止状態にあるわけではない。ある人々は金持ちになり、またある人々は貧乏になる。それゆえ十分な広がりを持った運動は社会有機体の内部を揺さ振り、社会有機体はこの点において生物有機体に類似している。生物有機体においては、血液の循環がある種の分子を急速に移動させ、同化過程と分泌作用とが、組織を構成する諸分子をたえず更新しているのであるが、有機体の外形、例えば成熟した動物の外形は些細な取るに足りぬ変化しか蒙らない。

他の特性、例えば知性、数学研究への適性、音楽、詩、文学、道徳的資質等に従って層

毎に人々を配分して考えるならば、多分我々がいま富の配分について見出したのと多少とも類似した形の曲線が得られるであろう[1]。富の配分曲線は良かれ悪しかれかなり多数の特性の合成曲線であり、こうした特性の総体が、富を追求する個人、あるいは既に富を獲得してそれを維持しようとしている個人の成功にとって好都合なのである。

（1）R・ベニーニ（R. Benini）氏の重要な論文「社会的ヒエラルヒー」*Gerarchie sociali*（*Rivista italiana di sociologia*, Roma, janvier 1899）を参照。

同じ個々人でも、我々がいま仮に描写した図の中で同じ位置を占めるわけではない。数学的天才あるいは詩的天才の配分を示す図のなかで優越的な層を占める個々人と、富の配分を示す図のなかで優越的な層を占める個々人とが一致すると言明するとすれば、実際これは明らかに馬鹿げたことであろう。道徳的資質あるいは道徳的と見なされている資質についての、そして富についての配分のこのような違いは果てしない詠嘆と雄弁とに場所を与えてきた。しかしながらこの間にはきわめて尤もなものがあるだけである。例えばアッシジの聖フランソワの資質は兵器商人クルップのような人物の資質とは全く別のものである。鋼鉄の大砲を購入する人々が持っているのはクルップのような人物の欲求であって、アッシジの聖フランソワのような人物の欲求ではない。

しかし、人々を政治的ならびに社会的な影響力及び権力の程度に従って配分するとすれば、この場合には大部分の社会において、政治的社会的権力の配分図と富の配分図において同じ位置を占めるのは、少なくとも部分的には同じ人々であろう。いわゆる上流階級はやはり一般的に最も富裕な階級でもある。

上流階級はエリート、貴族（アリストクラシー）[1]に相当する（語原学的意味においてはギリシア語のアリストは「最良」を意味する）。社会的均衡が安定状態にある限りにおいて、上流階級を構成する人々の大部分は良かれ悪しかれ権力を確保するための一定の資質に著しく恵まれているように思われる。

（1）J・ノヴィコフ（J. Novicow）の『良心と社会的意志』*Conscience et volonté sociales* の中にはエリートに関する優れた観察がある。

社会生理学にとってきわめて重要な一事実がある。それは貴族が長続きしないという事実である。彼らは多少とも急速な衰退に見舞われる。我々はここでこの事実の原因を探る必要はない[1]。世襲制によってその座に居座り続けているエリートについてだけでなく、度合いは低いが、入会指命によって仲間入りを許されたエリートについても、こうした事実の存在を確認すれば足りる。

（1）オットー・アモン（Otto Ammon）の優れた著作『社会秩序』*L'ordre social* 第一部のとりわけ第三〇章を参照。この著作全体が注意深く読みかつ省察されるに値する。

戦争は好戦的エリートの絶滅の有力な一原因である[1]。この事実は昔から知られており、

戦争という原因をこの好戦的エリートを消滅させる唯一のものと見なすことさえ試みられてきた。しかしこれは成り立たない。最も根本的な平和の中にあってさえエリートの周流運動は続いているものであり、戦争による如何なる損失も蒙っていないエリートでさえ消滅するのであり、それもしばしばかなり速やかに消滅するのである。単に誕生に対する死の超過による貴族の減退絶滅が問題なのではなく、貴族を構成する構成員の退化も問題なのである(2)。それゆえ貴族が存続しうるのは、このような退化した構成員の除去と新しい構成員の取り込みによってのみである。そこには生きている動物において観察されるのと類似の過程が存在する。動物が生存しうるのはある種の要素を除去し、同化しうる別のものに替えることによってのみである。もしこの循環が止められるならば動物は死んでしまい解体される。このことは社会的エリートについても同じであり、そしてたとえこの社会的エリートの解体がより緩慢でありうるとしても、やはり解体は確実である。

(1) アリストテレスは■ΑθηνΠολιτ■26で、■Ephiate■の改革時代のアテネにおいては権力側に属した人々は戦争によって著しく減少し、各戦闘で権力側エリートの二千人から三千人が死亡したことを記している。イギリスの薔薇戦争は貴族を大いになぎ倒してしまった。

既にThéognis de Mégareの時代から登場するある種のエリートと没落する別種のエリートとが観察されている。中世のフィレンツェ、一八世紀のフランス、等におけるように、新興の金持ちはエリートであった。「生まれのよい人でも—とThéognisは言う—低い氏素姓の人間の娘と結婚することを、もし彼女が大金を持っているならば、拒否しない」(185-186)。「富は氏素姓をごた混ぜにする—■ギリシア語1行」(190)。ボッカチオは、VII, 22において、昔のエリートの妻と結婚した金持ちの商人であるフィレンツェのジョルジュ・ダンダン(Georges Dandin)なる人物を登場させている。■(訳注：デカメロンと明示?のこと)

(2) このことは昔から学者にも文学者にも知られていた。ジャコビー(Jacoby)—ラプージュ(Lapouge)の『社会淘汰』*Les sélections sociales*, p.474に引用されている—は「あらゆる貴族が結局は衰弱、神経衰弱あるいは精神病によって終わりを遂げることを示した」。これには誇張があるが、真実の核心も存在する。

国際統計研究所報告*Bulletin de l'institut international de statistique*の第十二巻にはスウェーデンの貴族に関するP・E・ファールベック(P. E. Fahlbeck)氏の重要な研究が含まれている。彼は家族の存続に関する次のような表を示している。

	時代を超えて生き延びた家族	
年数	単なる貴族	伯爵及び男爵
0	1000	1000
25	797	764
50	626	630
75	513	537
100	431	470
125	358	427
150	309	398
175	266	
200	237	
225	230	

彼はスウェーデンの貴族については、肉体的奇形、アルコール中毒、神経衰弱、狂気といった症候が「国民全体におけるよりも高い水準で」観察されることはないと結論した。「貴族の創始者は一般にある種の社会的選択を呈示している。たとえ彼らの子孫が優越的な自然的素質を遺伝的に継承しなかったとしても、子孫は我々が述べたような退化の特徴を全く示していない。スウェーデンの貴族において観察されうる退化はもっぱら繁殖力と関係している。繁殖力が段々減退し

ており、それとともに子供の生命力も減退している…。このことの原因は全く仮説的に説明しうるだけであるが、その原因を一般に頭脳及び神経の過度の使用あるいは洗練された習慣の中に見ることができる…。同じような種類の退化があらゆる上流階級において常に、そしてあらゆる所で見られないであろうか。」

この循環の単なる遅滞だけでも結果として、まだ権力を保持している階級に含まれている退化分子の数を相当に増加させ、他方、従属的階級に含まれている優秀な資質の分子の数を増加させることになる。この場合社会的均衡は不安定になる。外部あるいは内部からの最小の衝撃でも均衡を破壊する。征服あるいは革命がやって来てすべてを転覆させ、新しいエリートを権力の座に昇らせ、新たな均衡を樹立し、この新しい均衡は多少とも長期にわたって安定するであろう。

アモン氏とドゥ・ラプージュ氏は、エリートの、優生学的エリートの人類学的特徴を与えようとして余りに特化させすぎ、彼らを長頭金髪に同定している。さし当りこの点は謎のままであり、エリートの心理的特性が外的、計測人体学的な特徴によって説明されうるかどうかを決定しうるためには、そしてこうした外的特徴が正確に如何なるものであるかを知りうるためには、いまだ長期にわたる研究（エトランジェール）が必要である。

ヨーロッパの現代社会にとって、異質の優生学的種族による征服は、バルバロイ、ゲルマン民族の最後の大移動以降はあらゆる意味を失ない、もはや存在しない。しかし将来においてこれが再び起こりえないことを示すものはなにもない。もしヨーロッパ諸社会が倫理家にとって大事な理想に従って作られなければならないとしたら、そして、弱い者、堕落したもの、怠け者、非適応者、博愛家の言う「小さく貧しい者たち」に系統的に味方して、エリートを構成する強く精力的な人間たちを犠牲にし、選択淘汰を妨げるようになるならば、新たな「バルバロイ」による新たな征服が全くあり得ないことではなくなるであろう。

実際我々の社会にあっては、エリートが存続しうるために欠くべからざる新しい分子の取り込みは下層階級から、主に農民階級から行なわれる(1)。農民階級は未来のエリートがひそかに生成される坩堝である。それは植物の根であり、エリートはその花である。この花はやがて色あせしおれるものではあるが、根とつながっていなければすぐさま別のものによって取って代られるものである。

（1）オットー・アモン前掲書、p.210.「下層階級、結局のところ農民階級の上昇と上流階級の消滅は社会体において緊密に相関している二つの現象である。」さらにp.215では次のように言う。「社会機構が規則正しく働くためにはその条件として、下層の社会層が上流階級の更新に必要な素材を現実に供給し続けることが必要である。もしこの素材が欠けるようなことがあると、最も完璧な組織でも救いようがないであろう。」これ以上うまくは言えないであろう。

事実は確認されているが、その原因はいまだ余りよく分かっていない。しかしながら、下層階級の中で、とりわけ子供たちについて作用する厳しい選択淘汰が最も重要な影響を及ぼすらしいことは、大いに考えうることと思われる(1)。富裕階級は子供が少なく、そしてほとんどすべての子供を生きながらえさせる。他方貧困階級は多くの子供をもうけ、特

に頑健で才能に恵まれていない子供の大部分を失う。同じ理由によって、動植物の完成された種族■（race?）■は、普通の種族に比べて非常に繊細である。ペルシア猫は普通の飼い猫よりもなぜはるかに繊細な動物なのであろうか。彼らは始終世話されているからである。人はペルシア猫の産んだ仔猫であれば全部生かそうとするが、普通の、野良で腹を空かせている不幸な猫の産んだ仔猫のうち助かるのは、傑出した健康に恵まれているものだけである。小麦が幾世紀ものあいだ受けてきた手入れは、この植物が生存競争に耐えることを不可能にした。野生の小麦は存在していないのである。

（1）第十章を参照。

我々の社会の富裕階級に対して多くの子供をもつようにと説得しようとする倫理家たち、正当にもある種の淘汰様式を避けようとはするが、別の淘汰様式を考えようとはしない人道主義者たちは、それと知らずに、種族の衰退、没落のために努力しているのである。我々の社会においてもし富裕階級が子供をたくさん持つならば、彼ら富裕階級はほとんどすべての子供を生きながらえさせ、最高度に虚弱で才能もない子供さえ生かすことになるであろう。そうなれば上流階級における退化した分子をそれだけ増やすことになり、下層階級出身のエリートの上昇を遅滞させることになるであろう。もし下層階級において選択作用が働かなくなれば、下層階級はエリートを産み出すことをやめ、社会の平均的質は相当に低下するであろう。

下層階級のなかで特に選択の素材を産出する特権を持つように見えるのが農民階級であるのは何故かを説明することは、それほど容易ではない(1)。他方では、植物や動物についても、類似的な現象で、その存在は確認されていても説明はされていない現象がきわめて多数存在する。例えば、ある種の質の亜麻を作るためにはリガの亜麻の種子を用いなければならないといった事実である。トスカナで栽培され、いわゆるフィレンツェのわらを提供する小麦の種子はイタリア東北部ロマーニャから来るものであり、急速に劣化する。最も美しいヒヤシンスの球根はオランダ産であるが、別の国では劣化する。

（1）オットー・アモン、前掲書、p.209.「かくして国家及び社会にとっての農民階級のきわめて大きな重要性を見なければならない。農民階級は結局のところ、それだけでは自己を維持することのできない他の全ての階級の人員募集のために人員を提供しなければならない。」しかし、近代産業もイギリスやアメリカにおいてはエリートを―例えば労働組合の労働者エリート―を産み出す能力のある労働者階級をつくり出す点をつけ加えなければならない。

農民階級がその筋力を発達させ、頭を休息させているという事実そのものが、まさにその結果として、筋肉を休息させその頭を過度に働かせる人々を産み出すということも考えられる。■いずれにしても、農民的生活は、文明化された大中心地における過度に活動的な生活がむさぼり食ってしまう、備蓄をつくり出すのに非常に適しているように思われる。■

新人員補充あるいはそれと類似の別の方法によって募られるエリートの没落は、別の、部分的には不明の原因を持っている。この種のエリートについて直ちに浮かぶのはカトリ

ック聖職者のエリートである。九世紀から十八世紀にかけてのこのエリートたちはいかに深刻な衰退を蒙ったことか。この場合、この現象の中で遺伝は相当な役割を果している。彼らの没落の起源は、エリートが補充される際にますます凡庸な質の素材が選ばれたという事実にある。部分的にはこの事実は、このエリートたちが徐々にその理想を見失い、信仰と犠牲の精神によって支えられることがますます少なくなったことに由来する。またこの事実は部分的には、外的状況、すなわち別種のエリートが現われ、没落しつつあるこのエリートたちからより抜きの素材を奪い取ったことに由来する。このようなより抜きの素材の国民の残りの部分に対する割合はほとんど変るものではなく、もしそうした素材がある一方に片寄るならば別の方面ではそれの不足が生ずるであろう。もし商業、産業、行政等がこうした素材に対して広大な進出口を提供するならば、必然的に別種のエリート部門、たとえば聖職者にはそうした素材が不足することになるであろう。

エリート周流の絶えざる運動によって社会の下層から現れ、上層に昇り、そこで花咲き、次いで没落過程に入り、破壊され消滅するエリートというこの現象は歴史の原理の一つであり、大規模な社会の動きを理解するためにはこの点を考慮に入れることが不可欠である。

この客観的現象の存在は実にしばしば我々の情念と偏見によって覆い隠され、この現象についての我々の知覚理解は現実とはかなりずれている。

一般に常に、具体的な客観的現象と、我々の精神がそれを知覚理解する形式、別の一現象をなすところの形式、主観的と呼ぶことのできる形式とを区別すべきである。ありふれた例で事柄を説明するならば、真直な棒を水の中に浸けることは客観的現象である。我々はあたかもこの棒が折れ曲っているかのように見る。そしてもし我々がこの間違いに気付かなければ、我々はその棒をそのようなものとして描写するであろう。これは主観的現象である。

ティトゥス・リヴィウス（訳注：Titus Livius,ローマの歴史家、前一世紀から一世紀の人）は、平民の家系が権力に到達する過程を画するいくつかの事実を説明するためにある逸話を紹介するに際して、現実には真直な棒を折れ曲ったものと見ている。それ自体としてはしばしば起きる小さな事件ではあったが、重大な結果を引き起こした事件が発生した、と彼は言う。一方は世襲貴族と結婚しており、他方は平民と結婚している、M・ファビウス・アンブストゥスの二人の娘のあいだの嫉妬が、平民の方にこれまで彼らには与えられていなかった権勢を獲得させる結果となったと言うのである(1)。しかし近代の歴史家の論拠はこの曲った棒を真直にしている(2)。ニーブール（Niebuhr）はローマにおける新しいエリート、すなわち平民貴族の上昇運動をしかるべく理解した最初の一人であった。彼が特に導きの糸としたのは、我々の今日の国々におけるブルジョアと人民とのあいだの闘争のアナロジーであった。このアナロジーは現実的である。というのも、そこには単一にして同一の一般的現象の、あらゆる特殊的事例が存在しているからである。

（1）　ティトゥス・リヴィウス（Tite-Live）、VI, p.34.

（2）　デュリュイ（Duruy）、『ローマ人の歴史』*Hist. des Romains*,I, p.262.「準備されていた革命は、トロイ戦争の原因がヘレネ（Hélène）の奪取ではなかったのと同様に、女の嫉妬によるものではなかった。それは一二〇年来追求され一日として止むことのなかった闘争の最後の一幕であった。」

歴史上の大事件を個人的な小原因に帰する考え方は今日ではかなり一般的に捨てられているが、しかししばしばもう一つの誤謬がそれに取って代っている。個人の影響を全く否定する考え方である。アウステルリッツの戦闘は、ナポレオンとは別の将軍によって、もし彼が偉大な軍人であったならば、勝利されることもありえたことは疑いないが、もしフランス軍が無能な将軍に指揮されていたならば、彼らは完全に戦闘を失っていたであろう。ある誤謬を免れる方法は、その対極の誤謬に陥ることのうちにはない。我々には折れ曲がって見える、真直な棒が存在するからといって、現実に折れ曲った棒が存在しないと考えるべきではない。主観的現象は客観的現象と部分的に一致しており、またそれとは部分的に異なっている。事実についての我々の無知、我々の情熱、偏見、我々の住んでいる社会で流行している観念、我々の心を揺さぶる事件、そしてその他幾千の状況が我々から事実を隠し、我々の印象が、それを生み出した客観的現象の正確な模写たることを妨げる。我々は対象を曲った鏡の中で見る一人物という状況にある。対象の規模の均斉の一部は変化してしまう。ところで、ある事件に居合わせた人々の精神状態についての直接の調査によるにせよ、あるいはこの調査に従事した歴史家の間接的証言によるにせよ、我々が唯一知ることのできるのは、大抵主観的現象、すなわち歪められた客観的現象だということに留意する必要がある。それゆえ史料批判が解決しなければならない課題は単にテキスト批判であるどころか、さらに、原理的に、対象の歪められた像を所与として対象そのものを再構成することにある[1]。

（1）R・フォン・イエーリング（R. von Jhering）は『ローマ法の精神』*L'esprit du droit romain* の中で、法についてのこの準則を非常に適切に指摘している。「たとえ、我々が（法の）規則をすべて手にしていても、我々はいまだ（ある時代の）その法の正確な像を持っていることにはならないであろう。規則が我々に与えるものはその法の時代が持っている意識であって、法そのものの持っている意識ではない。…法の規則が存在をやめてからずっと後にそれを発見しようとすることは一見逆説的ではある。しかしこのことは現実にそれほど無謀なことであろうか。歴史的事件が最初に理解されるのはそれが起こってからずっと後のことである。」序論第二部第一章第三節 Introd., Tit. II, chap. 1, § 3.

この再構成の作業は一般に難しく微妙な作業であり、さらに特異な事情によって一層困難なものとなる[1]。実にしばしば人々は彼らを行為させる諸力を自覚しないものであり[2]、自らの行為に対して、現実の原因とは大きく異なる想像上の原因を充当するものである。かくして他人を欺す人間が常に悪意であると信ずることは誤りである。逆にそうしたことはきわめて稀であって、大抵こうした人物はまず自分自身を欺すのであり、世にも誠実に想像上の原因の存在を信ずるのであり、自らの行為を決定した要因としてそれを言うのである[3]。ある社会的運動に居合わせた人々の証言、あるいはその運動に関与していた人々の証言でさえ、それゆえ、運動の現実の原因については、留保なしに受け容れる必要はない。こうした人々も、我知らず、現実的原因を無視し運動に対して想像上の原因を帰する方向に引きずられることがありうる。

（1）私はこの問題を展開し、「社会学理論の一応用」Un' applicazione di teorie sociologiche (*Rivista*

italiana di sociologia, Roma, juillet-août 1900）においていくつかの応用ケースを挙げておいた。

（2）R・フォン・イエーリング『ローマ法の精神』序論第二部第一章第三節（R. von Jhering, *L'esprit du droit romain*, Introd., Tit. II, chap. 1, § 3.）「ローマ古典古代の法律家の能力がいかに偉大であったとしても、当時においてさえ彼らには知られないままにあり、現代の法律学の努力のおかげで初めて明らかにされた法律規則が存在している。私はこれらを法の潜在規則と命名する。そうした規則を適用するためにはその規則を知っていなければならないのではないかという点を挙げて、そうしたことはありうるのかと問う人もあるかもしれない。これに答える代りに我々は言語の法則を参照すればよいであろう。幾千もの人々が毎日、彼ら自身は話題にしたことがなく、学者も必ずしも十分には自覚したことのないこの規則を適用している。しかし理論の及ばない部分は感情によって、文法的本能によって補われている。」J・ベンサム『政治的詭弁家の議論を伴なう政治的集会の戦術』J. Bentham, *Tactique des assemb. polit. suivi d'un traité des soph. polit.*, II, p.228. 「しかし一人物の精神に対して絶えず働きかける動機が彼自身にとって秘密であるといったことはありうるであろうか。然り、たしかにそうしたことはありうる。これほどやさしいことはないし、ありふれたこともない。さらに言えば、そうした動機を知らないことではなく、それを知っていることが稀なのである。」

（3）グローテ（Grote, 1794-1871. 英）は『ギリシア史』(*Hist. de la Grèce*, t. VI, ch. VI)の中でピタゴラスについて論じつつ、彼を「ペテン師」とみなす必要はない、と言う。「なぜなら、経験の証明するところでは、一定の時期にある人物が別の人物に対して自分は霊感を得ていると説得することが困難ではないとすれば、そのことを自分自身で信じ込むことはより一層困難ではないと思われるからである。」二人の人物が人を欺く意図は全くもたずに、同一の事実を全く違った形で物語るということがありうる。彼らはその事実をただ彼ら自身の情念と偏見のプリズムを通して見るのである。

十字軍に出掛けるに際して、貴族高潔の士は一人ならず、自分たちは純粋な宗教感情にのみ従っていると心から信ずることができた。彼らは自分たちが彼らの種族の本能の一つ、タキトゥスが古ゲルマンについて既に次のように叙述している本能に屈しているだけだとは思いも寄らなかった。タキトゥスは次のように書いているのである。「自分たちの生れた国が平和と無為の中で停滞し無気力になってくると、多くの若者たちが戦争をしている国々に身を捧げるようになる。こうした人々にとって休息は苦痛であり、危険な企ての中で名を上げることは容易だからである。」（『ゲルマニア』一四）。

ペルシア人の侵入を恐れたアテネ人たちはデルフォイの神に伺いをたてに人を遣わした。デルフォイの神は次のように答える。「全知のゼウスは、それだけで難攻不落の木の壁を海の神に授ける…おお、神々しいサラミス島よ、御身は女の子供たちの命を奪うであろう…」。神は何を言おうとしたのであろうか。ヘロドトスの語るところによれば、これはアテネ人たちが立てた問題であったが、彼らは人員及び荷物もろとも助かるための最良の方法という、実践的相において問題を論じたようには少しも見えない。ある者たちは「木の壁」とは昔城砦を取り囲んでいた木の柵であると言い、またある者たちはそれは船団のことであると言っていた。テミストクレスは後者の見解を採用して次のようにつけ加えた。神はアテネの勝利を予言している、なぜならサラミスで滅びなければならないのがアテネ人たちであるのならば、ピュティア（アポロンの神託を告げたデルフォイの神殿の巫子）は「お

お、神々しいサラミス島よ」とは言わずに、「おお、不幸なサラミス島よ」といったような表現を用いたであろう(1)、と。

（1）Hérod., VII, 143.

今日ではもはや、アポロンも海神も、さらにはゼウスの神さえも信ずる人はいないと考えてよいであろう。それゆえ人々はこのような事実について自由に語ることができるし、解決すべき問題が解釈の問題とは全く別種の問題であったことを認めることもできる。はるかに現実的な別の問題が存在していた。強力な船団の存在である。ヘロドトス（VII, 144）はこの事実を単なる偶然の一致として書きとめている。「以前にはテミストクレスの別の見解が首尾よく優勢を占めていた。彼はアテネ人たちに二千の軍艦を建造するために宝物資源を用いるよう勧告していた。」ヘロドトスはもっぱらこの主観的現象のみを叙述している。そして当時の多くの人々も彼と同じ見解であったに違いない。アポロンの託宣は、一連の論理的演繹によって、サラミスでもたらされた勝利の原点となる主要な事実であった。アテネ人たちは、ユークリッドが幾何学の定理を発見したのと同じように、正しい解釈を発見するという功績をたてたのである。

テミストクレスをして船を準備せしめた実践的動機が、サラミスでそれを用いるかどうかを決定する際に少しも影響していないと信ずることは難しい。人はそれゆえ、彼が託宣の解釈に訴えたのは外見だけであり、アテネ人たちに自分の考えを傾聴させるためだけであったと考えたくなるであろう。たしかにこれはありうることであり、そして我々としてはこの点についてテミストクレスが実際に考えたことは決して分らないであろう。しかし、今日起っていることから判断すれば、彼がその解釈において誠実であったということもありうることである。人は託宣ばかりでなく、どのような意味においてであれ、科学的提案をも、容易に、そしてそうとは自覚せずに解釈するものである(1)。テミストクレスは彼が準備させた船団を利用したいという願望をもっていたに違いない。そして彼が託宣をこの方向において解釈したであろうことは、多少とも本能によってである。かくして彼はまず自分自身を説得し、次いで全く誠実に他の人々を説得したのであろう。

（1）ニーチェが哲学者たちに対して行なう非難のなかにはなんらかの真実が存在する。「彼らは、冷たく純粋で神々しいくらいに無頓着な一弁証法（この点で、「霊感」について彼らよりも正直に、そして重々しく語る各ランクの神秘家たちとは異なる）の自律的展開によって彼らの見解を発見したという振りをする。しかし結局のところは、予め先取りされた命題、抽象的でふるいにかけられた一観念、示唆、大抵は心の願望が、苦労して探求された理由にもとづいて、彼らによって擁護されているのである。」（『善悪の彼岸』 *Par delà le bien et le mal*, trad. franç., p.7）

G・ソレルは■「社会主義の法的側面」（*Les aspects juridiques du socialisme, Revue socialiste*, nov. 1900）において、ペクール（Pecqueur）の議論について語りつつ次のように言う。「この議論は我々の心を非常に深く捕える。なぜならこれは我々の批判的ないしは科学的能力についてよりもはるかに多く我々の詩的能力について論じているからである。」ペクールは次のように言明する。「素材は神によって集合的かつ平等に我々に与えられている。しかし労働は人間である。聖パウロは、働かざる者食うべからずと言った。この言葉のなかには未来の社会経済学及び政治経済学の全体が

萌芽において存在する。」この点について、G・ソレルは大いに正当に次のように言う。「この公式を認める人はすべて資本家の利益を拒否するであろうことは明らかである。しかし、ペクールがこの公式を認めるとすればそれは彼が資本主義体制を拒否するからだということもまた明らかである。もし彼が最初から資本主義の敵対者でなかったならば、彼は「素材は集合的かつ平等に我々に与えられている」ということを肯定しないであろう。ベルンシュタインは、その師であるマルクスにおいてさえ、科学的体裁にもかかわらず、結論はしばしば論証以前に措定されていたことを十分認識していた。」

我々は日々類似の事実を目にしている。ある人物が生活している条件を考慮しながら我々は彼があるいくつかの見解を表明するのを聞くこともしばしばあると考えてよいであろうが、彼はこの点を自覚することはなく、全く別の理由によって自分の見解を正当化しようとする。

多くの人々は、彼らがある論証によって説得されたからということで社会主義者であるのではない。大いに違う。彼らは社会主義者なるゆえにその論証に同意するのである。

人々がその行動を規定する動機について自らつくり出す幻想の源泉は種々様々である。主要な源泉の一つは、人間の行為の大多数が推論の結果ではないという事実のうちにある(1)。それはもっぱら本能的なのであるが、それを遂行する人間はそれに論理的原因を恣意的に付与して快を感ずるのである。人間は一般にこうした論理の質については余り気むずかしくはなく、論証の外見だけできわめて安易に満足する。人間はこうしたものが全くなくては苦痛を感ずるであろう。

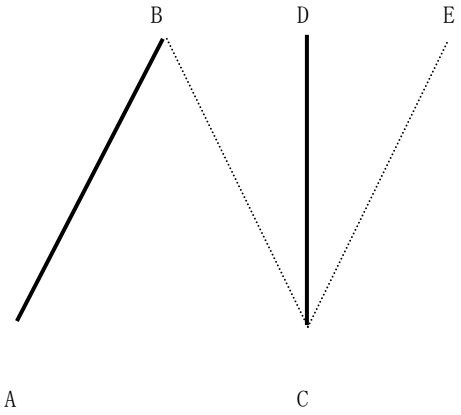
(1) この観点はハーバート・スペンサー(Herbert Spencer)によって非常に見事に要約されている。「観念は人間社会を統治することもないしひっくり返すこともない。人間社会が統治されたりひっくり返されたりするのは感情によってであって、観念はただ導き手として感情に奉仕するのである。社会機構は最終的に世論の上に立脚するのではなく、ほとんど全面的に国民の性格(カラクテール)に立脚するのである。」『社会静学』*Statique sociale*, ch.xxx, reproduit dans: *Classific. des sciences*, trad. franç. p.115-116.

G・ル・ボン(G. Le Bon)は『国民進化の心理学的法則』*Lois psych. de l'evol. des peuples*, p.30. の中で次のように書いている。「一国民の歴史における進化を規定しその運命を規制するのはその性格であってその知性ではない。…国民の性格の影響力は国民の生活において支配的であるが、知性の影響力は実に微弱なものである。」この提題のうちには真実が存在するが、同時に誇張も存在する。ありふれた誤謬を免れるためにG・ル・ボンは全く対極の誤謬に陥る。自らの提題を証明するために彼は次のようにつけ加える。「頽廃期のローマ人たちは彼らの粗野な祖先たちよりもはるかに洗練された知性を有していたが、彼らは性格の美質(les qualités)を失った。…」この主張は事実に反する。皇帝■Gratien■や■Sidoine Apollinaire■の同時代人たちが、シーザーやキケロ、あるいはアウグストゥスやホラチウスの同時代人たちよりも「はるかに洗練された知性」を有していたなどと言明することは如何にして可能なのか。頽廃期のローマ人たちは正確にラテン語を書くことさえ出来なかったのである。この点で「性格」とは何を意味すべきであろうか。■Ausone■はヴェルギリウスよりも「はるかに洗練された知性」を持っていたと正当に主張することは可能

であろうか。

我々はアウグストゥスの時代を挙げたい。ローマの力が最大になった時期だからである。

一つの図が事態を多分よりよく理解させるであろう。Aは現実的原因―その現象も同様に現実的である―であり、Bは結果である。人々はAとBとのあいだにおける現実的関係の存在を無視するか、あるいは無視しようと欲する。そしてBをなんらかの原因と連結すべき欲求を感じ、BをCの結果と主張する。いくつかのケースが考えられる。



一．Cは現実に存在してはいるが、Bはその結果ではないケース。これは性急な一般化、不十分な観察、欠陥のある推論によってかなりの頻度で生ずるケースである。関連CBは叙述する人物の想像の中にのみ存在するものである。現実には、こうした人物はこれを認めようとしないのであるが、Cの結果はDである。別のケースでは人は完全にこの結果を認識しているのであるが、それを避けたいと願い、関連CBを証明しようとするのはこのような意図においてである。これは決疑論の起源の一つである(1)。二．これは想像によるものではあるが、CをBに結びつける関連は厳密に論理的であって、すなわち、もしCが存在するならばその結果はBであろうというケースである。何故に水はポンプの中で上昇するのか。自然は真空を恐れるからである。水が吸い上げポンプの中で上昇するという事実は現実的である。真空を恐れるということの結果は論理的である。しかし自然およびその真空恐怖の感情というのは想像上の実体である。人が生命力によって説明してきたいくつかの事実はしばしば現実的であったし、推論が間違っていないということもありえたのであるが、しかし生命力なるものは未知の事物である。人がたとえば法的擬制において想像上の原因Cに訴えるのは時に故意によってである(2)。三．Cが想像上のものであるばかりでなく、CをBに結びつける関連も論理的でないというケース。この誤謬は形而上学者においてしばしばみられるものである。かくしてヘーゲルの『自然哲学』の中には、不可解な推論によって現実的現象の説明が演繹される際の出発点となる、いくつかの未知の実体があらわれてくる。この種の論考が極端にまで押し進められると、それは全くの夢想にまで退化する。ギリシアの神話が、東洋の神話に不愉快を感じる明晰な精神にとって魅力的である理由は、多分部分的には、ギリシアの神話が第二のケースに近く、東洋の神話は第三のケースに近いということに因るであろう。ホメロス、アイスキュロス、ソフォクレスの神々は想像上のものではあるが、その存在をいったん承認すれば、それらは余りに非論理的に行動するということはない。しかるに東洋の神々とくれば、その存在を認めることに努力が必要であるばかりではなく、各瞬間ごとにその努力を繰り返さなければならないのである。その行動様式に理解可能な

ものが何もないからである。四．最後に説明さるべき事件そのもの、すなわちBが想像上のものであるというケースを考慮しなければならないであろう。さらにこのような事件を、厳密な推論によって、あるいは厳密さも正確さもない推論によって、ある現実的な原因に、あるいは想像上の原因に、それぞれ結びつけることも可能である[3]。

（1）　後述■p.27（原文）■を参照。
（2）　第四章を参照。
（3）　この研究は社会学にとってはきわめて重要である。これについては別のところで採り上げるであろう。ここでは、問題にとって厳密に欠くべからざるものについてのみ説明する。

客観的現象の研究は、共に現実的な事実AとBとを結びつける相互依存の関係が如何なるものであるかを探求することにある。主観的現象は、人々が現実的関係に代置する関係を発見すること、あるいはさらに創作者が共に想像上のものである事柄CとEとのあいだに想定するCEといった関係を発見することを目的とする。

本書においてはあらゆる問題がこの二重の観点から、すなわち、我々が客観的と名づける観点および主観的と名づける観点から、可能な限り考察されるであろう。一方では、我々はあるいくつかの社会システムの樹立あるいはそうした社会システムの計画の開花を助長する現実的事実がどのようなものであるか、換言すればこのような形において我々に示されうる事物および事実とはどのようなものであるか、を探求するであろう。他方では、このようなシステムないしはその計画を正当化するために用いられる推論がどのようなものであるかを検討し、また、諸前提がどの点まで経験から引き出されているか、そして演繹がどの点まで論理的であるかを見るであろう。

この研究の種々の部分のそれぞれの大きさは遺憾ながらそれぞれの実践的重要性と釣り合わせることはできない。この点については、我々はほとんど客観的研究に限定しなければならないであろう。また種々のシステムの支持者が満足する推論がどのようなものであるかを我々に知らしめるせいぜい主観的研究の部分に限定しなければならないであろう。本書の大きな部分を占めているのであるが、こうした推論の論理的価値の研究は、哲学的思弁として好奇心をそそり興味あるものではあるが、実践的重要性は貧弱なものである。ある教義の普及はそれの論理的価値にはほとんど依存しない。そのうえ、ある教義の社会的効果をそれが有する論理的価値によって判断しうると信ずる人間は甚大な誤謬に陥ることになるであろう[1]。

（1）　L・ドゥ・モラン（L・ドゥ・ソシュール）L. de Morren（L. de Saussure）は『環境と種族』*Les milieux et les races*, février 1901, p.41.において次のように書いている。「ある新聞が中国における出来事を読者に説明するために、孔子（Fong-Shaui）の教えを説明した。これを読むことによって読者は中国人の行動をよりよく理解するであろうか。それを読めば確かに彼らは中国の環境と彼らの環境との相違についてある新しい観念を得るではあろう。しかし、それは読者に、中国人の信念と中国人の行動とのあいだに存在する因果関係についての大いに誤れる知識を与えることになる。なぜなら読者は教義という舞台に立たされることによって、教義としての孔子を判断する。すなわち論理的観点から孔子を判断することになるだろうからである。…読者はこの教義の論理の

なかに中国人の行動の説明を見出そうとするであろう。ところでこの教義は甚だしく非論理的である。それゆえ読者はこの記事を読むことによって、中国文明の安定性についてよく理解する代りに、中国文明に対する嘲弄の印象をうけ取るであろう。…孔子の論理的貧困によってもたらされるこうした判断は、それ自体としてはたしかに不正確とは言えないであろう。なぜなら、概念において争うべからざる役割を演ずるのは論理であり、概念は概念としてそれが感情の方向性を支配するのだからである。しかしこうした判断は、次の点で重要な事柄を無視している。すなわち、ただ概念の論理のなかにのみ行動の説明を見出そうとしている点、また、こうした説明はとりわけ中国人の感情、我々がこの場合直観によっても、概念の純粋理性によっても知らされていない感情、のうちに住まっていることを忘れている点、である。」

人々の意識には、事態はこのようには反映しない。彼らがある宗教的、道徳的、人道主義的な運動によって導かれていると感じているとき、彼らはほとんど全く本気で、自分たちの確信は現実の争うべからざる事実を出発点として有する厳密な一連の論証によって形成されていると信じている。

我々としてはこのような幻想を共有しないように注意し、幻想の源泉を明らかにすべくあらゆる努力をしなければならない。このような探求はしばしば、社会諸制度と教義を変容させるのが経済的事実であり、またそのことによって、「史的唯物論」が認めるように、人々の意識のうちに反映するのも経済的事実であることを我々に確認させるであろう(1)。しかし我々はまたかなりしばしば次のことも発見するであろう。すなわち、少なくとも我々の認識の現状においては、純粋な経済的事実に還元可能でないその他の事実も存在するという点である。

(1) これは通俗的解釈の方向であるが、他方このような解釈に対してマルクスやエンゲルスの文章は支持を与えてもいる。全く異なる方向の学問的解釈も存在する。第一四章を参照。

歴史に関する「唯物論」はそれゆえその出発点を真実の一原理に有しているのであるが、明確に規定しようと欲する余り、経験から正当に引き出しうる結論を越えるという誤ちを犯した。このような経過はさらに言えば人間精神にとって十分に自然なことのように思われる。なぜなら同種の欠陥はマルサスの理論においても、リカードーの地代の理論においても、その他多くの理論においても見られるからである。人が真実に到達できるのは連続的な修正を通じてのみ、誤謬であることが分かった個別の命題を削除することによってのみ、である。

人々は自らのすべての行動を、一種宗教的に信じている少数の行動規則に準ぜしめる習慣を有している。こうなるのは避け得ないことである。なぜなら人々の大多数は行動を現実的原因に結びつけるために必要な特性も知性も持っていないからであり、他方では最も知的な人々でさえ、自分たちの行動規則を少数の公理、基本原理に圧縮することを余儀なくされるからである。人は行動しなければならないときには実際のところ、長期にわたる精妙な理論的考察に身を委ねる時間はないからである。

しかし社会的現象の原因はこのように立てられた宗教的その他の少数の公理よりも桁はずれに多数であり、変化に富んでいる。自らの行動をすべてこうした公理に結びつけよう

と欲すること―人はそうせざるを得ないのであるが―は、それゆえ必然的に行動に対して虚構の原因を指定帰属することにつながっていく。このことから結果として特にある種の決疑論の必要性が出て来ることになる。社会生活は人が尊重したいと欲している原理の論理的帰結のすべてを受け入れることを不可能ならしめ、それゆえ、こうした原理をその帰結が現実の生活条件と余り衝突しないような形で解釈する手段を発見することが必要となる。換言すれば、人々が宗教的に信じている或る原理Xは論理的帰結として社会にとって有益な作用M、N、等、および社会生活の条件に余りに強く衝突する別の作用P、Q、等をも有するとする。P、Q、…を避けるためにXを拒否することは一般的に言って拙い方法である。なぜならXは必然的にZによって取って代られねばならないであろうし、このZは恐らくP、Q、…よりもさらに悪い論理的帰結であろうからである(1)。それゆえ普通採用される方法は、Xの帰結のうちからP、Q、…を排除することができるような形で、論理に若干の小さな歪曲を与えることである。これは決疑論者及び解釈学者の仕事である。もしこの仕事を論理的観点から見るならばそれは何の価値ももたず、実践的観点から見るならばそれは不可欠のものであり、事実このような仕事はいつの時代にも存在してきた。ギリシア・ラテンの多神教の進化の或る段階で、浄化された或る道徳を、解釈の離れ業によって、神々の伝説的犯罪と両立させることが試みられた。キリスト教がローマ世界における新改宗者の甚だしい増加に遭遇したとき、キリスト教は、明らかにもっぱら最下層の人間のために作られていた戒律を、金持ちや権力者たちもいないわけではない社会の生活条件と両立させるために驚異的な努力をしなければならなかった(2)。我々は今度は社会主義がこの局面に入り始めていることを第一四章において見るであろう。

(1) スパルタ人たちは敵の前で退却しないことを名誉と信じていた。これが原理Xである。この原理Xはスパルタにとって好都合な多数の帰結を持っており、■Thermopyles■の英雄たちに霊感を与え、■Simonide■は彼らに、自分たちはスパルタの法に従うために死ぬ、と言わしめている。*Anth., Epigramm. Sepul.*, 249:■（以下ギリシア語2行）

しかしこの原理はPlatéeに対して致命的な帰結も伴わなければならなかった。Amompharetosはその頭目であるPausaniasが命令した戦略を実行することを欲しなかった。この戦略は彼に敵の前で後退することを強いていたからである。Pausaniasは多分彼を説得するために決疑論のあらゆる手段を尽したであろうが、説得に成功せず、逆にこの片意地で厳格な論理家を気狂いじみて非常識な人間と言明した。（■以下ギリシア語1行）Herod. IX, 55, 3.

(2) ルナン（Renan）, *Marc-Aurèle*, p.601.「あらゆる面で犠牲にされたのは金持ちであった。金持ちは教会にほとんど入らず、彼らの教会における位置は難しいものであった。福音書による約束を誇りとしていた貧乏人たちは金持ちを尊大とも見られかねない態度で扱った。金持ちは自分の財産をキリスト教の精神に対する一種の背反として許してもらわねばならなかった。」

キリスト教徒になった最初の執政官の場合は、「ブルジョア」内閣の大臣になったミルラン(Millerand)氏の場合と同じ程度に厄介なものであったにちがいない。キリスト教の初期には、今日、娘の初聖体を許したということで■ジョレース（Jaurès）■氏を悩ましたのと類似の困難、また、社会主義的決疑論に対してそれが華々しく確立される機会を提供したのと類似の困難を経験した金持ちが一人ならず存在した。

論理的観点からすればパスカルがその著書 *Provinciales* において述べたことは正しかった。実践的ないしは総合的観点からすれば、しかし、彼の反対者たちも少なくともいくつかの場合にはまちがっていなかったことを見ることができる。彼らはいくつかの宗教的原理と、攻撃的で富を追求する文明社会における生存条件とを和解させようと試みたのである。そして時に彼らが責められるべき行き過ぎに陥ったとしても、和解の原理そのものが必要であるということは依然として正当なのである(1)。

（1）G・ボアシエ（G. Boissier）はその著書*La religion romaine*, II, p.98.において次のように指摘している。すなわち、ストア派の哲学者たちは「決疑事項を確定したいくつかの書物を書いた。そして、これらの書物はまぎれもなく決疑論の産物と認められうる。」彼は思い違いをしている。決疑論はずっと後のものである。EuripideはHippolyteに次のように言わしめている。「誓ったのは私の口であって、私の精神は誓わなかった。」（■以下ギリシア語1行）このような心的留保をしてもProvincialesの美点をなくすことはできないであろう。そしてアリストファネスもこのような留保を*Thesmoph*, 275-276 で書きとめている。パスカルならばジェスイットの心的留保を書きとめるであろう。なおさらに、ギリシア人もローマ人もこのような心的留保の術においては達人と認められてきた。彼らは彼らの動きを窮屈にする誓約を回避することについては知悉していた。我々と同時代人である、ある種のセクト的信奉者は素朴にも、ジェスイットは、目的は手段を正当化するという原理を発明したと信じている。この原理は世界と同じように古いのである。「神聖なる」プラトンでさえ、嫌がらずにこの原理を使用したのである。彼は、*De rep.*, p.459 c, d,において「政治権力（マジストラート）はしばしば虚言と策略を用いなければならないであろう」と言い、「治療策として用いられる場合にはそれらは有用だ」と別のところで彼が言ったことを想起させている。

このことは外見上矛盾する結論の一例にすぎない。このような外見上矛盾する結論に達するのは社会現象を異なる相において考えることによってである。誤謬における最も共通の原因は、こうした問題の吟味のために一般的に用いられる観点の狭さのうちにまさに横たわっている。

人々を巻き込み、ある時代に支配的な発想法や見解を通して、また人々の精神状態や行為を通して我々に明らかになってくる大きな潮流は一様なものではない。潮流の強さは非常にさまざまであり、時代によって大きく異なる。その原因は、知られている部分もあれば知られていない部分もあるのであるが、そのいくつかは人間の心理的本性に因るものと思われる。道徳的宗教的運動過程は、経済的運動過程と同じように、律動的なのである。経済的運動の律動は経済危機を生み出し、今日では、この経済危機については入念に研究されてきており、いまや十分に認識されている(1)。道徳的宗教的運動過程の律動について逆にしばしばその存在も気づかれないままで経過してきている。しかしながら歴史をざっとでも見てみれば、その存在はきわめて明瞭に確認することができる(2)。例えば同一の国で信仰と不信仰の時期の継起が多数見られる。運動はしばしば非常な大きさに達するのであるが、その際にはすべての歴史家がそれに注目する。しかし歴史家はそこに特別な一事実のみを見るのであるが、それは律動の一般法則の一つの表われなのである。

（1）*Cours*, § 925 以下。

（2）文学については律動運動は確認されており、G・レクサール（G. Rexard）氏の *La méthode scientifique de l'histoire littéraire*, Paris, 1900.に見事に描写されている。

社会的運動について、過去の事実によって運動の未来における方向を予見することが難しいのは、波動曲線に従ってそれが起きるからである[1]。我々は文学、道徳、法のなかに、ますます強まるある性格を発見することができるであろうが、そのことから、この運動が無限に続くものであり、社会がある一定の目的に向かって進むであろうと結論すればそれはまちがいになるであろう。反動が近づいていることもありうるし、逆方向の運動がまもなく生ずるということもありうる。さらに、ある運動がその方向を変えようとするときは、一般にまずその強度を減ずるのではなく—もしそうであれば予測は楽になるであろうが—逆に非常にしばしば、まさに方向転換の直前の時点においてその強度は最大になるものである。

（1）第六章を参照。

ローマ史を研究した著者たちはすべて、共和国の末期における不信仰から帝国後期における信心深さに至る、大きな振動を指摘している。フレンドレンダー（Friendlaender）は不信仰は上流社会以外にはほとんど波及しなかったことを指摘している。この指摘は一般的であり、拡張されねばならない。このような運動はとりわけ上流の社会階級において顕著であり、下層階級にははるかに少なくしか波及しない。もっとも下層階級はこのような運動の結果を多少とも感じるのではあるが。「人民の側は—とギボンは述べている（第一五章）—彼らの神々が、彼らが習慣的にその地位と才能を尊敬している人々によって排斥され嘲いものにされるのを見たとき、最も内含的（アンプリシット）な信仰とともに採用した教義の真実性について疑念と嫌疑を抱いた。」ルナン（Renan）は、ストイシズムのような哲学的教義まで含み、そして最終的には競合する諸宗教のうちの一つの勝利に帰着する、一般的な宗教的運動過程について非常によく見ていた人である。異教の哲学者たちの著作にはしばしば「キリスト教的」思想が含まれている。しかし借用はない。それはもっぱら、この時代の人々に共通の同一の観念内容が思想において取るところの形式である。勝利した宗教はかくして一般的運動の総合及び完成の形の下に我々の前に現れる。他方、その宗教は成功のためには深刻に自らを変容させなければならなかったはずであり、その敵からも大いに借用しなければならなかったはずである。

人々のなかに存在している宗教感情とそれがまとう形式とを区別することは本質的に重要なことである。振動は感情についても形式についても存在するが、一般に形式の場合よりも感情の場合の方が振動の強度ははるかに低い。それゆえ、ある宗教的形式の没落が見られる場合、感情そのものが衰退していると結論することには十分に警戒する必要がある。感情そのものの強度はほとんど変化しておらず別の形式のもとに現れるということがありうるのである。

十八世紀末と十九世紀初めの歴史を研究した著作家たちは宗教的信仰の深刻な動揺（オシラシオン）に気づいたのであるが、彼らはしばしば形式と内容とを混同している。ある宗教的形式がそ

の地歩を失うとき、彼らは、一般的に宗教感情については時に部分的補償作用が存在し、この補償作用は別の宗教形式が地歩を獲得することによることを見ることができない。

この点を考慮に入れつつトックヴィルはフランス革命に先行する不信仰の振動期をうまく叙述している（*L'anc. rég.*, p.220）。「一般に十八世紀にはキリスト教はヨーロッパ大陸全体においてその力の大きな部分を失ったと言うことができる。…不信仰は王家の若者、才子のあいだには広まっていた。…不信仰はフランスを除いてまだどこでも全般的で不寛容な情熱にもなっておらず、また抑圧的な感情にもなっていなかった[1]。」二二六頁では次のように書いている。「不信仰の哲学は（イギリスでは）我々の哲学者たちの大部分が生まれる以前に説かれていた。ヴォルテールを訓練しおおせたのはボーリングブローク（Bolingbroke）であった。十八世紀全体を通じて不信仰はその有名な代表者をイギリスにもっていた。」これは大きな道徳的危機が経済的危機と共有するところの一特徴である。双方とも全般的であって、局地的ではない。逆方向の振動が接近していた。他方、宗教的感情一般の振幅は、この宗教的感情の特徴的形式の一つ、つまりキリスト教について観察されたものよりもはるかに小さなものであった。キリスト教が失ったものを「自然」、「人間性」、「感受性」の宗教が、また神秘学（オカルティズム）が獲得した。フランス革命は一つの宗教革命であった。トックヴィルが次のように述べたとき彼は臆病にすぎたのである（一六頁）。「フランス革命はそれゆえ、宗教革命のように作用し、ある意味で宗教革命の側面をもった政治革命である。」問題は単に類似ではなく、同一性である。それ以降も、律動的運動は続き、経済的危機の場合と同じように多数の小さな振動が大きな振動に伴ってきた。一九〇一年現在我々はまだ宗教感情の強度について、上昇期にいる。宗教感情の再昂進は古い宗教にはほんの僅かしか利益をもたらしていないが、新しい宗教つまり社会主義とその他同種の「人道主義的」信仰、また交霊術等はそれによる利益のほとんどすべてを獲得した。

（1）この一節は今日のフランスについて書かれたかのように見える。

フリエンドレンダーはキリスト教の出現を特徴づける動きとこのような動きとのあいだに類似を見た。彼は次のように言う。「前世紀における反キリスト教的傾向の上げ潮が最高潮に達した後、急速に弱まり、強力な引き潮が続き同じように抗しがたい力で教養のある人の大部分を引きさらって行ったのと同様に、ギリシア・ローマ世界においても、第一世紀を支配した諸傾向の後に、積極的な信仰に向かう強力な反作用が優勢となり、この場合にも教養のある人々の大部分をとらえた[1]。」

（1）*Civilisation et moeurs romaines*, trad. de Ch. Vogel, IV, p.167.

低い社会層に生まれたエリートを最上層へと押し上げ、権力にあるエリートを降下させ消滅させる循環運動は大抵の場合いくつかの事情によって覆い隠されるものである。まず第一に、この運動は一般に緩慢なものであり、運動の一般的方向及び基本線を識別しうるのは、ある長い期間、例えば数世紀の歴史を検討することによってのみである。ある短い期間のみに目を向ける同時代の観察者には偶然的状況のみが目に入る。彼が見るのは特権階級（カースト）間の敵対、専制君主の抑圧、民衆の蜂起、自由主義的要求、貴族政治、神権政治、衆愚政治、である。しかし、これらには一般的現象の個別的局面しか表われておらず、

この一般的現象はしばしばまったく彼の目に入らない。
このようにしてつくり出される錯覚のうち、特に繰り返され特記に値するものがいくつか存在する。
感情の影響―これを免れることは具体的な事柄が問題になっている場合には非常に難しい―が我々の推論を曇らせることがないように、抽象的な形で表現しよう。Aを権力の座にあるエリート、Bを自らが権力に就くためにA を権力の座から追放しようとしているエリート、Cを不適応者、精力、独自の性格、知力を欠く人々、を含む国民の残りの部分、要するにエリートを別にしたときに残る人々、とする。 AとBは頭目(シェフ)であり、彼らが支持者、手先を調達する際に当てにするのがCである。C単独では無力であり、指揮官なき軍隊であり、彼らが重要性を獲得するのはAまたはBによって指導されているときのみであろう。非常にしばしば、あるいはほとんど常に、Cの指導者になるのはBである。Aは根拠無き安心のうちにまどろんでいるか、あるいはCを軽視している。さらに、Cをより上手に釣ることができるのもBである。これはまさしく、彼らは権力を手にしていないがために彼らの約束は期限がより長いからである。しかし時にAがBの上を行こうと試みることがある。あまり現実的な譲歩はせずに見せかけの譲歩によってCを満足させうると考えてのことである。Bがある種の緩慢な浸透を通じてAの地歩を少しずつ奪い取る場合、社会的周流運動が中断せられない場合には、Cは彼らを反逆へと駆り立てたかも知れない指導者を失なうことになり、そして繁栄の一時期が見られることになる。Aは一般にこのような浸透に対抗しようと試みるものであるが、このような対抗も効果なく、意味のない仏頂面に終ることもありうる。
Aによる対抗が効果的である場合、BがAの地位を奪い取ることができるのは、Cの助けを得てAと一戦交えることによってのみである。彼らが成功し権力を占有するときには新たなエリートDが形成され、かつて彼らがAに対して果していたのと同じ役割を彼ら自身に対して果すようになるであろう。以下同様に続く。
歴史家の大部分はこのような運動を見ない。彼らは事象を、あたかもそれが貴族あるいは寡頭支配者―これはいつも同じである―と、民衆―これもまたいつも同じである―との闘争であったかのように描き出す。ところで事実は次の如くである。一．問題は一方の貴族ともう一方の貴族との間の闘争である。二．権力の座にある貴族は絶えず変わる。今日の貴族は一定時間の後敵対者によってとって代られる。
Bが権力に到達し、凋落の一途をたどるエリートAに取って代るとき、一般に大きな繁栄の一時代が到来する。ある種の歴史家たちはそのすべての貢績を「民衆」、すなわちCに帰する。このような観察のうちに存在する真実は、ただ下層階級が新しいエリートを産み出すという点だけである。この下層階級自体について言えば、彼らは統治する能力はなく、衆愚政治が帰着したところは破局的事態以外にはないのである。
しかし、事態を遠くから観察する人々の錯覚よりも顕著なのは、運動に巻き込まれていてその中で一定の能動的役割を果たしている人々の錯覚である。Bに属する人の多くは、彼ら自身あるいは彼らの階級のための私的な利益ではなく、Cにとっての利益を追求している、そして彼らが正義、自由、人間性と呼んでいるもののためにもっぱら闘っているのだと誠実に考えるのである。このような錯覚は同じくAにも作用する。Aに属する人々のうちの何人かは、こうした美しい原理の実現のために、そして不幸なCを助けるために闘っていると信じつつ、彼らが属する階級の利益を裏切り、現実には彼らの行為はもっぱら、

Bが権力を奪取し、次いで、Cの上にAによるくびきよりもしばしば重いくびきをかけるのを助けるという結果をもたらす。

最後になってこのような結果に気づく人々は時に、それがBに属する人々であれAに属する人々であれ、Cを助けたいという願望に導かれているだけだと主張する彼らの偽善を非難することがあるが、これは一般的にまちがいであり、Aに属する人もBに属する人もその多くは誠実さの点から見て非の打ちどころはない。

ある貴族集団についてほとんど常にその没落を告げる徴候は、人道主義的感情と甘ったるい感傷癖の侵入である。これらはこの貴族集団を、その地位を防衛することについて無能にしてしまうのである(1)。暴力と力とを混同してはならない。暴力はしばしば弱さに伴うものである。権力を維持する力を失った個人あるいは階級がむやみやたらに暴力を振るってますますおぞましいものになっていくのを見ることができる。強い人間はそれが絶対的に必要な場合にのみたたき殴る。そして、その場合には何者も彼を阻止することはできない。■トラージャン（Trajan）トラヤヌス？■は強力ではあったが暴力的ではなかった。カリギュラ（Caligula）は暴力的であったが強力ではなかった。

（1）ルナン（Renan）『キリスト教教会』*L'église chrét.* p.96.「すべての人がより善良になってきている…苦しむ人に慰安を与えることが万人の関心になってきている。…ローマの残酷な貴族政に代って善を望む誠実な人々による属州の貴族政が登場してきている。古代世界の力と偉大さは失われてきている。人々は善良で、温和で、忍耐強く、人間的になってきている。常に起ることであるが、社会主義的観念はこのような寛大な観念の恩恵に浴して出現してきているのである…」。

テーヌ（Taine）『旧体制』*L'ancien régime*, p.242.「十八世紀の終りには、上流階級において、そして中間階級においてさえ、人々は血を恐れた。品性の穏やかさと牧歌的空想は戦闘的意思を柔弱にした。行政官たちは到る所で次のことを忘れた。すなわち、社会と文明の維持は一握りの悪人や気違いじみた人間の生活よりも限りなく優越せる課題であること、政府の本来の目的は、憲兵隊のそれと同じく、力による秩序の維持である、ということである。」

ル・ボン（Le Bon）『社会心理学』*Psych. du social.*, p.384.「新しい野蛮人に対する反対者は彼らと交渉すること、そして一連の譲歩を通して彼らの生存を少し延ばすことしか考えない。こうしたことは野蛮に反対する人々に襲いかかろうとしている者たちを勇気づけるだけであり、そうした連中の軽蔑を買うだけである。」

これら三つの引用を結びつけるものは偶然ではない。

ある生命体が、ある所与の状況の中で生存競争を維持するために必要な感情を喪失するならば、それは退化の確実な一徴候である。なぜならこうした感情の欠如は多少とも近い将来において種の消滅をもたらすだろうからである。殴られたら殴り返すこと、敵の血を流すことを恐れる生命体はそのこと自体によってこの敵の慈悲に身を委ねることになる。羊には常に、それをむさぼり食おうとしている狼が存在してきた。そしていま羊がこの危険を免れているとすれば、それはただ人間が自らの食い物とするためにそれをかくまっているからにすぎない。自らを守ることもできないほどに流血を恐れる人間は遅かれ早かれ好戦的な人間の餌食になるであろう。この地球上には多分、剣によって征服されなかった土地、また土地を占有している住民がそこにとどまるのに力によらなかったような土地は寸土といえども存在しないであろう。もし黒人がヨーロッパ人よりも強力であったならば

ヨーロッパを分け合ったのは黒人であって、アフリカを分け合ったのもヨーロッパ人ではないであろう。「文明的」と自称する諸民族が持つと主張するところの、「非文明的」な他の諸民族―彼らはそう呼ぶことを喜ぶ―を征服する「権利」なるものは全くばかばかしいものであり、よく言ってもこの権利は力以外のものではない。ヨーロッパ人が中国人よりも強力である限りにおいて彼らは中国人に対してその意思を押しつけるであろうが、もし中国人がヨーロッパ人よりも強力になるならば、役割は逆転するであろう。そして人道主義的宣言が一軍隊に対して有効に対置されることがありうるとは全く考えられない。

同じく社会においても権利なるものはそれが一つの現実であるためには力を必要とする。権利はそれが自然に成長したものであれ、少数者のつくったものであれ、それが反対者に強制されうるのは力によってのみである。ある種の制度の効用、その制度が喚起する感情は制度の樹立を準備するが、その制度が既成事実となるためには、そうした制度を欲する人々がそれを欲しない人々にそれを強制する力を持っている必要があることはしごく明らかなことである。■アントン・メンガー（Anton Menger）■は、我々の今日における権利は「力に基づく伝統的諸関係にほとんどもっぱら立脚している」がゆえに取り換れなければならないということを証明しようと考える。しかしそうしたことはこれまで存在してきたすべての権利について言えることであり、そして、もしメンガーの望む権利が一現実となるとしたら、それはもっぱら、今度はそれが現実に対して力を持ったからである。もしそれが力を持たないとすれば、それは夢想の状態にとどまりつづけるであろう。権利は最初は切り離された個々人の力として始まったが、今日では集団の力を通して実現される。しかしそれが力であることに変りはない(1)。

（1）ヘンリー・サムナー・メイン卿は『原始制度の歴史の研究』(Sir Henry Sumner Maine, *Etudes sur l'hist. des inst. prim.*, trad., franç., p.337) で次のように言う。原始時代における法的進歩の創始者たちの目には「正当な権利を有するとみなされたのは、満足を得るために種々の危険に立ち向かった者、人々の集まりに向かって不平不満を述べていた者、都市の入口に所在を定めて王に対して執拗に正義を要求した者、であった。」アイスランドの古代法については次のように言う（p.51）。「あらゆる処罰の欠如はしばしばブリーホン（訳注：古代アイルランドの裁判官、決定の強制権はもたなかった）の権利の理解を妨げる最大の困難の一つであった。」逮捕や差押えを執行するのは当事者自身であった。R・フォン・イエーリンク（R.Von Jhering）も、ローマ法の中に「当事者自身が自らの権利を実現する一時期」の存在を確認している。ヘンリー・サムナー・メイン卿は『古代法と原始習慣の研究』(*Etudes sur l'anc. droit et la cout. prim.*, trad. franç., p.521) で次のように記している。「彼らの命令への尊敬（＝法廷の命令への尊敬）は我々の風俗習慣の中に非常に深く移行しているので、…裁判所が服従させるために物質的強制力に訴えなければならないことは稀である。…力が依然として権利に役立っていることは疑いないが、それはいわば凝縮された形で留保されており、このことが、力を人目につかないように隠すことを可能にしている。」

制度変更の成功についてしばしば行われることであるが、力に対して説得を対置すべきではない。説得とは力を獲得するための一手段に他ならない。社会の全成員が例外なく説得されたことはいまだかつてないことである。成功を確保するために、ただ社会の一部の人々、最多数であることによるか、あるいは全く別の理由によるか、いずれにせよ力を持つ部分が説得されただけである。

社会制度が樹立されるのも力によってであり、それが維持されるのも力によってである。

自らの地位を守るために一戦を交える用意のないエリートは誰であれ凋落のさなかにあるのであり、もはや彼に残されているのは、彼には欠けている男性的性質を有する別のエリートに自らの場所を譲ることだけである。彼が闡明してきた人道主義的原理が彼自身にも適用されるであろうと考えるならばそれは全くの夢想である。征服者は彼の耳に仮借なき vae victis（ヴァーエ・ヴィクティス、「征服されたる者は無残なるかな」）の道理を説き聞かせるであろう。前世紀の終りにフランスの指導諸階級がその「サンシビリテ」を磨くことに専念していたときギロチンの刃は秘かに研がれていた。この無為のうちに暮す軽薄な人々は、寄生的な生活を送りつつ、優雅な晩餐の席で、世界を「迷信」から解放し「破廉恥なものを押しつぶす」ことについて、自分たち自身が押しつぶされようとしているとは考えもせずに、語り合っていたのである。

エリートの継起現象と並行して、文明諸国民のあいだでは別の非常に重要な現象が観察される。経済的財の生産は特に動産資本の増加によって増大する一方である。動産資本の住民一人当りの平均は文明と進歩の最も確実な指標の一つである。かくして物質的安寧はますます拡大してゆく。他方で、戦争及び内戦はますます儲からない仕事となり、数の上でも激しさの点でも低下しつつある。その結果として風俗は柔和になり、道徳は醇化される。かくして政治家たちの虚しい煽動の外部でG・ド・モリナーリ（G・de Molinari）氏が「静かな革命」[1]と名付けた事態が実現する。すなわち社会的諸条件のゆっくりとした変化と改善である。このような動きは国家社会主義による浪費によって、またあらゆる種類の保護主義的法律によって阻まれたり、時には停められたりするが、それにもかかわらず現実的なものであり、最も文明化された諸国民のあらゆる統計がこのような動きの痕跡を示している。

（1）*Comment se résoudra la question sociale*, Paris, 1896.

エリートの継起という事実が歴史において有する重要性を確認したからとて、非常に頻繁に見られる誤謬に陥ってはならない。つまりこのことを唯一の原因としてすべてを説明しようとしてはならないということである。社会進化はとてつもなく複雑な過程である。我々は社会進化の過程の中にいくつかの主要な流れを識別することができるのであるが、それらを単一の流れに還元しようと欲することは少なくとも現時点においては無謀な試みである。今のところは諸現象を大きく分類して研究し、それらのあいだの関係を発見することを試みるべきである。

エリートの継起に関する、以上のような一般的研究は、いくつかの具体的事例によって補足されれば役に立つものとなるであろう。

ローマ史は我々に、継起的に権力に到達したきわめて多数のエリートを教えてくれる。

エリートはまずローマの農民階級[1]から、次にはその周辺つまりラティウムの農民階級から、そして後者が涸渇すると[2]イタリアの残りの部分、ガリア、スペインから出現し、最後には蛮族そのものが用立てられたのであった。

（1）多分、農民階級がエリートを産み出すという事実についての多少とも漠然たる認識はカトー（Caton）が表明している世論のうちに何らかの場所を占めている。（以下ラテン語5行）。

■De re rustica: At ex agricolis et viri fortissimi et milites stremuissimi gignuntur, maximeque pius quaestus stabilissimusque consequitur, minimeque inuidiosus: minimeque male cogitantes sunt, qui in to studio occupati sunt.農業について: しかし他方、最も強力な男も、また最も強健な兵士も農民から産出される。そしてまた最も良心的で、最も確実な、しかも最も反感を買わない利得も農民によって達成される。その仕事に心をとらわれているものは最も考えるというところがなく、またまちがって考える。■

アテネに関してH・フランコット（H. Francotte）が『古代ギリシアの産業』(*L'industrie dans la Grèce ancienne*, II, p.327)で次のように指摘しているのは正しい。「都市は都市を若返らせる生命力を農村人口から汲み取っていた。そしてこの生命力が全く汲み尽くされてしまうのには長い時間を必要とした。」

（2）ラプージュ（Lapouge）氏が『社会的淘汰』*Les sélections sociales*, p.87.で述べているところによれば、問題は優生学の遂行、優秀な種族の人間の完成である。この見解は、これを絶対的に受容するにしても拒否するにしても、事実が不足している。

遠い昔から上流多数派（majores gentes）と新たなエリートすなわち上流少数派（minores gentes）とのあいだの闘争は看取されている。この上流少数派に対して大タルキン（Tarquin l'ancien,ローマ五代目の王）は上流多数派とともに上院に参加するように要請しないわけにはいかなかった。「元老院貴族の家族はあまり多産であったようには思われない—とCh・レクリヴァン（Ch. Lécrivain）[1]は言う—。子供の数は普通五人であったと誤って主張されてきている。…元老院貴族の家族の歴史は結局のところ…同じ結論に達した。王政と共和政の貴族階級は相次いで滅亡しつつある…。それゆえタルキンが上流少数派を貴族に昇格させることによって元老院の欠員を埋めたことは了解できることである。」したがってこの場合、ローマ七丘の上にある都市パラティヌスとその他の都市との併合に起源を有すると思われる浸透が重要なはずである。それにもかかわらず、上流多数派と上流少数派との敵対の証拠には事欠かない[2]。勿論、少数派が多数派と分担して権力を握るときには、少数派は多数派と同じように国民の残りの部分に対しては堪えがたいものとなるであろう。

（1）Dict. Daremb. Saglio, s. v. *Gens*. p.1514.

（2）Niebuhr, *Hist. rom.*, trad. franç., II, p.153.「紀元二五三年、彼ら（上院少数派）は執政官の第二位の地位を回復する。それにもかかわらず、彼らが自分たちの昔の抑圧者に併合され、次に抑圧者から市民（コミュニス）を守らず、そして彼らに戻ってきた地位から一再ならず追い払われたとき、人々は彼ら自身が思うほど、彼らに対する信頼を保持（コミュニス）しなかった。」(p.209)「我々は次のように言明しても間違いはないと確信する。すなわち、市民（コミュニス）の全面的な奴隷化を予め防いだのは二六九年に、寡頭政の多くの部分が執政官の地位から自分たちが排除されるのを見越して市民（コミュニス）と同盟したことである。」それゆえこの場合、Cと同盟するBが見られる。彼らは自分たちが欲していたものを獲得するや否やCを裏切る（p.211）。これら全体から次のように考えざるを得ない。すなわち、上流多数派は貴族のあいだに生じた分裂の帰結をこの場合理解していたこと、もはやなにものも邪魔することのできない調停が存在していたこと、である。この時点（コミュニス）から「市民（コミュニス）」に対して最大の憎悪を示したのはまさに上流少数派であった。ニーブールが「市民（コミュニス）」と呼んでいるものは、DおよびCの新たなエリートの全体に他ならない。

ニーブール（Niebuhr）、モムゼン（Mommsen）、デュリュイ（Duruy）といった、我々の理論

にとって有利な歴史家の証言は貴重である。なぜならこの学者たちはこの我々の理論を承知しておらず、しかもこの理論とは絶対的に対立する考え方さえもちながら、事件を解釈するために予め考えられた構想によって自らを導くことができず、自分たちの構想を支持するような論拠を見出すことができず、事実の抗し難い力によって我々の理論の方向に導かれざるを得なかったのだからである。

（3）Tite-Live, III, 65：（ラテン語三行）．■Quiescenti plebi ab junioribus patrum injuriae fieri coeptate. Juniores patrum を“les jeunes patricien”と訳してはならない。問題になっているのは、minores gentes である。

共和政が樹立されるや否や、俗説に従えば「貴族」と「市民（プブル）」との間の[1]、しかし実際には旧貴族と、下層階級から出現した新しい貴族とのあいだの闘争が始まる。「闘争は市民（シトワイアン）の内部に集中している。傍らに並行的に第二の動き、都市に憧れている非市民（ノン・シトワイアン）の動きが現れている。ここから、平民（プレーブ）、ラティウム諸民族、古代イタリア人、解放奴隷による不穏な動きが出て来る。平民や解放奴隷のように既に市民の名称をもっていようと、あるいはラティウム諸民族や古代イタリア人のようにいまだこの名称を拒否されていようと、彼らは全て政治的平等への欲求を強く感じており、それを要求している[2]。」これは真実の一部にすぎない。これらの部隊を突撃に駆り立て、それらに政治的平等、さらにはその敵対者の財産までも約束するのは新しいエリートである。「彼らのうちの貧乏人の絶望状態は彼らの指導者の最強力の武器であり、この指導者たちの抗議理由は、新しいエリートにとっては、もし法律が下層階級を単一のまとまりとして結びつけていないならば、どうでもよいことであろう[3]。」貧乏人たちはローマにおいてはその指導者に従った。彼らは「負債の免除と若干の土地所有権」を望んでいたからである[4]。旧貴族と同じように富裕であり、同じように権力をもちたいと望んでいる平民貴族が存在することを誰もが知っていた。「市民（プブル）の力は平民あるいは大衆の中に移行していた。彼らは既にその身分の者のあいだで、および有力かつ富裕な人々の大多数の中で重きをなしていたのである[5]。」権力獲得への道を歩んでいるのは新しいエリートである。彼らはその野望を、大衆に味方する要求のヴェールの下に隠し持っている。しかしその要求は手段であって目的ではない。大衆に対してその指導者は土地法と負債（レギオン）の免除を約束するであろう。これはまさしくもっと後になって帝位への候補者たちが軍団に対して贈与物（donativum）を約束するのと同じである。

（1）E・ブロー（E. Belot）は『ローマ騎兵隊員の歴史』（*Hist. des chevaliers rom.*, Paris, 1873, II, p.8）で次のように書いている。「フランスではまだ、平民によるまず第一に元老院貴族（ペトリシアン）に対する、次いで一般貴族（ノブレス）に対する闘争を、ほとんど同じ程度に誇り高く有能な二つの特権階級（アリストクラシー）のあいだの闘争と見ることに慣れていない。しかしながらそれ以外であり得たと想像することは困難であろう。」

（2）Mommsen, *Hist. rom.*, trad. franç., II, p.3-4

（3）Niebuhr, *Hist. rom.*, I, p.550. 彼はアイルランド人について語っており、彼らをローマ人と比較している。

（4）Niebuhr, *ibidem*, p.551.

（5）Mommsen, *ibidem*, p.16.

平民のエリートは元老院（セナート）に入った。そしてもし伝承されている話が正確であるならば、

そこでほとんど半数を占めた。そのとき「当然のことながら、貴族が政治秩序における特権から溢れ出させる物質的利益を富裕階級が大量に獲得する状況が見られた。そして、最も有能で抵抗を指導する能力のある人士が元老院（プブル）に入ることによって、被抑圧身分から抑圧身分へと移行するに応じて、ますます重く市民の上に苦難がのしかかることになる[1]。」しかし、旧特権階級はまだ排他的権利を有しており、彼らはそれを享受することを欲していた。それゆえ高位職の配分をめぐる闘争が新たに始まった。この闘争は長く続いた。「なぜなら、この場合一般的な利害を満足させることが問題ではなく、市民の何人かの指導者の野心のみが問題だったからである。それゆえ攻撃は激しくはあったが、持続性には欠けていた。そして平民たちは名に満足して長い間実を忘れることになった。我々は平民たちがほんの僅かな農地のために■Licinius Stolon■と執政政治を最後の瞬間に見捨てる覚悟をするのを見るであろう[2]。」彼らは多分まちがってはいなかったであろう。ほんの僅かな農地でもそれは少なくとも触知しうる確実な財であった。今日、フランスでは社会主義者の多くは同じように、彼らの指導者の一人をヴァルデック・ルソー（Waldeck-Rousseau）の内閣に入れることによって彼に与えられる名誉が、彼らにとってブルジョアの富を分配することの代りになりうるとは考えない。

（1）Mommsen, *Hist. rom.*, II, p.35. 被抑圧者及び抑圧者という用語は過剰である。問題にされているのは、権力に到達する新しいエリートだけだからである。

平民の元老院議員の数はますます増加した。旧特権階級は消滅して、新たな特権階級がそれに代った。Willems の『ローマ共和政における元老院』（*Le sénat de la république romaine*）によれば、三〇四名の元老院議員のうち、パトリキとしての議員は九八名、平民の議員は二一六名であった。「スルラ（Sulla）は—とニーブールは『ローマ史』III, p.280 で言う—リキニウス法をこえてまで政体を逆行させることはできなかった。その理由は、旧特権階級パトリキの家族は大部分絶えており、平民の家族もその政体のシステムの中に利益を見ようとしたからである。」

（2）Duruy, *Hist. des rom.*, I, p.223.

ローマにおいては、「平民特権階級が護民官職を奪取しそれを彼らの目的に向けて方向転換させて以降、土地法と信用法はある意味で放ったらかしにされるようになったが、それでも新しく征服された領地も不足することなく、田舎では貧困な、あるいは貧困化しつつある市民（シトワイアン）に不足することはなかった[1]。」しかしある時期に帝位候補者すべてが、兵士たちに報いることができないのであればなすべきことは何もないことを遂に納得したのと同じように、「遂にある日、それまで貴族（ノブル）の抵抗」によって政治的平等の恩恵から除外されていた—貴族にとっては市民の無関心が助けになっていた—平民特権階級は、パトリキを前にしては孤立し無力な、不幸な大衆との同盟を確認した[2]。」

（1）Mommsen, *Hist. rom.*, II, p.67.

（2）Mommsen, *ibidem*, p.69.

新しい特権階級は輝かしい勝利を得る。■Liciniae sextiae■ の法律は外見上市民（シトワイアン）間の平等を樹立する。現実には、「以前と同じく貴族政治のままであった[1]。」偶然はしばしばある種の抽象的関係に具体的形態を与えるものである。新しい法律の作成者ガイウス・リ

キニウス・ストロン■Gaius Licinus Stolon■ はこの自らの法によって有罪判決を下された最初の人であった[2]。彼はただ自らの階級に兵隊を供給するためだけに作られた一法律が自らに適用されたことに驚いたに違いない。

（1） Mommsen, *Hist. rom.*, II, p.83.

（2） Val. Max., VIII, 6, 3. この問題についてニーブールは独自的である。彼はまず（III, p.1-2）ガイウス・リキニウス・ストロンの中傷者に対して激しく憤慨する。次いで（p.47）あたかも言ったばかりのことをもう覚えていないかのように、G・リキニウス・ストロンに対する有罪判決を引用したあとで、次のように付言する。「これは貪欲なるものの力についての物悲しい一事例である。その力は、名誉のために貪欲になることを最も警戒していたはずの人々のうえにさえ及んだのである。あるいはこの事例は、善行（ビエンフェ）なるものは必ずしも最もきれいな手から出て来るものではないことを証明していると言ってもよいかもしれない。」

エリートの周流運動が再び始まる。「新しい貴族政治が樹立された。すぐさまそれに対する反対党派が登場した…彼ら（新しい反対派）は下層の人々、とくに零細農民の利益を掲げている[1]。」すなわち新しいエリートは加盟者を、彼らがそれを見出しうるところから、さらには権力に到達したばかりのエリートを徴募したところから補充するということである。

（1） Mommsen, *Hist. rom.*, II, p.84 plus loin, 85. 「前夜来（depuis la veille）獲得されていた市民（シヴィル）の平等の内部に既に、貴族的党派と新たな民主的党派の最初の要素が姿を見せていた。」かくしてモムゼンは自ら自覚することなく、継起するエリートという現象を叙述している。

もう一つ別のエリートが場面に登場する。本来のローマの農民階級が次第に涸渇し消え去りつつあった。「市民（キリト）になった平民の下に、そして百人隊及び族（トリビュ）の外側に、既に急速に数を殖やしていた解放奴隷（ミニニシーブ）[1]、ローマでは制定されていた選挙権をもたない（sine suffragio）職人、商人、自治市住民、最後にaerarii（この中には裕福で活動的で知的な人々が含まれている）が含まれていた[2]。」ニーブールは「自治市住民は国民に対して新しい家族を提供することによってそれを若返らせた[3]」と非常に適切に叙述している（III, p.11）。それからはこれはローマ史を支配する重大な事実となる。ローマは近接諸民族のあらゆるエリートを少しずつ刈り取ることになるであろう[4]。彼らをすべて貪り尽くすときローマは潰えるであろう。

（1） 解放奴隷は明らかに奴隷の中のエリートである。解放奴隷の非常に僅かな部分はその自由をずる賢さ（ヴィース）に負うていたであろう。大多数はその自由を性格、知性、活動性、種々の労働への適性に負うていた。道徳的観点からすれば、しかし、彼らは質の低いエリートであった。

（2） Duruy, *Hist. des Rom.*, I, p.287.

（3） 一種の知的淘汰が生じた。自治市の中で公職を得た者はローマ 市民（シトワイアン）となった。ガイウス（Gaius）I, 96 （■以下ラテン語四行）。

（4） Duruy, *Hist. des rom.*, V, p.529.「かくして、イタリア周辺におけるローマ文明の栄光がつくり出

した運命的な一法律によって、そして全般的繁栄の結果として、各属州に次のような瞬間が到来した。すなわち、自治市の問題の管理の必要上形成された人々、あるいは、商業によって富裕になった人々が、自然に、国家の各種業務のために国家から要求されるようになるのである。二世紀にはローマでこの新しい貴族が元老院、軍隊、執政官邸、高位行政職の到る所を満たしていた。」

これらの事実はまちがっていない。解釈は修辞学と形而上学から取り出されたものであり、不幸にしていまだ歴史学者たちを感動させるものである。「ローマ文明の栄光がつくり出した致命的な一法律」なる表現は、古代物理学者たちのいわゆる「真空に対する大自然の恐怖」に通じている。「致命的な法律」と致命的でない法律とはどのように区別されるのか。これは何も意味することができない。これらは純粋に言葉だけの説明である。

自治市の問題の管理がそれだけで新しいエリートのメンバーを「形成」したことはなかった。商業がそれだけで彼らを「富裕にした」ということはなかった。何にもましてこれらはまさに淘汰の手段であった。これらはよりよきものを選択し、より不適切なものを排除するためのメカニズムであったのである。勿論この場合、よりよいとかより不適切とかといった用語は、もっぱら、こうした人々が果たさなければならなかった職務に関係している。

元老院議官（patres）たちはこの新しい階級のエリートに依拠することを試みた。こうした現象はよく起こることである。旧特権階級の残りの部分も同様の手段によって味方を獲得しようと試みる。

監察官であったアピウス（Appius）は諸族の中に新しい階級の男たちの名前を記載し[1]、かくして、権力について以来「下層細民（プチ・エ・アンプル）」のことはあまり気にかけていなかった平民貴族の憤慨を呼び起した。「疑いもなく時代の最も著名な人物の一人である（ニーブール、III, p.277.）」Cn.Flaviusが新しいエリートに属している。

（1） Tite-Leveは IX, 46. で、監察官アピウスについて語りつつ次のように書いている。（以下、ラテン語4行）。

アピウスの改革は部分的に時期尚早であった。市民（シトワイアン）の投票の意義を減じさせる変化であった、新市民の登録様式の変更が起ったのはほんの僅か後であった。すぐさま動きが再開し、もはや停止することはなかった。

我々はここでは、多数の、興味ある詳細部分については短縮しまた削除しなければならない。そうしないとこの事例の報告は本書の残りの部分の大きさと釣り合いが取れなくなるからである。

エリートというものは経済的、社会的生活条件に従っていくつもの形で現れる。商人及び産業家における富の獲得、好戦的国民における軍事的成功、専制政治、民主政治、衆愚政治における政治的能力及びしばしば謀略の精神と性格の卑劣さ、中国人における文学的成功、中世における聖職上の高位、等はそれぞれ人間の淘汰が行われる手段である。

ローマでは■equo privato（私有財産を有する?）■騎兵隊員は、護民官グラックス兄弟（Gracques）から共和政の終りまで、大部分田舎の諸族の出であり、金権政治的淘汰の産物である[1]。金持ちになった共和派はその数を増やしていたのである。

（1） Cic., Pro *Q. Rosc. Comoe.*, XIV, 42■ラテン語二行

しかしこのエリートと並んで、市民軍出身のもう一つ別のエリートが形成されていた。選挙権を有しない(sine suffragio)市民、sociiは全て軍務に従事させられていた。かくして淘汰はすぐさますべてのイタリア人に及びそのリーダーたち（praefecti sociorum）は正当にローマ市民となった。軍務が市民の一時的な仕事ではなく職業となったとき淘汰はいっそう強烈なものとなった[1]。これはマリウスとともに始まる。彼は「民間徴用人まで含めて財産条件をもはや考慮に入れなかった最初の人物であった。彼は市民のうちの最貧の志願兵に対してさえ、彼が良き兵士であることを自ら証明しさえすれば、軍隊の地位を開放した[2]。」マリウス、スルラ、シーザー、オクタヴィアヌスはそれぞれ異なる政治的原理を体現していたが、根本においては彼らは等しく軍事的淘汰によって産み出された新しいエリートであり、騎兵隊員と同盟しつつ帝国の基礎を築き、幾世紀かにわたってそれを維持することになるエリートである。

（1）Arrius Menander, *Dig.* XLIX, 16, 4, § 4, § 10 ■ラテン語３行

（2）モムゼン（Mommsen）*Hist. rom.*, V, p.120. plus loin, p.167.「私の見るところでは、マリウスは軍事的には兵籍登録を国内にまで導入することによって国家を救ったのであった。これは幾世紀もの後、外国人の兵籍登録によってStiliconとArbogasteが更にいくばくかの間国家の存続を延長させることになるのと同じである。」

貴族政の復興者であったスルラはその勝利を新しい人々に負うていた。ノラで、二人の執政官がやって来て、彼から軍隊を取り上げアジアでの戦争のためそれをマリウスに与えたとき、一人の執政官補佐を除いて将校たちは彼スルラを見捨てたのであるが、兵士たちは依然として彼に忠誠を誓い、そして、彼がローマに入りその意思を強制したのは、彼らの指導者としてであった。長い間軍隊はエリートであり、他のすべてのエリートと同じく、下層階級から湧き出てきたものであった。「アウグスティヌスの諸制度の廃墟の中で唯一生き残っていた軍事力が—とデュルイは帝国について語りつつ言っている[1]—全てを支配することは避けがたいことであった。当時の人々はこれには驚かなかった。幾世紀ものあいだ、軍隊はローマ人の兵士から成り立っていた。この遠い昔の記憶は完全には消え去っていなかった。そしてその構成にもかかわらず帝国全体を防衛していた軍隊は、帝国を代表するにふさわしいと思われた唯一の団体であった。サン・ジェローム（Saint Jérôme）はこのように考えたのであるが、それは彼が司祭による司教の選挙と兵士による皇帝の選挙とを比較するからである。」

（1）*Hist. des rom.*, VI, p.361-362.

これはさらに言えば、しばしば社会進出において見られる、一般的事実である。「王政が終った後のギリシアの最初の時期におけるいくつかの共和政は戦士によって構成されていた[1]。」さらに中世ヨーロッパにおいては、封建貴族は戦士のエリートに権力を集中している。

（1）Aristote, *Polit.*, IV, 10, 10.

■クラディウス（? Claude）■はローマ人行政区クリア会の空白を埋めるためにエリートの選抜をガリアにまで拡大し、ローマ皇帝■ヴェスパジャン（Vespasien）■はそれを他の属州にまで拡大した。イスパニアはローマに皇帝トラヤヌス（Trajan）を提供した。次には蛮人自身が緋色の衣服を着するようになった。

後期帝国は各人物をその職業に縛りつける措置によってエリートの周流を大部分停止させた。農民はもはや自らの土地を放棄することができなくなり、職人は自らの同業者団体を捨てることができなくなり、参事会議員はクリア（ローマ人民行政区）を捨てることができなくなった。

紀元四〇〇年皇帝オノリウスはコレギウム（同じ地位、職能の者の団体、含）の会員を探すことを命じ、彼らが発見された場合には例外なくその職業に連れ戻すように命じた[1]。紀元四五八年には皇帝■マジョリエン（Majorien）■は新たに同様の措置を規定し、「生まれたときの身分を望まない[2]」全ての人々を元の身分に戻すことを欲した。「血筋における絆は―とH・ワロン（Wallon）は言う[3]―あらゆる事物の崩壊状態にあっては、国家を維持する上で、十分に強力かつ一般的と見える唯一のものである。出生の運命性、これは帝国の至高の法である…ローマはギリシアの文明を通過してオリエントの世襲的階級制度に至った。」国家社会主義の浪費[4]は、富を破壊し、世襲的階級制度は人々を動けなくし、それゆえ新しいエリートは形成されることもできず、上昇して、絶対的に頽廃していた支配的エリートの地位を奪取することもできなかった。「中間階級と上流階級を更新し維持する上昇運動は―とヴァルツィング[5]（Waltzing）は言う―停止させられていた。」

（1）*Cod. Theod.*, XII, 19, 1
（2）*Nov. Major.*, XII, § 7.
（3）*Hist. de l'esclav.*, III, p.220.
（4）第三章を見よ。
（5）*Etude hist. sur les corpor. prot. chez les Romains*, II, p.263.

この社会はその致命的に重大な部分において病に冒されていた。それは死すべき体であった。蛮族の侵入がそれを救った。蛮族が外部からある種のエリートを運び込んだからばかりでなく、とりわけ、エリートの周流を妨げていた柵を破壊したからである。繁栄するイタリア共和国をつくり出そうとしている職人やブルジョアは外部からのエリートではない。彼らは土着の種族出身であり、彼らの上昇を妨げたのは帝国後期の政体のみであったろう。中世の無政府状態と呼ばれたものが彼らの上昇を可能にする。エリートの周流が再開し、それとともに繁栄が戻って来る。

ローマ帝国の終りの頃にはそれまで人々が教会という作品の中に見ていたものとは多くの点で異なる選別手段が現れた。教会は中世においては、教養ありかつ知的な人間のほとんどすべてを引き寄せていた[1]。この時代には聖職世界における位階および軍隊における階級以外には人間を選別する手段はほとんどなかったであろう。少し後になって、第三の選別様式のおかげで自由都市コミュヌが誕生する。すなわち商業と工業であり、先の二つの占めていた位置をほとんど奪ったのはこの新しいエリートである。

（1）今日フランスにおいて「知識人」と呼ばれている人々は、彼らが中世において教会にいた人々の属性を少なくとも部分的には体現していることを知らない。しかし中世において教会にいた人々は、その各々を国民の残りの部分との対比において見るならば、現代における「知識人」よりも優越的であったと思われる。

キリスト教共同体の内部で行われた選別は大部分の歴史家の目を免れることはなかった。「三世紀以降、共同体の長すなわち永世終身の高位者となった古代ローマ人及び監督者たちは彼らの間で真正の同業者集団（コルポラシオン）、すなわち大衆つまり俗人から区別され隔絶された聖職者集団を形成した。…司祭と司教は俗人によって選ばれた。彼らは宗教界の指導的集団であり、政府であった。しかしこの政府は宗教界そのものを源泉として発したものであり、それ以外の如何なる源泉ももってはいなかった(1)。」他方選挙はもっぱら宗教的原理から着想されたというものではなかった。選挙はしばしば世俗のエリートを選出した。

（1）Fustel de Coulanges, *L'invasion germanique*, p.67.

「特に五世紀から十二世紀までの時代の聖職世界における位階はすべての人間に開かれていた。教会は低い地位からも高い地位からも、あらゆる地位から人を補充し、そして低い地位からの補充の方が多くさえあった(1)。教会に関する限りすべては特権制度のもとに置かれていた。それが保持していたのはただ平等と競争の原理のみであった(2)。教会はありとあらゆる、正当に認められた優位性を権力の所有の方向へと引き寄せた(3)。」

（1）新しいエリートが出現するのは下層階級からである。

（2）競争は効果的な選別のための、知られている唯一の手段である。

（3）Guizot, *Hist. de la civil. en Europe*, p.139-140. 著者ギゾーはこうした考え方を一般化しさえすれば、エリートの理論に到達したであろう。

これと同様な場合について真理の発見を妨げるものは、事実間に存在する諸関係を専ら探求するのではなく、それらを道徳的ないしは実践的観点から考察することである。この場合ギゾーは教会が持ちうる長所と短所について主として考え、こうした考察が現代においてどう役立つかについて考えている。このような観点に支配されて、事実間の純粋に客観的な関係は彼の場合忘れられている。これは植物を良い草と悪い草に分けるだけで、それらの植物学的分類を気にかけない農耕者である。

教会の統治はますます貴族政治的になり、次いで君主政治（モナルヒー）に傾き、そしてローマ教会司教の至上権が確立された。しかしこれは教会そのものの内部における新しいエリートの出現を停止させるものではなかった。新しいエリートは彼らの要求を宗教的形態でもって覆っていた。なぜなら当時にあってはそれが社会的論争が表現される言語だったからである。新しいエリートは時には旧エリートから完全に分離し、その場合には教会分離あるいは異端が生まれる。また時には旧エリートが新しいエリートを吸収し、そのエネルギーを自らの権力を安定させるために利用するに至ることもある。かくして十一世紀頃にはカタリ派が生まれ、闘争は十三世紀におけるアルビジョア派に対する十字軍に到達する。他方ローマはアッシジの聖フランンチエスコの改革運動の方向を首尾良くそらせることに成功し、

新しいエリートを吸収した。ローマはまだparcere subjectis et debellare superbos の原則を働かせるだけの能力とエネルギーを十分に持っていたのである。

中世という時代はとてつもなく面白い実験を試みた時代である。すなわち、権力が一定の知的エリートによってもっぱら行使される組織、という実験である。もしこの試みが成功していたならば、もし教皇たちが全キリスト教徒に対する絶対的支配の意図を実現しえていたならば、支配的エリートの宗教的性格は徐々に消え去り、文学的、学問的性格が優勢を占めることになったであろう。現在のヨーロッパは現在の中国にある点からすれば似ることになったであろう。進化がこのような道筋をたどらなかったのは、一方では—これが最重要の事実なのであるが(1)—軍事エリートが自己の持ち分を取られるままになってはいなかったからであり、他方では知的エリートの構成員たちが互いの心を結ばれた状態にはとどまらなかったからである。宗教的エリートを知的エリートから分離させる動きが生じた。後者は新たな出口を法律の研究、学問の研究、そして主として経済的職業のうちに見出した。ある瞬間は宗教的エリートと知的エリートとが完全に一体になっていたが、そのうちある日彼らはライバルになり敵となった。そしてこの日から宗教的エリートの凋落が始まった。宗教的エリートは衰弱した後、そのかつてのライバルつまり軍事エリートと和解したばかりでなく、軍事エリートへの完全な従属状態に陥った。

(1) 法律家、医者、錬金術師、そしてもっと後になると人文主義者(リテラトゥール)たちは、教会に対して王によって保護された。

ローマ教会の支配を免れうるためには、分裂状態にありローマに対して全てが忠実なままにはとどまりえなくなっていた軍事エリートの保護によるほかなかった。宗教改革がドイツにおいて成功したのは諸王の剣のおかげであった。もし宗教改革にこの支えが欠けていたならば、宗教改革はアルビジョアの異端の結末と同じ結末を迎えていたことであろう。(■注が必要)

こうした事態は内容と形式とを分離しなければ全く理解することができない。内容とはエリートの周流運動のことであり、形式とはその運動が生じる社会において支配的な形式のことである。形式とは、中国においては文人たちのあいだの論争であったり、古くはローマにおける政治的闘争であったり、中世においては宗教論争であったり、現代においては社会的闘争であったりする。中世に生きていた不満分子はその改革への欲求を宗教的考察によって表現し、その論拠を福音から汲み出した。もし彼らが今は生きているのであるならば同じ欲求を社会主義理論によって表現し、その根拠をマルクスから汲み出すであろう(1)。

(1) J・ジャンセン(J. Janssen)はその著書『ドイツと改革』(*L'Allemagne et la réforme*)の第五巻のエピグラフとしてラ・ユギュエリー(La Huguerye)の次の言葉を引いている。「宗教は当今ではもはや問題の仮面としてしか意味をもたない。」

ギゾーは『ヨーロッパにおける文明の歴史』(*Hist. de la civil. en Europe*)一七一頁に次のように言う。「五世紀から十六世紀にかけての歴史をざっと見てみよ。人間精神を支配し指導するのは神学である。」これは、精神の表現が神学的形式をまとっていると言うべきであろう。「すべての見解が神学の刻印を帯びていた。哲学的、政治的、歴史的諸問題が常に神学的観点から考察された。」性愛の問題さえ何らか神学的な形式を帯びていた。このような傾向の見事な風刺はボッカ

チオに見られ、そして特にマキャヴェルリの *Mandragola* の中で Fra Timoteo の論議の中に見られる。（■注）

しかし人々を行動に駆り立てる感情の内容が以上のようであるとすれば、エリートの選抜は社会的諸形式の影響を留めることになる。こうして生まれるエリートたちには何ら絶対的なものはない。つまり聖人のうちのエリートもありうるし、山賊のうちのエリートもありうるのである。カタリ派の時代の聖職者（クレルジェ）、次いでアッシジの聖フランチェスコの時代の聖職者（クレルジェ）（■注）は腐敗堕落しており背徳的であったが、他方、選抜の様式は名目的には宗教的道徳的完徳を維持していた。この点ではカタリ派とアッシジ派の聖フランチェスコ由来のフランシスコ会は実際にエリートであったが、他の点では、例えば経済的及び社会的進歩の点では、聖職者（クレルジェ）たちの方が、全く堕落していたとはいえ、彼らカタリ派やフランシスコ会よりも優れているということがありえた。もっと後になって十六世紀に大きな宗教的変動が生じたとき、ローマから分離した国々におけるのみならず、とりわけローマ自体における新しいエリートの出現はルネサンスの輝ける一時代を終焉させ、多分数世紀間、宗教的寛容の樹立を遅らせた。

ガリヤ地方でまだ四世紀には宗教的選抜と並んで作用していた世俗的選抜は、五世紀頃には消滅した。「学校に通っていたのは主として上流階級の子弟であった。ところでこの階級は…全き退廃状態にあった。学校は彼らとともに崩壊した。制度はまだ残っていたが、中味がなくなった。魂は肉体を去っていった。(1)」

（1） Guizot, *Hist. de la civil. en France*, I, p.118

同じような進化が軍事社会についても起きた。軍事社会は最後には宗教社会がもたなかったすべてのものを自らの支配下に置いた。しかし同時にそのとき、主として経済的諸力の影響の下にその没落が始った。この現象が最もよく観察されたのはイタリアにおいてである。経済的ルネサンスが始まるのはこの国においてだったからである。

すでにダンテの時代にフィレンツェの旧貴族は衰退状態にあり、新しいエリートが旧貴族の位置を奪っていた(1)。富裕ブルジョアジーは封建貴族と闘争状態にある。しかし間もなく新しい層が自らの道を切り開こうとするようになり、ブルジョアジーと人民との間の闘争が起きる(2)。フィレンツェの歴史を研究する者はみなフィレンツェ共和国の社会進化とローマ共和国の社会進化の過程の類似に驚く。類似は二次的な事柄にまで及んでいる。かくしてメディチ家大公はフィレンツェにおける衆愚政治に終止符を打つになったのであるが、これはアウグストゥス（Auguste）皇帝がローマにおける衆愚政治に終止符を打ったのと同じである(3)。

（1）

Enfer.XVI：

(73) La gente nuova e i subiti guadagni
Orgoglio e dismisura han generata,
Fiorenza, in te, si che tu gid ten piagni.

「天国」の歌第一六では彼は新しいエリートの大量進出を描いている。

(61) Tal fatto e fiorentino, e cambia e merca,
Che si sarebbe volto a Simifonti,
Lá dove andava l'avolo alla cerca.

そして旧エリートの衰退についても描いている。

(76) Udir come le schiatte si disfanno
Non ti parrà nuova cosa nè forte,
Poscia che le cittadi termine hanno.

続けて彼は現在力を失っているかつては裕福で強力であった家族を挙げている。

サルヴェミーニ（Salvemini）氏は、*Magnati e popolani in Firenze*, p.24 で別の例を引いている。ヴィラーニ（Villani）は土地を耕す羽目になった貴族について語っている。ティンティナンノ（Tintinanno）の伯爵家は彼らの城を十三世紀の終わり頃サリムベーニ（Salimbeni）に売った後、施し物で生活していた。

サルヴェミーニ氏は異なる種類のエリート間の闘争については十分に描写したが、一般的運動については見ることができなかった。彼の著書からは多くの貴重な知見を得ることができるであろう。しかし、イタリアの自由都市は経済的自由を持っておらず、したがってその繁栄をこの経済的自由に帰することはできないと考える点において彼は完全にまちがっている。ヴェニスやフィレンツェのような最も繁栄していた共和国は、他よりも本物の通貨を有し金銭貸借上の足かせが少なかったのみならず、そこでの商業がきわめて広大であったという事実そのもの―これは誰も否定できない―が、商業を妨げるための効果的な禁止措置がとられたことがなかったことを証明している。外国貿易の現実的自由の度合は外国貿易の発展のうちにある。保護主義的あるいは禁止的制度の目的は、まさにこの外国貿易を制限することであり、こうした制度が効果的であるのはこの目的が達成される度合いにおいてのみである。

似たような別の誤謬については第十五章を見られたい。こうした誤謬は事態を一面的に見る見方、及び、量的関係の代わりに質的関係を代置すること、に由来している。（訳注：第十五章とあるが、第十四章のことと思われる。）

（2）よく知られていると同時に多数存在するこのような事実は、すべての国々において観察される。A・ルュシェール(A. Luchaire)『フランスの君主政治制度の歴史』(*Hist. des inst. monarch. de la france*, II, p.161.)には次のように述べられている。「自由都市をつくり出した世論の動向の自由主義的かつ民主的な性格についての、ある種の歴史家たちによる誇張された称賛に与しないように注意する必要がある。商人、本物ではあるが領地の小さい男爵たちからなるこれらの自由都市の社会はきわめて早く、そしてほとんどあらゆる所で、世襲制のカースト社会となり、市の職務のすべてを独占し、（一般にギルド、職人からなる）下層住民を虐げ、彼らに全ての税金を課し、十四世紀には、自由都市を民主主義的方向に変容させることになる凶暴な憎悪と反抗を誘発することになった。一般に十二世紀の独立自由都市はすでに狭量で堅苦しく嫉妬深い貴族政治になっており、領主に対して自由を要求する点でも、民衆に対して自由を拒否する点でも同じように敏捷であった。」

■【訳なし】Ce que M. Luchaire appelle <<la transformation dans le sense démocratique>> est simplement l'avènement d'une nouvelle elite.■

（3）この点について余りな一般化はすべきではない。しかしながら、同じような目的が今日芽生え始

めているジャコバン的な衆愚政治を求めるということはありえないことではない。

歴史家たちはしばしばこうした事件を彼らの情熱と偏見を通してしか見ることができず、二つの競争するエリート群の間の単なる闘争を自由を獲得するための戦いとして我々に描いて見せること、このことを我々はなお繰り返さなければならない。どの方面から見ても諸事実は我々をこのような観察につれ戻すからである。彼ら歴史家は次のように自ら信じ、我々にもそれを信じさせようとする。すなわち、実際にはその権力を取り上げようとしている別のエリートと全く同じように、権力を利用し濫用するために、権力を奪取しようとしているエリートは、隣人への純粋な愛のみによって、あるいは今日の慣用語法を用いれば、「名もなく貧しき人々」（des petits et des humbles）の幸福のみを願って動かされているというのである。こうした歴史家たちは敵方を攻撃しようと願うときだけは、少なくとも敵については真実を発見するに至る。かくしてテーヌ（Taine）はジャコバン派の宣言の意図を見破り、彼らが隠し持っていた貪欲な利害を我々の前に示した。同じようにジャン・ジャンセン（Jean Janssen）は、専ら土地をめぐる非常に見え透いた利害の覆いにすぎない神学的対立を我々に示してみせたのである。彼の著書は、新しいエリートが権力に到達したとき、前日までの彼らの同盟者、「名もなく貧しき人々」をどのように扱うかを見事に描き出している。「名もなく貧しき人々」はただそのくびきを変えただけである[1]。さらに同じく今日、社会主義者たちは十八世紀末の革命が単に旧エリートの代わりにブルジョアジーを据えただけであることを十分に見ており、そして彼らは新しい主人たちの抑圧の重みをかなり誇張しさえしているのであるが、他方で彼らは新しい政治エリートならば、今日まで続いてきた政治エリートたちよりも自らの約束をよりよく守るであろうと誠実に信じているのである。さらに、すべての革命家たちは相次いで次のように宣言するのである。すなわち、過去の革命は最終的に人民を欺瞞するほかなかった。真の革命はただ彼らが念頭に置いているもの以外にはない、というのである[2]。「すべての歴史的運動は―と『共産党宣言』は一八四八年に言う―今日まで、少数者の利益のための少数者の運動であった。プロレタリアの運動は膨大な多数者の利益のための彼らの自発的な運動である。」不幸にして純粋の幸福を人々にもたらすはずのこの真の革命なるものは人を失望させる蜃気楼にすぎず、一つの現実と化したことはかつてない。それは千年王国（l'age d'or des millénaires）に似ている。つねに待ち望まれながらそれはつねに未来の霧の中に消え去り、忠実な信者たちがその千年王国の誓いを守っていると信じている瞬間にもつねに彼らの手から滑り落ちている。

（1）この著者は仏訳版Ⅱの六〇八頁で、農民蜂起の後に作られた一つの歌を引いている。

お前たちは金持ちになる、
幸福になり、尊敬される！　こう言われた。
百の至福を与えると約束された。
こうして俺たちは道を誤ったのだ。
俺たちは金持ちになったか。
おお神よ、我等をあわれみたまえ。
持っていた僅かなものもなくしてしまった。

今こそ俺たちは貧乏だ。

おそらく、今日準備されている社会革命の後にもまた似たような歌が歌われる可能性があるであろう。

ド・ゴンクール（De Goncourt）『総裁政府時代におけるフランス社会の歴史』（*Hist. de la soc. franç. pendant la Directoire*, p.394）（訳注：総裁政府（一七九五―一七九九年））「デュムリエの予言『新しい貴族政治が君主制の貴族政治に取って代わろうとしていた』が、予言者の考えたところをさえ越えて、冷笑的運命によって実現された。…允許（訳注：国王が臣下に与えるもの）による一代限りの小弁護士が、一，五〇〇あるいは一，八〇〇万リーブルを溜め込むこと、四人の子持ちの共和党員がその娘たちの結婚祝いに八〇万リーブルを投じること、総裁政府を任期切れになった共和党員が自分の晩餐会のために、一，二〇〇リーブルの磁器一式をせしめること……」こうした情にもろい人道主義者たち（sensibles humanitaires）は人生を楽しむことに巧みであった。

Ph・ブオナロッティ（Ph. Buonarroti）は『バブーフの所謂平等のための陰謀』（*Conspiration pour l'égalité dite de Babœuf*）四八頁で、ジャコバンの新しいエリートが人民に課したくびきについて強く嘆いている。「革命政府がエゴイストたちの手に落ちてからというもの、それは公衆の真の災禍となった。それの行動は…全てを道徳的に頽廃させた。それは奢侈を復活させ、柔弱な風俗をよみ返らせ、極悪非道をよみ返らせた。それは公的領域を一掃した。…支配的党派の当時における努力の方向は不平等の維持と貴族政治の維持であった。」六六頁には次のように書かれている。「ぶどう月一三日の戦闘の後、平等への愛によって勝利を得た人々は、この戦闘の指導者たちに対して、彼らがなしえた人民の権利を樹立するという約束を守るようにと強く迫った。これは無駄であった。」

もしブオナロッティの友人たちが権力に到達していたならば、ブオナロッティが支配者たちについて言うこと、ジュール・ゲード（Jules Guesde）が一九〇〇年に権力に到達した社会主義者たちについて言っていることを、別の人々がブオナロッティの友人たちについて言ったことであろう。

（2）全ての事例を挙げるためには一巻の書物が必要であろう。比較的最近のものを次に挙げる。P・クロポトキン（P. Kropotkine）『パンの奪取』（*La conguête du pain*, Paris, 1894）六五頁。「もしも、やがて来る革命が社会革命にちがいないとすれば、それは、その目的によってのみならずその方法によっても、以前の蜂起とは区別されるであろう。…人民は旧体制を打破するために戦う。人民は貴重な血を流す。次いで彼らはひとふんばりした後、物陰に戻る。多少とも誠実な人々からなる政府が樹立され、組織化の任務はその政府が担うことになる。」

社会主義は一方で社会のほとんどすべての階級のうちに見出される原因を持つと同時に、他方で階級によって異なる原因をも有する。

社会主義の原因としてほとんどすべての階級のうちに見出されるもののうちには、自分たちの同胞の苦しみに対して同情し、その救済策を探求するように人々を駆り立てるところの感情、を含めなければならない。この感情は最も尊敬すべきものの一つであり、まさに社会のセメントである。

今日ではほとんどすべての人が社会主義者におもねっているが、それは社会主義者の勢力が大きくなったからだ。しかし、多くの人々が社会主義者をほとんど悪人ほどにも評価しなくなる時代はそれほど先ではないだろう。このような見方ほどまちがったものはない。社会主義者が現在まで、「ブルジョア」政党のメンバー、とりわけ他の市民からの税金を天引きするために法を利用する政党のメンバー、そして「ブルジョア社会主義」と呼んでよ

い政党のメンバーに比して、道徳的に劣るところのなかったことは確かなのである。もし「ブルジョア」たちが社会主義者と同じように自分たちの階級のために自己犠牲の精神によって動かされてきたとすれば、社会主義は今日それが脅威と感ぜられているほどに脅威的であることは決してないであろう。新しいエリートのその地位におけるふさわしさはまさに、その支持者たちが示す道徳的資質、その支持者たちをして、多数の迫害という厳しい試練を乗り切って、勝利せしめる道徳的資質によって証明される。

人々が自らの同胞に対して感ずる思いやりの感情、それなくしては多分社会が存在しえないであろうところの感情は、階級闘争の原理となんら相容れないものではない。自分自身の権利についてのきわめて断固とした防衛そのものも隣人の権利の尊重と完全に調和することが可能である。各階級はもし弾圧されるのを避けたいと望むならば、自らの利益を擁護する力を持たなければならないが、しかしこのことは、他の階級を弾圧することを目的としなければならないということでは全くない。逆に経験は、自らの利益を擁護するための最良の手段の一つはまさに、正義、衡平、そして思いやりをもって他者の利益を考慮に容れることであることを教えるであろう。

不幸にしてこの思いやりの感情は必ずしもつねにきわめて見識あるものとは言えない。この感情を経験する人々はしばしば、民間療法を勧めようとして病人のまわりに群らがっているおばちゃんたちに似ている。病人に役立ちたいという彼女たちの願いには疑わしいものはないが、ただ彼女たちの治療法の効果は疑わしい。彼女たちが病人のために感じることのできる最も献身的な愛情も彼女たちに欠けている医学知識を提供することはできないであろう。彼女らと同じような精神状態にある人物たちを彼女らが相手にする場合には、最後にはほとんど偶然的に一つの治療法が選ばれることになるであろう。ともかく「何かをする」ことが必要だからである。そしてもし病気が悪化しなければ病人は助かるチャンスがあることになる。

この事情は社会病理学の問題の場合にも同様である。隣人に対する最も熱烈な愛情、隣人の役に立ちたいという最も生き生きとした願望も、いかなる意味においても知識の欠如を補うことはできない。知識の欠如は、我々の提案する処方が我々が望む効果とは逆の効果をもたないかどうか、そして我々が闘っている病気を結局のところ悪化させないかどうかについて確かめることを不可能にするのである。しかし、情熱に押し流されている人々がこのような理性の言語に耐えるようになるのは嫌々ながらのことである。このような人々はともかくも「何かをする」ことを欲し、情熱に流されることに屈しない慎重な人々に対して全くの善意誠実から憤慨する。

偏見のない観察者ならば、たとえ社会主義が直接に着想した方策によって良い結果をもたらすことができなかったとしても、少なくとも間接的にはそれが我々の社会における進歩の本質的な一要素であったこと、しかもその理論が固有に持ちうる論理的価値とは独立にそうであったことを、認識することができるであろう。ある観点からすれば、たとえ社会主義の理論がまちがっているとしても、それが喚起する感情が有用であれば、そのことはほとんど問題ではない。ところで社会主義的宗教はプロレタリアに対してその権利を擁護するために必要なエネルギーと力を付与するのに貢献した。さらにそれはプロレタリアを道徳的に向上させた。この点においては、イギリスの労働組合主義(la Trade-Unionisme)を除けば、この社会主義的宗教は旧宗教のほかには重大な競争者をほとんど持たなかった。そして旧宗教のなかの庶民階級に好意的な情熱を一面では刺激したのである。社会主義は

現在大工業の労働者の環境に最も適合的な宗教形態であるように思われる。大工業が成立したところではどこでも社会主義的宗教が現われ、工業の発展に比例して支持者を増やしている。社会主義は下層階級のなかから現れるエリートの組織化を容易にし、今日において下層階級の教育（エデュカシオン）のための最良の手段の一つである。

我々が今述べたことは、いまだに教育（エデュカシオン）と知識（アンストリュクシオン）とを混同し、ある宗教の社会的価値をその教義の論理的価値によって判断しようと固執する人々には受け入れられないであろう。しかし社会科学はこれこそまさに根本的な誤謬であることを我々に教えている。

社会階級が異なるにつれて異なる別の諸原因も社会主義の発展に味方している。しばしば社会主義的信念の原因の一つである高貴な感情を吟味したのであるが、我々は、その中の金（きん）があらゆるまじり気から免れて純粋であること、社会主義が真に稀な例外として、我々の情熱や利害が我々の信念に多少とも及ぼす影響を免れていること、こうした点を保証する気には全くなれなかった。

こうした側面から見れば、社会主義的感情は主要には二つの大きな流れの如きものを形成していると見ることができる。一つは社会の下層から流れ出る。その源泉はこの層の人々が耐えている苦しみおよび、上流の人々が享受している財を奪取することによってそれを終らせたいと感じる願望、あるいは全く単純に他者の財への渇望にある。かつては、下層階級が上流階級を羨んだのは単にその経済的富ばかりではなく女性もその対象であった。財の共有はほとんど常にその補足として女性の共有をともなっていた。今日のところ、人民の要求のこの第二の部分は未解決のままに残されている(1)。この現象の原因を発見するためにはある奇妙な研究がなされねばならないであろう。もう一方の流れは上流階級から出て来ている。その源泉は多数である。すべての社会階級のうちに存在する社交性の本能は結果として、同胞に対する思いやり（bienveillance）の感情を大部分の人々のうちに生み出す。この感情は、いま見たばかりであるが、社会主義体系にとって一般に有利である。しかしこの感情はとりわけ上流階級においては、下層階級の場合にそれが取る形とは異なる形を取る。そしてこの違いは上流階級の衰退が進むにつれてますます大きくなる。

（1）今日では「自由恋愛」の支持者はともすれば女性の利益という見地に立っている。女性の共有はかつては主として男性の利益の観点から擁護されていた。

幸福な状態にある人々は彼らの同胞もまた同じく幸福であることを願うものである。そしてこの慈愛心（bienveillance）は家畜にまで拡大される。ここにはもはや尊敬すべきものも有益なものもない。他のあらゆる事柄においてと同様、有害なものはもっぱら過剰ということである。両親がその子供たちを愛するのは良いことであるが、甘やかすのはよくないことである。ところで慈愛の感情はしばしば感傷的な夢想へと退化し、そこから、地上に幸福を行きわたらせなければならないとするユートピアが生まれる。この目的を達成するための手段は一般にきわめて単純である。それは、本質的に、人々が避けたいと欲する悪と同じ時点において存在しており、そして「しかる後に、したがってしかるが故に（post hoc, propter hoc）」の論理によって悪の原因と判断されるいくつかの制度の廃止を宣言することにある。人間は社会のなかにあっては不幸である。自然状態に戻ろう。人間は幸福になるであろう。守銭奴は金（きん）を欲する。金をなきものにしよう。我々は守銭奴をなくすることができるであろう。結婚は人間のあらゆる他の制度と同じく悪を含んでいる。「自由恋

愛」を結婚の代わりに代置しよう。エリートが精気と活力に満ちている限りにおいては、こうしたたわ言は文学者、詩人、ディレッタントの小さな仲間のあいだで受け入れられるだけであるが、エリートが衰退状態になるときにはこれは彼らの大部分にとって好箇のものとなる。強者の慈悲と弱者の臆病とを混同してはならない。自らの利益と権利を譲ることができること、他者の利益と権利を侵害しはじめるまさにその点で停止しうるに十分な自制力を持ち同胞に対する慈悲の心をもちうること、これは強者の特性である。逆に自分を護るに必要な勇気を欠くこと、あらゆる抵抗を断念すること、勝者の寛大さに身を委ねること、さらには、怯懦の末に勝者を助けその勝利を容易にすること、これは弱い頽廃した人間の特性である。このような人間は軽蔑に値するだけであり、社会の利益（ビアン）のためにはできるだけ早く姿を消した方がよい。

既に見たように、衰退はその主要な徴候として生存闘争において備えていなければならない男性的感情の弱まりを見るばかりでなく、倒錯的趣向を発達させ、新しく珍奇な楽しみを追求させるようになる。後者のうち、少なくとも我々の民族においては、衰退の諸時期にしばしば現われるものが一つある。人は自らを貶め、格を下げ、自らが属している階級を嘲いものにし、それまで尊敬すべきものと信じられてきたものをすべて嘲弄することに鋭い快楽を感ずるようになる。衰退期のローマ人たちは道化役者の水準まで自らの格を下げた。すでにティベリウス（Tibère）帝の時代に元老院議員はパントマイムの劇場に入ることを禁ぜられており、ローマ騎兵隊員（訳注：元老院議員と平民との中間に位置する）は公にはパントマイムを見物することを禁ぜられていた(1)。ドミティウス（Domitien）はパントマイムに熱中していたかつての執政官補佐を元老院から追放した(2)。ローマの良家の既婚婦人で娼婦になっている者が見られた(3)。十八世紀フランスにおける上流階級のものの考え方や素行がどのようであったかを想起するまでもない。書物で知った後で現実においてそれを見たいと思う人々は現代の上流ブルジョアジーの少なくともその一小部分を観察すればよい。十八世紀末の上流階級はボーマルシェ（Beaumarchais）の舞台を嘲笑することに共に喜びを感じていた。今日ではいくつかの国で、毎日劇場でブルジョアジーを侮辱し、法服に泥をかけ、社会（きん）の力を構成するものすべてをよだれで汚すような作家たちを、ブルジョアジー自身が金でまぶしているのが見られる。ブルジョアジーは穢らわしい書物に耽溺している。しかも、こうした書物に比較すればサティリコン（satyricon）でさえ慎ましく思われるほどであり、これらの中で彼らは無残に侮辱されているのである。彼らを引きつけるのは単に猥雑さだけではなく、今日まで彼らが尊んできたものすべてが泥沼の中に引きずり込まれ、社会秩序の基盤が動揺させられるのをみたいという倒錯的な楽しみである。退化した社会では劇場の下らない出し物が再び主要な関心事となっており(4)、こうした社会はあらゆる品位を喪失している。

（1） Tacit., *Ann.*, I, 77 ■（タキトゥス、年代記?）■Ne domos pantomimorum senator introireti; ne egredientes in publicum, equites romani cingerent.》
Gell.,XI, 2 に引用されているところによればカトーは、次のように述べていたと伝えられている。すなわち古代ローマ人の間では詩は高い評価を与えられていなかった。もし誰かが詩に打ち込み、食卓が好きであれば、人は彼を寄生者と呼んだ、と。

（2） Suet., *Domit.*, 8

（3） Tacit., *Ann.*, II, 85. *Dig.* XLVII, 5, 11(10), § 2, Suet., *Tib.*,35「破廉恥な婦人たちは（姦通を禁ずる）

法律による刑罰を避けるために、そして良家の婦人としての身分（コンディシオン）と品位とを捨てるために娼婦の世界に身を投じた。二つの身分の若者たちは元老院布告にもかかわらず劇場と円形闘技場に出入りすることができるように、故意に、裁判所が自分たちの破廉恥を確認するように仕向けた。」

（4）十八世紀にはまだ多少の抵抗が存在していた。バショモン（Bachaumont）はブフレル（Boufflers）の騎兵隊員の、ある役者モレ（Molé）についての歌を保存している。

……

今度はそんなおもちゃがお気に入り？
モレ（Molet）にきまってる、
そうでなければニコレ（Nicolet）のしるし（signe）

……

将軍様、娼婦、法官、うやうやしい高僧、
宮廷婦人、みんなとりつかれて
彼のところに甘いお菓子をもって行く、
モレにきまっている
そうでなければニコレのしるし

……

しかし今日、誰が喜劇役者に対してこのような無礼な詩を書く勇気を持つであろうか。

ある裁判官はその判決において、未婚の母の自由恋愛を称賛することを拒否している人々を果敢にも叱責し、ディレッタントたちに大いに受けているのであるが、しかしこのディレッタントたちも彼らの娘や姉妹がこの麗しき先例に従ったならば、悲嘆にくれるであろう。法律は離婚を許しているというので、ある種の人々は、不思議な詭弁によって、この権利を行使しない婦人の方が好きだという人間を、法と「共和的精神」の蔑視者だと主張する。しかしながらローマにおいては、執政官の任期によってではなく夫によって年次を数えていた婦人がいたとしても、別の婦人たち、彼女たちは法に背いていると退化した社会ならば考えるであろうが、一夫にしかまみえなかったことを誇る婦人も存在したのである[1]。

（1）Orelli, 2742: ■*Q. Ragoniac Cyriaceti coniugi dulcissime et incomparibili, uni viriae, caste bone*: etc. 我々の時代のブルジョア社会主義者ならばおそらくこのような碑文を打ち壊させたことであろう。*Auth. lat.*, II, p.275: *Calsino nupta univira unanimis. Auth. Palat., Epigr. Sepul.*, 324: 「私はただ一人の夫のためにしか帯は解かずにこの石の下に眠る。」

上流の階級の人々はこのような社会主義的精神の遊戯にふけっても危険はあり得ないと信じている。そして時になんらかの危険の存在を彼らが認めるとしても、彼らはそれをきわめて軽微なものと見なし、このスポーツが彼らにもたらす快楽をより鋭いものにするのに役立つだけであると踏んでいる。

これらはすべて感傷主義的な媚態を伴なっている。人は贅沢な境遇の中でであれば悲惨について快適に論ずるものである。■サティリコン■の著者は■トリマルション（Trimalchion）■に次のように語らせるとき、この種の思わせぶりをパロディー化してし

かるべきである。「我が友よ、奴隷も同じく人間であり、彼らは運命によって虐げられてはいるけれども、我々と同じ乳を飲んでいたのだ[1]。」しかしこの少し前にはトリマルションは自分の奴隷ミトリダトゥス（Mithridate）が主人の守護神を冒涜した科で磔にされたことを眉一つ動かさずに物語ることを欲していたのであった。今日、自分たちの金で諸制度―まさにこの制度の中で、ブルジョアの富は不当に獲得されたものであり、彼らから収奪されなければならないということが教えられている―を援助している裕福な人々は少なくとも首尾一貫しているとは言えない。彼らの富は共同体から横領されたものであると彼らが本当に考えているのならば、その富のひとかけらではなく、全部すっかり返還しなければならないはずである。もっぱら「資本」による収入で生活している人々のその「資本」を弾劾しようとするとは、皮肉なことではないか。労働の生産物全体に対する労働者の権利についてきざな雄弁を弄ぶ人間の大部分は労働者ではないばかりか、その十本の指からはいかなる有用なものも作り出してはいないのである。■ *Quis tulerit Gracchos de seditione querentes?*

男らしさの欠如はさらに、犯罪者たちに対する愚かしい哀れみのうちにより一層鮮明に現われる。犯罪者たちが今日享受している特別な好意をある程度まで説明できるのは、この犯罪者たちというのはしばしば、凋落期にあるエリートの多くと同じように、退行的変質者（dégénérés）だという点である。

ある人間が別の人間を殺す、あるいは殺そうと試みるとせよ。我が博愛主義者たちの憐憫の情はもっぱらその殺人者のうえに注がれる。誰も犠牲者を気の毒には思わない。人々の心を占めるのは殺人者のことである。裁判官はこの哀れな男を迫害しないか。彼に「精神的拷問」を加えないか。彼はおそらくその輝かしい仕事を続ける能力があるであろうが、そうできるように彼はすぐさま社会に復帰させられるであろうか[1]。泥棒たちもまたこのような莫大なる慈悲を享受するが、盗まれた人間の方はもちろんこのように慈悲を受ける権利をまったく持たない。人々はある種の場合には、盗みの権利を宣言するまでに至っている。たしかに必要にせまられて一個のパンを盗む人間は、彼がこのような痛ましい事態に陥ったのが彼の意思、あるいは彼の落度によるのでないならば、いくらかの寛恕免責に値するではあろう。しかしこのようにして自分の財産を奪われたパン屋の方は、何らの同情にも値しないのであろうか。もしその日暮らしの貧乏人たちが全て彼からパンを奪うならば、このパン屋は破産に追い込まれ、彼もその家族も悲惨な状態に陥るであろう。社会はすべてのその日暮らしの貧乏人すべてにパンを供給しなければならないものであるとさし当り認めるとしても、全市民のものであるべき負債を、何故にもっぱらパン屋だけが支払わなければならないのか。しかし、感傷主義的悪癖に取りつかれている人間たちと議論しても無駄である。

（1）一九〇一年九月パリで開かれたグランド・オリエントのフリーメーソンの総会は、「刑法第四六三条の改正の方針を承認した。この方針は既に改訂されている、寛大なヒューマニティーの原則を適用することによって犯罪者を無罪にすることを裁判官に可能ならしめることもあるであろう。総会はこの素晴らしい「犯罪者」たちの犠牲者の被害を軽減するための適切な措置を鋭意考えることは潔しとしなかった。この犠牲者たちが「寛大なヒューマニティーの原則の適用」から何故に排除されるのかを理解することは困難である。彼らは一犯罪者によって奪われた、あるいは利益を侵害されたという事実だけで、人類に属することをやめるということでもあろうか。

このようにして要求された法律が議会に提案されていた。この法律は、我々の時代の感傷主義的な用語法で「許しの法」(loi de pardon) と名付けられている。この法律の目的は刑法の条項を愛しい犯人に適用するという気の重いつらい必要性から裁判官たちを免れさせることにある。これは純然たる偽善の一種である。人々はまだこれらの条項を明瞭に廃棄しようとは敢えてしない。しかし彼らは、高位高官に対しては不健康な人気取りのためにこれらの条項を適用することを許している。

これはもう仕方のないこととしても、犯罪者はますます有利な処分を発見するために相互にしのぎを削って、その明敏な頭脳を使う人間がますます多くなるであろうことは確実である。

エリートの社会主義のもう一つの源泉は、彼らエリートの利害の一部のうちに見出される。いかなる社会階級も同質ではなく、その内部に常に敵対が存在し、そして、これによって形成される党派の一つがその拠点を下層階級に求めることがありうる。これこそむしろ非常に一般的な現象である。ほとんどすべての革命はある一つのエリート集団のうちの反逆的構成員たちをその指導者にいただいてきているのである。

主義や宗教はその進展のある時点で、社会の中に存在する諸利益を調達するための一手段となり、その場合には転向の多くはもはや利害問題以外のものではなくなる。社会主義もこの一般的法則を免れることはできなかった。そして、いくつかの国では社会主義は、然るべき学習と実践によって準備されるべき、一つの職業(カリエール)となっている[1]。この道をたどる者の中で、ある者たちは政府の特別の計らいを獲得することだけを熱望するのであるが、他の者たちは立法機関に地位を得ること、あるいは少なくとも地方行政当局に地位を得ることを望む。ストライキは（訳注：社会主義者の）政治家にとっては上昇するための絶好の機会の一つである。戦争が軍人にとって昇進のためのそれであるのと同じである。

（1）G. Ferrero, *L'Europa giovane* を参照。

キリスト教が迫害されていた限りにおいては、キリスト教に改宗したのは、一般に、自らの信念のために自らの利益を犠牲にする力のある人間たちだけであった。これは社会主義が迫害されている国々では今日でも社会主義について起っていることである。キリスト教が支配的な宗教となるや否や、それは、宗教を何よりもまず利害問題とみなす人間たちを引きつけた[1]。そして社会主義についても現在いくつかの国々で同様のことが起きている。

（1）ローマ司教の選挙に関連して Ammien Marcellin (XXVII, 3) が言っていることは誰もが認識していることである。「ローマにおけるこの地位の重要性を考えるとき、私は、競争者たちがそれを求めてみな同じように貪欲になることに驚かない。この地位を獲得した者は確実に、貴婦人等からの莫大な寄進によって金持ちになるのである。」Julien の或る教会憲章は (*Cod. Theod.*, XII, 1, 50)、聖職者になることによってクリア会から免除されようと試みていた十人隊隊長たちをクリア会に戻すように命じている。

さらには次のようなこともしばしば起るのである。すなわち教義が多数の信奉者をもつようになり、ある種の感情が非常に広く普及したときには、ある種の人々は、この教義あ

るいは感情を自分たちの目的のために利用し、それらの内容は全く変えてしまいながらその形式だけを尊重する方が得策ではないかと考えるようになるのである。そのもっとも顕著な例の一つはアウグストゥスの場合であって、彼は共和政的形式の外観は尊重はしながら、ローマにおける皇帝の統治を樹立したのである。宗教の進化も同じようにこの種の事例を数多く提供している。十九世紀の初めおよび前半期を通じて上流階級は社会主義的理念を窒息させようとしたのであるが、今日ではそれを利用しようと努力している。やがては自分のことを社会主義者であると言わない人間を見つけることが難しくなるであろう。キリスト教社会主義、プロテスタント社会主義、カトリック社会主義、トルストイ風社会主義、いくつかの倫理的社会主義、共和主義的国家社会主義、民衆煽動的社会主義、王政主義的社会主義、特にイギリスにおける帝国主義的社会主義、無政府主義的社会主義、各種の文学的社会主義。小説や喜劇は最も重大な経済問題を、言うまでもなく社会主義的方向で、解決する。このような社会主義への熱中が過ぎ去ったときには次のようなことがありうる。すなわち、我々の文筆作品の多くは、十八世紀末のある種の感傷主義的な宣言について今日我々が感じるのと同じくらい、滑稽なほど意味のないものと思われる可能性である。

人間をある教義の支持者へと促すものは単に利害や計算だけではない。模倣の精神もあればその他多くの原因があるのであるが、なかでもいまの場合忘れることができないのは、知的プロレタリアートと呼ばれるものの存在である。こうした状況すべてが結び合わされてきわめて強力な一つの流れが生み出され、この流れはその通路にあるすべてのものを巻き込んでゆく。

科学的社会主義は人道主義的渇望に一つの科学的形式を与えたいという欲求から生まれたものである。かつては宗教的形式がそうであったように現代では科学的形式が支配的様式になっていることを考慮する必要がある。科学的社会主義は教義という視点からすればきわめて重要ではあるが、実践の観点からすれば重要性においてはるかに劣る。科学が大衆を感動させ熱狂させたことはかつてない。

社会主義は現在までのところ、社会の下層階級に対してよりも上流階級に対して、より大きな作用を及ぼしてきたように思われる。ヨーロッパのあらゆるところで社会主義の指導者たちが主としてブルジョアジーから補充されることになるのは偶然ではない。社会主義の理論家たちの出自は労働者階級ではない。

上流階級における抵抗精神全体の弱化、さらに、彼らが彼ら自身の没落を加速するために自覚することなく励むところの執拗な努力、これらは現代における最も興味ある現象の一つである。しかしこれは例外的なことではさらさらない。歴史はこうしたことについてのいくつもの事例を提供しており、多分今後もエリートの周流が続く限りは、すなわち我々の予想が未来に向って該当する限りにおいて、そうした事例は提供されるであろう。

一九〇一年十一月三十日
セリニー（ジュネーブ）にて
ヴィルフレッド・パレート

社会主義体系

第一章　社会組織（オルガニザシオン）の一般原則

歴史的決定論―現実運動と仮想運動―社会的集合（アグレガ）とその諸部分―相互作用―政府は少なくとも部分的には、必然的に支配階級の利害の代表者である―あらゆる統治機構（オルガニスム）は社会機構（オルガニスム）と密接な関係にある―経済的自由の実現を妨げる諸原因―あらゆる政府が支点を持たなければならない必然性―社会組織を絶対的な一観点から判断することはできない、善と悪とを総合的に判定しなければならない―このことは、社会的作用（アクティヴィテ）のある部分を修正するためにとられるあらゆる措置についてもいいうることである―科学的疑念と党派信仰との対比―社会システムを判断するためには大抵の場合経験に訴えなければならない必然性―これこそ自由と競争のための議論である

社会的事実が斉一性（ユニフォルミテ）を示さなかったならば社会科学というものは存在しないであろう。この斉一性の存在の確認は科学的決定論という考え方を作り出す。この考え方と唯物論とを混同しないように注意する必要がある。唯物論は一つの宗教である。なぜならそれは科学の範囲を越える問題の解決を与えると主張するからである。

絶対的教義の支持者は、科学的研究のもつ専ら相対的な性格というものを理解することができない。絶対的なるものを、それが存在しえないところで追求することによって、彼らは科学的探求を彼らの理念にしたがって解釈し歪曲するのである。

科学的決定論は斉一性の絶対的必然性を主張することはしない。それが主張するのは、これが絶対的教義とは大きく異なるところなのであるが、人はこれまで斉一性を実地に確認してきているということ、そして諸事実が斉一性を示すようには見えないときは、それは専ら我々の無知によると思われること、なぜなら我々は現在までのところ無知以外の原因が作用していることを発見することはできていないからということ、である。

絶対的たることを欲して誤謬に陥るところの、ある種の決定論が存在する。A・ナヴィル（A. Naville）教授が決定論と闘うのは全て尤もなのであるが、彼の唯一のまちがいは決定論と科学的決定論とを混同するところにある。彼は言う。「人がすべての歴史的説明の相対的性格を十分に理解したとき、そしてこれは容易なことなのであるが、歴史科学は必然的に限界をもっていること、歴史科学はいまだ説明のつけられていないものを使ってつねに説明するということを確信したとき、彼はもはや、我々に全く近いところでの、また我々自身における変遷（エボルシオン）そのもののうちに説明のつかないものが存在するという信念に対して、それを認めないという宣言を対置することはできない。この信念はなにか定理的なものの存在に矛盾するわけではない。■法則の存在の肯定は決定論を含意しない■。定理的なものは諸関係を認識するだけである。定理的なものが認識するのは次のことである。すなわち、なんらかの条件が実現されている、しかも他の撹乱的状況の併在なしに単独で実現されているならば、それ相応の結果が生ずる、という関係である。ある一項を想定せよ、定理的なものは諸君に、いかなる別項が必然的な依存関係によってそれに結び付いているかを教えるであろう。しかし如何にして最初の項は措定されるのか。それらはどこから来るのか。如何なる時期にそれらは現われたのか。それらはすべて同時代のものであるのか、それとも継時的に生み出されたのか。―定理的なものはこうしたことについては何も知らない[1]。」

（1）『科学の新しい分類』*Nouvelle classification des sciences*, Paris, 1901, p.132-133.

これは全く正確ではあるが、科学的決定論はまさにここに示されている範囲の外にでるものではなく、従って、科学的決定論について、決定論は法則の肯定と結びつけられていないという反論を立てることはできない。

さらに科学的決定論からはいま一つ間違った帰結が引き出される。あらゆる社会組織は社会に作用する内外の諸力の働きから結果するということがまず認められる。もし我々が一定の組織の事例を見出さないならば、それは明らかにその組織を規定する条件—これから組織が結果するのであるが—のうちのいくつかが確認されていないからである。進化（エボルシオン）の運動は、完全に規定されているならば、それが現実にたどってきた方向以外には起こり得なかった。

こうした考え方—これは実際に確認される斉一性の範囲内に含まれている限りにおいては、科学的決定論の容認者のうち誰も異論を唱える者はいないであろうが—から出発して、ある種の論者たちはあらゆる理論的研究の無益性を宣言し、科学を単なる記述的命題に限定しようとした。不可能なことに一生懸命になって、それが何になるのか。おとぎ話でも読んでいたほうがましだろう。かくして自称歴史派は政治経済学の研究を軽蔑し、不幸にも彼らが理解しえない理論に見向きもしなくなる。

しかし単なる良識でも、こうした余りに絶対的な結論には異議を唱える。起こらなかったことはすべて不可能であったのだ、これは誰も否定しない。しかし、不可能にも別の種類の不可能が存在するのである。一方の不可能は安定した恒常的■結合■—これは常に観察されてきたし、将来においてもおそらく観察されるであろう—から結果する。他方の不可能は、偶然的可変的結合—これは観察されたりされなかったりし、そして将来においては二度と生じないということがありうる—の結果である。あらゆる事情に鑑みて、ナポレオンがワーテルローにおいて勝利することは不可能であった。しかしこの不可能性は明らかに、トロイの城壁のもとでの神々の戦いのそれとは全く異なる種類の不可能性である。それゆえ戦略学が戦いの実際上の結果がどのようであったかということばかりでなく、ある種の仮説的条件が現実化していたならば交戦者の運命はどのようになっていただろうかということを研究することは意味がないわけではない。かくして戦略学は過去から、未来がどのようでありうるかについての教訓を引き出す。たしかに未来は決まっている。しかし我々はそれを知らないのであるから、少なくとも、考えられうる結合はどのようなものであるか、そしてその結合の結果はどのようなものであろうかについて知ることは有益である。さらに、あらゆる科学はこうした探求に専念しているのであり、社会諸科学は、人間の知識状態が社会諸現象の決定に寄与する一要素であればあるほど、またこの知識状態が科学的探求によって訂正されることが可能であればあるほど、この道をたどる正当な理由を持つのである。

力学の用語を借用して、人間社会についても、現実的運動と仮想的運動を区別することが可能である。

ある表面上を移動させられる重みのある質点を想定せよ。その質点のたどるであろう線は決定されている。この質点の現実的運動が行なわれるであろうのはこの線の上である。さしあたり我々は重さを捨象し、点についてそれが表面上を移動する条件のみを残すこと

ができる。その場合この点はこの表面上のどのような線でもたどることが可能であろう。こうして仮想的運動が得られるであろう。これら両者の研究は表面上の点の均衡条件を確定するのに役立ち、また同時に、この点が実際にたどった曲線のいくつかの特性を発見することに役立つことができる。これはまさにこの実際にたどられた曲線を、可能性としてたどらせ得る別の曲線と比較することによって、可能になるのである。

ある一つの社会に生きる一人の人間を想定しよう。彼の環境、この人間自身の性質、その他いろいろの状況が彼の行動（アクシオン）を決定するのであるが（1）、これは点の運動が決定されたのと同じ形である。これはまさに現実的運動である。さしあたりこの人間の行動を決定する状況のうち一つあるいはいくつかを捨象しよう。その場合我々は別の可能な行動を得るであろう。これこそまさに仮想的運動である。このような可能的行動の研究は均衡条件の発見にとって有益であり、また、現実的行動が示すところの性格を発見するうえでも有益である。

（1）　ここでは我々は、こうした行動が今度は社会条件に反作用する状況については無視する。

例えばフランスで生活している人々は保護貿易主義体制の下にある。彼らがそこに到達したのは質点の運動と全く同じように決定される現実的運動によってである。しかし、質点の運動について我々がさしあたり重さを捨象することができたのと同じように、フランス人についてもさしあたり彼らが自由貿易体制のもとに生きていると想定することが可能である。その場合フランス人の工業と農業はどうなるであろうか。結婚と出産の動きはどうなるであろうか。こうした問題に対する答えは我々に仮想的運動についての情報を与え、そしてこの情報は我々に、経済的均衡の条件を発見するうえで、また現実的運動が示すところのかなり数多くの性格を確定する上で、有益であろう。例えばフランスにおける人口増加の不足は少なくとも部分的には、蓄積された資本の、保護貿易主義、国家社会主義、そして軍国主義による破壊と関連しているということ、あるいは、もしこの破壊が止まるならば人口は増加するであろうと言うこと、これらは同じことを表現しているのである。後者の表現法は仮想的運動の叙述形式のもとに事柄を表現しているにすぎないのである。

我々がここで従事しなければならないのは、現実的運動を全く無視するわけではないが、特にこの仮想的運動であろう。現実的社会システムの研究はより特殊的に社会学に属する。我々としてはそれについてはわずかしか、つまり理論的システムの研究にとって必要なことのみを述べるであろう。

ハーバート・スペンサーは全くに正当に、ある集合体（アグレガ）の有する諸特徴はその諸部分の示す諸特徴から結果するものであると述べた。この命題に対してなされた反論はほとんど根拠がないものと思われる。反論は、集合体の諸特徴は諸部分の諸特徴の総和ではないこと、集合体の諸特徴は諸部分の諸特徴の単なる羅列によっては得られないということに基づいている。これは完全に正しいのであるが、しかし複数の事物の合成結果は必ずしもそれらの総和ではない。ある物体が一つの点に集まる二つの直線によって大きさ及び方向が表示されるところの二つの力によって動かされているならば、その物体はあたかも最初の二つの直線に基づいて作図される平行四辺形の対角線によって大きさ及び方向が表示されるところの一つの力によって動かされているように運動する。この一つの力は最初の二つの力の総和に等しくないという理由で、この力は最初の二つの力の合成結果ではないと反論で

きるであろうか。群衆を形成する人々は彼らが一人のときにするのとは異なって考え行動するということを否定する者は誰もいないが、だからといって群衆の示す諸特徴がその諸部分の諸特徴から結果するということが正しくなくなるわけではない。南アフリカにおける敗戦の後イギリスの群衆は、トンキンにおける敗戦の後のフランスの群衆と同じようには行動しなかったことに最近誰もが気づいている。次の二つの命題のあいだに矛盾は存在しない。イギリスの群衆の諸特徴はフランスの群衆のそれと同じく、これらの群衆を構成する個々人の諸特徴の単なる羅列によっては得られないという命題。そして、群衆のこうした諸特徴は個々人の諸特徴から結果するものであり、その一帰結であるという命題。

一国民の経済的および政治的（グヴァエルヌマンタル）システムが厳密に言えばその国民の諸特徴の合成結果であるということは、この後者の意味において理解されなければならない。しかしこの表現の仕方は完全に正確というわけではない。なぜならこういったシステムも今後は国民の諸特徴を変容させるかたちで介入するからである。そこには一連の作用と反作用とが存在する。すなわち、一原因とその効果ということに還元され得る一現象というよりもむしろいろいろな力の一均衡システムが存在するのである。

個々人の特徴は政治システムの特徴を決定する原因ではなく、また、政治システムも個々人の特徴を決定する原因ではなく、これら二つのあいだには必然的な対応が存在するのである。相互に作用し反作用する諸力のあいだに均衡状態が樹立されるのである。このことは特殊な場合についてのみならず、一般的に理解されなければならないことである。この点は社会諸科学の研究にとって絶対的に根本的なことがらである(1)。

（1）我々はここではこの問題について『経済学講義』*Cours d'économie politique*, § 591 § 600, およびその他の箇所で既に行なった詳しい叙述を繰り返すことはしない。

諸事実の観察は昔から実践的な人々をしてさまざまな形でこの真実を認識せしめてきた。人は本当に事実に就き従おうと欲するときには、理論を、とりわけ道徳的、感情的、あるいは神秘的理論を作りあげようと欲するときよりも誤謬に陥ることが少ないものである。ある一国民にとって非常に結構な法律が他の国民にとっては非常に都合が悪いということがありうることに気づいて、あるいは気候や人種民族の影響に気づいて、quid leges sine mores? という問いを立てるときには、人は個々人の特徴が集合体の特徴に及ぼす作用を認識する。ローマの平和の恩恵を称讃するとき、商業と工業の繁栄を財産の安全に関連づけるとき、最後に、これは誇張をともなってであるが、賢明なる法律の良き効果に注目するとき、人は集合体の個人に対する作用を認識する(1)。

（1）モンテスキューは『法の精神』*Esprit des lois*, XV III, 7 et 8 で別々の箇所においてであるが、二つの視点を呈示している。「人々は自らの配慮によって、またよき法律によって土地を彼らのすみかとしてより適切なものとした。…」もっと先では、「法律は、いろいろな国民がその生活の資を手に入れる様式と非常に大きな関係をもっている。」

現実に現われるままの現象についての科学的概念を得るためにはこれら二つの視点を結合する必要がある。これらを切り離して別々に扱うと重大な誤謬に陥る可能性がある。この点について特に危険なのは第二の視点である。

陶工が粘土を形づくるように社会を形づくる立法者、という考え方はきわめて旧いものであって、神話的でさえある。政府はそれが支配する社会とは絶対的に異なるなにものかであると考える人々、もっと悪いことには、国家と名付けられたある種の抽象的実体は具体的社会から独立した一存在であり、人間の偏見、無知、悪徳を免れていると信ずる人々、このような人々はいつの時代にもいた。倫理的国家 l'Etat éthique の崇拝者は、彼らの偶像たる国家が人間社会をつくり出し加工し発展させ、社会にあらゆる種類の美徳を付与したのだと考えるとき、全くの白昼夢を見ているのである。たしかに、もしこの倫理的国家という言葉が彼らの想像のなかにだけ存在するところのある形而上学的実体を意味するだけであるならば、それに対して、彼らが望むところのありとあらゆる美点を与えても自由なのであるが、もしこの言葉によって何か現実的もの、例えば公権力の総体を意味させようとするならば、その場合には人は、上等の特性あるいは劣等な特性の双方に関与する一機構、そのいずれをも強化することのできる集合体と向かい合うことになる。

最も絶対的な専制君主とは大抵の場合軍事的寡頭制あるいは官僚制の頭目にほかならない。多くの気まぐれが起りうるのではあるが、彼は支配階級の利益に一般的に、そして恒常的に対立しつつ統治することはできない。「兵士たちを金持ちにし、その他は軽蔑せよ」(1) と Septime Sévère はその息子に言ったのであるが、さらに一層兵士たちを喜ばせることが必要であった。そして彼らが満足しないときには、トルコの近衛歩兵がスルタンを廃したように、スコットランドの貴族が王を思いのままに支配したように、中国の官僚集団、さらにロシアの官僚集団がその主君を妨害しその意思を無力化したように、アテネの民衆がもはや彼らの気に入らなくなった煽動政治家を捨てたように、彼ら兵士は皇帝を退位させたのであった。ある民主派の政治家は自らの支持者について語る際に冗談にではあるが次のように言わされている。「私は彼らの指導者である。私は彼らに追従することがどうしても必要である。」ローマの皇帝で自らの親衛隊について同じようなことを言う可能性のあった人は一人どころではなく、また中国の皇帝のような専制独裁君主も一人ならずその官僚集団について同じようなことを言いかねなかった。なおまた、このような無力は好都合なことがあるのと同じく時に不都合なこともある。ずっと昔から指摘されてきたように、全くいただけないローマ皇帝の名のもとに非常に卓抜な法典（constitutions）が存在していた。カラカラ（Caracalla）の名によるものが多く残されている(2)。さらに、このようなことは一般的であった。帝国の指導的地位におけると同じく属州においても官僚集団がトップの欠点を中和した。デュリュイ（Duruy）は『ローマ史』第五巻四九六頁で、中央行政当局の事務局が地方総督の事務局の組織と類似の組織をもっていたことを指摘している。「彼らは無能なトップのもとでもいつもの仕事を続けていた。従って帝国の悲劇は属州においては気付かれないままに過ぎていった。」

（1） Dio Cas., LXXVI, 13:...■ギリシア語2行 p.83

（2） Le *Cod. Greg. XIV, ad. Leg, Jul. de adulteriis* は我々に、厳格かつ潔癖な道徳についてのカラカラの法典を残している。*Habebunt autem ante oculos hoc inquirere, an, cum tu pudice viveres, illi quoque bonos mores colendi auctor fuisti: periniquum enim mihi videtur esse, ut pudicitiam vir ab uxore exigat, quam ipse non exhibet.*。■*Hist. Aug.*が述べているのはこの王子のことである（fuit male moratus.）■。そして彼の息子とその義理の母との結婚に関しては次のようにある。*nuptiasque eas celebravit quas si sciret se leges dare, vere solus prohibere*

debuisset.

他方、非常に善良な意志をもった君主たちは全くなにも手に入れず、倫理的な構想を実現したいという自らの願望の犠牲となって非業の死を遂げさえした。Pertinax は、自ら犠牲となって、国家の首長たる者はあまりに廉潔であってもならないし、あまりに倹約であってもならないことを教えた。これは社会主義の指導者たちがその勝利の日に忘れてはならないことであろう。彼らの支持者はマルクスの理論についての立派な注釈とは別のものを欲するであろう。彼らにはパンとサーカス、とりわけサーカスが必要であろう(1)。

(1) フランス、リールでは市の権力は社会主義者が握っている。この社会主義者たちは劇場に対して大金を助成しているが、各興業ごとに民衆のための無料の四百席を設けることという条件がついている。納税者の負担で見せ物を見物したい人は市の職員が管理する帳簿に自分の名前を書き、順番の番号を受けとる。一から四〇〇の番号を持っている人々は最初の演目を見物することができ、四〇一から八〇〇の番号をもっている人々は第二の演目を見物することができる、…以下同様、といった形である。最初の年には三六〇〇名の記載があり、第二年目には一二〇〇〇名の記載があり、三年目には一五〇〇〇名の記載があった。(フランス労働党当選者国民連合月報、第一集、一八九九・十二・一、*Bulletin mensuel de la Fédération nationale des élus du parti ouvrier français*— 1er decemb. 1899)。他の都市もリールを模倣している。トゥルーズでは、市庁劇場の管理部局は一九〇一年に始まる三年期の間、各演目ごとに五〇枚の入場券を社会主義の市当局に預けることを約束しなければならなかった。

「美への権利」という一般理論さえつくり出された。おそらくいつの日か我々は人民の代表がそれに進物 congiarium を授与するのを見るであろう。そして、この贈り物の記念のためにメダルがつくられるであろう。

バックル (Buckle) が叙述している、イスパニアにおけるシャルル三世の改革の試みの不成功の歴史は典型的である。「この君主は—とバックルは言う—絶大な精力をもった男であった。そしてイスパニア生れではあったがその国民の感情を共有していなかった。…その臣下たちと比較して彼はたしかにずば抜けて見識が高かった。彼は粘り強く自らの政策を続行し、そして彼の大臣たちは彼と同じく広く世間で認められた有能な人士であったので、彼らはその計画の大部分を、然るべき妨害にもかかわらず、実行に移すことに成功したのであった。…しかし、他の類似の場合と同様この場合にも、彼らは民衆が愛してやまない悪習を攻撃することによって、この悪習がひき起こす病気を進行させたことは明らかである。法律によって考え方を変えようとするのは徒労である。それは単に失敗するばかりでなく、見解をこれまでになく強化する、ある反作用の原因となるのである。…(イスパニアにおける)反作用は沈黙のうちに準備された。そして世紀の末になって表に現れた。…五年足らずのあいだに全てが変ってしまった。教会はその権威(アンピール)を回復した。討論の自由は全く廃止された。十七世紀以来人々がもはや話題にしようともしなくなっていた旧い専断的な原理が蘇った。…宗教裁判が突如目を覚まし、その敵たちをふるえあがらせるほどのエネルギーを発揮した。」

絶対主義的体制が失敗した場合でも、それ以上にはるかに群衆の意見や偏見に依存して

いる民主体制が成功しうると考えることは難しい。実際、あらゆる政府は、たとえそれが思うがままに命令しているように見える場合でも、かなりしばしば従属しているのである。それゆえ改革は、それがどのようなものであれ、それが適用される個々人の特徴を考慮に入れなければ、判断することができない。このような命題を述べることは平板に見えるかも知れない。しかしほとんどの場合人々は政治的論議においていとも簡単にこのことを忘れるのである。

政府はあらゆる生物有機体（せいぶつオルガニスム）と同じように、自らの力の維持と他の有機体からの侵襲の排斥を第一の関心事として持っているし、また持たねばならない。それは自己保存への傾向をもっており、またそれなくしてはまもなく衰弱し消滅するであろう。

もし政府という有機体（オルガニスム）が完璧な存在からなる一国民のなかで成育するのであれば、最も誠実で最も道徳的な手段こそが自らを維持し繁栄するために採用さるべき最も効果的な手段でもあるであろう。しかしそれは人間のなかで、すなわち完璧ならざる存在のなかで、成育するものであるから、こうした存在に適合した手段、必然的に善と悪との混合となる手段に訴えなければならない。さらにこの有機体は主として孤立した個々人と関係しているのではなく、「群衆」と関係しているのだということを付言しなければならない(1)。ところで群衆心理学に関する最近の研究は、次のことを明らかにしている。すなわち群衆なるものは多くの点で、それを形成する個々人の性質よりも劣った性質を持っているということである。こうした「群衆」の性質が変化しない限りにおいては、ある一国で受け継がれる政府はそれがいかなる形のものであれ、存続し繁栄するためにはほとんど同じ手段に訴えなければならないはずである。一七八九年以降のフランスの歴史を検討すればこのことを納得できるであろう。ジャコバン党員は一人ならず、その生活習慣をあまり変えることもなしに、帝政に奉ずることも王政復古に奉ずることもできたのである。もしフランスで社会主義が勝利するならば、現在の急進派は一人ならず、何ら背教的要素なしに新しい体制に献身し、いつか彼が独裁専制君主に仕える日を待つことになろう。■Bareres■の種族が消滅したことを示すものは何もない。

（1）「群衆」については次のものを見よ。S. Sighele, *La foule criminelle*. S. Sighele, *Psychologie des sectes*, G. Le Bon, *Psychologie des foules*.

王政復古政府はあまりに多くのポストを配分したとして強く非難された。ポール・ルイ・クリエは次のように言った国民議会議員を気持ちよくからかい、ベランジェはシャンソンで皮肉った。

とうとうやったぞ
……
兄弟を二人就職させたし
三人の息子も職を得た

しかし王政復古につづくいくつかの政体が職員の数をまさしく減少させたとは、少なくとも統計を信ずる限りは思われない(1)。

（1）

年	職員数	給与総額（100万フラン）	平均給与（フラン）
１８４６	188000	２４５	1300
１８５８	217000	２６０	1350
１８７３	285000	３４０	1400
１８８６	350000	４８４	1450
１８９６	416000	６２７	1490

■オーストラリア（Austriche）■については、*Statistische Monatschrift* に次の数字が見られる。

	１８９１	１９００
行政職員	35903	65415
職員数の増加（%）		82,20
給与の増加（%）		102,50

有権者に対する買収行為は選挙そのものと同じくらい旧いものである。かつて人はイギリスの貴族階級は選挙者を買収するということで強く非難したのであるが、アメリカその他における近代民主主義はそれを差し控えているであろうか。貴族は、常にではないが少なくとも何回かは、自分自身の金を使っていた。そして煽動政治家はともすれば他人の金を使いがちである。選挙者に各種の税金による収入を分配するのである。しかしこれと同じ現象は既にアテネにおいて生じていたのである。「第一執政官ペリクレスは—とアリストテレスは言う—Cimon の富の影響力を弱めるために裁判官たちに給与を支給した。Cimon は王侯の如き財産を持ち、まずは恒例の礼拝式を壮麗に取り行ない、次には自らの費用で

自分の行政区デモスの多数の住民に生活の資を供した。…ペリクレスは自分の財産ではこうした費用をまかなうことができず、自分自身の財を与える代りに、市民に対して市民自身の金を与え、裁判官の給与制度を設立した[1]。」ローマにおける有権者買収という非常によく知られた事実は思い出すに及ばない。これはローマにおいては選挙と共に自然に終焉し、民衆に対する進物 congiarium[2] 及び兵士に対する献金 donativum によってとって代られた。しかし属州においては、選挙したがって候補者の贈り物は帝政時代にも続いていた。権力の代わりとしては、人は民衆から、あるいは職人の単なる同業者団体から外観だけの実体のない肩書きを買い取った。ポンペイで候補者を推薦するためにいくつかの同業者団体によって書かれた文字が発見されたが[3]、この推薦文は無料ではなかったと信じてよいであろう。少なくとも我々は、同業者団体から称讃される市民の気前の良さを我々に認識させる書き物を多数有している[4]。今日イギリスその他の国々では選挙者は候補者の費用で飲み食いする。これはずっと昔からの習わしである。「市民よ—と、ある書き物にはある—甘いぶどう酒と菓子はいかがか。六時までならばふるまわれるであろう。もし遅れたり、またこのことを無視したとしても、そのときは汝自身のみを責めるがよい」(Orelli, 7083)。たとえ新しい経済体制が現在のブルジョア社会のそれに取って代わるとしても、これほど尊敬すべき習わしが終焉するとはほとんど考えられない。さらにイギリスでは、急進派が選挙費用削減の要求を差し控えている。彼らが要求しているのはただ、候補者の負担の代りに国家による支給である。かくして進歩の法則がこうしたことを欲するのである。進歩の法則によれば、ペリクレスの方式が Cimon のそれに到る所でとって代る傾向にあることになる。アリストファネスは善良な民(bon Démos)の好意を得るためにお互いにしのぎを削る政治家たちを見事な腕前で描いた[5]。しかしこのことからなにか民主体制に反対するような結論を引き出すことはまちがいであろう。国王の追従者たちはもっと悪いことをやったのだからである。人間の本性が変化しない限りは、人はあらゆる手段を使って、権力を自由にしている人物たちの好意を得ようとするであろう。

(1) ギリシア語一行 p.88

(2) アウグストゥスはまったく強力ではあったが、「選挙の日には、自らも所属していたファビア族およびスカプティア族に対して、一人あたり一〇〇〇セステルシス(ローマの銀貨)を与えた。彼らが候補者に何も要求しないようにするためであった。」Suet., *Aug.*,40.

(3) 例えば、C. I. L., IV, 97: *C(aium) Cuspium Pansam aed(dem) muliones universi.* Ibidem, 113 : *C(aium) Julium Polybium II vir(um) muliones rog(ant).* Ibidem, 180: *M(arcum) Ennium Sabinum aed(ilem) pomari ro(gant).* Etc.

(4) 後の一時期についてHuelsenが、書き残されたものによって知ることのできた配分にしたがって表を作成した。この配分は漁師及び潜水夫の団体に向けてなされたものであった。漁師たちは多分オスティエあるいはポルトゥスに住んでいたと思われる。総額はデナリウス銀貨で示されている。額は受け取る人物の身分に従って変わっている。

配分された人物の肩書き	贈与者					
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
平民保護貴族及び三人組終身委員	２６	２６	１６	５０	—	100?
長官	１６	１６	１６	２６	２５	１２
管財人	１２	１２	１２	１６	１５	—
十人組組長	—	—	—	—	—	4
平民	8	8	8	１２	１０	—

（人名）
（Ⅰ）アマンドウス
（Ⅱ）マクシムス
（Ⅲ）フロリヌス
（Ⅳ）セプティミヌス
（Ⅴ）アナエウス
（Ⅵ）不明

（5）アリストファネス（Aristoph.）, *Equit.* クレオン(Cléon)と豚肉屋が人民の好意を奪い合っている場面全体を引用する必要があるであろう。（一一九〇）。「クレオン―わしのこの肉入りの菓子を一つ受け取れ。―豚肉屋―わしの菓子を全部受け取れ。―クレオン―お前には彼らに与える野兎のシチューはないだろう。―豚肉屋―しまった！野兎のシチューはどこにあるのだ！」等。その後の野兎シチューの効果を繰り返そうとした政治家が一人ならずいた。

フランスで一八九七年の選挙に備えて政府は地租を二六〇〇万フラン軽減するボズリアン（Bozerian）の税制改正案を可決させた。この額についてはもっと増やすことができたはずであった。ジョレース氏は一八九七年九月九日の雑誌*La Dépêche*『至急便』)で農民に向けて次のように書いた。「彼ら（農民）はいまや指導者たちのエゴイズムが、痛めつけられている耕作者たちの苦痛を軽減させたでもあろう大きな税制改革を全て挫折(コンヴェルシオン)せしめたことを知っている。彼らは特権者たちが農民に対して六〇〇〇万フランの債務転換を拒否したことを知っている。彼らは特権者たちが所得に対する一般税と累進税、そして地代に対する課税―これらも耕地を押しつぶすような重荷を軽減することができたであろう―を拒否したことを知っている。…鉄道会社にはセンターへの補給を容易ならしめるためにフランスの小麦は無料で輸送するように要求する必要がある。」これは既にして一個の肉入り

菓子であるが、次のは野兎のシチューである。*Joural des Débats* のある論説記事は次のように書いている。「少なくとも主要なものについては、更地に対する地租の四分の一が農民から免除されようとしている。これで二五〇〇万フランから二六〇〇万フランになる。既に一八七一年に地租は一五二五フラン軽減されていた。これで四〇〇〇万フラン以上の軽減になる。このうえまだ七六〇〇万フランから七七〇〇万フラン残っているであろう。もし彼らが軽減を切実に願い、三％の債務転換を決心するならば、この残りの部分を取り壊すことも可能であろう。」このような提案がきわめて大真面目に経済学者によってなされているのである。債務転換は（もしそれが成功したとしても）五五〇〇万フランから五六〇〇万フランにしかならなかったであろう。しかし、農民の税を廃止するためであれば、「償還を犠牲にして」不足分の二〇〇〇万フランをまかなうことも可能だったであろう。目的は明確に示されている。「かくして政府は自らの権限として、そして選挙に先立って、断固たる行動をとることができる。」

昔ナポリのブルボン政府は■Camorra■汚職と妥協するということで非難された。最近のある訴訟は(1)、イタリア政府は選挙の時期にマフィアの支持を受けるのを嫌がらなかったことを示した。現在の政体に続くであろう新しい政体も同じような支持を当てにするかどうかを見ることは興味あるところである。過去の経験によって判断するならば、肯定が予想されるところである。

（1）ノタルバルトーロの訴訟。シシリーの元王立警察署長であった軍事大臣は、ミラノの裁判所で証言するに際して、一人の身代わりを立てていた。その人物はパレルモの主席検事だったのであるが、この軍事大臣は彼がすでに死去したものと信じていた。そして、彼がマフィアのメンバーに対して弱かったと非難した。しかしこの法官はまだ生きていた。彼は、この警察署長が、殺人、盗み及び文書偽造で起訴されていたある人物を釈放するようにとこの法官に依頼している手紙を公表して反撃した。この手紙には選挙のための目的が明瞭に示されていた。手紙には次のように書かれている。■*Non è per me che chiedo chè io non chiedo e non chiederò mai nulla, ma pel partito. Bisogna assolutamente che Damiani sorta vittorioso dulla lotta, perchè Damiani è Crispi.*（私は決して私自身のためにお願いするのではありません。党のためです。ダミアーニの勝利が絶対に必要です。ダミアーニはクリスピ派ですから。（p.91））■主席検事は被告の釈放を拒否した。手紙が公表された後、軍事大臣は、従来からのしきたりに従うという過ちを犯しただけなのであったが、辞表を提出した。

現在までのところ、完全な経済的自由のシステムに従って統治された国は存在しない。このことの主たる原因は、経済的自由がその支持者にいかなる特権も約束せず、また、不正利得の魅力によって彼らを惹きつけることもできないからである。それは彼らに対して最大多数のための正義と幸福を提供するだけであり、それでは余りに少なすぎるのである。それで経済的自由なるものは現実外のものとなる。特権なるものは、たとえそれが大衆には一〇〇フランを費やさせねばならず、特権者には五〇フラン―残りは雑費に消える―をもたらすだけであるとしても、一般に歓迎されるであろう。なぜならば、大衆は自分たちが奪われていることをほとんど理解せず、他方特権者は彼らが享受する利益を完全に理解す

るからである。

人々は社会の中で単純に並置されているのではない。従って社会の諸部分のうちの一つがもつ重要性と力は、その部分の人数に比例するものでは全くない。皇帝親衛隊員はローマ帝国のなかでほんの僅かな少数であったが、それでも彼らは権力を持っていた。フランスはほとんどつねにパリ民衆による革命を受け入れてきた。田舎の人間よりもはるかに活動的で進取の気性に富んでいる都市労働者は立法者の注意を独占している。普通選挙権はある種の同質性を回復させるに違いないように思われるが、それは結果として新しい分化をもたらしただけであった。この現象はとりわけアメリカ合衆国において顕著であって、そこでは少数の政治家たちが権力を共有している。ニューヨーク市はタマニー・ホールの政治家を決定的に追い払うには至っていない。彼らは追い出されてもすぐ権力に復帰する(1)。

(1) 政治家の汚職は莫大な規模に達している。一九〇〇年三月ニューヨーク・タイムスは、ニューヨークでは賭博場は保護してもらうために警察に対して年間一五四五万フランを支払っていることを公にした。他の施設も同じように搾り取られている。

政府はどこかに支点、拠点をもたなければならない。もしそれが軍事力であるならば、軍人に特権的地位を与え、彼らを超法的な存在とし、国の金を彼らに分配することが必要である。もしそれが寡占支配者に依拠しているのであれば、彼らにあらゆる種類の特権を与えること、大衆に負担をかける税金や給付という直接的な形であれ、専売権や保護関税という間接的な形であれ、彼らを金持ちにすることが必要となる。もしそれが民衆に依拠しているのであれば、彼らのために富者を犠牲にしなければならない。富者はアテネでは訴訟や、富者の奉仕義務によって没落させられ、あるいは重税によって押しつぶされる。そして既にして進化は裁判で、ある種の人々のために新しく特権をつくり出している。フランスでは、常に経営者に非があるとする指定委任とともに選出された労働審判所判事が存在したことが指摘されている。この裁判所においては実にしばしば裕福な人物は、ただ彼が裕福であるという理由によって、たとえその他の点では正しくとも、有罪を宣告される。政体の変化は特権者の変化をもたらしはするが、特権そのものをなくしはしない。もっぱら正義と道理とを実現する組織というのは、肉体なき精神といったものと同じく全く観念的な概念にほかならない。現実の組織はきわめて多様である。小さな国においては例外がありうるが、一般には組織の指導者は、彼らをしばしば鼓舞するすばらしい意図にもかかわらず、正義とか道理に意を用いることができるのは、ただ可能な限りにおいてであり、それが彼らの利益やその支持者の利益を害しない限りにおいてである。

例えばフランスでは公権力がアルコール中毒に対する闘争を企だてている。我々はここではこれがよいか悪いかは論じない。しかし、ともかくもこの方向に立つのであれば、それはアルコール中毒が害悪のもとであり、そこから国民を救い出すことが彼らの義務と信じてのことであると本当に認めなければならない。不幸なことに彼らはワイン、ビール、りんご酒の生産者を大事に扱う必要性によって■停止■させられる。これらの生産者も選挙人であり、多数であり、そして公権力は彼らの票を必要とする。そうした場合、最も権威ある人々の意見に反して(1)、ワイン、ビール、りんご酒はどれだけ飲んでも全く害はないと宣言されることになる。表面上は健康上の理由によって、そして実際には売るための

ワイン、ビール、りんご酒をもっている選挙人を有利にするために、一つの法律がつくられる。この法律のおかげで、「健康的な」飲みもの、すなわちワイン、ビール、りんご酒は免税されなければならず、これらが支払っていた税金は他の税によって埋め合わせられなければならない。これは水だけしか飲まない人々にもかかっていくことになる。かくして例えばパリで子供何人かをもつ父親がいるとせよ。家族は水しかのまないとする。他方に、毎日酔っている独身者あるいは結婚してはいるが子供のいない男がいるとせよ。政治家諸氏の言にもかかわらず、人は蒸留酒リキュールで酔うことができると同じようにワインでも酔うことができる。ところで大酒飲みが大いに楽しむことができるようにパリ市は、「健康的な」飲み物に関する法律に続いて、ワインに課税することをやめ、そして予算にあいた穴は埋めなければならないので、食事の際に水だけを飲む人も含めてあらゆる人にさまざまの税金をかける。そこで、倫理的国家の論理にほとほと感心されたい。すなわち、酔っぱらうまでワインを飲む独身者に少なく支払わせる分を、家族を養うためにワインを断っている男により多く支払わせて埋め合わせるのは、アルコール中毒と人口減少—これはアルコール中毒の結果であると主張されているが、我々はこれを誤って信じているのだろうか—に対して闘うためである、というのである(2)。

（1）　我々が全見解を共にするには程遠い人物であるが、G・ダランベルグ（G. Daremberg）博士は、『ジュルナール・デ・デバ（*Journal des Débats*）』一九〇一年九月五日号に次のように書いている。「我が読者たちはしばしば、ワイン、りんご酒、ビールといった衛生的飲み物について語ることを欲する。私としては読者たちがこの衛生的という言い方を真面目にはとらないように望みたい。こうした言い方はアルコール性飲料の生産者、取り扱い商人によって、とりわけブドウの栽培者やその取り扱い商人によって、たとえ命の水は危険な毒物であるとしてもワインは有益で不可欠の栄養物であることを信じさせるために、案出されたものであった。…我々の経験はワインについての「衛生的飲み物」という伝説を決定的に打ち砕いたと私は考える。」同じ雑誌の一九〇一年八月二九日号でも彼は次のように述べている。「ブドウ産地の選挙人や代議士を喜ばせるために軍隊でワインを配給することが始められた。この新しい慣行は、まことに困った結果をもたらすであろう。」

（2）　いくつかの都市の予算がこのような改正を認めたばかりでなく、国家予算も赤字を出している。この点について、一九〇一年一〇月九日のジュルナール・デ・デバ（*Journal des Débats*）は次のように言う。「北部地方を砂糖で満足させようとした後、南部地方を蒸留酒リキュールで満足させることが試みられた。このためには不幸なことに、予算を犠牲にすること、すなわち、特殊利益のために、あるいは地域的利益のために一般利益を捨てることが必要であった。」読者はもしかするとこのような引用を不必要と判断するかも知れない。読者はこれと似たようなものを、どんな新聞ででも多数見出すことができる。

結局一言で言えば、どんな困難な事態も否定され得るというものだ。そしてやむを得なければ、ワイン・ビール・りんご酒を「健康的な」飲み物とする命題を押し通すことも可能である。しかしもっとよいことがある。

アルコールは毒であると言明されている。しかしよく注意されたい。アルコールは全面的に有毒ということではない。健康に有害ではない特性、少なくとも法律が有害とは見な

していない特性も存在するのである。この特性はその化学的構成によってではなく、もっぱら生産者の性質によって他と区別される。この特性はブドウ産地の蒸留酒製造に由来する。フランスではいかなる政府も敢えて彼らの特権に手を触れることはしなかった。彼らはあらゆる税を免れてアルコールを生産することができるのである。ブドウ産地の蒸留酒製造業者に由来するアルコールは、他の品質のアルコールのどれよりも健康にとっての有害性が低いとまじめに信ずることの出来る人は、そもそも存在するのであろうか。もしブドウ産地の蒸留酒製造業者が、大事に扱う必要のある選挙人でなかったならば、彼らの特権はずっと以前に消滅していたであろうと想像できない人はいるだろうか。

このようなことは少しも例外的ではなく、それどころかいつものことであり、普通のことである(1)。そしてこうしたことを見ないでいるためには故意にかたく目を閉じている必要がある。驚くべきことは、こうした事実の認識が倫理的国家の信者の信念を少しも変えることがないという点である。

（1）一九〇一年九月二〇日の *Gazette de Lausanne* は、食料警察に関する法案を検討している国民会議委員会の仕事について次のように解説している。「各都市あるいはいくつかの小さな都市は、単独ないしは共同で肉類監督官を指名することになるであろう。肉類はごく僅かの税金を用いて監督されるであろう。…家庭内での屠殺は公式の監督の対象とはならないであろう。公式の監督が望ましいと思われるふしはあるのであるが。国家の立法および監督の欠を埋める仕事は農民屠殺者の慎重さと知性とに委ねられている。国家の干渉はよく思われないであろう。」

他方、論理や経験が提供するところの最も明瞭な証拠によってさえ動揺させられないというのがおよそ迷信なるものすべてに共通する一特徴である。極端でしかも非常に驚くべき事情は次のようなものである。教皇アレクサンドル・ボルジアの息子であったバレンタイン公爵は、反逆の罪でヴィテロッツォを捕え、彼を絞殺させた。ヴィテロッツォは死ぬ前に、死に際しての恩恵として、公爵に対して、自分が犯した罪の全贖宥を与えることを教皇に嘆願してほしいと要求した(1)。このように、ヴィテロッツォは誰よりもよくアレクサンドル・ボルジアの破廉恥状態を知ることができていたにもかかわらず、このあらゆる罪にまみれた男が彼のために天国の門を開くことができると考えていたのである。

（1）Machiavelli, *Descrizione del modo tenuto dal duca Val nello ammazzare Vitellozzo, ecc.*: 《*perchè Vitelozzo pregò, che e' si supplicasse al papa che gli desse dei suoi peccati indulgenza plenaria.*》（ヴィテロッツォは何故に祈ったのか、その罪に対して全贖宥を授ける教皇に対して何故かほどに懇願したのか。）

もう少し高い知的水準のところでは、当該組織の一般的欠陥であるものを特にある幾人かの人物の責任に帰そうとする説明の試みが見られる。人々は公権力を非難し、自分たちの苦しみの全てについて公権力を責める。しかしこれはまちがいであり、不当でもある。公権力を行使する人物たちは大抵の場合国民の公共的利益を確保するために最善を尽そうと試みている。彼らはその敵対者たちが想像するよりはるかに善き意図によって動かされている。ただしかし彼らは彼らが依拠している私的利害を考慮に容れなければならないの

である。議会制が存在している国々では事態をより明瞭に見ることができる。内閣は議会の多数派に依拠しており、多数派は選挙人に依拠している。大臣たちが議会の票については顧慮することなく倫理的抽象観念の実現のみを追求すると想像し、同じように代議士たちも再選について何も考えないと想像するためには、とてつもなくすばらしいお目出度さを授けられていなければならない。他方選挙人たちは、その私的利害のみを考えている時でも、公共の利益にのみ専念しているように見えることを欲する。公権力が法案を正当化するために論理的価値はほとんどあるいは全く持たない理由を呈示せざるを得ないのは、人間が一般に自らの行為に対して一定の原則を付与したいという願望と同じくこうした私的利益の願望を満足させるためである。真の理由は明示されず別のものが言明される。

人々が法律及び国家の援助を用いて階級闘争を遂行することを断念しない限りは(1)、ある種の市民たちの利害を保護するための法律がその他の市民の利害の犠牲において規定されることが必然的であろう。そしてそのような法律は、国家の権限が拡大されるにつれて一層多数になるであろう。

(1) 第十四章を参照。

しかし、たとえすべての社会組織の形態がこのように共通の性質を持っているにしても、これらの性質がどのような組織にも全く同じ影響を及ぼすというわけではない。全て人間はある種の情熱にとらわれやすいと述べることは、すべての人間が同じようにそれに屈服する、と言おうとするものではない。差異は主として量的であり、そして例えばトラヤヌス（Trajan）のような人物が兵士の利害を考慮すべく余儀なくせられているとしても、誰もその治世をカラカラのそれと混同しようとはしないであろう。誇張された悲観論の感情に引きずられてはならず、また、あらゆる組織が欠陥ないしは悪徳をも使うということで、あらゆる組織をひとまとめに非難してもならない。ただこの世では人間もその組織も完璧なものは存在せず、まさにこの存在しないものを想定して、何らかの体系を強く勧めたり、措置を採ったりしてはならないということを想起する必要があるのである。人は少数の法規則と倫理規則の適用によって絶対的な形である社会システムを判断することはできないし、提供しうるのはそれを別のシステムと比較することによる相対的判断のみである。力学の用語を借用すれば、次のように言うことができるであろう。社会的運動は完全に自由なのではなく、いくつかの障害の中を通過するという形で行なわれるものであり、そして、絶対的最大限を決定することが問題なのではなく、障害や拘束条件が可能ならしめるところの相対的最大限が問題なのだということである。

それゆえ我々はある組織についてただそれに長所があるからという理由で賛同してもならないし、ただ欠陥があるという理由で非難してもならない。このように問題を単純化するのは原始的精神の特性である。このような精神にとっては中間というものは存在しない。ある組織はすばらしいものであるか、いまわしいものであるかのどちらかである。かくして通俗劇においては陰影が情景描写に欠け、見ることができるのは崇高にも誠実な人物かおぞましい犯罪者かである。現実には、実際のあらゆる組織は善と悪の混合であり、それらを比較するためには困難でしばしば非常に複雑な問題を解決しなければならない。これは質的分析から量的分析に変えなければならないときにも一般に起きることである。

人は一般に、国々の支配者たちに対して不公平である。なぜなら、彼らがそのなかで変化することを余儀なくさせられている環境の難しさを十分には考慮に入れないからである。こうした支配者のなかには、その反対派が信ずる、あるいは信じさせようとするよりもはるかに多くの廉潔の士、無欲で、誠実に正義を願う人士が存在する。しかし彼らが国のためになると考えることを実現するために直接に目的に向って進むことは不可能である。作用しているあらゆる利害を考慮するためには、彼らは必然的に斜めに進まなければならない。人が政治は妥協の術であると言ったのは正当である。ところで常に迂回路をたどっていると人はしばしば最後に目的を見失うものである。そしてこれが、非常に誠実で善意の政治家が最後にはしばしば善の代りに悪をなすようになる事情を説明するものである。

ある制度を判断しようとするときに問題の一面しか、それもきわめて制限された一面しか見ようとしないことによる誤謬はきわめてありふれたものである。フランスに離婚が存在しなかったとき、道徳主義者たちは結婚の解消不可能は重大な不都合をもたらし犯罪を引きおこしさえするということを異論の余地なく証明する諸事実を援用し、そして結婚の解消不可能性は有害であると結論した。離婚が存在するようになって以降、別の道徳主義者たちは、離婚が悪をともなわぬものではないことを証明する諸事実を援用し、離婚を廃止することが必要であると結論している。このようにして問題は明らかにまちがって設定されている。

フランスでは長男と次男以下の兄弟のあいだでの遺産取得の平等が行なわれているので、論者たちはあらゆる種類の悪をこの制度に帰し、なんらの留保もなしにイギリスの法律を称讃している。しかしここにこれとは全く逆の立場をとるイギリスの論者ソロルド・ロジャース（Throld Rogers）がいる。「土地も持たず金も持たず、従って納税者の負担となる次男以下の最大の頼みの綱、それは軍隊であった。フランスとの戦争で得をしたのは彼らであった。この戦争が終結すると彼らは長男あるいは宮廷の寄食者となった。家畜貸借権の消滅によって家族財産の分け前をなくして、たちの悪い、しばしばいやらしい策師となった彼らは、間に合わせの兵士となった。…用益権と信託に関する法制定、…—これは限嗣不動産権設定 entail の基礎ではあるが—は、国庫を使って生きることを余儀なくされた次男たちの赤貧を永続させることによって、我々の不動産制度を一つの国民的害毒、公的詐欺の道具たらしめた(1)。」対立するこの二つの観点はおそらくあまりに片寄りすぎているであろう。制度なるものは善と悪とを比較検討することによって判断されなければならない。

（1） *Travail et salaires en Angleterre*, p.263-264 de la trad. franç., Guillaumin et Cie.

ある方策が社会のいくつかの難点を治療することができると証明することは、その治療策が一般的安寧にとっても好都合であることを証明することには少しもならない。なぜならその治療策の採用が、それが消滅させた難点よりも重大な難点を招来することがありうるからである。その昔ローマで貧乏人が食糧に事欠いていた。小麦の無料配布はこの問題についてともかく部分的には有効な対策ではあった。しかしこのような配布は別の結果もともなっていた。それは産業の意気込みをくじき、怠惰を促進し、大量の好ましからぬ人々をローマに引き寄せ、総じてローマの人々にとって益するところよりも害するところの方

がはるかに大きかった。イギリスにおける昔の貧民法は明らかに最良の意図の結果ではあったが、設定された目的を達成するどころか、確実に善よりも悪を生み出したように思われる。現在、自らのエネルギー、活動力、知力、節約によって何らかのゆとりを獲得した人々から、こうした努力の産物を、弱い者たち、無知な人間、無能な人間、怠け者、悪徳漢、さらには犯罪者にまで分配するために、収奪する傾向が現われている。このようなシステムが、それを実行する国民の頽廃を準備しないかどうかは、未来が決めるであろう。

アテネで集会に参加した市民に支払われた■triobole■および彼らが受け取ったその他の報酬はアテネ民主制の安定条件の一つであったように思われる。あらゆる相違を考慮した上で、アテネでは、スッラが貴族制を復活させて被征服者たちの土地を兵士に与えたイタリアにおけるよりも、あるいはアウグストゥスが同じく帝政を開始したときよりも、悪が小さかった。アテネでは密告者に苦しんだ者は一人ならずいたが、ローマ帝国の密告者は別の多くの犠牲者を引き出し、大逆罪法はいくつかの近代国民においていまだに犠牲者をつくり出している。軍団の給与及びローマ皇帝の寄付donativumは、いくつかの治世においては、国の有する富と比較すれば、近代諸国民の軍事費よりも少ない金しか使っていなかった。社会主義者が権力に就いたならば、彼らは確実に、彼らが民衆の中で火をつけた欲望を満足させるために、かなりの量の富を破壊しなければならないであろう。しかしその額がブルジョア階級の政府が消費するに至った額よりも大きいか小さいか、軍国主義のますます法外になる出費の上に保護主義、国家社会主義、そして■自治体社会主義（socialisme communal）■によって引き起こされる損失が付け加わるかどうか、を正確に決定することは容易なことではない。今日のところはパラドクスのように見えるかも知れないが、いつの日か科学的社会主義が、国家社会主義の拡大がもたらしうる完全な破壊から資本を守るために介入するといったことは、ありえないことではない。もし現在の富の浪費が増大しつづけ成長しつづけるならば、社会主義体制の方がそれ以前の体制よりも金がかからなくなるということは起こりうる。■Odoacreの政府はトラヤヌスの政府よりは劣っていたが、アウグストゥスの政府よりは優れていた■。

それゆえ、ある組織を判断するためには一種の貸借対照表をつくる――一方に利（bien）を置き、他方に害（mal）を置き、均衡がどちらに傾くかを見る――ことが不可欠であることについては、強調しすぎるということはない。たしかにこの方法は巨大な困難に遭遇するが、しかし科学的進歩のためにはこのような犠牲が必要である。

さしあたりこの貸借対照表を作成しうるとしても、それは非常に大雑把なやり方でにすぎない。しかしそれでも何もしないよりはましであり、とりわけ、事態の一面しか見ない、狭い部分的な判断よりは優れている。しかしこうした難しさの存在は我々を用心深くするにちがいなく、そして、科学の現状においては何らかの新しい組織の結果がどのようになるかを正確に予測することはきわめて困難であることを率直に認めなければならない。ところでこのような認識は検討すべき組織について然るべく判断するためのまさに欠くべからざるものである。ある種の明らかに馬鹿げたシステムを排除することは予備的検討で十分に可能であるが、しかしこのような排除が終れば、我々の科学的認識の不完全さの故に原因を十分に知った上での判定はほとんどできない、いくつかのシステムに対峙しなければならない。要するに経験だけが決定することができるということである。我々は、経験によって我々が到達する結果についての認識を、推論によって予め先取りすることはでき

ない。

このような科学的疑問は党派の盲目的信念、時に幻覚の境界に接する点まで高揚する信念とはきわ立った対照をなしている。人々は無知であればあるほど自分たちの信念をますます強く確信するものであり、そして「群衆」なるものは義務教育の進展にもかかわらず、きわめて無知なままにとどまっている。これは群衆が他愛もない話に対して割り当てる熱狂的な歓迎を説明するものであり、この他愛もない話についてはルシアン（Lucien）やヴォルテール（Voltaire）のような人物のペンのみがその間の抜けた馬鹿々々しさをそれにふさわしく知らしめることができるものであろう。

あるシステムを判断するために経験に訴える必要があるということは、その必要性が感ぜられ、しかもその感ぜられ方が単に理論的体系化のためだけではないようなときにのみ成し遂げられうる漸進的変化ということのためには、最高度の重みを有する論拠となる。さらにそれは、自由の利点と不都合についての貸借対照表を作成するときに、自由に味方して支持しうる強力な論拠の一つでもある。絶対的に無謬の存在者のみが、彼らが社会をしてある一定の道筋をたどらせるために提示する強制的な方策は、別の道筋でも到達可能なより良い一状態に到達することを妨げない、と保証することができる。改革者が社会にとっての最大の安寧を獲得しようと企てる場合、彼らが要求しうることの最大限は、彼らのシステムを実験することを許されることである。しかし彼らの要求する「自由」は大抵非常に特異なものである。彼らは多少とも現実的な、また多少ともいかがわしい多数派が力によって、望まれる改革を課することを欲している。かつては彼らが訴えたのは多数派に対してではなく、君主に対してであった。手段は変化し、目的は依然として同じままである。人々をその意志に反してでも幸福であるように強制することが必要である。ルイ十四世の竜騎兵はフランスからプロテスタントを追放し、ギロチンもフランスから貴族主義者、■des Brissotins■、ジロンド党員、その他多くを厄介ばらいした。今日では、一方では、ユダヤ人、プロテスタント、フリーメーソン、自由思想家、無国籍者、国際主義者、その他列挙するのも長たらしいその他のセクトをフランスから排除しようと欲している人々がおり、他方ではカトリック教徒を力ずくででも改宗させようと、あるいは少なくともカトリック教徒が政府のポストを獲得するのを阻止しようと欲している人々がおり、さらには、こうしたブルジョアジー内部の抗争を軽蔑して、経営者と資本家を根絶すること—これは地上に黄金時代をもたらすであろうと信じて疑わない人々がいる—で事足れりとする人々がいる。ビロード・ヴァレンヌ（Billaud-Varennes）は言う。「ある意味では、自由を回復することが望まれるような人々を再創造することが必要である。なぜなら、古い偏見を破壊し、古い習慣を変え、倒錯的な愛情を改善し、余計な欲求を制限し、根深い悪徳を根絶する必要があるからである。」カリエール Carrier はもっと露骨である。「我々はフランスを我々の流儀で再生するのでなければ、むしろフランスを墓場にするであろう。」

絶対的真理をわがものとしていると確信して、もろもろのセクトはある種の疑問という形ですら矛盾を認めない。セクトはどんな例外でもほとんど罪と見なされるような一般的普遍的規則を強要する。宗教的セクトは規則と異なる行動は神に対する侮辱であると断言する。独裁制を好む傾向のあるセクトは万人が君主の意思に服従しなければならないと確

信しており、現在こうしたセクトは「国民的統一」にも訴えている。自称民主主義的なセクトは自らによる抑圧に対して素朴にも自由という名を与えている。この不合理を正当化するための論証における努力の大部分はいま一つ別の恣意的な断言、すなわち一国民はその多数派によって規定された法に従うときにのみ自由である、という断言に結局のところ帰着する。同様に、半数プラス一で半数マイナス一を強奪することを正義と名付けるセクトも存在する。正義に社会的という形容語を付けてそれを別の正義―これは形容語がない場合には■tribuere suum cuique■「誰であれ自分のものを分け与える」ことに存する―から区別するのは有効なことである。

現代の著作家であるレオン・ドナ（Léon Donnat）はその著書『実験的政治』（*La politique expérimentale*）において、もし最良の法を探求しようとするのであれば経験に訴えることがいかに不可欠であるかを申し分なく説明した。しかし彼の声は孤立したままにとどまっている。昔以上に各種のセクトは自らの「不滅の原理」の下に事実を従属させ、感情を理性の上に置くことを欲している。さらにこのことは群衆の目から見た彼らの成功の本質的な条件の一つでもある。彼らの行為は人々を説得するのには有効であるが、最小の実質的な進歩であってもそれを実現するのには絶対的に無力である。芸術と諸科学における独創性は、それがいかに些細なものであろうとも、彼らに由来することはない。

ある日ヘンリー・ベッセマー卿（sir Henry Bessemer）は鋼鉄を生産する新しい方法を発見した。最大の満足感を得るために有効であったのは、新しい方法の支持者がそれを昔の方法と競い合う形で実験してみることができる、ということであった。これは実際に行なわれた。鋼鉄を製造するための新しい方法についての特許はきわめて多数存在している。経験に付されるなかでこうした新しい方法の大多数は淘汰され、ベッセマーやマルティン等の非常に少数の方法のみが成功したのである。これらが今日採用されているものなのである。

しかし、産業上の革新ではなく、政治的あるいは社会的革新が問題となったならば、事態は別の経過をたどったであろう。専制君主、官僚体制、政治家、選挙民の多数派を説得することが必要だったであろう。そしてそれに成功したならば、いつの日か政府は鋼鉄製造の新しい方法を古い方法に代える布告を発したことであろう。この新しい方法が実際によい方法であることも事実ありうるのであるが、もっと起りやすいのはこれがまずい方法であること、うまく行くはずであるとされたのではあるが実際にはうまく行かない場合である。不成功を見れば人はその方法を捨てたであろう、と信ずることはできない。この方法の運命はなんらかの党派、たとえばAという党派の運命と結びついているであろう。そしてこの不幸な方法を捨てるためには党派Aをその現在の位置から立ち退かせることが必要だったであろう。党派Aはなんらかの「不滅の原理」、例えば「連帯」とか「社会的正義」といった原理に必ず訴えたことであろう。この党派は進歩の軽蔑者、彼らの迷論珍案の恩恵を拒否するエゴイストを罵り、迫害したことであろう。要するに、重要なこと、すなわち新しい方法に関する経験が提供したところの結果、を除くあらゆることが熱心に議論されたことであろう。

ヘンリー・サムナー・メイン卿（sir Henry Summer Maine）[1]は正当に次のように指摘する。「英国に名声を付与したもの、英国に富を与えたもの、それはすべてしばしば取るに

足らぬ少数派の業績であった。」しかし次のように付け加えるとき、彼は行きすぎである。「もしこの国にこの四世紀の間余りに広い選挙特権と余りに多数の有権者団体とが存在していたならば、宗教改革も王朝の交代も、宗教的寛容も、さらには正確なカレンダーさえも存在しなかったことであろう。このことは絶対的に確実であると私には思われる。大砲、織機、ミュール・ジェニー、そして多分蒸気機関も禁止されていたことであろう。」百貨店―これは商品の分配における今日の最も顕著な進歩を表現している―に対して民主体制が今日■援用■する頭の良くない対策、あるいはいわゆる不正競争―これは結局のところは単純な競争にすぎない―に対して規定されたいくつかの処分、あるいは取引所を規制するために取られた措置が富の循環にもたらした桎梏を観察するとき、ヘンリー・サムナー・メイン卿に加担したい気になることはたしかである。しかし彼の命題に対立する別の事実も存在する。庶民からなる、あるいは学識ある人々からなる「群衆」は技術的あるいは経済的進歩をすべて体系的に拒否する、というふうに言うことはできないであろう。ただ彼らの選択は大抵の場合盲目的であり、選択において感情や偏見が圧倒的な部分を占めるのである。しかしながらこのことが主要な不都合ではない。なぜならこのようなことは人間の選択のどんなものにも結局のところ見出されることだからである。最も困ったことは、経験による説得の代りに法による強制が来ることに因る。このことが不可避的な誤謬の結果をとてつもなく深刻なものにしてしまうことになるのである。

（1） *Essais sur le gouv. pop.*, trad. franç. p.142.

第二章　社会主義体系一般

社会主義体系の一般的な理解のされ方—階級への分裂—社会主義体系を理解する際の困難さは、階級によって非常に異なること—財産の先取—富を獲得する手段のさまざまの種類—略奪—社会諸階級の闘争—これらの階級あるいは類似の集団を規定する特徴—各集団の貸借対照表—これらの集団の行為を規定する論証の役割及び感情の役割—被略奪者側における抵抗の欠如—略奪が遭遇する主要な障害は富の破壊と国の荒廃である—略奪は社会組織の変化のなかでも存続するであろう—いかなる方策でも一般的に随伴的効果を有する—人々の性格の相対的安定性—諸感情の内容は持続し、形式は変化する—今日いくつかの国で権力に到達している新しい社会階級は、旧支配階級が享受していたものと絶対的に類似した特権を自らに与える

一般に社会主義的組織の意味は厳密には定義されておらず、それを定義することはほとんど不可能である。これは通俗言語に属するあいまいな用語の一つであり(1)、さし当たりはそれを使用せざるを得ないが、もっと厳密に定義された何らかの術語にできるだけ早く換えた方がよいであろうと思われるものである。

（1）ベネデット・クローチェ(Benedetto Croce) が次のように指摘しているのは尤もなことである。「日常語ではことばは概念としては厳密さを欠いている。」*Di alcuni principii di sintassi e stilistica psicologica del Gröber*, p.10.

既にロックは、*Essai phil. concernant l'ent. hum.*, liv. III, chap. IX, § 4 においては次のように述べている。「言語の主要な目的は…理解されることであるが、一般市民の話あるいは哲学的な話において、ある単語が、語る者の精神において意味するのと同じ観念を聴き取る者の精神の中に呼び起さないときには、ことばのこの目的に十分に役立つことはできない。」

このように単純なことを絶えず繰り返さなければならないという事実は、この単純なことが普通いかに無視されているかを示すものである。

G・ヴェラティ(G. Vailati)氏 は、*Rivista filosofica*, janv.-fév.1901. において日常語における用語が生み出した非常に多数の錯覚と誤った推論を挙げているが、これはしごく尤もなことである。

政治経済学はこれによって十二分に害をこうむったのであるが、この学問の将来における進歩は厳密に科学的な言語の採用と密接に結びついている。

何人かの人々にとっては、社会主義的組織は「人工的」な組織であり、これは自由な、いわゆる「自然な」組織に対立するものである。楽観主義的な学派の経済学者はこうした表現をしばしば用いるという過ちを犯してきた。「人工的な」社会組織とはそもそも何であり、それは「自然的な」組織とどのように識別されるのか。もしこの「自然な」という用語によって、自然の中で発展して現実に存在している組織を特徴づけようとするのであれば、社会主義的組織という用語は全くのところあまりに大きな広がりをもつことになり、我々が仮想的と名付けた組織すべてに拡大されることになるであろう。もし「自然的組織」なる用語によって、人間に「自然的本能」の全てを追求することを許すようなある組織を意味するのであれば、そこで示されているのはある純粋なユートピアにすぎず、さらに、

本来的には組織の否定であるところのものに組織なる名称を付与するという矛盾があるとさえ言いうるのである。それゆえ、今少し精確に推論しようと欲するのであれば、これに類した用語を用いることを慎むべきなのである。社会組織の細部についてさえこうした用語が用いられてきている。人工的なシステムに対立する、銀行の自然的システムといったものさえ語られてきている。これはほとんど意味がない。どのような銀行もある意味では自然的組織であり、またある意味では人工的組織でもある。

社会システムが私有財産を許容する限界を検討することによって、社会システムを特徴づけるためのより精確な基準を得ることができる。二つの極端は実現不可能である。私有財産を完全に廃止することは不可能であり、何の制限もなしに私有財産を認めることも不可能である。一方では、どんな人間でも彼が食べようとしているパンの一口については少なくとも所有権を有するであろうし、口元に運ぶワイングラスについても同様であろう。他方では、どのような組織でも共同で行なわれる出費、労働、犠牲を要求するものであり、既にそのことによってさえ私的所有の絶対的権利に対する侵害である。これら二つの両極の間に無数の中間段階が存在し、それらは、システムがどちらの極端により近いかに従ってそのシステムを特徴づけるのに役立てることができる。これが我々の採用しようとするところの分類である。社会主義体系は、それが最低限の私有財産のみを認めるということによって特徴づけられるであろう。この特徴はしかしながらこれまで普通には社会主義体系の中には入れられてこなかったいくつかのシステムの中にも見出されるものである。たとえば専制的組織の場合である。

いま我々が行なった大分類は、侵害された私有財産の種類に従ってさらに分類することが可能である。一．どのような所有であれ、所有の全体が問題である場合には、一方では我々は完全な共産主義をもち、他方ではもはや国民ではなく奴隷を有する絶対的専制君主の体制をもつことになるであろう。共同の所有は婦人にまで拡大されることが可能であり、婦人は実際にしばしば獲得された財産と見なされていた。二．生産物についての所有権が存続し生産手段についての所有権は排除されるならば、我々は一方では少なくとも近似的には近代社会主義体系をもち、他方では政府による独占システムをもつことになるであろう。三．最後に、生産手段の私的所有権は完全に保持しつつ生産物の私的所有権は排除される場合を想定することが可能である。この最後の分類の純粋形態は、観念的システムの中でさえほとんど見ることができないが、多少ともそれに近いシステムは存在している。たとえば、一方には国家社会主義があり、他方には、個々人によって生産された富を寡占支配者、衆愚政治、軍人あるいは聖職者階級に供与させる非常に多数の現実の組織が存在する。このような組織は個々人に富を生産させ、次には主として課税によってそれを奪い取る。■Sic vos non vobis mellificatis, apes.■ かくして蜜蜂たちよ、女王蜂は自分では働かない。

この第三の部類がどのような意味において生産物の私的所有を制限するかについては説明の要がある。実のところ、生産物の私的所有権は生産物が消費される瞬間にはつねに存在している。しかし、我々が注目しなければならないのはこの消費の瞬間ばかりではなく、消費に先立ついくつかの局面である。その場合には我々は明瞭に区別されうる三つの類型が存在することを見ることができるであろう。

（α）商品がその持ち手を変えうるのは、自由意志による売買、交換、贈与、等であるような場合。（β）AがBの持っている商品を力ずくで獲得することによって、商品がその持ち手を変えるような場合。これは私的かつ直接的な略奪の場合である。商品は一瞬たりとも私的財産であることをやめず、ただそれを持つ人間が変わるのである。（γ）集団あるいはそれを代表するとみなされる政府がAからそれの持っている商品を取り上げ、次に一定の規則に従ってそれを分配するような場合。商品はかくしてBの手に到達する。この場合には商品は長短はあれ一定時間私的財産であることを停止したのであり、私的所有権が制限されたというのはこの意味においてである。国家社会主義の組織は明らかにこの第三の類型に属する。

第二の部類は第三の部類よりも実現がはるかに容易でないシステムを含んでいる。換言すれば生産手段の所有の制限は実際のところ生産物の所有の制限よりも稀であるということである。富の社会的生産は、戦争という手段による以外には、相応の利益をもたらさないことがしばしばであった。戦争は全く特殊な一産業であり、絶対的な意味においては生産的ではなく、ただ相対的な意味においてのみ生産的なものである。他方、戦争そのものはしばしば私的産業としての性格をもっている。それどころかさらに経験の示すところでは、生産者の財産であるところの富のうちのかなりの部分を彼らから取り上げることが可能であり、しかもそれでも生産者たちは余りがっかりすることもなく、余り激しい抵抗を示すこともないのである。このことは労働者についても資本家についても同じように見られることに違いない。かつてローマでは、主人たちは奴隷に対して奴隷の生産した富の一部を自由買戻しのための身代金の形で奪わずに残していた。今日では国家社会主義体制は同じように資本家に対して彼らの資本の果実の一部を委ねている。いずれの場合においても、解決しなければならない問題は、個々人の熱心さが十分に刺激され、しかも、彼らから天引きされる額が最大になるようにするには、彼らに生産物のどれだけの部分を残してやるのがよいのかを決定することである。奴隷からその労働の産物のすべてを取り上げることは主人にとって大きな収入を獲得するための手段とはならなかったと同様、資本家からすべてを奪うことは社会主義政府にとって最大の利益を引き出す手段とはならない。

諸企業を共同化することは、現在までのところ、そして例外的な場合を除いて、企業の生産を増大させる手段ではない。企業は私的企業家の手にまかせ、次に彼らの生産した富の一部を取り上げる方がよい。彼らからすべてを取り上げるのがよくないことは明らかである。なぜならその場合には彼らは働き生産することをやめるだろうからである。国家社会主義の組織の大部分はまさに節度の欠如の故に滅びたのである。資本家からの先取は最初は節度があったのであるが、動産資本の顕著な部分を破壊するに至るまで増大しつづけ、企業精神を挫折させ、生産を妨害し、そのことによって国の経済的崩壊にまで至らしめたのである。

近代の強硬な社会主義者とベルンシュタイン風の妥協的な社会主義者とのあいだの主要な相違は、前者が私的企業を全面的に廃止しようと欲するのに対して、後者は私的企業を最大限利用することを目的としてそれを存続させる点にある。

しばしば行なわれるように、私的所有を尊重しないと言われる社会主義体系と、逆にそれを尊重する現行のシステムとを対立的にとらえる必要はない。

ヨーロッパにおいては、そして十九世紀においては、国家支出はつねに増大してきてお

り、現在では著しい割合を示しており、しばしば市民の収入の四分の一以上になっており、この増大傾向が止まるきざしは何もない[1]。それゆえ私的所有は大規模に侵害されているのである。

（1）フランスについてはジュール・ロシュ（Jules Roche）氏が次のような数字を挙げている。

年	通常収入（百万フラン）	年平均増大額（フラン）
１８２０	８６４	5,444,000
１８２９	９１３	
１８２９	９１３	16,555,000
１８４７	１，２１１	
１８７４	２，４８６	40,000,000
１９００	３，５２３	
１８９８	３，４２７	50,000,000 61,000,000
１８９９	３，４７７	
１９００	３，５３８	

事実が否定されることはほとんどありえないが、それからの帰結を認めることは拒否される。現行の体制によって行なわれる私有財産に対する先取は、それが単なる課税であるからという理由で、社会主義的先取とは異なるというのである。これは結局のところ、分類の基礎として事物そのものではなく、事物を飾る名称を採用するのと同じことになる。こうした名称が恣意的なものでないことはたしかである。なぜなら税金の定義は「国家の欲求（ブスワン）のために必要な総額」とされているからである。これは困難を先送りするだけのことである。いまや困難は欲求という用語のうちにあるのである。もしこの用語を通俗的意味において理解するならば、社会主義者たちは、国家の第一の欲求は幸福で繁栄している市民をもつことであり、そのためには生産を社会化することが必要であるということができるであろう。そしてもしこの目的を達成するために私的な富に対してなされる必要のある先取を税金と呼ぶことを彼らが求められたならば、ただ言葉に関係するだけの譲歩を拒否するほど彼らの性格は悪くはないと信じてよい。彼ら社会主義者の提案する手段の効果について議論することはできるであろうが、これはまた別の問題である。

もし欲求という用語により精確な定義が与えられるならば、定義の数と同数のシステムが得られることになるであろう。一方の定義は、国家の欲求とは人々の安全と財産の安全を保証することだけであると言うであろうし、他方の定義は国家の欲求は倫理的理想を実現することである、等と言うであろう。

税金について我々が与えるこのような説明はそれゆえ、純粋に言葉だけのものであり、まだこのような表現―これはあらゆる実証科学から最終的に追放されている―を受容していることは社会科学の重大な欠陥の一つである。実際は、そしてもし我々が事実にのみ忠実であるならば、税金とは、支配する人間たちが直接的であれ間接的であれ、彼らを含む集合体から先取する金額、彼らの理性、偏見、利害、そして時に気まぐれが彼らに命ずる

ところに従って、彼らが使用する金額に他ならない。勿論これらの出費は出費する人々によって、必要なものとつねに宣言され、そして実際彼らの観点に立てば必要なのである。昔から税金の一部は、統治者及び被統治者双方の共通利益のために、また一部は—これは一般にかなり小さいが—被統治者だけの利益のために、さらに一部は—これはしばしば多額であるが—もっぱら統治者のため、および被統治者のなかの彼らの支持者の利益のために、そして非常にしばしば被統治者の中の支持者以外の人間を抑圧するために、使われてきた。そして最後に、一部はまったく無知蒙昧あるいは気まぐれによって浪費されてきた。統治者及び被統治者双方に共通の利益のために出費される部分が最大であったと言えるどころではない。むしろ逆の方が真実味があると言うべきである。

私的所有を認める組織、すなわち今日までのところで知られているほとんどすべての組織は、富を獲得するための、本質的に異なる二つの手段を人々に提供している。一方は労働および人々が持っている資本を用いることによって、富を直接的あるいは間接的につくり出すことであり、他方は、このように他者によってつくり出された富を奪うことである。これら二つの手段はこれまで常に用いられてきたものであり、こうした手段を用いることを人々がすぐにやめるであろうと信ずることは浅慮なことであろう。しかし第二の手段は一般に道徳によって厳しく非難されているものであり、人々は自発的にそのような手段の使用には目を閉じており、それは間歇的で偶然にしか起こらないことであるかのように考えるふりをしているのであるが、この手段の使用は一般的かつ恒常的な現象である。

社会的運動は一般に最小抵抗線に沿って行なわれる。ところで、経済的財の直接的な生産はしばしば非常に骨の折れるものである。他人によってつくり出された財の私物化は時にかなり容易である。この容易さは、略奪を法に逆ってではなく、法を使って行なうことが案出されて以来、大いに増大した。節約するためには、すなわち自分の稼いだものをすべて消費しないためには、人は一定の自制力をもっていなければならない。小麦をつくるために畑を耕すことは骨の折れることである。追いはぎをするために淋しいところで通行人を待っているのは危険なことである。逆に投票用紙を提出しに行くことは非常に容易なことであり、そしてもしこの手段によって食と住をまかなうことができるのであれば、すべての人間が、とくに不適応者、無能力者、怠け者は急いでこの手段を採用するであろう。

別の観点からすれば、他者の財を横奪するために用いることのできる二つの方法、すなわち直接的に暴力ないしは詐欺による方法、あるいは間接的に公的権力による方法、のうちこの後者の方法のほうが前者よりも社会的安寧のためにははるかに無害である。これは、家畜の飼育が野生動物の狩猟の完成と改善であるのと同じく、前者の完成であり、改善なのである。現在の所有者の財産接収の問題を公正に規制することによって生産手段の所有権を集団に帰属させようと欲する社会主義者は、これら二つの方法を交互に用いようとしているということをもって非難することはできない。現在の所有者を漸進的にかあるいは急激にか補償金なしに接収しようと欲する別の社会主義者は明らかに第二の方法に訴える意図をもっているのであって、ある種の立法者たちがやるように、この社会主義者たちが第一の方法に訴えようとしているかのように考えることは実際のところできないであろう。社会主義者や共産主義者が富の配分を変えようとし、彼らが一方の者たちから取り上げた富を他方の者に与えようとするのはもっぱら法を手段としてのことであり、この点では彼らのシステムは、しばしば指摘されているように、別の保護主義システムとなんら異なる

ところはないのである。保護主義システムは正確に言えば、企業家と資本家の社会主義を表現している。

古典的な政治経済学が法律によって生じる取得の問題に専念したのは、税効果を通してにすぎず、また税効果を非難するためにすぎなかった。どの科学にとってもその研究分野を限定することは一つの権利でもあり必要性でもある。従ってこの点では、政治経済学が採用した方法に反対していうべきことは何もない。しかし、現実の一現象のさまざまの部分を分析によって分離しそれらを別々に研究した後では、現実についてのある観念をもつためには綜合が必要であり、諸部分を再統合することが必要である。政治経済学は法律による取得を研究せずに済ますことも可能であるが、具体的な現象を認識しようと欲するのであれば、このような研究は何か別の科学によってでもなされなければならない。このように重要な部分を無視することは決してできないであろう。

マルクスが特に注意を集中した階級闘争は、現実の一事実であり、歴史の各ページにそれを見出すことができるのであるが、しかし階級闘争は、ただ二つの階級の間でのみ、つまりプロレタリア階級と資本家階級とのあいだでのみ生じたのではなく、異なる利害を有する無数の集団のあいだで、とりわけ権力を争うエリートのあいだに生ずるものである。これらの集団は多少とも長く存続することがありえ、恒久的な特徴に立脚していることもあり、また多少とも一時的な特徴に立脚していることもありうる。野蛮な民族の大部分においては、そして多分すべての民族において、性別はこのような二つの集団を生じさせる。プロレタリアが嘆いている、あるいは嘆いた抑圧はオーストラリアの蛮族の婦人が苦しんだ抑圧とは比較にならない(1)。生まれ、肌の色、国籍、宗教、人種、言語等に基づく多少とも現実的な特徴はこのような集団を生み出すことができる。今日、ボヘミアにおけるチェコ人とドイツ人のあいだの闘争は、イギリスにおけるプロレタリアと資本家とのあいだの闘争よりも激しいものがある。同じ職業に従事する人々も自然に団結する気になる。いくつかの国で砂糖製造業者たちは彼らの同胞から税金をせしめようとして歩調を合わせている。この現象はその昔武装軍団が農民から貢物を集めた時に観察された現象と類似している。海運業者は航海補助金をせしめようと団結している。小売商人たちは百貨店を税金で圧迫せしめるべく団結している。定住している小商人たちは行商を不可能にするために、あるいは困難にするために団結している。一地域の企業家たちは他の地域の企業家を排斥するために団結している。「組織された」労働者たちは「組織されていない」労働者からあらゆる仕事を取り上げるために団結している。ある一国の労働者たちは「国民国家市場」から他国の労働者を排除するために団結している。ある一都市の労働者は他都市の労働者を排斥するために団結している。イタリアではいくつかの都市に住んでいる靴屋たちは、入市関税を使って、これらの都市の外部に住んでいる靴屋の作った靴の販売を不可能にすることを試みた(2)。

(1) 事実は非常によく知られているので、引くまでもないほどである。ラボック(Lubbock)によって引用されているが、セロン・アイアー(Selon Eyre)によれば次のようである。「若者が一人の女性を評価するのは主として奴隷としての奉仕の故である。若者に何故に彼らは女性を得たいと思うのか、と尋ねるならば、普通彼らは、次のように答えるであろう。すなわち、彼女は身の回りのもの、水、食物を自分にあてがってくれ、自分のものを持ち運んでくれるから、…ということである。土

地に生まれ育った女性を調べてみるならば、頭に恐ろしい傷跡をもっていない者、体全体に槍でつかれた跡をもっていない者を見つけることは稀であろう。私は体中全く傷だらけの若い女を見たことがある。もし女性があまり可愛くなかったならば、彼女の立場は、それが可能ならばのことであるが、さらに一層恐ろしいものになる。」

（2）一九〇一年七月イタリアのロンバルディアその他の地方から輸入される家具に対する入市保護関税がヴェニスの市会に提案された。ヴェニスには自然の原動力が存在せず、賃金は上昇しており、木材がない、等を挙げて市会はそれを正当とした。E・シエザ（E. Chiesa）氏はこの問題について、l'Italia del popolo、一九〇一年七月七日ですぐれた記事を書いているが、もし国家と国家の間での保護関税の有効性を認めるのであれば、市と市の間の保護関税も同じく正当化される、としているのは尤もである。F・パパファーヴァ（F. Papafava）氏は大いなる機智でもってこの保護主義的な気分のパロディーをつくっている。つまり彼の生まれ故郷であるパドウア（Padoue）に、地方新聞をミラノやローマ、トリノの新聞との競争から守るための保護関税を設けたらどうかと愉快に提案しているのである。

いつでもどこでも、過去の歴史と現在の観察は、人々が集団に分かれており、各集団は一般に経済的財を、一部は直接的に生産することによって、また一部は他の集団から奪うことによって―この他者の集団もそうしているのであるが―手に入れていることを示している。これらの行為は千々に錯綜し、とてつもなくさまざまな、直接間接の効果をもたらす。各集団が一種の貸借対照表を作成する必要があるようになるであろう。例えば工業家はいくつかの商品を生産し、彼らが使用している商品にかかっている保護関税のゆえに税金を払い、そしてこの税金は他の工業家、農業家、商人等の集団のところに行く。彼らはその他に、紙幣の発行という立場主張のための代価、あるいは貨幣流通に関して取られた対策のための代価、また政治家への献金、彼らが好都合と判断するいくつかの偏見を維持するための代価を支払う。その代りに彼らは、彼らの生産物と競争しえた外国の生産物にかけられた保護関税のおかげで消費者からの支払いを受け、紙幣発行のおかげで、あるいは労働者（ウヴリエ）が労働の販売条件について自由に議論するのを妨害するために政府が取る対策[1]のおかげで、働く人間（トラヴァエール）から支払いを受け、政府の調達物を好意的な価格で落札することによって、納税者からまき上げる、等。ある種の工業家集団にとっては帳尻がどちらに傾いているかを見るのは容易であるが、別の工業家集団にとっては、社会一般にとって富の莫大な破壊をもたらすこのような機構によって全体として得をしているのか損をしているのかを知ることは困難である。相互的略奪のこのようなシステムが利害関係者たちに提供するであろう損益計算において当事者が間違ったケースは稀ではない。多分国家社会主義はいくつかの集団に対して残酷な幻滅を用意しているであろう。

（1）政府はしばしばはるかにひどいことをする。非常に多数の事実を挙げることができる。例えば、イギリスにおける *Statut des travailleurs*（労働者身分規定）。今日のことで言えば、イタリア政府は、自由な刈取り労働者が要求する賃金を高すぎると思い支払いたくなかった地主の収穫を行なわせるために、兵士たちを派遣した。一般的に、また大まかに言えば、イタリアでは貧乏人から奪うのは金持ちであり、他の国々では金持ちから奪うのは貧乏人であるということができる。

問題を非常に単純に立てることのできる集団が存在する。例えば、何もろくなものをつくり出さず、代価を支払わず、あるいはほとんど支払わず、ただ受け取るだけの人々の集団である。最も多数で最も重要な別の人々は直接的に財をつくり出し、そして非常にしばしば、代価を支払い、しかも受け取らず、あるいはほんの些細なものしか受け取らない。これがしばしば働く人間の運命であった。そして同じく、ある種の体制が将来において企業家や資本家に与えようとしている運命でもある。

一般に、個々の人間が集団を形成し他者の財の征服に向って進むことができるためには、いくつかの条件が必要である。一・集団のメンバーは余り分散していてはならず、容易に見分けのつく一特徴、例えば同一人種、同一宗教、同一職業、等の特徴をもっていることが必要である。ここに、消費者たちは生産者たちの組合に対して抵抗しようとして自らを組織化しようとしてもほとんど成功しえない最も効力ある原因の一つがある。例えば現在の我々の国々ではすべての人々が多少とも衣服を用いているのであるが、彼らのうち既製服だけを着る者は非常に少数しかいない。それゆえ服を着るということでは人々のなかのある集団を確認するという点では役に立つことはありえない。しかし服を作製するということはその作る集団を完全に確認することを可能ならしめる。二・文明の数世紀は人間の脳に、他人の財を奪うことは慎しまねばならないということを刻みつけた。この感情を直接的に傷つけることは避けなければならない。そのためにはこのような他人の財の私物化のための間接的方法を採用し(1)、それを正当化するための何らかの理由を発見することが望ましい。しかしこの点についてはあまり大きな困難があったことはない。なぜなら最悪の理由でも、それが強力な利益に役立ち偏見が大目に見られるときには本当だと思われるからである。大部分の人々が自らの利益を確信しているときには、転向者は説教されるものである。空疎な慣用語法、実体のない外見だけの、大仰で感情主義的な公式、抽象的で何度も繰り返される文章、あいまいで不安定な、意味が何ら決まっていない表現、これらはすべて、彼らには用のない真理ではなく、彼らにとって利益になる、あるいは単に快いだけの、行為の正当化を求める人間の必要とするものである。さらに、たとえばフランスにおける十八世紀の終りや、現代のように、被略奪者自身が「感受性」とか「連帯」とかに関する彼らの倫理的宣言によって、略奪を正当化しそれを増大させることを引き受けているような時代が存在するのである。

(1) バスティア、『コブデンと同盟』(Bastiat, *Cobden et la Ligue*, Guillaumin et Cie p.265)。コブデン同盟の弁舌さわやかな演説家は次のように言う。「何ということだ!もし今日の穀物法が存在していなかったならば、もし内閣がパンに対する税金の法案を敢えて提出していたならば、もし内閣がパンごとに価格の四分の一、—もちろんパン屋が消費者に支払わせることになる税金なのであるが—それを課せられているパン屋の入り口に担当官を置くとしたら、このような抑圧を支持する人物が国全体で一人でもいるであろうか(p.266)。私は優雅な伯爵が…パンの大部分を取り、『これが私の分だ、税金の取り分だ、よろしければ残りを食するがよい』というところを見たいものだと思う。もし税金がこのような直接的な形で天引きされるならば貴方がたはこれを我慢しないであろう。しかしこれが、貴族が別の形でやっていることなのである。」

最も明白な論理的矛盾でも本物の信仰者の信念を動揺させることはできないであろう。「投機家」を激しく非難する人々が、一方では小麦価格の高騰の故に彼らを非難し、他方では小麦価格を下げることを非難するのがしばしば聞える。かくして投機家は何が起ろうともつねに間違っていることになる。農民に向ってものを言うときには彼らは小麦価格が低い原因は投機家であると言い、労働者に向って語るときには、この同じ投機家が高い小麦について責任があると断言する。「連帯」の論理においては、二つの矛盾する命題が同時に真であることができるのであるが、これは通常の論理においてはないことである。しばしばなんであれ論証そのものが消滅し(1)、人々を引っ張っていくためには、ある適当な名辞、ある事物にふさわしい名称が生じさせるところの感情を彼らに抱かせるだけで十分である。これはいつの時代にも、またどこでも起ったことである。アテネの民衆に小麦の安値を語ることによって彼らから自らの望むものを獲得した人々がいた(2)。中世においては最も勇気ある人間でも、異端、マニ教的二元論、異教、非キリスト教的と呼ばれはしないかとおびえていた。十八世紀の終りの時代には、「感じやすい（サンシブル）」ことが必要であった。革命時フランスでは「美徳」、「公民精神」、「過激共和主義（サンキュロティスム）」が大いに尊敬された(3)。二人のプルータス、ソクラテスと毒薬があらゆる議論にほとんど必ず登場した。ローマ共和派の「美徳」について言及しなければならず、それをフランスにおける模範として提示しなければならなかった。この伝統は、フランス国民が、ローマ国民が「彼らの指導者を選んだ」のと同じ方法で、共和国の大統領を選出することを望んでいる「ナショナリスト的な」指導者によって、最近再興されている。この（訳注：テーヌの）着想は真にすぐれた歴史的研究の、ある種の深みを示すものである。

（1）G・ル・ボン『群衆の心理学』(G. Le Bon, *Psych. des foules*) 一〇一頁には次のように書かれている。「我々はすでに群衆というものは論証によって影響されるものではなく、また粗雑な観念連合のみを理解するものであることを示した。また、群衆に印象を与えることのできる演説家が訴えるのは彼らの感情に対してであって、彼らの理性に対してではない。論理法則は彼らに対して何らの作用も及ぼさない。」一〇二頁には次のようにある。「少しく緻密な論理の連鎖には征服されることに慣れている論理的精神の持ち主は、群衆に向かってものを言う時でもこの論理的説得様式に訴えずにはいられないのであるが、彼らはつねに自分の話の効果のなさに驚かされることになる。」この指摘にはしかし次のことを付け加えておかなければならない。つまり、群衆というものは論理を愛することはないが、少なくとも論理の見せかけは好むという点である。群衆を説得するためには、論証してはならない。論証している風をすることが必要である。同じように、群衆を内容的に道徳を破壊する方向に導くことはきわめて容易であるが、道徳を尊重する風をすることは必要である。

（2）アリストファネス、Aristoph., *Equit.*, 1359-1360.「審判者たちよ、もし諸君がこの被告を有罪にしなければ、諸君はパンを手に入れることができなくなるであろう。」

（3）テーヌ（Taine）は少しく広い範囲で、そしてどの時代にも見られる精神状態を見事に描いている。「今朝小売店の入り口のところで立っているとき、私はかぼちゃの薄切りを値切っている乞食の声を聞いた。小売人と値段について折り合いがつかなかったときその乞食は、おぬしは『貴族制に毒されている』とその小売人に言った。『私はお前の言うことなど恐くない』とその小売人は言った。

しかし話している間に小売人は青ざめ、そして付け加えた。私の公民精神はあらゆる試練に耐えることができる。…まあそれだからかぼちゃはもって行きなさい。—ああ、それでこそあんたは立派な共和主義者だ、とその乞食は言った。」こうしたことはあらゆる時代に見られることである。アリストファネス、Aristophane, *Vesp.*, 493-495. 「ある人がにしひめじを買っていわしを買おうとしない場合には、いわしを売っている商人がすぐ横から言う。『この男の食糧貯蔵庫からは専制のにおいがする。』」Achar., 910-925 も参照。今日、人は反連帯の罪で非難されるであろう。

今日「連帯」ということばが流行になっている。一八四八年には非常によく使われたが現在では少し流行遅れになっている「友愛」にとって代ったのである。実際のところは各人が自分流に「連帯」(1)ということばを理解しているのであるが、このことばやその他類似の言葉を愛用せしめるのはまさに受け取り方の曖昧模糊たるところである。人が他者と連帯関係にあると表明するとき、それは一般に他者のために何かを獲得してやるためであって、彼に何かを与えるためであることはきわめて稀、ほとんど皆無のようなものであることに注意する必要がある。「保護」ということばは流行おくれになってはいない。これは大いに使われつづけている。これは「国民的」という形容語を付することによって有効に強化される。国民的産業、国民的農業、等の保護を持ち出すこと、これは反駁の余地のない理由を用いることである。

（1）労働者が「ブルジョア」を収奪したいと願うのも、自分たちの仕事から他の労働者を排斥するのも、新入りの数を制限し、一定数の若者が生活の糧を手に入れるのを妨げるのも、オーストラリアやアメリカ合衆国の場合のように、可能な場合には外国人労働者の移民を妨げる法律を制定させたのも、「連帯」の精神によってである。この場合彼らのスローガンはむしろ「各人は己れのために」であるように思われる。

経済学者たちは人間の行為を決定する動機として論証ということに余りに重要性を付与しすぎるという誤謬をおかしてきた(1)。彼らは自分たちの敵対者の理論の空虚さと誤謬を明らかにすればそれらを無力化しうるものと信じてきた。コブデン同盟の成功は大いにこの錯覚のうちにあった。人々はこの成功は偏見に対する理性の勝利であると考えていたが、それは単にある種の利益の他の利益に対する勝利にすぎなかった。フランスでは政治経済学全体が自由主義的であった。そしてバスティアの見事なパンフレットは自由主義の教義を普及させていたのであるが、それにもかかわらず保護主義は重大な反対に遭遇することもなく勝利したのである。同じ現象がイタリアでも起こった。カヴール（Cavour）、ミンゲッティ（Minghetti）、ペルッツィ（Peruzzi）といった政治家たちは自由主義者であった。フェッララ（Ferrara）、パンタレオーニ（Pantaleoni）、ボッカルド（Boccardo）、デ・ヴィティ（DeViti）、マッツォーラ（Mazzola）、マルテロ（Martello）、デ・ヨハニス（De Johannis）、ダッラ・ヴォルタ（Dalla Volta）、ジレッティ（Giretti）、トッデ（Todde）、その他の経済学者たちはまだ自由主義的学説を教えていた。ある日一つの利益同盟が保護主義的政策への決定的な復帰を強いた。フランスでもイタリアでも戦闘が行なわれたのは学説の戦場においてではなく、利害の戦場においてである。保護主義者たちが学問的に重要

でないのと同じように、自由貿易主義者は実践的に重要ではなかった。金（きん）は説得し雄弁には何の力もない（Auro suadente, nil potest oratio）。

（1）Fr・ポーラン（Fr. Paulhan）は『論理的精神と虚偽の精神』（*Esprits logiques et esprits faux*）三三一頁で次のように言う。「最良の根拠が個々人の願望や利害を前にしてはいかに無力たらざるをえないか、議論がいかなる力で、しばしばいかに実り豊かに、時にはいかに柔軟に、そしてほとんどつねにいかなる粘り強さで、排除され、裏返され、真価を認められず、変質歪曲されるか、誰もが確認できている。それゆえ情念によって支えられているある観念に対して単に知的な構想を対置することによる成功をあまりに重視するならば、その素朴さに首をひねるのが順当というものであろう。説得されることを欲しない人々の、かなりしばしば無意識的で、意図的ではない虚偽性がすべての人々を驚かせてきた。誠実で、最善を尽くして検討する人々でさえ、強情を張ってその他の人々とほとんど変るところない形で論証しようとする。なぜなら彼らの知性は少しく活発な感情の圧力をものともせず正常に機能するほどに自由ではないからである。いずれの側においても、願望に有利に作用する観念は、必要な一定数の誤謬、論理的矛盾にもかかわらず、維持される。」

それゆえ、十分に周知されている真理は存在するが、大部分の人々はそれが含んでいる帰結をちょうど引き出そうとするその時点で立ち止まる。

たしかに科学的論証がこうした現象と絶対的に無縁であるとか、コブデン同盟の成功に科学的論証が何の役割も果たしていないとか、少なくとも何らかの軽微な間接的影響も与えていないとか主張することはできないであろう。しかしこうした現象の決定的原因であると言うにはほど遠い。

生産者の最大部分が国家の保護によって他者の財を領有するときには、何も要求しない者はそのことによって犠牲になりさえする。彼は代価を支払っても何も受け取らない。それゆえ彼は天引きされた分を取り戻す目的のためだけでも、ケーキの自分の分け前を要求しなければならない。これは主人の夕食を運んだ犬の寓話である。その犬はまず他の犬たちから主人の夕食を守り、最後にはその夕食の中の自分の分け前をぱくりとやって満足する。

かくして関税保護はあらゆるものの価格を上昇させ、もし労働者が自分たちの賃金を増やすために団結しなかったならば、彼らは犠牲になることになる。なぜなら彼らの支出は増大するが、彼らの収入は一定のままにとどまるからである。これは一八八七年から一九〇〇年にわたってイタリアで実際に起ったことである。政治家たちは関税を増加させるために他の人々に支払わせた。産業家と海軍業者は巨大な財産をつくった。農業労働者大衆が全てを支払った。この不幸な小作たちが同じ賃金のままであり、彼らのまわりでは全てが値上りし、その結果彼らの苦しみは耐えがたいものとなった。自由主義者たちは彼ら農民に、保護主義に反対するように勧告したのであるが、このやり方は実際的ではなかった。まず第一にこのような論証は小作たちのところまで届かなかった。次に、このような論証が彼らのところまで届いたとしても、それは理解されなかったであろう。最後に仮に彼らが理解したとしても、彼らは収奪が取るところの多様な形態と闘う手段をもっていなかった。最小抵抗線は別のところにあった。それを発見したのは社会主義者であった。彼らは、

ストライキという手段を用いて地主たちに耕作契約の一定の改善を課する、抵抗同盟に小作民たちを組織した。小作民たちは、この努力が成功でもって終った場合には、彼らが奪われたものの一部を取り返すことになる(1)。社会主義者たちが小作民を行動させるために彼らに与える理屈は大して重要ではない。それがいかなる論理的価値も科学的価値も持たないということもありうるのであるが、個々人を説得するに必要な性質をもつことはありうる。そして重要なのは全くこの点である。多分いま始っている運動は小作民たちが取られた分だけを取り返すという点を越えるであろう。収奪されたあとで、今度は彼らが収奪者になるであろう。この場合、この不幸な小作人たちの財の略奪によってかくも長い間富んでいた人間たちは、彼らが播いたもののみを収穫するようになるであろう。

(1) もし全ての価格が同じ比率で、例外なく、上昇するということがありうるとすれば、単純に、経済的均衡の出発点に戻るだけのことであろう。

注目に値するある奇妙な状況が存在する。すなわち、人々は自己の財を守るためよりも他人の財を奪い取ることのためにはるかに大きなエネルギーをもって行動するということがしばしば観察されるのである。「人口三千万のある国で、何らかの口実をもうけて、各市民に一年につき一フランを支払わせ、その総額を三十人の人物のあいだで分配することが提案されると想定しよう。奪われる方の各人は年間一フランを支払い、奪う方の各人は百万フランを受け取ることになるであろう。振舞いは両方の側で非常に違ったものになるであろう。年毎に百万フラン獲得しようと願う人々は夜も昼も休むことなく活動しつづけるであろう。彼らは月刊雑誌に奉仕し、支持者をつくろうと務めるであろう。…奪われる方では、活動ははるかに小さい。選挙運動をするためには金が必要である。ところで、各市民から数サンチームの金を出させようとすることを妨害する、乗り越えがたい、実際的ないくつかの困難が存在する。…ある個人が、一フランを課するにすぎない税金が設けられるのを妨げることを願って十二フランを拠金するのは、ただ博愛心によってのみのことであって、経済的には彼は間違った取引をしているのである(1)。」もう一つ別の例を挙げよう。公務員の「最低給与」を設けることが提案されるとする。この措置の結果として給与の増額にあずかる者たちは、彼らがそこに見出す利益を完全に理解するであろう。彼らとその友人たちは、彼らにこの天来の恵みを配分することを約束する候補者たちを成功させるために出来る限り動き回るであろう。給与の増額分を支払う者たちはと言えば、彼らのそれぞれは、税金によって彼らから奪い取られるものについて理解することに多大の困難を感じ、たとえようやくそれを理解したとしても、金額は余り大したものではないと思われるであろう。さらには、大抵の場合彼らはそのことについて考えることさえしない。彼らは自分たちには少しも関係のない事柄が問題になっているかのように、この措置についての議論を上の空で聞いている。納税者に理解させるのが最も困難なことの一つは、一フランの十倍は十フランになるという点である。税金の増額が徐々に行なわれる場合、それは全体として高額になるのであり、一挙に税金を引きあげようとすればそれは怒りの爆発を引き起こすことであろう。

（1）『経済学講義』*Cours*, II, § 1047.

それゆえ収奪は、しばしば、収奪される側からの十分効果的な抵抗には遭遇しない。収奪を終らしめるのは、それの結果としての富の破壊であり、それは国の滅亡をもたらすこともありうる。歴史が我々に教えるところによれば、収奪は一再ならず、金の卵を産む鶏を遂には絞め殺してしまった。

それぞれが、他人のつくり出した財を掠めとろうとしているこれらさまざまの集団の行動は、例えば私的所有の廃止のような、社会組織の根本的な変革まで、おそらく存続することであろう。実際、この私的所有は消費の時点でもう一度必然的に現れてくることを忘れてはならない。消費されねばならない財の分配のために念入りに研究された規則の完成度がいかなるものであろうとも、この規則は人間存在によって運用されなければならないであろうし、この人間存在がなすところの行為は、その質と欠点の名残を後々までとどめることであろう。もし今日、ある階級に属する人間にはつねに非があるとし、別の階級に属する人間にはつねに理があるとするような労働裁判所判事が存在するならば、菓子を、Aには非常に少なく、Bには非常に沢山与えるという形で分ける「分配者」が生まれる可能性があるであろう。

改革者の大部分がこうした点を全く考慮しないのは驚くべきことである。彼らは自分たちが提案して設ける規則はつねに悪用されることなく適用されるものと考えているようである。しかし少しでも観察すれば、理論と、法律によって規定された規則、あるいは道徳ないしは慣習によって課される規則の実践的運用とのあいだには、つねに巨大な差異が存在したことは十分理解できるはずである。そして、その差異が将来消滅するであろうとは、それがいかにしてそして何故に起こるか説明されない限り、認めることはできないであろう。

それゆえ我々はとりわけ社会システムのこの側面について考察しなければならない。我々は、ある措置がある目的をもっていたとするならばその目的は必ず達成されるであろうと信ずることには十分心しなければならない。その目的は完全に失敗し、全く求めていなかった別の目的が成就されるといったことがありうる。昔の刑法が盗みを死刑に処したのは盗人を消滅させることを意図していたのであるが、泥棒は実のところ消滅したであろうか。中国の社会組織は政府を優良市民と碩学の手に委ねることを目指しているのであるが、それは実際に起っているであろうか。それゆえ解くべき問題は実質上次のようになる。ある措置が取られたとして、その目的はどうでもよい、その実際の効果はどのようになるか、である。

この問題を解くためには、措置が適用される人々の性格特徴を把握することがどうしても必要である。もしこの特徴が変化することがあり、我々が知っているものとは全く違うものになることがありうると認めるならば、最初いかにそれが愚かしく見えることがあるにしても、着手実行できるのは社会システムからではない。実現の問題は次のような形で立てることさえ可能である。すなわち、あるシステムが所与として、それが機能するためには、人々が持たなければならない性格特徴はどのようなものであろうか、と。これは内容的には次のように別の形で一般に立てられているのと同じ問題でもある。すなわち、ある社会システムが所与として、それは我々が知っている人々の性格と両立可能であろうか、

という問題である。

人々の性格というものは変化するとしても非常にゆっくりとであり、無数の事実がこのことを証明している。アテネの民主制は、同じく民主制と名付けられている近代の政体とはたしかに非常に異なっていた。まず第一に、奴隷の存在は、こう言ってよいならば、アテネの政体を貴族階級の民主制にすぎぬものとした。さらにアテネの道徳的、知的、そして物質的生活条件は近代人のそれとはかなり隔たっていたのであるが、それにもかかわらず、環境の大きな差異にもかかわらず性格と感情の類似には驚くべきものがある。さらに、古代のギリシア、ラテンの作家たちの魅力をなすものは、まさしく、彼らが我々自身も経験している感情を表現していることである。我々が彼らを引用するのは単に古典古代への懐旧の情によってではなく、当時も現在も真実であることを述べているからである。たとえあるラテン時代の作家が、■Summum ius, summa iniuria■ と書かなかったとしても誰か後代の作家がそれを言い、引用されるようになるであろう。この古諺は、不完全な法が不完全な存在によって運用された国民のなかでのみ生れえたものであり、法とその運用の完全性なるものを承認するならば、意味をもちえないであろう。これがいまもなお引用される事実は、それが生まれた条件が現在においてもなお存続していることを示している。ヘシオドスのなかには、近代の作家も署名することのできるような、莫大な数の観察と教訓が含まれている。アリストファネスが登場させたデマゴーグたちは今日生きているデマゴーグたちとほとんど変るところなく、近代のデモスはアテネのデモスと、取り違えるほどに似ている。

しかし、アテネ民主制の古き良き時代から我々を隔てる約二三〇〇年は、人類の歴史のなかでは何ほどのものでもない。これは本当のことである。そしてこのことから、例えば一万年後に人がどのようになるだろうかということについて我々は何も知らないという結論を引き出したとしても、この結論は完全に正当であろう。この点については沈黙を守り、我々の完全な無知を認めるしかない。科学は我々の知識の現状においては、はるかに近い時期について専念することしかできない。しかしその場合、一世紀の間に、二三〇〇年間の人間のあり方および今日の人間のあり方とは本質的に異なるものになるであろうと言明するに至るならば、それは、それ自体では何らの確率ももたない命題、そして、歯に衣着せずに言えば、感傷的なあいまいな宣言ではなく、とてつもなく強力で決定的な証拠によって支えられる必要のある命題を表明することになるであろう。

存続するのは感情の内容であって、それが表現される形式はきわめて多様でありうるということは言うまでもない[1]。社会科学の困難の一つはまさしく内容を認識することであり、それはさまざまの形式によって覆われており、同じ単一の命題がいくつかのことばによって書かれているのである。二つの場合には翻訳することが必要である。

（1）　引用しうるきわめて多数の例の中で、次のものは顕著なものであると思われる。ドルビニー（D'Orbigny）はボリビアについて述べつつ次のように言う（*L'homme americain*, I）。谷の入り口と両側の頂上のところに、どの道でも、私は大抵木の十字架が立てられている、多少とも大きな石の山を認めた。…インディアンの住んでいるボリビア共和国のあらゆる部分でそれらを再発見することによって私はそれらがアパッチ（apachetas）のものであることを知った。そしてもっと後になってそれを確信する理由もあった。これらの石の山はスペイン人たちが来る以前に存在してい

た。それらは、切り立った山の側面を苦労してよじ登りながら、見えざる神でありあらゆる事物の推進力であるパシャカマック(Pachacamac)に対して頂上にまで到達する勇気を与えてくれたことを、道をたどりつづける新しい力を要求しつつ、感謝した、荷物を背負った原住民によって作られたものであった。彼らは立ち止まり、しばし休息し、眉毛を何本か風の中に投げ、あるいは彼らにとって最も貴重なものであり彼らが口の中で噛んでいるコカを石のかたまりの上に投げ、たとえ貧乏ではあっても、周りから石をもってきて石のかたまりに一個をつけ加えることで満足していた。今日でも何も変っていない。ただ原住民も今はパシャカマックに感謝を捧げはしないが、キリスト教徒の神—十字架はそのシンボルである—に感謝を捧げる。」

モーリ(Maury)は著書 *La magie*, 一五三頁 で次のように言う。「シシリーでは処女が豊穣の神ケレスやヴィーナスのすべての聖域を占拠していた。そして、これらの女神に敬意を表して行なわれていた異教的儀式は部分的にキリスト教の母に移された。」一五六頁では次のように言う。「神託を授ける神々は沈黙した。しかし聴罪司祭や殉職者の墓がそれらに取って代った。そして、神々に対してなされるべき要求が記されていた召喚状を予言者に託す代りに、召喚状は聖者に託されるようになった。ほどなく聖者は■返事した■。」そして一五八・一五九頁には次のようにある。「泉は、かつて神に対するように捧げられた供物を、いまも受け取り続けている。」このようにして健康を回復することができると信ずること、これが明らかに主要な事実である。この感情が表現される形式は二次的な事柄である。

表面上は非常に異なっていて敵対している制度や教義が、内容的には同一の起源をもっていることがありうる。かつて同じ感情がある種の人々のあいだでは禁欲主義的な形を取り、別の人々のあいだではキリスト教の形を取った。近代の作家たちは十八世紀末の作家たちの誤謬を是正して、皇帝ユリアヌス(Julien)は少しも自由思想家ではなかったこと、彼の異教再興は内容的にはキリスト教の敵対セクトをつくり出すための試みであったことを明らかにした。彼は我知らずミトラ、キリスト教、その他の教義の中で花咲いていたのと同じ神秘主義的影響を蒙っていた。ユリアヌスの宗教はヘレニズムの文化の宗教の大部分と同じように三位一体論的でさえある(1)。現代でも同じような神秘主義的、禁欲主義的な感情が、いくつかの社会主義的宣言のなかに、禁酒家や菜食主義者の宣伝、子供をつくるためでなければ(si ce n'est liberorum guaerendorum causa)愛を感じることを禁ずる厳格な風俗監督者の宣伝のなかに、また、その絶大な憐憫の情がもっぱら犯罪者の身の上にだけそそがれてその被害者は系統的に無視する人々の珍論奇論のなかに、見出される。

(1) Adrien Naville『皇帝ユリアヌスと多神教の哲学』(*L'empereur Julien et la phylosophie du polythéisme*)

トックヴィルは、革命が旧体制のやり方を用いただけであることを非常に見事に指摘した。現在いくつかの国で権力に到達した新しい社会階級は、かつて支配した階級が享受していたのと全く同じ特権を自らに与えている。旧体制のもとでは、けんか騒ぎの暴力行為に熱中していた貴族たちは罰せられることは滅多になかった。新体制のもとではこの特権はストライキを打つ労働者のところに移っている。彼らは、仕事を続けたいと思う労働者

を、罰せられることなく、あるいは馬鹿々々しいほど軽い罰を受けて、虐待し、時には殴り殺すこともできるのである。これはフランスでは特にワルデック・ルソー内閣の統治のもとで見られた。こうした多数の事実を挙げることができる。一九〇〇年フジェールで靴製造所が完全に破壊され略奪された。この略奪の張本人はまだ罰せられないままである。一九〇〇年八月五日にはルアーヴルで「海軍憲兵隊伍長が頭に弾丸を撃ち込まれて負傷させられた。重傷を負って家に移送されねばならなかった将校リコナールも同様であった。何人かの他の将校も石を投げつけられて多少とも重傷であった。」(ル・タン、八月六日)。マルセーユでは社会主義者の市長の暗黙の了解のおかげで、ストライキ参加者たちが数日間支配した。往来するためには通行許可書を携帯しなければならなかった。同じことがモンソ・レ・ミーヌでも起こった(1)。同じ地方で、ストライキ参加者の同情を惹く幸運を持ち得なかったマルタンという名の男がストライキ参加者の一団に追跡された。身を守るために彼はピストルを発射した。しかしそれは誰にも害を与えなかった。次いで彼はラゴー氏のアパートに避難した。彼の後から警察署長と社会主義者の補佐役がそのアパートに入った。「マルタンはこの警察署長に、窓の下で決死の叫び声を上げピストルを発射している激昂した連中が散らされるまでは彼を外に出さないように哀願した。しかし警察署長はこの不幸な男を群衆に引き渡した。数分後には頭から足まで傷しかなかった(2)。」このような暴行の張本人が非難されて不安になることは稀である。彼らを訴追することが絶対的に避けられないときには、執行猶予の法律を適用しつつ有罪判決し、次には、彼らが出直しすることができるようにということで彼らを完全に自由の身にする、大赦が来る。かつて聖職者と貴族は特別の裁判をもっていた。今日ではこの特権を享受しているのは労働者である。労働裁判所判事は、昔の教会裁判所が聖職者に対して取った以上に厳しい処置を、労働者に対して取っているようには思われない(3)。被支配階級にとって一つの過失あるいは罪であるものが、支配階級にとっては単なる小罪となる。イタリアでは労働者が経営者に敵対して自分の正しさを認めさせることは稀であるが、アルプスを越えてフランスに入れば、労働者に敵対して正しさを認めさせうることが稀なのは、経営者の方である。同一の原因は同じ結果を生み出すが、ただその結果の現われる形式はさまざまである。同じ現象が税金についても見られる。昔、農民が情容赦なく租税や夫役(ぶやく)を課せられていた国々が存在した。今日では情容赦なくそういうことをやられるのは富裕な人士である(4)。農民たちは租税を支払っていたが、それについて投票してはいなかった。今日では税金を払わない多数派の代表者たちが、専ら少数派にふりかかる租税を可決するための会議が一つならず存在する。この点では、租税が貴族、僧侶、平民の三身分によって決められていた国のブルジョアがもっていた保証よりも後退したのである。富裕な人士たちの条件は、昔のブルジョアの条件よりもむしろ農民たちの条件に接近する傾向にある。情容赦なく租税や夫役を課せられていたとされる農民たちは必ずしも最も極端な悲惨に追い込まれていたわけではなかった。賢明な領主は農民たちにいくらかのものを残すほうが、農民を仕事に鼓舞して、確かに彼らの利益になることを理解していた。同様に今日、富裕な人士たちの唯一の頼りは、課税の対象が消滅することがないようにという懸念である。

（1）　ジュルナール・デ・デバ（*Journal des Débat*）、一九〇一年二月一六日付。「ある郵便配達夫が最近ストライキ参加者によってひどい目に合わされたので、市長は郵便配達夫のための通行許可書を発行させたのであるが、それには次のように記されている。『すべての善良なる市民に対し、郵便電報配達夫たる…某を自由に通行させるようお願いする。』」

（2）　ル・ゴロワ（*Le Gaulois*）、一九〇一年二月六日付。官報はしかし、ストライキ参加者の暴力行為は弾圧されてはならないと確認している。ラ・プティ・レピュブリーク（*La petite République*）、一九〇一年二月一八日付ではシャロンのストライキに関して次のように述べられている。「通信社の言によれば副知事は紛争を避けるためにはあらゆることをする決意と思われるのだが、それならば何故に彼は歩兵隊と憲兵隊を動員したのか…。」同紙の更に先のところでは、シャロンのストライキ参加者についての次のような重大な事実が読まれる。「さし当たりストライキ参加者の分遣隊は五百人によって支えられている。彼らはガラス工場に姿を現わしている。鉄柵は閉鎖されている。彼らは力ずくでそれを突破している。」かくして、公権力によらずに、鉄柵はこじあけられるにまかせられねばならない。

　モンソ・レ・ミーヌでは「兵士たちは、ストライキ参加者の集団が通過するときには、命令によって姿を隠す。実際あらゆる紛争を避けることが重要なのである。」（デバ・一九〇一年二月六日付）。暴動参加者に背を向けなければならないという、公権力についてのこの新しい考え方は特徴的である。

（3）　事実は無数にある。特に、スイス連邦裁判所が、労働裁判所判事による判決を不公平として廃棄した、多数の判決を参照。例えば、一八八八年四月二〇日の一判決は「労働裁判所が請求者に対して、ただ彼の全く根拠のない申し立てのみにもとづいて、彼の請求総額を、訴訟相手方が法規に従って作成した証拠書類―これは請求解除が可能であった―にもかかわらず与えたことを確認している。請求者の申し立てはそれを裏付けるものが何もなくとも判事によって正しいとされ、被告の供述は否定され、裁判所は証人の証言■（témoins：原文ママ）■を聞くのを拒否している」（*Journal de Genève*, 13 avril 1900）。一八九五年一二月一二日の判決。「労働裁判所の判決は訴訟手続法の基本規定を犯しているという理由で破棄された。労働裁判所判事は、一方ではおじの言い分をその甥による訴訟において聞き、他方では、証人尋問において何も問題はなかったのに証言を聞くことを拒否した。」

　G・サルヴェミーニ（G. Salvemini）は、*Magnati e popolani in Firenze dal 1280 al 1295*, p.178. においてフィレンツェでは貴族高官の罰は普通の場合の二倍から六倍であったことを指摘している。同様にオルヴィエトでは十三世紀の初めころには、普通の人間を傷つけた貴族の罰は通常の二倍であった。同様の処分が一三〇八年にリュックで見られる。サルヴェミーニはネリ・ストリナティのCronichettaから借用した一例を挙げている。すなわち、ネリは他の五人と共に―そのうちの二人は■庶民（popplani）■であった―ランベルト・チプリアーニという男の保証人となった。その男は支払いをしなかったので、保証人が介入しなければならなくなった。二人の■庶民（popplani）■のうち一人は死んでおり、もう一人は支払おうとしなかった。権勢をもっていたチプリアーンともう一人の保証人が、■庶民（popplani）■に逆うこともできずに支払わなければならなかった。《si erano fatti gli ordinamenti del popolo contoro ai Grandi》

（4）　彼らはしばしば、あまり巻き上げられないように、裕福さを隠さなければならなかった。同様に、オリエントの専制政治の下では、金持ちは、君主が彼を羨み、財産をとり上げることを恐れていた。

　スッラの治下、名門の出で、温和で節度ある性格の持ち主であった市民クウィントウス

(Quintus) は、どの党派にも決して加担しなかったが、あらゆる期待に反して追放リストに自分が載せられているのを見て、次のように叫んだと言われる。「私はなんと不幸なことか。アルブの私の地所が私を裁判にかけさせる！」

善良なブルジョアが同じようなことばを繰り返す日は多分、あまり遠くはない。

こうした例は増やすことができるであろう。それらは、非常にさまざまの外観の下に一つの共通の内容が隠れていること、同一の事物の多様な変態が問題であることを証明している。

第三章　現実的システム

黄金時代伝説―スパルタ―貴族の継続的進化―リパーリ諸島―ピタゴラス学派―古代ギリシア・ラテンにおける国家社会主義―ギリシアにおける収奪―動産資本の破壊の結果―この破壊が大規模に起った国の破滅―アテネおよびローマ帝国の没落について、こうした原理によって説明すること―国家社会主義の致命的結果

我々は実際に存在したシステム、あるいは存在したと信ぜられているシステム、一般には混合システムの研究から始める。次いで、理論的システムを研究しよう。

人々は黄金時代伝説の中に、社会主義的組織、土地の共有と条件の平等についてのぼんやりした記憶を見ようとしてきた。歴史文献の解釈が問題になるときに、疑問を感じることがほとんどないE・ド・ラヴレー（E. de Laveleye）は、「私有財産が知られていなかった黄金時代の普遍的伝説の中に、ギリシア及びイタリアにおける（土地の）共有の存在についての一証明をいまも見ることができる[1]」と言う。別の著作家たちは、伝説の下に隠れている現実がどのようであったかを一層精密にし洞察しようとしてきた[2]。これはまさに必然的に不毛を運命づけられている探求である。黄金時代伝説は切り離されて単独で存在してきたものではなく、昔の人々を我々の同時代人よりも徳に富み、幸福で、力強く、長命で、長身の人間として描き出し、彼らのうちの幾人かの祖先は神あるいは動物であるとするところの、一系列の伝説の一部をなすものである。ゼウスは多数の人間の女を愛したが、彼の愛への信仰は幸いなことに世俗の権力からも精神権力からも我々に強制されてはいない。未開人たちは、彼らに現在トーテムとして役立っている動物の子孫であるかのように自分のことを思っているが、こうしたことは確かなことでは全くない。身の丈については墓の中の遺骸や地質学的発見物は伝説のこの部分とは全く逆のことを証明しており、かくして伝説の他の部分も現実的基礎をもたないことがありうる。化石動物の骨がしばしば巨人の骨と解釈された。「Hoe à Plymouth を発掘しているときに発見された巨大なあごの骨と歯は、英雄 Cornwall という名のもとになったCorinens の最後の闘いを行なった巨人 Gogmagog のものと見なされた。マスタドンの化石の骨は、アメリカで発見されたのであるが、それが埋っていた場所に *Campos de Gigantes* という名をつける所以となった。」これらはまさに機会原因 causes occasionnelles であるが、こうしたあらゆる伝説を着想せしめた感情は明らかにホラチウスの *laudator temporis acti* の感情であり[3]、しかも我々は、伝説の一部となり得た現実的要素を寓話から区別するための手段、さらにはこのような要素が存在したのかどうかを知るための手段を全くもっていない[4]。フュステル・ド・クーランジュ（Fustel de Coulanges）は、E・ド・ラヴレーによって引用された文章を検討し、農地の共有体制についていかなる結論も引き出しえないことを明らかにした。これはR・ペールマン（R. Pöhlmann）[5]がギリシアについて引用されうる文章について到達している結論でもある。

（1）*De la propr.*, 1891, p.369.

（2）伝説の歴史は、*Socialismo antico* において Cognetti de Martiis によって十分に明らかにされている。

（3）*Art poétique*, 173. 既に Nestor は、彼の時代に、人々が退化している！と嘆いている。■改行■ルクレティウスの時代には、世界は老衰していた。「すべての種をつくり出し、無数の動物を生んだ大地は、衰弱し、やっとひよわな動物を産み出すだけである。」■Ⅱ■, 1150-1152.

（4）Grote, *Hist. de la Grèce*, ■Ⅱ■, ch. Ⅱ, p.170 de la trad. franç.：「何か個々の神話を、単なる臆測で、証拠もなしに、歴史あるいは哲学に組み入れるために、その本来の部類から切り離すことは、そのような方法をその他についても使えるのでなければ、何らの利益ももたらさない。もしその方法が信頼に値するのであれば、それは全てについて適用されなければならない。逆にそれが全てについて適用できないのであれば、いかなるものであれ特殊的証明は理解できないとつねに仮定するならば、個別の単なる一神話に適用されても、信頼に値しない。何らか個々の神話をその本来の部類から分離させることは、その神話を誤った観点において提示することである。」

（5）*Geschichte des antiken Kommunismus und Sozialismus*, ■Ⅰ■.

素朴な信仰と共に語られるタイプの伝説から、いくつかの感じられないほどの段階を経て、明らかに個人的な空想の産物である別のタイプの伝説に移行する。最初のタイプの伝説には多分、ヘシオドスが『労働と日々（*Opera et dies*）』の一〇九から一一九頁で物語る伝説が含まれるであろう。「クロノスが天を支配していたときに生きていた者たちは、心配から解放され、労働と悲惨から免れており、悲しい老衰もなく、手足もいつも変らず元気な神々のように生活していた。彼らはあらゆる苦労から解放されて、宴の中で楽しんだ。…あらゆる財が彼らにはあった。肥沃な畑は何もしなくとも多種類の豊富な収穫をもたらした。」しかしテレクリディウス（Téléclide）の語るものは第二のジャンルの伝説に属する（Ath., ■Ⅳ■, p.268）。「平和が至る所を支配した。…大地は有害なものを何も生み出さず、いかなる病気も生み出さなかった。必要なものは自然に生れた。酒はほとばしるように流れ出た。菓子とパンは食べられることを願って人間の口の前で争っていた。…魚は家へ入ると自分自身を焼いてテーブルの上にのった。ソースの河が寝台の周りを流れ、熱い肉を運んできた。…焼かれた鵝（らい）がミルク菓子と一緒に口の中に飛び込んだ。…人々は肉づきがよく、巨大な身の丈をもっていた（1）。」さらに私有財産の存在しないことはこの部類の伝説における際立った事実ではない。これらは人間を苦しめる不幸が存在しない状態を描き出そうとしているだけである（2）。不幸の中で、私有財産の存在に由来するものが数え上げられるのは当然のことである。「人々は—とオヴィディウス（Ovide）は■Ⅲ■, Eleg., 8 で言う—犂で畑に畝をつけるのに苦労する必要は少しもなかった。」次の一文が主要な観念を表わしている。「人々は耕作しなくても豊かな収穫、果物や蜂蜜を得ることができた。」次いで彼はつけ加える。「*Signabat nullo limite mensor humum.* 測量家が畑の境界線を引くことはなかった。」

（1）フーリエは、いくつかの点でテレクリディウスが描いたものに似ている、未来の黄金時代を描いている。第十二章参照。

（2）財の共有の概念が、もはや過去のではなく未来の黄金時代の描写のなかに再び現われるのは、このことによる。かくして *Chants Sybyllins*, ■Ⅱ■, 318 et suiv. では次のように言われる。すなわち、酒、蜂蜜、ミルクの泉があり、土地は豊富な産物を自分自身で生み出し、もはや貧乏人も金持

ちも専制君主も奴隷も存在しない時代がやって来るであろう、と。あらゆるものが共有であろう、と必ずつけ加えられる。（ギリシア三語、一四二頁注）。類似の概念は Lactance, *Divin. instit.*, ■ Ⅶ■, 19 および、近い未来におけるキリストの地上での支配を描写しているキリスト教の他の著作家の中にも見られる。

我々は未開民族の観察によって、彼らが大変な悲惨の中で生きていることを知っている。労働もせずにしかも豊かな財を持っているどころか、彼らは艱難辛苦してしかも不十分な食糧を得るだけである。人はしばしば自覚せずに、論点先取の虚偽を行なう。原始の時代は人間にとって幸福の時代であったと仮定し、この仮定に沿って黄金時代伝説を説明する。次にこの論証を逆転させ、このように説明された伝説がかつて人々が享受した幸福を証明するのに役立つことになる。

黄金時代伝説はまた、人々のあいだに平等が支配していた時代の存在を証明するために援用される。このような事態の名残りはギリシアではクロノスの祭りや、イタリアではサトゥルヌスの祭りのうちに見られる。

これらの祭りは中世まで続き、いくつかの地域では変形されて、狂人の祭（*fêtes des fous*）となった。狂人のなかから司教あるいは大司教が選ばれ、彼が教会での祭式を司式する。その祭りはありとあらゆる滑稽を生み出した。アンティーブのフランシスコ派修道院では、司祭も番人も罪なき人々の日には聖歌隊のところに行かず、修道院で雑用をする聖職位階を受けていない助修士がその日は司祭たちの位置を代行し、祭式を行ない、破れていて裏返しにした聖服を身につけていた。彼らは本をさかさまに持っていた。…ロターリの書記によるオータン教会の第二報告集――報告は一四一六年で終っているが――の中には、日付は特定されていないが、狂人の祭りの日には背中に長袍祭服を被せられたロバが歩かされ、人々は次のように歌ったと述べられている。『へえ、へえ、ロバ殿(1)。』いま仮に我々が、中世のこのような祭りがサトゥルヌス祭の名残りであり変形であるということを知らずに、このような祭だけをそれ自体として知ったと仮定しよう。その場合我々は、狂人が正気の人々に命令し、本がさかさまに読まれ、ロバが尊敬される社会状態の記憶をそこに読み取ることを許されるであろうか。明らかに否である。しかしこの場合我々は、サトゥルヌス祭の中に、奴隷状態が存在せず人々がすべて平等であった古代における社会状態なるものの存在証明を見ることもできない。実際のところは、人々のあいだにある十分に一般的な感情は、対比の遊戯を作らしめるのである。パロディーを思いつかせるのはこの感情であり、それは主人と奴隷、賢者と狂人との通常の関係が逆転される催しにおいて主要な役割を演じていたのである。

（1） Voltaire, *Dict. Philoph.*, ■Ⅴ■, *Kalendes.* Voyez Ducange, ■Ⅴ■を参照。*Kalendae : Cuiusmodi autem fuerit, et quibus ineptiis constiterit, docet Beletus lib. de Divin. off. cap.* 72, *his verbis : Festum Hypodiaconorum, quod vocamus stultorum, a quibusdam perficitur in Circumcisione, a quibusdam vero in Epiphania, vel in ejus octavis.* 更に先の方で彼はフランスにおけるこの祭りの廃止について述べている。in *quo sacerdotes ipsi ac clerici Archiepiscopum, aut Episcopum, aut Papam creabant, eumque Fatuorum appellabant.* ■改行■ Ph・シャスル『中世の研究』(Ph. Chasles, *Etudes sur le Moyen Age*, p.249) はこの祭に登場したロバはもとも

とはバラームの雌ロバであったことを指摘している。■改行■モーリー『魔術（La Magic）』は一六〇頁で、異教の祭りがこのような祭りに変形したことを指摘している。

しかし、知られていない時代についてこのような疑点を含む蓋然的研究、今日も多くの著作家たちの多くの時間を失なわせている研究は措き、少なくともいくらかの歴史記録をもっている組織の研究に限定しよう。

スパルタはある種の共産主義的組織が支配した都市であると長い間考えられてきた。Sudre はさらに書いている。「リュクルゴスの法は共有システムを完全には実現しなかったけれども、それにもかかわらず彼の法律は共有ということにきわめて大きな役割を演じさせたので、それを共産主義的ユートピアの大部分についてその最初の源泉とみなされなければならない（1）。」用語に自分の欲する意味を与えることはたしかに自由ではあるが、しかし、スパルタ社会の組織に共産主義の名称を与えるのであれば、近代常備軍組織にも同じくその名称を与えなければならない。差異はただ量に関するものであって、質に関するものではない。スパルタ組織は市民権を有するすべての人に及んでいた。近代の兵営はただ市民の一部を含むに過ぎない。

（1）*Hist. du communisme*, p.6. ドン・イゾァール『財産と財の共有』(Dom Isoard, *La prop. et la commun. des biens,* ■I■, p.24）には次のように書かれている。「それゆえ共産主義者マブリー（Mably）はスパルタ共和国を壮麗に称めちぎり、『市民から土地財産を取り上げそれを共和国に譲渡することを通じて』リュクルゴスによって獲得された平等の完成をそこに看ている。」ドン・イゾァールもマブリーもスパルタの社会状態が全く分かっていなかった。

もし軍隊のような規律のもとにおかれた人々の関係が国の全人口について生ずれば、この量的差異は減少させられる。ただスパルタでは、今日「民間人」と呼ばれている者を、hilotes（奴隷）および périèques と呼んでいた。

スパルタ組織にもっと近い近代の例を見たければ、下士官食堂で一緒に食事をしている将校や、小作農によって耕される土地の所有者を考えればよい。小作農は hilotes すなわち奴隷であり、将校たちはスパルタ人「平等者」である。食堂は平等者共同の食事を象徴している。クレタ島では食事は国によって供給されていた。すなわち近代国家が将校に与える俸給に似たようなものが存在していたのである。スパルタでもクレタ島でも生産は社会主義的ではなかった。富の分配も社会主義的ではなかった。富裕者も貧乏人も存在した。

スパルタにおける富は土地の耕作と戦争の結果であった。土地の耕作は個人的に行なわれ、今日の収益小作人に似ていた。「一つの宗教的呪いが――とプルタルクは言う――地主に強い印象を与えていた。それがなければ地主は小作料を上げたであろう。」（*Inst. lac.*, 40)。そして Tite-Live は奴隷について語りつつ次のように言う。「太古の昔から農村の住居に住んでいるのは農民の種族である。」（■XXXⅣ■, 27)。我々はスパルタでは、共同生産のための組織を見出さないし、ローマの大荘園組織のような、一人の地主の監督下にある組織さえ見出すことができない。戦争という産業によって作り出される富は今日でも古代でもしばしば国家に属し、かくして社会主義的産業に似ている。まさにスパルタにおいてはこの産業がむしろ個人的性格を示しているのを見るのは不思議なことである。戦争は

国家を富ませなかった。戦争は、harmostes、将軍、最高政務官、王、といった人々を富ませ、彼らは敗者を搾り上げ、自らを堕落するにまかせた。

スパルタについて多数の誤謬を生み出したのは、我々が扱っている時代の二世紀ほど前に、今日見られるような社会主義運動にいくつかの点で類似した民主制運動がスパルタで起きたことである。ただ現在の社会主義者が彼らの完全な組織の理想を想定するのは未来においてであるが、スパルタの民主主義者はそれを過去に置いた。Sphéros はスパルタの体制について叙述したが、それを実際にあったようにではなく、彼が過去について望んだように描き出した。他方、スパルタについて叙述した著作者たちにおいて、条件の平等はつねに、過去の記憶であるか、あるいは未来における渇望である。それが現在における現実であったことは決してない。

リュクルゴスの伝説は、この立法者リュクルゴスとともに「不平等は大きく、多くのスパルタ人は何ももたず、ほんの少数だけが豊かであった」ことを物語っている（Plut., *Lyc.*, 8）。リュクルゴスは財の平等を樹立したとされている[1]。しかし、その平等はいずれにしても歴史時代までは続かなかったのである。なぜなら、スパルタに関する記録が出現するや否や、それらは条件の不平等を我々に示しているからである[2]。その不平等は耐え難いほどであり、Agis と Cléomène の改革を惹き起し、Nabis の略奪を惹き起した。他方ではすでにアリストテレスの時代に「Lacédémone ではすべての財が少数の手に集中している。」（*Polit.*, ■Ⅴ■, 6, 7）。プルタルク（*Inst. lac.*, 42）は次のような古代の神託を伝えている。「スパルタは富への愛によって滅びた[3]。」プルタルクによればこのような貪欲さは最近の起源のものであるとされているのであるが、実際のところそれはあらゆる時代について指摘されていることであり、それが存在しなかったとされている時代は純粋に伝説上の時代に限られている。さらにプルタルク自身、それの存在を認めているのはリュクルゴスの改革以前についてである。Pausanias は■Ⅳの４■で紀元前八世紀のある例を引いている。あるスパルタ人は、飼育すべく委ねられていた牛の大群を自分のものにしてしまった、と。ヘロドトスは■Ⅵの 86 で、紀元前六世紀のもう一つ別の例を引いている。あるスパルタ人は何人かの Milésiens が預けた供託物を自分のものにしてしまおうとした、と。ヘロドトスはさらに■Ⅶの 134 で、「それぞれ非常に高貴な生まれと非常に金持ちの二人のスパルタ人[4]が Xerxès に供されるべく自らを捧げた」と述べている。

（1）Grote は（*Hist.de la Grèce*, ■Ⅲ■, p.329）このような伝承は Agis が実際に土地の分割を思いめぐらしていた時代に生まれたと信じている。「かくして、想像や渇望、そして現在からの間接的示唆が、古いぼんやりした、そして色あせた歴史的過去から引き出された思い出としての表現を取ったのである。」

（2）アリストテレスは、*Polit.*, ■Ⅴ■, 6,2 で、Tyrtée に依拠しつつ、Messénie の戦いのあいだスパルタでは「戦争によって破滅させられた市民たちは土地の新たな分割を要求した」と述べている。このように、遠い昔から貧乏人と金持ちとが存在していたのである。

（3）Zenob, ■Ⅱ■, 24: ギリシア語５語（１４７頁）、アリストテレスは lacédémoniens の共和国におけるこの神託を想起させている。

（4）ギリシヤ語数語（１４７頁）。Thucyd., ■Ⅰ■, 6; ■Ⅴ■, 50; Xenoph., *Hell.*, ■Ⅳ■, 4, 11; Pausan., ■Ⅲ■, 8, 1; 15, 1; 17, 6; Isocrate, *Archid.*, 55 et 95; Elien, *Var. Hist.*, ■ⅩⅡ■, 43;

Arist., *Polit.*, これらは金持ちであったスパルタ人、あるいはそのような富の存在を前提する事実について語っている。■改行■アンリ・フランコット（Henri Francotte）は『古代ギリシアにおける産業』（*L'industrie dans la Grèce ancienne*, ■II■, p.303）で次のように書いている。「それゆえ私は、平等主義的な配慮関心がたとえ過去において存在したとしても、スパルタその他において、土地所有の組織を構想させその割当てを支配する動機の中では全く第二次的なものであったと結論することができる。」

社会主義者は、近代産業システムが富を急速に少数の手に集中させる結果をもたらしていると主張する。もし我々が、スパルタでは非常に少数の人間が全ての富を所有していたとする著作家たちの主張を受け入れるならば、近代の産業システムがこのような富の集中効果を有する唯一のものではないことになる。それゆえ社会主義者は、彼らが樹立したいと欲する平等はリュクルゴスによって樹立されたとされる平等よりも、より良好に維持されるだろうということを証明しなければならない。

統計は、近代の産業システムが少なくとも今世紀においては非難の的である富の集中を生み出しているという主張を否定している(1)。もし我々がスパルタに関する精確な統計を持っているならば、古代の著作家たちの主張の中にも誇張を見出すということがありうるであろう。たとえ彼らの報告が真の事実を基礎としているとしても、多分この真の事実は著者の自覚もなしに、社会的貧困（*misére sociale*）という視点によって誇張されるであろう。社会主義者たちは次のように言ってきた。すなわち、絶対的な富だけでなく、相対的な富も考慮しなければならない、つまり、人々がこの富についてなすところの評価を考慮に容れなければならないのであり、客観的事実に限定してはならず、主観的事実も見なければならない、というのである。この点について彼ら社会主義者は正しい。幸と不幸はとりわけ主観的な事柄である。少なくとも大部分の人々にとっては主観的事実が絶対的事実と融合する、窮乏の限界点が存在することは事実であるが、しかしこの限界点に到達する以前では大きな幅が存在し、その場合には、幸不幸についての主観的事実と富の多寡についての客観的事実とのあいだの完全な対応を見ることはできないであろう。

（1）*Cours*, liv. ■III■, chap. ■I■.

我々の近代的な社会産業システムが社会的貧困の総量を増大させたということ、これはありうることである。しかし、このことが証明可能であればと望んでも、今日のところまだそれはない。社会主義体制が現在の体制と隔たりうるのとほとんど同じくらい、工業的システムとは異なっているスパルタの組織システムも、たしかにこのような社会的貧困を生み出したのである。その社会的貧困はある具体的な形態を取ってさえいた。共同飲食のためには「平等者」たる各人は法律によって定められた一定量の食物を提供しなければならなかった。「貧乏人にとっては—とアリストテレスは *Polit.*, ■II■, 6, 21 で述べている—それに参加することは容易ではなかった。ところでこれは慣習によって都市の規則であり、この食事のための出費をすることができない者はもはや公民権にも与からない。」それゆえ貧困という物質的不幸に加えて公民権剥奪という精神的不幸が存在したのである。

Platéeの戦いでは、ヘロドトスによれば五〇〇〇人のスパルタ重装歩兵がいた。三世紀後のAgisの時代には、プルタルクの数えるところでは市民は七〇〇人しかいなかった。富の集中が市民の数のこのような減少に比例していたと考えるならば大きくまちがうことになるであろう（1）。これが正しい可能性はせいぜい、市民にのみ属しえたスパルタの土地財産についてのみである。まず第一に、スパルタ人の九〇〇〇区画が存在した地方のほかに、périèquesの三万区画が存在した地方があった（2）。そして前者における土地財産の集中は後者における土地財産の集中を全く含んでいない。後者における土地財産の集中は起こり得たことなのであるが、しかし次に忘れてはならないことは、古代について語る際にしばしばあることなのであるが、不動産は富の一部にすぎないという点である。スパルタにおいてさえ動産はかなりのものであった。プラトンは、あるいは作者は不明であるが*Alcibiade*の著者は、Lacédémoneだけでギリシアのその他の地方全体よりも多くの金銀をもっていたとさえ主張している。プルタルクは（*Agis*）、スパルタの不幸を、アテネを征服した後、スパルタが金銀で満たされたことに帰している。périèquesは商業と工業に没頭していた。そして彼らがそれによって金持ちになり、スパルタ人よりも金持ちになるということも考えられることである。かくして我々はArchémachos（Ath., ■Ⅵ■, p.264）から、多数のpénestesがその主人Thessaliensよりも金持ちであったことを知ることができる。奴隷でさえかなりの額の動産を獲得することが可能であった（3）。同様に、イタリア共和国の時代には、封建貴族が没落し、新しい貴族となるブルジョアジーが上昇するのが見られる（4）。イタリアで起きた現象をスパルタで起きた現象から分けるものは、この最後の事情である。しばしの間、イタリアでは封建貴族のみが自由な人間であり公民（シトワイアン）であったと仮定しよう。彼らの集団（カースト）だけを考えれば、ギリシアの著作家たちが描いたのと同じように事態は描かれたであろうし（5）、Polybeが語ったのと同じように富の集中と「人々の窮乏」が語られたであろう。古代の著作家たちが住民について我々に語ることを解釈するに際しては非常な慎重さが必要である。彼らには公民のみを注意して見る傾向があり、その他の人間は彼らの目に入らないのである。

（1）アリストテレスは*Pol.*, ■Ⅱ■, 6, 11,で、スパルタについて語りつつ、千五百人の騎兵と三万人の重装歩兵をまかなう能力のある国は、辛うじて一千人の戦闘員を数えるだけであると指摘している。このことは住民総数の減少を示すものと一般に想定される。この減少が本当のことであった可能性もあるが、しかしここでアリストテレスが語っているのは公民についてのみであり、その他は数に入っていないことは明らかである。アリストテレスの指摘を否定しなくとも、奴隷の数の方がもっと多かった可能性はある。

（2）Plut., *Lyc.*, 8.

（3）Hérod., ■Ⅸ■, 79; Plut., *Cleom.*, 23. Cléomène は五百ドラクマを払った奴隷には自由を与えた。こうして彼は五百タラントの金を集めた。それゆえ、五百ドラクマを支払うことのできた奴隷は六百人いたことになる。

（4）■本訳、三八頁を参照。■

（5）クセノフォン（*Hell.*, ■Ⅲ■, 3, 5,）が語るところによれば、Cinadonは「平等者」に対して陰謀を企て、彼が共犯者にしたいと思っていた一人の男に、ある一日にアゴラにいるスパルタ人の数を数

えるように頼んだ。スパルタ人は四百人のうち四十人にすぎなかった。

要するに、スパルタにおける推移は、貴族とブルジョアとが存在しているあらゆる社会における推移と同じであった。富の一般的配分があまり変らないということはありうることであるが、スパルタの場合では、貴族の大多数は貧乏になった。ペリエーク（périèques）によって代表されるブルジョアは、他方では atimie 等によってスパルタ人が権利を失っていたが、金持ちになった。双方ともに不満であった。一方は権利をもっていても富がなく、他方は富をもっていても権利がなかったからである。Agis の時代におけるスパルタ社会のこのような状態は最初の革命前夜のフランス社会の状態とあまり違っていない（1）。この革命は、貴族は新しい血を注入することなしには自らを維持することができないという事情の結果である。この新しい血の注入はスパルタでは不可能あるいは非常に稀であった。

（1）テーヌ『アンシャン・レジーム』(Taine, *L'ancien régime*, p.48 à 51)「Bouillé は、二百ないしは三百の家族を除いて旧い家族はすべて没落したと概算している。ブエルグでは数人が五〇ルイ、あるいは二五ルイの収入で生活していた。…ベリーでは一七五四年頃、『四分の三が餓死した。』フランシュ・コンテでは、我々がいま述べたばかりの信徒団体は喜劇的な光景である。『ミサの後彼らは、ある者は歩いて、またある者はやせ馬に乗ってそれぞれの家に戻る。』…彼らは借金をし、負債に苦しみ、土地を一切れ一切れと売っている。」

他方、ブルジョアは金持ちになった。*Ibidem*, p.401.「十八世紀には第三身分の状況に非常に大きな変化が生ずる。ブルジョアは働き、製造し、商売をし、稼ぎ、節約し、そして日々ますます金持ちになった。…」さらに、p.406.「同時にブルジョアジーは社会的階段を昇り、彼らのエリートを通じて最高の地位に行き着いている。」

Agis と Cléomène によって試みられた改革についてプルタルクが述べていることのなかに、財の新しい分配が問題になっているばかりでなく、périèques を公民としての地位にまで上昇させることも問題になっていたことを見ることができる。

紀元前五八〇年頃、リパーリ諸島にギリシア人が住み着き、「ある者は全員に共有の土地を耕作し、またある者は海賊と闘っていた（1）。」しかし、土地の耕作だけがギリシア人の従事していた生産分野ではなく、彼らはその上海賊でもあった。「彼らの習慣は――と Tite-Live は言う――あたかも掠奪が国家歳入であるかのように、捕獲物を共有することであった。」それゆえ我々はここに軍事的社会主義を見出す。これはシーザーがライン河沿岸の Suèves で観察したことでもある。「彼らは一〇〇の地域区画をつくり、それぞれの区画から毎年一〇〇〇人の武装男子が戦争に出かける。国に残る者たちは自分たち及び不在者のためにその土地を耕作する。彼らも次の年には武装するのであり、彼ら以外の者は国に残るのである。」（*De bell. gall.*, ■Ⅳ■, 1）。

（1）Diod., ■Ⅴ■, 9. Tite-Live, ■Ⅴ■, 28 の文章に注意を喚起したのは、Th・ライナッパ氏（Th. Reinaeh）である。*Mos erat civitatis, velut publico latrocinio partam praedam dividere.* 彼らはローマがデルフォイに運んだ金一クラテラを掠奪した。同じ事実は Diod., ■ⅩⅠⅤ■, 93 によっても報告されている。

原始的共産主義の存在を証明するについてこの二つの例は大いに重視されている。しかし、過去にも現在にも、このような例は他にも多く見出すことができる。かくしてヘロドトスは（■Ⅳ■, 42）、フェニキア人たちが海路でアフリカを回ったことを報告している。「秋が来ると彼らはもといたリビアの土地に上り、小麦を播いた。収穫の時期までそのまま待ち、収穫の後再び海に戻った。」我々の著者は言わないが、この収穫が共同で行なわれたことは大いに考えられることである。同様に現在でもアフリカを横断する武装軍団のメンバーは、彼らが手に入れる食料を共有している。これと本来の意味での社会主義組織とのあいだには大きな距離がある。

ピタゴラス学派の共産主義は、その存在が証明されたならば、本来の意味での社会主義により接近している。あいにくこれほど不確実なものはない。Zeller が非常に見事に指摘したように、「伝承はピタゴラス哲学及びその創始者について、事実が生じた時代からその哲学が遠ざかるにつれて、ますます多くの細部を我々に提供している。そしてまた逆も成り立っていて、ピタゴラス哲学は事象そのものにさかのぼるにつれてますます口を利かなくなる(1)。」この現象はスパルタで起こったことと同じであって、スパルタでは紀元前三世紀あるいはもっと近い時期の社会主義的理念はリュクルゴス（Lycurgue）に負うものであった。

（1） *La philosophie des Grecs*, trad. franç., ■Ⅰ■, p.282.

多数の事実が、ピタゴラスの時代 Crotone で、そしてピタゴラス学派自体の中に、私有財産が存在していたことを証明している。Jamblique が言うところでは、Cylon その他の金持ちの公民はピタゴラスの敵対者であった。金持ちと貧乏人が存在したとすれば、これは明らかに共産主義が存在していなかったということである。ピタゴラスと Milon は自己所有の住居を持っていたし、Tarente の Archytas は領地と奴隷をもっていた。有名なピタゴラスの格言「友人どうしのあいだではすべてが共有である(1)」が意味しているのはただ、スパルタ人その他が相互に助け合うのと同じように、学派のメンバーは相互に助け合わなければならなかった、ということである。そしてこれはアリストテレスが、財の共有についてのプラトンの体系よりも「公共の習俗によって完成され良き法律によって支えられる現在の体系」を好むと言うことによって表明しているところの考え方である。「現在の体系は共有と排他的所有という二つの利点を結合していると私は言いたい」（*Polit.*, ■Ⅱ■, 2, 4）。そして彼アリストテレスはこの点について、まさに上記の古諺を引用している。

（1） ギリシア語三語。「この諺は古代著作家にしばしば登場し、そして異なる意味で現われる。Jamblique は（*De Pyth. vita*）、明らかに財の共有という意味を与えている。この点は Diog. Laert., によって引用されている Timée についても、Porph. Mal.; Gellius, ■Ⅰ■, 9 についても同様であり、ピタゴラスよりもずっと時期的に後の著作家たちもこの伝統に従っている。エウリピデスが（Euripide, *Orest.*, 735）この諺を引用しているのは全く別の意味においてであって、これは Pylade にあっては、幸福も不幸も友人には共有であることを表現するものとして使われている。

キケロが（*De offic.*, ■I■, 16; et *De legib.*, ■I■, 12. Martial, ■II■, 43: *Das nihil et dicis, Candide,* ギリシア語二語？）この諺を用いるのは道徳的意味においてでもある。

ピタゴラス学派の何人かは禁欲主義という点で今日のある種の「倫理学者」（éthiques）に似ていたように思われる。彼らはあらゆる種類の苦行を成就することを自らに課し、ギリシアの喜劇詩人の良識が明らかにした過度ということを避けることを知らなかった（1）。

（1）Diog. Laert., ■VIII■, 38 に引用されている Aristophon はピタゴラス学派について言う。「彼らは野菜を食べ、その液汁を飲む。しかし若い者たちはしらみ、ぼろ着、不潔に耐え得ない。」同じ著者はある人物に、「黄泉の国ではピタゴラス学派の人間だけが死者の神プリュトーンと夕食を共にしている。」と言わしめている。別の人物は次のように答える。「この神は、この垢にまみれた人間たちのあいだで喜びを感ずるならば、大変きさくな神である。」

要するに、ギリシアには社会主義の最初の二つの部類、すなわちすべての財産あるいは生産手段の所有だけが集団に帰属させられる部類は見られないということである。そこに見られるのは、現代の我々の社会におけると同じように、第三の部類、すなわち国家社会主義である。しかしギリシアにおいてとくに見られるのは、一方の市民による他方の市民からの直接的な収奪である。この点における中世の共和国との類似は驚くべきものである。現代ではこのような直接的収奪はほとんど完全に消滅した。しかし類似的現象はなおいくつかたしかに存在する。ナポリの *camorra*、シシリーのマフィア、銀行における政治屋の直接的暴利、ニューヨークにおける彼らの操作。いくつかの国では労働者はストライキに参加することを拒否する仲間を殴る権利をもっているように見える。またいくつかの国では彼らは、権利としてではないが少なくとも事実上、労働を売るために自由に同意された契約を気が向けば廃棄することができるのに対して、経営者はそれを厳密に守らなければならない。しかしこれらはすべて規模の点ではギリシアで起った全般的収奪の下位に位置する。今日では、社会階級間あるいは個人間の直接的奪取の代りに国家社会主義による措置をとるきわめて顕著な傾向が存在する。

ギリシアでは紀元前三世紀および二世紀ごろ、「全くおびただしい数の収奪が存在した」と M. P. Guiraud 氏は述べている。「多くの都市が Cinoetha d'Arcadie のように、殺人、略奪、強奪によって長期にわたって混乱させられていた（1）。」

（1）*La propr. fonc. en Grèce,* p.608. 同じ著者は *La main d'oeuvre indust. dans l'anc. Grèce,* p.212. で次のように書いている。「民主派のあいだでは、わずかな報酬を得るためにあまり骨を折ることは全く無益なことである。なぜなら革命のおかげで富あるいは生活のゆとりを一夜にして獲得できるのだから、と一人ならず判断していた。」これは多くの人々が今日でも考えていることである。「このような考えに取り付かれて、彼らは労働を、それから解放されたいと急ぐ、辛く嫌な労苦とみなし、たとえ必要上仕事に赴かねばならないとしても、心の底では遅かれ早かれそれから離れる希望をもち続けた。彼らの渇望の主要な対象は土地であった。そして彼らが最も一般的に共有したのも土地であった。しかし彼らは住居、奴隷、鋳造貨幣も軽視するどころではなかった。彼らには、

彼らが所有者としての身分を得さえすれば、すべてが手に入れるに値すると思われた。」多分彼らはこの時代から「連帯」あるいは何かそれに似たものを発明してさえいたであろう。

悪はもっと昔から存在した。Théognis de Mégare は事態を次のように描いている。「しかし、悪人が暴力的になるとき、彼らは民衆を頽廃させ、自分たちの財産と権力のために不当な判決を下す。このような都市がたとえ現在は平穏無事であっても、悪人が公共の不幸に由来する利益を享受しているときには、長い間平穏無事であることを望んではならない。」（四四 - 五〇頁）「暴力は―と彼は先の方で書いている（一一〇三頁）―Magnésie, Colophon et Smyrne を破滅させた。」人々は自分自身から自らの財を奪った。さらに Mégare では民主制と寡頭制とが、共に不正で暴力的であったが、交互に交替を続けていた(1)。アリストテレスは非常に頻繁な革命の原因の一つとして次のことを挙げている。すなわち、デマゴーグたちは「民衆の人気を獲得するために、不当な仕打ちをし、名士たちを憤激に駆り立て、財産が分有されること、あるいは彼らに富裕者の義務 *liturgies* を課すことを要求し、そして時には民衆のために巨大な財産を没収するために彼ら名士たちを誹謗中傷した」のである。（*Polit.*, ■V■, 5, 3）同じような渇望がまさに今日でもまだ存在している。あるものは全ての「ブルジョア」を裸にすることを要求し、ある者はユダヤ人だけを裸にしようとし、ある者は、プロテスタントだけを、あるいはカトリックだけを、あるいは特に宗教団体だけを裸にしようとする。一九〇一年には、フランスで大財産の見直し案が議会に提出された。

（1）Mégare の歴史については、Fr.Cauer, *Parteien und Politiker in Megara und Athen*, 1890 を参照。■改行■プルタルクは（*Quaest. Graec.*, 18）次のように述べている。「貧乏人たちは金持ちに対して暴力を振うに至った。彼らは力ずくで屋敷に押し入り、金持ちたちに対して自分たちを贅をこらして待遇することを強い、豪華な食事をふるまわせた。それを拒否すると彼らは暴力に訴え、その無礼傲慢を制しうる者は誰もいなかった。」

Polybe は（■VI■, 9, 4）それまで継起してきたさまざまの政体について語りつつ、次のように言う。「旧体制の権力と支配を経験した人間がいく人か残っていた限りにおいては、平等と自由の上位に来るものは何もなかった(1)。」これはまだ現代にも起きていることである。いくつかの古い政府が自由の名においてくつがえされ、改変せられ、変形された。そのときには自由こそが人の望むすべてであるように思われた。しかしやがて場面は変わり、いまや多くの人々が軽蔑と共に自由について語っている。彼らが自由を欲するのはただ他人の財についてのみである。Polybe は、彼の時代としては優れた観察者であることを示している。そして、歴史は繰返すことは決してないけれども、彼が次のように言うとき、多分いつの日にか、彼は少しく予言者であったと見られるであろう（*Ibidem*, 8）。「民衆が他人の財産で生活し、自らの頼みの綱を他人の財産のうちに見ることに慣れてしまうときには、貧乏の故に政治権力から排除されている一人の豪胆な指導者がいるならば、彼は民衆を暴力的に権力に対して立ち向かわせるであろう（*Ibidem*, 9）。その後に来るのは、殺人、国外追放、土地の分割、である。」

（1）ギリシア語一行。

アテネは部分的にこのような悪を免れた。そこでは私的収奪の代りに国家社会主義のはるかに秩序だった措置が取られていたからである。しかしこの国家社会主義もその果実を生み出した後、結局のところ都市の崩壊をもたらした。

マルクス主義が目指しているのは私的資本の集団的資本への転換のみであって、資本そのものは破壊されないであろう。しかし国家社会主義は、それが破壊する私的形態における資本を集団的形態において再構成することには関心をもたずに、ただ富を奪取することにのみ専念することによって、遅かれ早かれ必然的に国の疲弊に帰着しなければならない。実際次のことに留意する必要がある。すなわち、生産の技術的ならびに社会的状況を所与とすれば、資本のさまざまの種類、つまり不動産資本、動産資本、そして人的資本（ペルソネル）（1）は、何かどのような比率ででも結合できるといったものではなく、最大の効果をあげるためには、絶対的に固定されてはいないがかなり小さな範囲内でのみ変化しうるところの比率において結合しなければならない。このことから次のことが結果する。すなわち、均衡状態が存在するとして、これら三種の資本のうちの一つ、たとえば動産資本の量を乱暴に減らすならば、他の二種の資本はもはや同じように有効には使用されず、一般的生産力は減退し、結果として消費もまた減退し、貧困は増大する、ということである。このような結果は我々が明らかにした別の事実によっても確認することができる。我々は次のことを明らかにした。すなわち、収入の配分曲線は非常に顕著な安定性を示すこと、その曲線は、時と場所の状況が大いに変化してもほとんど変わらないことである。この命題は統計的に集められた事実に由来するものであるが、一見したところ人を驚かせる。この命題が人々の心理的特徴の分布のうちに、また資本の結合比率は任意ではありえないという事実のうちに起源を有するであろうことはかなり確実である。収入の配分曲線は所与として、一定以上の収入をもつ人間はすべて、財産を接収されると仮定しよう。収入の配分は長期にわたって変ってしまうにちがいないように見える。人々の肉体的精神的特徴の不等性がついには収入の不等性をつくり出すであろうということは認めることができるが、そのためには少なくとも何世代かが必要であろう。現実には、別の効果がはるかに早く生み出され、乱された均衡が回復される傾向がある。富裕な階級の収入は一部は動産資本を維持し増大させるのに役立つ。この点はマルクスが、資本家は蓄積の熱狂的な主体であり、とりわけ、思い切った投機に使われる場合には生産の新しい分野を開く動産資本の一部をなす、と述べる際に彼がよく見ていたところである。それゆえ収入が、集団的資本の収入によって埋め合わせられるよう措置されることなしに削られるならば、動産資本の総額は一定の減少を蒙むるであろう。それによって資本の比率は変化し、結果として生産は、動産資本の最も生産的な部分が削られれば削られるほど、減少するであろう。生産力の一般的減少は収入の一般的減少によって表現される。かくして、収入の高い部分が削られ、曲線の上の方の部分が切断され、意に反して収入のあまり高くない部分も同時に減額されてしまう。曲線の下の方の部分が全体としてさらに低くなり、結局のところ曲線自体は、すべての部分の収入が減少するということを除いて、以前の形とかなり類似した形を再びとることになる（2）。海塩の溶液が大きな立方体に結晶化するのを、たとえば揺り動かすことによって妨

げる場合には、それは小さな立方体に結晶化するであろうが、結晶の形は同じになるであろう。

（1）　我々はワルラス氏の分類を最良のものの一つとして採用する。人的資本とは人間たちのことであり、彼らの働き（*service*）は労働である。さらに、経済学理論の説明は資本概念から独立のものとすることが可能であり、経済的財の変形という、より一般的な概念にとどまることも可能である。しかし、資本という概念は大いに説明を単純化するのである。収入の再配分についてずっと先に触れられた問題は *Cours*, vol. ■Ⅱ■, ch. ■Ⅲ■で扱われている。これは、近いうちに出版される著作の主題となるであろう。

（2）　この説明は不完全である。しかしこの問題を数学を使わずに説明することはきわめて困難である。

資本の減少が単に相対的なものであるということはありうることである。発展している社会にあっては資本量は、一方では人口の増大についていくために、他方では技術的進歩―これは結果として動産資本のその他の資本に対する割合を絶えず増大させる―についていくために、増大する。もし資本量がこうした事情で必要とされる量よりも増加しないようになると、絶対的減少から生ずるのと類似した結果が生ずるであろうことは明らかである。

それゆえ、私的な形において破壊された資本がただちに集団的な形態のもとに再構成されないならば、あるいはこの新しい形態のもとでも資本の生産性が古い形態の場合よりもはるかに低いならば、人々が享受しうる財の総額は必然的に減少するであろう。従ってこの減少の原因を何か別の増大化原因が補うようにならない場合には人々の不幸が増大することになるであろう。歴史はこのような推論をいくつも立証している。

今日、国家社会主義が実現した、私的資本の破壊は現在までのところ、技術の進歩と経済組織の進歩による生産の増大によって埋め合わされている。国家社会主義はあたかも、強力で生命力のある生きものを蝕むことによって、一定期間はその犠牲者をあまり弱らせることもなく栄えることのできる寄生物のように成長してきた。工業および農業における生産力の増大は国家による生産物の破壊よりも早く進行した。そうして節約は国家によって根こそぎにされた資本を復原させ、さらにはそれを増大させさえすることができた。しかし、このような埋め合わせがいつまでも続き、また我々の社会が、かつてアテネやローマ帝国を襲ったような没落を完全に避けることができると証明するものは何もない。アテネやローマでは正にこの埋め合わせが続かなくなったのである。

アテネにおける税の累進性の問題が大いに論ぜられてきた。ベーク（Boekh）の理論―これによれば *eisphora* は明確に累進的であったが―は勇ましい反論者を見出した。我々の扱っている問題からすれば、このことにかかずらう必要はない。税が法律上はどのようであったにせよ、事実としては、税金によって財産に対してなされた先取りと、多少とも自由意志であった富裕者の奉仕義務とが、累進的であったことはたしかである。ところでこの全体的な先取りについてもっぱら考察しよう（1）。

（1）M. E. Cicotti は *La retrib. delle funzioni pubbliche nell'ant. Atene*,において次のように指摘しているが、我々はそれを正しいとは思う。すなわち、市民に対して国家から支払われる報酬は市民を何もせ

ずに遊ばせておくほど高くはなかった、というのである。我々の見解では、考えるべき事柄は主に、破壊された資本の総額である。

P・ギロー氏（P. Guiraud）は、*La prop. fonc.*, 五三一頁で次のように言う。「アテネの人々は、金持ちは厳格な義務として共同分担金以上に引き受けなければならないと確信していた。そして金持ちの方も、愛国心によってか、自己愛によってか、世間体によってか、あるいは野心によってか、ともかくあまり苦痛を感ぜずにそれを甘受していた。」このような富裕者の義務はもっぱら莫大な浪費に帰着した。それは、公共体育場制度、大燭台の設置、合唱隊、hestiasis といったものであった（訳注：ギリシアでは富裕な人々は義務として例えば合唱隊を自費で維持訓練しなければならなかった）。アリストテレスは天才的ひらめきによって、近代の経済科学が到達しなければならなかった結論を見抜いている。彼は言う。「民主政体においては金持ちたちに損害を与えないようにする必要がある。彼らの財産を分け捕りしてはならないのみならず、時に回りくどい手段を用いて行なわれているのであるが、彼らの収入も分け捕りしてはならない。」近代の民主政体においてはこのための手段は税金である。「彼らが、合唱隊や lampadarchie（1）、その他類似のもののような贅沢で無用の富裕者義務のためにその財産を湯水の如く使うのを妨げる必要さえある。」（*Polit.*, ■Ⅷ■, 7, 11）。Lysias（■ⅩⅠ■, 1, 2, 3）のある依頼人は富裕者義務として九年間に六三六〇〇ドラクマを出費した。アリストテレスよりも経済学者として劣る、近代の著作者たちはこれと似た場合について、悪は金持ちが原因であり善は民衆と都市が原因であると考える。彼らにはこのような資本の浪費が都市の破壊を招くにちがいないことを理解する能力がない。

（1）*lampadédromies* すなわちlampadarchiesの目的（オブジェ）は松明リレーであった。共同体育場長は各自これらの祭りの一つの費用をもたねばならなかった。

富裕な人々はまた税金—*proeisphora*—を前払いし、次いで税金の取り立てをする義務を負っていた。類似のシステムによる悪と浪費が最近の事例の中にもある。アンシャン・レジーム下のフランスでは、徴税官は税金を割り当てることも徴収することもしなければならなかった。「この仕事は—とテュルゴーは言う—絶望の原因となり、ほとんどつねにその担当者の破滅を引き起した。こうして一つの村の裕福な家族はすべて、相次いで食うや食わずの状態に追い込まれた。」数え切れないほどの悪習が生み出され、浪費を増加させるようになる。いく人かの抜け目のない手品師のような人間は *proeisphora* によって前払いした以上に徴税することによって金持ちになることができたが、大多数の徴税官は破産させられたであろう。なにしろ債務者は税金を支払わなかったのであるから。デモステネスのある徴税請負人は、自分には悪い債権ばかりが任せられると嘆いている（*in Polyclem*, 9）。デモステネスによるものとされている、Phénippe に対する反論は税金によって破産させられた一市民の存在を我々に提示している。

告発者たちは仕事を完了した。今日、反対者と闘うために司法権を使っている政治家たちはアテネのデマコーグの伝統を引き継いだにすぎない。クセノフォンは、静かに自分の

仕事に専念することを欲する人間にとっては、アテネでの生活は辛い、なぜなら彼のものを取り上げるために訴訟が起されるから、と Criton に言わしめている(1)。ソクラテスはクセノフォンに、犬が羊を守るようにクセノフォンを守る貧乏な男を見つけるように勧告している。Archédème とかいう男は報酬と引き換えにこの仕事を引き受け、告発者たちに勝利し撃退した。このことが完全に自然なこととして語られている。民衆裁判は都市の倉庫をいっぱいにするために罰金を宣告した。富は有罪の法的根拠の一つであった。Lysias は市民判事に対して次のように言う(2)。「諸君はしばしば、不当にも被告を見逃そうと欲している連中の言うことに耳を傾けてきたことを反省しなければならないし、もし諸君が被告を起訴しなければ、諸君の給料を支払うことができなくなるということを知っておいて頂かねばならない。」彼は別のところでは(3)、都市が金を必要としているときには被告の釈放を獲得することは困難である、と言う。近代の我々の民主政体におけると同様、金持ちの人間たちは掠取されないために、貧乏に見えるように努力した。イソクラテスは、アテネでは金持ちに見えることは公然と刑事犯罪を犯すことよりも不正になっていると述べている(4)。しかし、このような事態の故に民主政を非難するとすれば、それはまちがいを犯すことになるであろう。寡頭政がもっと誠実であったというわけではない。三十人僭主（訳注：前五世紀アテネの寡頭政治）はまず告発者を殺し、次に…自分たちが彼らを模倣した。Théramène が、彼らは人をその財産を没収するために不当に殺すと言って非難したのはこの点である(5)。自分たちの兵隊に給料を支払うために僭主はそれぞれ、メトイコス（市民権のない留外人）を捕まえてはその財産を奪った(6)。何人かのローマ皇帝、そしてまだ何世紀か前にすぎないヨーロッパの何人もの君主はこの道をたどることを嫌がらなかった。この道は今日ではさまざまの革命派を引きつけている。

（1）イソクラテス（Isocrate, *De permut.*, §160）が言うことのうちには、美文家の誇張にかくされてはいるが、真実の基礎が存在する。「財産を奪取された者の数は、犯罪によって罰せられた者の数よりも大きい。」

（2）*C. Epicratem*, §1.

（3）*De bonis Aristoph.*, §11.今日では、ある社会主義的雑誌は、それが推奨するいくつかの社会改革を数え上げたあとで次のようにつけ加えている。「これらすべてのためには、金が必要である。修道会が金をもっている。」それゆえ、修道会から金を取ることがいまやもっぱらの問題である。

（4）*De permut.* 似たような事実はいつの時代にも観察されうる。中世ではイタリアの共和国において、フランスでは恐怖政治の時代などにこのような事態が起きている。

（5）Xénoph., *Hist. graec.*, ■II■. 3, §22: ギリシア語二行。三頭政治執政官の Lépide, Antoine et Octave は同じことをやった。法王アレクサンドル・ボルジア（Alexandre Borgia）は枢機卿たちをかれらの金を奪うために毒殺した。恐怖政治時代のフランスでは金持ちであることはしばしば死刑に値した。今日では人々は目下ことばに気を取られている。反ユダヤ主義者は公共の利益のために収奪されなければならないとされる人々を名指しで挙げている。マルセーユのストライキ参加者は同じく、彼らが取りつぶしたいと思う海運業者を指名している。

（6）Xénoph., *Hist. graec.*, ■II■, 3, §21. ■Lysiae■, *orat. c. Erathosth.*, §6.

こうした事実はすべてよく知られていることである。論者たちはそれぞれの気質に従っ

て、ある者はもっぱら民主政体を手厳しく非難し、またある者は「専制君主」を非難した。真実のところは、あらゆる体制のもとにこうした事実は見出されるということである。いかなる体制も国庫金を横領浪費する特権をもってはいない。今日では私有財産からますます多くを吸収するのは民主主義国家と共和国家の予算だけであろうか、それは君主国家の予算についても専制国家の予算についても同じことではないか。司法権の濫用はアメリカ合衆国でもロシアでもほとんど変るところはない。イタリア君主制の司法官は選挙で政府を助けるマフィアの犯罪には一貫して目をつむるのであるが、彼らは「ブルジョア」を一貫して糾弾する人民派司法官とそれほどに違った振舞いをしているわけではない。政治的体制というものはこうした現象に対してただ形式を付与するだけであり、その内容は、さらに深いところに位置する原因、人間の自然と社会組織のうちに探られねばならない原因、に依存している。

アテネで行なわれた富の破壊は、国が動産資本を必要としていただけに一層有害であった。金利の高さは、動産資本の現存量と生産が必要としていた量とのあいだの不均衡が相当のものであったことを示している。いくつかの個別的事実もこのことを示している。クセノフォンの『歳入』(*Revenus*) という小さな論文では、国家が生産を増大させるためにまかなわねばならない財源が問題にされている。鉱山を開発するための資本も欠乏していた。何故に昔のように、新しい鉱山がいまは開かれないのか、とクセノフォンは問う。「その理由は—と彼は言う—鉱山の経営者が余りに貧乏だからである(1)。」事実の観察に導かれてクセノフォンは、顕著な危険をはらんでいる生産は金持ちによってしかほとんど不可能であることをよく見ていた。彼は、経営者が貧乏な場合、彼らが新しい仕事の危険に身をさらすことがいかに不可能であるかを説明している。「良好な鉱山を見つけた者は金持ちになるが、悪いのに当った者は全てを失なう。」もし金持ちが税金と富裕者義務とによって破滅させられなかったならば、もし節約して金をためることが許されていたならば、運が悪かったときの結果を、完全に破滅させられることなく耐えることができるに十分な、そしてうまくいったときの成果によって埋め合わせることができるような財産が存在したであろう。クセノフォンはいくつかの点で鉱山資本を集合化することになったであろう一つの計画を開陳している。さらにこの論文には、生産上必要ではあるが個別では提供できない資本を構成する義務を国家に課する意図が見えている。この意図が実現されていてもなおそれは最小の悪であった。しかしアテネ民主政はますます国家社会主義にのめり込み、私的形態における富を、集合的形態において再構成することなく破壊した。かくして凋落は速やかであり、手の施しようもなかった。たしかに戦争による被害はアテネの場合大きな部分を占めていたのであるが、カルタゴに完全に破壊された後繁栄する都市を再建したパックス・ロマーナのもとでさえアテネは経済的に再興することはなかった。栄光に満ちた過去から残ったのは寄生の習慣だけであった(2)。

(1) *De vegt.*, ■Ⅳ■, 28: ギリシヤ語一行

(2) Anthologie (■ＸＩ■, 319) のある短詩は、アテネにおける市民権の購入、アリストファネスやデモステネスの時代からすでに行なわれていた市民権の購入のことを嘲笑している。「一〇ボタソーの石炭を持って来い、君は市民だ。それに一匹の豚をつけ加えるなら君は Triptolème だ。その他に、デマゴーグ Héraclide にそらまめとキャベツあるいは貝殻型容器を与える必要がある。…」

デマゴーグは今日ではもっと要求が多い。

ローマ帝国の没落は動産資本の破壊から結果する被害について別の例を提供するであろう。まず社会主義あるいは共産主義とは関係のない一事実を除外しよう。昔は人々はローマ帝国の没落を土地法に関連づけようとした。しかし今日ではその誤謬から脱している。G. Humbert 氏は次のように非常に適切に述べている。「この法律がローマで私有財産（*ager privatus*、私有地）に打撃を与えることを目的としたことは一度もなかった。本来の所有者からの強奪を許可した執政官証書のおかげで、イタリアのいくつかの州で軍事植民地が樹立されたのは、スッラおよび三頭執政官による粛清の時代だけである。しかしこのような力の濫用は本来の *leges agrariae* 農地法には縁のないものである[1]。」*agrariae leges* のなかに共産主義的措置を見ようとする人々の誤謬は、すでに指摘した誤謬、社会主義的措置と、単に私有財産を一方から他方へと移行させることを目的とする措置とを混同する誤謬に類するものである。土地法は別のところで（*Cours*, ■I■, §450）既に指摘したように結局は、戦争産業を営んでいた仲間のあいだでの清算を行なうことを目的としたものであった。形式について言えば、土地法は社会主義的法律とはまさに正反対のものであった。なぜならそれは私有財産を制限するのではなくそれを拡大したからである。

（1）Dict. Daremb. Saglio, s. v. *Agrariae leges.*

ローマ帝国の没落はかなり早い時期にさか上る。G. Boissier 氏は、没落はアウグストゥスのもとに帝国が樹立するやすぐに始まったと見る[1]。「帝国樹立の日以降—と彼は言う—四世紀の間、人々は絶えず下降線をたどった。下降は多少速かったり遅かったりしたが、下降そのものが止まることはなかった。」このように複雑な一現象に対して単一の原因を指定しようとするならば人はつねに誤つであろう。いくつかの道徳的、宗教的理由が指摘された。キリスト教が何人もの論者によって帝国没落について責任ありとされた。G. Boissier 氏はこのような偏った見解がまちがいであることを証明するのに苦労はしなかったのであるが、この没落を促進するうえでのキリスト教の影響をすべて否定することによって今度は彼自身が誇張に陥った。キリスト教の発展は、部分的には、当時の人々の禁欲主義的傾向、ストア学派やその他多くのセクトにもあらわれていた傾向、そしていくつかの点で今日「連帯」についての美文を刺激するような傾向に似たものの結果であった。しかし結果であったものが今度は原因となることは可能であり、この禁欲主義的な傾向の増大を促進させることもありうる。ところで、一国を経済的、政治的および軍事的に繁栄させたのが諦観忍従の禁欲家であったことはほとんど一度もない。

（1）*La fin du pagan*, ■II■, p.443.

同様に、自由の喪失、特にディオクレティアヌス（Dioclétien）の時代からますます東洋的専制主義の形態をとるようになった絶対的支配の確立は人々の性格の柔弱化の原因であり、同時に結果でもあった。古代ローマの貴族制の力と偉大さをつくり出した男性的で激しく精力的な資質が完全に失われるのが見られた。

我々はここで帝国没落のすべての原因を検討する必要はない。我々が注意しなければならないことはただ、エリートが消費され尽し、消滅したにもかかわらず同じような長所をもつ別の人間たちによって交代されていなかったという事実、これと並行して、最高の重要性を有する一事実、すなわち動産資本の大規模な破壊も同じく見られたことである。これら二つの事実はしかし相互に依存していた。もし国家社会主義が生れたばかりのエリートをつぶさなかったならば、このエリートは彼らに対立して設けられる柵を結局は除去しうるに十分なほどに強力になっていたであろう。もしこの防柵が存在していなかったならば、この生れたばかりのエリートは結局は富の浪費を防止したことであろう。

パックス・ロマーナは富の生産を増大させ、貯蓄の形成と維持を助けた。ここから帝国初期の繁栄が生じたのである。これは現在、生産の技術的経済的進歩が我々の社会に同じ結果をもたらし、繁栄をもたらしているのと同じことである。しかしローマ帝国において富が増大すると同時に人々はその破壊に着手した。これは現在さらに拡大された規模で起きていることである。貯蓄の浪費が貯蓄の生産を上回る日がローマに来た。我々の社会にも類似の現象が出来する可能性はある。当時帝国にとっては浪費が没落の最大の作用因であった。

民衆の安楽あるいは民衆を楽しませることを目的とした、多少とも随意的な支出が、アテネにおける富裕者義務がその収入を消尽したのと同じように、ローマ帝国の富裕階級の収入を使い果した。当時の歴史を研究して驚かされることは、貯蓄が経済的富の生産に使われるのではなく、それが流通して浪費される何千もの経路を見るときである。無分別な出費が公共建造物や遊びのためになされたのは単にローマにおいてだけではなかった。諸州においても至る所で類似の出費が貯蓄の形成を阻んでいた。それは富の破壊の正真正銘の大饗宴であった。誰もがそれに参加することを欲していた。Martial は剣士の闘技を提供したある靴直し職人のことを嘲笑している(1)。帝国没落の前夜、Symmaque は自分の息子が地方総督の地位に就いたことを祝うためにおよそ二〇〇万フランを出費している。G・ボアシエ（G. Boissier）氏は公共建造物について論じつつ次のように言う(2)。「我々を驚かせるこのような華麗さの秘密は、まさにすべての人がそれに寄付したことである。」そして彼はそこにこそ禍いがあったことを疑わない。

（1）　■Ⅲ■, 16:

Das gladiatores, sutorum regule, cerdo,
Quodque tibi tribuit subula, sica rapit.

（2）*L'opp. sous les Césars*, p.48.

財産の破壊はクリアへの新規加入をますます困難にした。彼らの上には余りに大きな出費が降りかかったのである。害悪は古い昔からのものであった。小プリニウスは意に反して十人隊の隊長にならされた人々について語っている(*Epist.*, ■X■, 114)。—*qui inviti fiunt decuriones.*—国の窮乏化が進むにつれてこの害悪もまた増大した。*loco supplicii* が *curiales* であることはついには非難されるようになった。彼らはあらゆる所から逃げ、無人の場所に避難しさえした。

さらにもっと悪いことがあった。土地所有者たちは、国家社会主義の出費及び皇帝の浪

費をまかなうために必要であった、ますます増大する税金に押しつぶされて、自分たちの土地を捨て耕作することをやめてしまったのである(1)。現在の国家主義も、累進課税その他類似の方法によって資本家を滅ぼそうと試みることによって、また、ストライキ及び無数の強圧的措置—これらは商工業の自由を制限しその負担を増大させる—によって企業家を消滅させようと試みることによって、我々の社会を同じような状況に向って歩ませている。

(1) 帝国の中で最高度に肥沃でまだ蛮族の侵入をこうむったことのない国の一つにおいても耕作が放棄された莫大な面積が存在した。*Cod. Theod.*, ■XI■, 28, 2: *Quingenta viginti octo milia quadraginta duo iugera, quae Campania provincia iuxta inspectorum relationem, et veterum monumenta chartarum in desertis et squalidis locis habere dignoscitur, iisdem provincialibus concessimus, et chartas superfluae descriptionis cremari censemus.* この法制度は紀元三九五年からである。Cod. Just., ■XI■, 58; Eumen., *Paneg. Const. Caes.*; Zozim., ■II■, 38; Amm. Marc. ■XIX■, 11, は公共的運輸のための莫大な負担について語っている。これは多くの屋敷を空家にするものであった。*quae clausere domos innumeras.* Salv., *De gub. dei*, ■V■, 8, 9.

皇帝たちは荒廃農地 *deserti agri* が国家に提供した悪に大いに専念した。唯一の実効性ある治療法は、農業の負担を軽減し(1)、国家社会主義によって完成された動産資本の破壊を少し抑制することであった。この道に向かうことを欲しもせず、またそうする能力もなく、彼らは完全に無益な措置に訴えた。このことは措置の数そのものによって証明される。

(1) 時折税の延滞金が免除された。これは多分支払わせる望みがなくなった時であろう。*Cod. Theod.*, ■XI■, 28.

一方で、農業に人手を供給することが試みられた。これから、緊縛小作人制を強化し人間を土地に縛り付ける措置が出てくるのである。またこれから蛮族捕虜を土地所有者に配分するという措置も出てくるのである。他方では、捨てられた土地のための新しい地主も探された。Pertinax は一〇年間の免税という条件で、最初の占有者に捨てられた土地を耕作することを許した(1)。Valentinien と Valens の法律はいくつかの免除特権のもとに占有された荒廃農地について述べている(2)。しかし土地のこのような随意的占有は税務当局にとって—これが何よりも問題だったのであるが—、税金を払えそうな誰かを見つければ事足りるといったことからは程遠いものであった。地主になれ！と強制することも考えつかれた(3)。我々の社会主義者もこれと似ていて、ストライキの場合の強制的調停という手段によって、企業家に対して壊滅的な条件で事業を続けることを強制しようとする。捨てられた土地の税金は何とかして回収されねばならなかった。Aurélien はクリア会にかれらの都市の領域内にある無主地の責任をとるようにと命じた。Constantin は、もしクリア会が支払い能力がない場合には、捨てられた土地にかかる税金を支払わなければならなくなるのは地主全体となろう、とつけ加えている(4)。

(1) Hérodien, ■II■.

（2）*Cod. Just.*, ■XI■, 58, 3: *Quicumque deserta praedia meruerint sub certa immunitate...*（année 364）, *Ibidem*, 8. この法律は誰であれある個人に対して、彼の近くに存在しその地主から捨てられようとしている土地を、耕作することを認めるものである。但し地主が二年以内にその土地を請求した場合には、その土地に費やされた出費を弁償することと引換えに、その土地は返還されなければならない。

（3）不毛な土地と肥沃な土地を結びつけることを義務づけられていた。このやり方は adjectio（ギリシヤ1語）と呼ばれていた。

（4）*Cod. Just.*, ■XI■, 58, 1.

以上のような措置は、治療しようとしていた悪をはびこらせるのに役立っただけであることは明らかである。ある地主たちは重税を課せられて土地を捨てていた。別の地主たちはまだ抵抗し難局を切り抜けようと試みていた。彼らが耐えていた税金を軽減することによって彼らを助けるのではなく、捨てられた土地の税金を彼らに降りかからせることによって、さらに税を重くした。結果として土地の新たな放棄が引き起された。

これらはまさにかなり全般的な現象の個別的事例にすぎない。ある種の措置が不都合を生ぜしめるとき、人は元に戻るのではなくその措置をさらに強化する。これが不都合を増大させ、同じ措置をさらに強化することを余儀なくさせられる。これが際限なく続けられる。アルコール中毒者も同様であって、彼は酒を飲まない状態に戻るのではなく、アルコールの量をますます増加させることによって、自らがつくり出した悪を忘れようとする。

関税保護は国の生産を衰弱させる。人は保護を増大させることによってこの事態に治療を施しているような気になるが、得るものは、治療しようとしている悪を重くすることだけにすぎない[1]。ある一つの社会階級、たとえばそれは富裕階級のこともあれば労働者その他の階級のこともあるであろうが、それに課せられる税が過度なものであると仮定しよう。問題を明確にするために、一〇〇人の人間から一〇万フランを、各人が平均一〇〇〇フラン支払う形で引き出すことが必要であるとしよう。この税の重さに耐えることが出来ずに当該の階級の一定数は破産し、移住し、要するに姿を消し、結局その階級の数は八〇人になるであろう。ところでこの階級から一〇万フランを引き出そうという意思は依然として続くので、各人は平均一二五〇フランを支払わなければならないであろう。これは一人当たり平均一〇〇〇フランの場合よりも一層耐えがたいであろう。それゆえこれはこの階級の新たな減少を引き起こし、さらに新たな税負担を結果するであろう。そしてこのような連鎖が続く。

（1）フランスでは小麦の関税保護は最終的に小麦の「過剰生産」に、そしてワインのそれはワインの売れ行き不振に帰着した。それにもかかわらず他の国々では保護主義者たちは依然として、小麦とワインの売れ行き不振に対する救済策として同じような措置を要求している。■改行■ロシアでは産業保護が非常に強度の財政危機を結果し、非常に多数の革命の暖炉をつくり出した。このような保護主義的措置を定めた政府当局者の意図のうちにはこれらいずれもありえなかった。

我々は多くの国々で繰り返されてきた現象を記述したところである。この現象は累進課

税が行なわれる場合に古代アテネ、ローマ帝国、フィレンツェ共和国に起きたことであり、今日では民衆階級が政治権力を掌握してそれを富裕階級から財を奪取するために用いているところで新たに見られるものである。しかしこれは、逆に富裕階級が貧乏人のものを奪う国々において見られることとあまり異なるものではない。

動産資本はローマ帝国において不足していたものであった。そしてこれが農業、商業、工業の発展と進歩にとって主要な障害をなしていた。E. Ciccotti 氏(1)は、ローマ帝国における農業は、機械の使用を除外して考えても近代農業が同量の生産物を獲るために用いる労働者の数の四倍から五倍を使っていたらしいと考える論者たちを思い起こしている（一七一頁）。このように最大生産量を変えるものは動産資本の不足である。もっと先の三〇五頁では、「流動資本の不足は生産を、奴隷経済よりもさらに後退した経済形態、すなわち農奴制の方向に押しやった」と記しているが、これは正しい指摘である。

（1）*Il tramonto della schiavitu.*

財産の集中がこれまで大いに論じられてきた。そしてラティフンディウム（*latifundia*）の存在がそれを証明すると信ぜられてきた。これら二つは同義ではない。大地主は、彼らが所有していた土地の大きさに比例した収入を得ることからは程遠かった(1)。ラティフンディウムの世紀の前半においてローマのこのような大地主たちは非常に広大な土地資産の持主であったが、数十万フランでもどうしたら手に入れることができるか、当惑したことであろう。ラティフンディウムはきわめて不十分にしか耕作されず、収穫は僅かであった。Symmaque は、農地が収穫をもたらすのではなく出費が多いこと、金持ちだった者が貧乏になったことを嘆いている。G. Salvioli 教授は、次のように指摘する。「fundi latissime continuati は蓄積を保証するよりもむしろ虚栄心を満足させるものであった。元老院議員および騎兵隊員にとって富の源泉は依然としてもっぱら属州の略奪、投機、高利貸行為であった(2)。」同じ著者はまた、小土地所有がラティンフンディウムと並んで存続していたこと、大地主たちは税金によって破滅させられていたこと、小地主たちはどうにかほそぼそと続き、難局をより上手に切り抜けたことを明らかにしている。

（1）Plin., *Epist.*, ■Ⅱ■, 4:「私は収入は、土地というものの性質によって、不確かというよりも、どんなにかささやかであることか。」

（2）*Sulla distribuzione della proprietà fondiaria*, p.30.

動産資本の少なさによってPline が次のように言うところが説明される(1)。「全く信じられないと思われかねない古代人の一格言を口にしたら私は多分、軽率無根拠ということで非難されるであろう。それは、非常に申し分なく耕作することほど損なことはない、というのである。最下層に生まれ、軍事的才能によって執政官にまで登り、さらに古風な節約家であったL. Tarius Rufus は Picentin で土地を購入し、それを利益を求めずに耕作するために随分と出費したのであるが、その辛苦のほどは、彼の相続者が約一億セステルシウス（二一〇〇万フラン）の遺産を拒否するほどであった。」もし動産資本が非常に潤沢であったならば、別の何人かがこのような経験を繰り返し、最後には成功したことであろう。

少なくとも十八世紀イギリスにおいては事態はそのように推移した。「全ての大貴族―Th・ロジャースは言う―あるいはすべての側近貴族は…自らの農地を監督し、実験的栽培を行なった。…この趣味が国民全体をとらえた。…新しい耕作の試みが結局のところしばしば破滅に帰着することがあったのは言うまでもない。これは今日と同じように当時も、余りに小さな資本で余りに広大な面積を耕そうとする悪癖によるものであった(3)。」このような問題について非常に有能な我々の著者は四二〇頁で次のように言明する。「よく耕作された土地の穀物及び家畜についての生産力は十二世紀に比較して四倍になっていた。」「連帯的生活」の名において、あるいは何か別の空想の名において―この点は余り重要ではないのだが―、もし動産資本が破壊されていたならば、また「倫理的」原則の名において、あるいは何か別の原則の名において―この点はさらに一層どうでもよいのであるが―、遺産が没収されていたならば、こうした成果は生み出されなかったことであろう。そしてイギリスは大変な苦労をしてやっと僅かな人口を養いつづけていたことであろう。

（1） *Nat. Hist.*, ■XVⅢ■, 7, 4, trad. Littré.

（2） *Trav. et salaires en Angl.*, p.413 et 414.

（3） Columelle, ■Ⅰ■, 3 はこのような過ちに陥らないように強く忠告している。*Laudato ingentia rura, exiguum colito.* 社会の諸悪はすべての土地が占有されていることに由来すると想像している人々には申し訳ないが、土地に不足しているのは大抵の場合動産資本である。第十章を参照。

ローマ帝国の末期には動産資本の不足は極端になっていた。皇帝の無気力は属州の最後の資源によって蛮族との平和を購った。すべてが崩壊し、経済的破滅は政治的軍事的破滅を準備するであろう。以上が最も壮大な国家社会主義の試みの結果であった。

第四章　現実的システム（続）

集団的耕作—家族集団—家族は擬制的親族関係によって拡大する—かくして家族は擬集性を喪失する—家族財産は個人財産の方向に進化する—土地の集団的耕作を人為的に拡大するための試み—ニュージーランドの村民共同社会（Village settlements）—ジャワ—中国—古代ペルー—そこでは、強固に構成されたヒエラルヒーと同時に社会主義体系が存在していた—パラグアイにおけるジェスイット派のreducciones—個にとっての効用と種にとっての効用—後見—ペルシアにおける社会主義—暗殺者—フス派キリスト教徒—ボヘミアにおける暴動—農民戦争—再洗礼派—マンステールにおける共産主義—ナポリ王国における共産主義的反乱—イギリスにおけるチャーチスト運動

土地の耕作は過去においてはしばしば同一家族の構成員による集団的作業であったし、現在でも部分的にはそうである。家族的紐帯は明らかに社会的紐帯の起源の一つであった。これは同じく群をなして生きている動物の中にも見られることである。ギリシアおよびローマの都市は起源においてはいくつかの家族の連合であったと思われる。とは言え、家族的紐帯はやがて擬制的なものとなった。すなわち部外者が自然的家族に所属するものと見なされるようになったのである。我々はここに、すでに指摘した習慣的やり方を再び見出す。それは非論理的な行為に対してアポステリオリに論理的な理論を付与することである。これは三段論法の結果としてあるのではなく、人は非常にしばしば新しい事実を考慮に入れなければならないようになるという必然性に支配されてのことである。その際もし彼らが、一般に昔の人々の場合にそうであったように、彼らの制度を維持することを好むならば、彼らはその行動のアポステリオリな正当化を、彼らの制度の正式の修正のうちにではなく、新しい事実を古い枠組の中に入れることを可能にするようなこじつけの擬制的な調整のうちに求めるであろう。かくして法律家たちは擬制をつくり出すに至ったのである。少なくとも起源においては彼らの行動を決定したのはこのような擬制ではない。彼らの行動は実際的必要によって強いられたのである。その次に擬制がその行動を正当化するために使われたのである。エーリンク（Jhering）がきわめて正当に指摘したように、「法的手続きの厳密な形式と同様に、うわべだけの法行為と擬制ももっぱらローマ法に固有のものではない。文明のある局面では人は至るところでそうしたものに遭遇する。イギリス法の歴史はまさにそれを証明している。この局面が過ぎるとすぐに両方とも少しずつぼやけて行き最後には消滅する。」しかし、たとえそれらが法の少なくとも大部分において消滅するとしても、それらは政治の中に、そして社会組織の規則の中に存続する。エーリンクによって観察された局面は、人々が事実としては新しい制度を認めているのではあるが、それを論証によって過去に結びつけることを欲する局面である。今日では最も文明化された諸国民のあいだでは、人々はそれを未来における理想的制度と結びつけようと欲する。彼らは単に、その物神を過去の中に探すかわりに未来に置くだけのことである。

家族は奉公人を加えることによってごく自然に拡大した。彼らはある意味で家族の下級構成員にほかならなかった。このカテゴリーに入るのは自由な奉公人ではなく、奴隷あるいは僕（しもべ）であった。彼らはより安定した形で家族集団に結びつけられていたからである。Gortyneの法は、ある個人が権利所有者を残さずに死んだ場合には、家族の敷地に住んでい

る僕が相続すると規定している。アテネでは宗教儀式がある意味で奴隷を家族に加え入れた。

家族は拡大しつづけるなかで、親族の擬制的紐帯によって結びついた他人の加入を認めた。しかしこのやり方は、結びつきを拡大することによって、それ自体で結びつきの解体を準備する。今日でもまだ東ヨーロッパのキリスト教徒スラブ族のあいだでは、共同体は単独の個人の養子縁組や家族全体の迎え入れによって増大している。インドでは家族共同体あるいは村落共同体は、スラブ族の共同体と同じく、解体の傾向にあるとは言え、非常に広く存在している。カルカッタでは奴隷を含む三百人から四百人の人間の集合体が見られる。「しかしこのような拡大は—とサムナー・メイン（Sumner Maine）は言う—いろいろな変化を伴わざるを得なかった。農地は完全に共同で耕作される代りに、村のいくつかの家族のあいだで分割された。地所は一方から他方へとつぎつぎに移行し、あるいは個人財産として家族に帰属させられたりし、ただ売却の場合にのみ村人の集団的拒否権の規制下に置かれた。同業者としての紐帯も同じくあらゆる種類の擬制のおかげで次第に弱まり、また余りに多く部外者の血を迎え入れたので共通の祖先の記憶はあいまいになるか、あるいは完全に消滅した（1）。」かくしてこれらの共産主義的小社会は大抵の場合、家族的所有の進化の一局面にすぎず、個人的所有への進化のさなかにあるのである。

（1）*Etudes sur l'anc. droit et la cout. primit.*, trad. franç., p.351.

農業は最も容易に集団的形態で作業することのできる生産の領域の一つである。集団的形態の大きな障害は、実は主導性の欠如とルーティンにある。ところでこれらの欠陥は農業の場合には、少なくともいくつかの場合ほとんど害にならない。何世紀ものあいだ土地の耕作は同じやり方のままである。地中海の沿岸ではいまでもオリーブはローマ時代と同じように栽培されている。しかし現在農業は科学的方法の応用によって工業に接近しつつあることも付言しておく必要がある。これは昔は見られなかったことである。それゆえ昔は土地の耕作は、家族的に、あるいは全く集団的な形態においてさえ、重大な支障なしに行なわれえたのである。このような組織はいくつもの国々で部分的に生きのびており、現在でも見ることができる。

しかしながら、集団的農業移民という形で人為的にこのような組織を拡大する試みは最終的に失敗に帰した。大いに人々の心をそそった考え方はつぎのようなものである。すなわち、町には仕事のない労働者がいる。耕作されていない土地がある。これらの労働者になぜこのような土地を与えないのか、ということである。これと同じような考え方は、あらゆる社会的悲惨はすべての土地が独占されており、自由な土地がもはや存在しないことに由来するという理論の始まりとなった。この考え方は重大な誤謬の上に立っている（1）。一．農業という仕事は、部屋の中で農業をやるような人間が想像するほど習得の容易なものではない。町の労働者は一般に土地を耕作する能力はない。彼らはこの骨の折れる労働にたちまちうんざりし、ろくなことは何もできない。畑を捨てて町に駆けつけるのは野良仕事をする労働者である。二．生産するためには土地と労働者だけでは足りない。動産資本も必要であり、しかも農業が進歩すればするほど必要となる。貧困を避けるためには自由な土地だけでは不十分である。土地を耕作するために自由に使える動産資本がさらに必

要であり、特に、この動産資本を託された人物たちがそれを浪費しないことが必要である。例外的な危機の場合を除いて、仕事のない労働者というものは一般に仕事に対して余りやる気のない、どうやらあまり先を見ない人々である。これらはまさに、野良仕事における彼らの失敗を決定的にするところの特徴である。彼らはほとんど働かず、彼らに託された動産資本を浪費し、破壊する。

（1）第一三章を参照。

この結論は非常に多数の事実によって確認されている。最も顕著な事実の一つを今日、ニュージーランドに見ることができる。一八九三年の法律によってそこに、*village settlements* の名のもとに農業共同体が設けられた。この共同体は、政府が一人当たり六四ヘクタールの面積の土地の貸与と五〇リーブル・スターリング、すなわち約一二五〇フランの融資をすることが可能になる、少なくとも二〇人の人間を擁していなければならない。協会はこの額を返還しないわけにはいかない。協会は、協会によって選ばれ、協会を管理するための非常に広い権限を授けられた、少なくとも三人の被委任者からなる委員会によって指導されている。「彼らは労働の継続時間を決めることによって、村民の仕事を指揮し監督する—と村民が仕事をしているところを見た Pierre Leroy-Beaulieu 氏は書いている[1]—。委員会は彼らに対して、何であれ協会の利益にとって有害と判断する作業に従事することを禁止することができる。食料庫と倉庫を管理する。食料庫の中の食料と交換するクーポン券の形で村民及びその家族に対して行なわれる割当て分を決定する。公衆衛生、秩序の維持と規律のために夜通しの見張りをする。二五〇フランまでの罰金を課すことができる。ある村民の労働時間を増やすことができる。あるいは彼の受け取る割当てを減らすことができる。…」

（1）*Les nouvelles sociétés anglo-saxonnes*, p.161.

このような社会主義的経験の結果は嘆かわしいものであった。「ある共同体では土地を開墾した後になって、人々はそこに何を植えるべきかについて合意することができなかった。その土地は休耕状態で放置されている。大量の異なる種類の栽培が同時に試みられた。大部分はうまく行かなかった。村の状況はいずれにせよ悲惨である。…」（*loc. Cit.*, 一六三頁）。人々はわずかしか働かない。「八時間労働ではなく七時間半労働であり、これが、夏も冬も同じように、気象条件に厳しく依存する作業（これが農業である！）に適用されるのである」（一六四頁）。その結果、すべての共同体が借金をかかえている。「国家から前貸しされる、構成員当たり一二五〇フランという最大限は優に超過している。村は一つとして新たな前貸しを要求せず、法律によって予定された期日に返済を開始することは不可能な状態にあると言明している。三〇の共同体のうち最も多く借金を背負っているものは、一人当たり一二八リーブル・スターリング（三二〇〇フラン）に達している。要求されている前貸しの追加は村民当たり一二五〇フランから二五〇〇フランである。それがないと我々は仕事を放棄せざるを得ないであろうと（国会の調査の）証人は言う」（一六三頁）。それゆえ、自由な土地だけでは人々が難局を切り抜けることができるためには全く十分で

はないと思われる。さらに、資本が必要であり、…、働く欲望が必要である。ニュージーランドの経験が物惜しみせずに行なわれ、それ自身に委ねられたと仮定しよう。一定期間の後には金持ちと貧乏人、財を蓄積する目先の利いた活動的な人間と目先の利かない怠惰な人間とが出て来るであろう。後者の人間は前者の人間に雇われることに利益を見出すようになるであろう。尤も、後日になって彼らを羨み、政治的措置によって彼らのものを掠奪することはありうるのであるが。

とは言えこうしたことは既に萌芽としては存在していることである。平等がこれらの共同体において支配しているなどとはとても言えない。むしろ人の上に立っているのはしばしば最も称賛に値しない人々である。「ホルダーでは調査委員会は朝の六時に到着したのであるが、畑には牛の青草を刈っている一人の婦人以外には誰もいない。『男たちが何もしていないときに女が一人外で働くのはよいことと思うかね』とある人が協会の会長に尋ねた。—『ああ、彼女はたしか健康のために外にいるのですよ』と彼は皮肉に答えた」（一六四頁）。「ある村民が襲われ脚を折られたので、被委任者たちはその襲撃者の追放を決定したが、全体集会はそれを可決することを拒否した。この村では多くの人間が他のいろいろの暴力事件の当事者だったのである。いずれにせよ至るところで暴力事件があり、そして至るところで正義もまた片寄っている」（一六五頁）。これは、あらゆる暴力と犯罪は「ブルジョア」社会の欠陥のある組織に責任があると主張する社会主義者たちが我々に約束するものでは到底ない。

村民のなかで少しく良識を有する者は彼らに対してなされた約束がいかにまことしやかないかがわしいものであるかを理解した。「あなたはここに着いたとき共産主義者でしたか、とピアプの村の一住民にある人が尋ねた。—私は人民のための土地（*the land for the people*）の熱心な支持者でした。私は、我々は兄弟姉妹のようになるだろうと信じていました。—それはうまくいきましたか。—いいえ、私はそれがうまく行くはずがないことを体験しました。—今も人民のための土地を信じていますか。—いいえ、私が信ずるのは、自分のための土地です。そしてその証人は土地を個々人の持ち分の形で分配することを要求している」（一六六頁）。人の良いニュージーランドの社会主義者たちは、寄生者は支えをとられたら生存できないということを忘れていた。国家社会主義は略奪すべき金持ちが存在する限りは素晴らしいものである。しかし、搾取者を孤立した共同体の内部に閉じこめることは彼らに餓死を宣告するに等しい。

何人もの論者たちがかつては所有が集団的であったということを証明することに非常に大きな重要性を付与している。彼らが証明したいのは「人民」は所有権を奪われていて、補償される権利をもっているということであり、加えて、過去に存在したからには集団的生産は可能であるという点だからである。

この推論にはいくつもの詭弁がある。一．たとえさしあたりかつての「人民」が集団的所有権を奪われたのだと認めるとしても、近代の金持ちが近代の「人民」に対して補償の義務を負うという結論は全く出て来ない。なぜなら近代の持てる階級が昔の持てる階級から直接に由来すると証明できるものは何もないし、逆にこれほどありそうにもないことは考えにくいからである。非常に限られた数の英国家族のみが自らの貴族身分をウィリアム征服王の時代まで遡らせることができること、フランス貴族の中で非常に少数の個人のみが十字軍の時代の先祖をまともなやり方で確認できるだけだということを考えるとき、有

史以前にローマ及び地中海沿岸地方に個人所有を導入するという罪を犯した階級の子孫が現在の持てる階級の中に存在するとは全く、あるいはほとんど考えられないことが分るであろう。二．さらに、個人的所有体制におけるよりも集団的所有体制のもとでの方が人々が幸福であったということを証明しなければならない。これに対する肯定が「資本主義」に反対を宣言する人間たちの議論の余地のない信仰箇条である。しかし科学というものは証明を要求するのであって、教条的断言で満足することはできないであろう[1]。

（1）第十一章「労働に対する権利」を参照。

表面的な検証だけで信じられるかも知れないこととは逆であるが、集団的耕作体制は、貧乏人と金持ち、専制的上位者と忍従的下位者とが存在する社会組織と完全に調和するということを示す事実に人はしばしば遭遇する。ジャワはそのような事例である。E. de Laveleye のような論者たちは、*dessa* すなわちジャワの村落共同体の幸福に果てしもなく際限もなく感動する。しかし現実は彼らの夢想によって作り上げられた田園詩とは別のものである。E. de Laveleye 氏自身次のように証言しているのである。「いくつかの村すなわち *dessa* では、牽引家畜を持たない単なる労働者は土地の分配から排除されている。」しかしこの程度のことは、かつてこの民衆の上にのしかかっていたところの、そして現在もその名残りをとどめている社会的ヒエラルヒーと比較すれば何ほどのことでもない。「名門であること、この偶然をジャワ人は一つの徳性としてきた。彼らは名門にあらゆる権利を認め、多くの義務を免除している。彼らは名門に喜んで権力を委ね、名誉と富でもって飾る。…貴いということは楷程の存在を含んでいる。社会の上から下まで各人は地位の価値と払わるべき敬意の程度を知っている[1]」（六‐七頁）。「ジャワの貴族はその家柄と相続した役割とによって全能であり、『権力の濫用』ということばの意味を知らないほどである。土地も人間もすべて昔から彼らに属していたので、彼らが人民に残しておいたものは鷹揚さだけであった」（一六九頁）。

（1）J. Chailley-Bert, *Java et ses habitants*, Paris, 1900.

三．生産の集団的組織の問題は何よりもまず人々が獲得できる生産物の量の問題である。土地の耕作の集団的組織について引用される事例は、それがもっと進んだ農業状態に関係しているのでなければ、この問題を解けないであろう。そのようなものは存在しない。事例が証明しているのは、土地はどうにかこうにか集団的に耕作することは可能だということであって、集団耕作によって最大量の生産物を獲得することができるということでは決してない。

中国は、集団的所有あるいはむしろ国家所有と個人所有とのあいだで振り子運動するような土地所有制度を持っていたように思われる。Hia（周？）王朝（紀元前約二千年）の下では、各家族は五〇mou[1]の地所を受け取り、五 mou 分の産物を税として収めた。すなわち十分の一税である。Yn（殷？）王朝（紀元前一四〇〇年頃開始）の下では、八家族の集団それぞれに九〇〇mou が割り当てられ、各家族は一〇〇mou を受け取り、その他に家屋分および庭園分として二・五 mou をもらい、残った分、すなわち八〇mou は共同で耕作

されねばならない分であり、生産物は国家に属した。割り当てられた土地の面積は最初は各集団について六三〇mou であった。Tcheou（周？）（紀元前一一〇〇年頃）の下では、十家族による集団それぞれに一〇〇〇mou が割り当てられ、十家族は共同で土地を耕作しなければならないものとされ、生産物の十分の一を国家に収めた。Meng-tseu はこれら三つのシステムを次のように説明している。「Hia 王朝の諸王の下では五〇アルペンの土地で年貢を収めた（あるいは十分の一税に付されていた）。Yu 王朝の下では、七〇アルペンの土地が共同扶助分として強制されていた（*tsou*）。Tcheou 王朝の諸王は *tche*（これは最初の二つの年貢を含んでいた）を（各家族が受け取った）一〇〇アルペンについて要求した。これら王朝のいずれも実際上十分の一税を課していたことになる。年貢の最後はすべての負担の平等な配分である。第二の年貢は相互援助と扶助のための税である。*Loung-tseu* は次のように言った。土地の分割と配分を行なった場合、扶助税（*tsou*）以上によい税を設けることはできない。また十分の一税（*Koung*）以上に悪い税を設けることはできない、と。この最後の年貢について王は何年かのあいだの平均収入を計算する。それを恒常的で操作しやすい税制度の基礎とするためである。米の出来がよく、高い年貢を要求することが暴政を行使することにはならないような豊作の年には、要求されるものは相対的に僅かである。耕作者が土地に施すべき肥料もないような災害の多い年には、年貢の全部が彼に対して絶対的に要求される[2]。」結局のところ明らかに財政的利益がこうした組織の決定的な主要動機であった。これらのうち一つとして、十分に良い結果をもたらさなかった。ともかくも国を動揺させた騒乱や同時代人の不満の声によって判断する限りはそうである。Mih-Teih の弟子である同時代人の一人は「弱い者を略奪する強者、多数でもって少数者を抑圧する者たち、善良な人間を欺す狡猾な人間、庶民を嘲いものにする貴族」について語っている。

（1） この時代における mou の価値についてはよく知られていない。唐王朝の統治以降、すなわち紀元六一八年以降、mou は約六四〇平方メートルに等しい。

（2） Trad. de G. Pauthier : *Confucius et Mencius*, p. 278-279.

（紀元前二五五年に統治を開始した）秦王朝は個人所有を確立したと思われる。後に何人もの皇帝が各家族の所有しうる土地面積を制限しようと試みたのであるが、ほとんど成功しなかった。七世紀から九世紀の唐王朝の下では、別個の家族をなす人間はそれぞれ八〇〇mou（約五ヘクタール）の土地と庭を地所として受け取った。土地を売ったり貸したりすることは禁ぜられていたが、やがて法網をくぐる方法が見出され、最後には法の悪用そのものが合法的となった。

十一世紀に書かれた中国の百科全書は旧制度の廃棄を深く嘆いている。「*Chen* の時代の農業コミューン（*Tsing-t'ien*）が廃止された後、土地はそれを耕作しない者の所有となった。他方その耕作者は不足していた。…賢者たちは旧農業コミューンを再建するのが適切かどうかを大いに議論した。…[1]」この著者は、紀元前二〇六年に王位にまで昇った *Han* 一族はこの仕事を成し遂げる能力があっただろうと見ているが、著者の時代（一〇〇九年から一〇六六年）にはもはや可能であるとは思っていない。

（1）Puini 教授による翻訳　*Rivista italiana di sociologia*, Rome, juillet 1897.

十一世紀には Wang-nang-chi という大臣が社会主義的と判断されていた制度を中国にもたらそうと試みた。しかし現実にはそれは中世時代にヨーロッパで行なわれた考え方と余り異なるものではなかった。過去に模型を求める中国の習慣に従って彼は Tcheou の治下に存在していたと同じような、取引に対する警察による裁判所を復活させた。この裁判所は売買の監督権を持ち、毎日食糧の価格を決定した。彼らは、貧乏人は免除されていた税金を金持ちには課し、その結果は援助する者のいない老人、貧乏人、仕事のない労働者、そして一般に窮乏していたすべての者を救済するのに役立った。Wang-nang-chi によって設けられた別の裁判所は、耕作者に種子の前貸しをし、土地はどのように耕作されねばならないかを決定し、耕作されていない土地を耕作者に配分する責任を負っていた。

種子の前貸しは他の改革—その中には貨幣改革もある—と同じように、混乱を生み出したように思われる。大臣に対するある反対者は、種子として使うように貸し出された穀物がしばしば全く別の用途に用いられたと述べている。一部は直接に消費され、他の一部は売られ、そして耕作者は働く代りに、のらくらしつづけていた。穀物が実際に種子として用いられた場合には、耕作者は穀物を返還しなければならないことと、大変な労苦を費した収穫物の大部分を持って行かれることに不満をもった。最後に、穀物の返還を確保する責任を負わされた役人はあらゆる種類の盗みと掠奪を犯す危険にさらされていた。

Wang-nang-chi の改革はあまり長続きしなかった。彼の布告は、布告が出された時代の皇帝を継いだ次の皇帝の治下ではすべて廃棄された。この法令が後に復活させられたことがあったが、十二世紀初めのほんの僅かな期間だけのことであった。実際この法令を生み出した運動は、社会主義的運動であったということ以上に、はるかに、保守的文人とある種の改革者との間の闘争であった。

ペルーでは我々は十分に社会主義的な特徴を有する組織の例を見出すことができる。そしてこの組織も例によって住民の完全な服従と結びついている。我々は遺憾ながら古代ペルーの社会状態についての事実そのままの詳細を余りもっていない。スペインの著者たちによって伝えられているいくつかの基礎的知識で満足しなければならない。Heinrich Cunow 氏（1）は、インカ族の統治以前には村共同体は一つのマルクを共有していたと考える。著者はゲルマンのマルクという現象の一般性についての先入観によって引きずられているように我々には思われる。我々はスペインによる征服の時期のインカ族のもとでのペルーの社会組織がどのようなものであったかについて、ほとんど知らないも同然である。インカ族の前に存在していたものについて依然として我々は知っていないのである。我々の著者によれば、インカ族は旧組織に対して取るに足りぬ変化しか加えなかった。村共同体は当時約一〇〇〇人の構成員を有していたであろうとされる。彼らの土地の一部はインカ族によって没収され、残りが彼らのものであった。

（1）*Die soziale Verfassung des Inkareichs*, 1896.

住民全体は十人組に分割され、各十人組は一人の指導者ないしは組長を持ち、十人組が

五つ集まって一つの中隊を形成する。この中隊が二つ集まって百人組となり、一人の指導者をもつ。百人組五つが集まって一人の指導者をもち、この五百人組が二つ集まって千人となり、また別の指導者一人をもつ。以下同様である。各段階の指導者たちは各配下の落度と犯罪を告発しなければならない。もし彼らがこの仕事にもとるところがあればきわめて厳しく罰せられる。些細な犯罪にも惜しみなく死刑が与えられる。役所はとてつもなくうるさく、とかく文句をつけたがり、結局のところ住民は奴隷あるいは家畜の如くに扱われていた。無為怠惰は体刑を与えられ、子供は五歳から労働しなければならず、盲人や足のわるい人間も労働を免除されなかった。インディオは、*blactacamayu* と呼ばれていた裁判所の役人が事件を検査し万事が適切にいっているかどうかを見ることができるように、食事の時間でも入口をあけておかねばならなかった。

土地は三部分に分けられていた。最初の部分は太陽に、すなわち宗教儀式の費用をまかなうことに向けられていた。第二の部分はインカ帝国に属した。すなわち政府の支出をまかなっていた。そして第三の部分が住民の必要に供せられていた。マルクの規制は一様ではなかった。各共同体の土地の一部分は共同体のなかの家族のあいだで毎年分割され、別の部分は共同所有のままであった。村の指導者は土地の耕作を指揮した。国の北部では耕作は十人ずつに分けられた、村の全構成員によって行なわれ、各十人組はその構成員および夫役あるいは軍務に服している者の土地をつぎつぎに耕作した。収穫物は等しい部分に分けられるのではなく、各自、自分の土地の産出した分を受け取った。一片の土地でも他者にその所有権を譲渡したり、与えたり、貸したりすることは誰もできなかった。百人組の長の同意なしにはマルクを放棄することはできなかった。ある種の作業、例えば灌漑のような作業は共同体全体によって集団的に行なわれた。その他に指導者の土地および、老人と寡婦の食糧をまかなうための土地を耕作しなければならなかった。この貧しい者のための土地の収入は村の指導者によって配分された。

各家族がその家屋と菜園とを持っていた地所はその家族の私有財産であった。これは集団所有とほとんど常に結びついて見出されるところの措置である。

ペルーでは諸条件についての非常に大きな不平等が支配していた。「そこでは地位の差は完全に確立されたものであった。市民の大部分は、*yanaconas* と呼ばれていたが、彼らは奴隷状態につなぎとめられていた。彼らの服装と家屋は自由人たちのそれとは異なる形のものであった。メキシコの *tamemes* と同じように、彼らは思い荷物を運ぶために、そしてありとあらゆる辛い作業のために使われていた。彼らの上には自由人がおり、この自由人たちは世襲的な職務や高位は全く授けられていなかった。次に、耳（oreilles）につけている飾りからスペイン人が *orejones* と呼んだ人々が来る。彼らは貴族集団を形成し、平時にも戦時にもあらゆる公務を執行した。国民の頂点に位置するのは太陽の子たちであり、彼らはその生まれと特権によって、*orejones* が他の市民の上にいたのと同じ程度に、*orejones* の上に位置していた（1）。」

（1） Robertson, *Hist. d'Amer.*, liv. ■Ⅶ■.

集団的体制は税金の敵ではない。それどころか、君主であれ政治家であれ自らの同胞の

幸福を確保する責任を引き受ける人々は、十分に秩序ある慈善はまず自分自身から始まるということを決して忘れない。それゆえペルーでは税システムは大いに発達した。インカ族は土地の一部を自分のものにしたばかりでなく、さらにその土地を夫役によって耕作させた。種播きと収穫の時期には村共同体の作業する能力を有する全ての人間がインカ族の土地に必要な作業を行なわなければならなかった。山岳地帯では、家畜、主としてラマが飼育されていたのであるが、インカ族はその一部を先取りした。ラマの原毛から女たちは共同作業で織維を作らねばならなかった。それゆえこの産業は集団形式で組織されていたのである。最も優美な布地は首都に持って行かれ、インカ族の衣装として用いられた。

住民はインカ族に対して、鉱物、染料のための木材、羽製品、等も供給しなければならなかった。彼らは鉱山開発、道路建設、運河の開さく、のために夫役をしなければならず、その他の公共土木事業もしなければならなかった。原始的な道具を用いて、辛苦と忍耐でもって彼らはインカ族の宮殿を建立するために巨大な石を磨いた。一定数の部族は若い娘を提供しなければならなかった。彼女たちはインカ族及び寺院に奉仕することを運命づけられていた。その他に、最も美しい者の中から選ばれた八歳から十二歳の若い娘が、太陽に仕えるために、またインカ族および土着民指導者の妻となるために、提供されねばならなかった。

ペルー人が生きていた隷属状態は、個々人の精力と決断力における絶対的不足と—これが原因ではないにしても—少なくとも関連してはいた。封建制度をもち私的所有を知っていたメキシコ人はスペイン人に対して英雄的な抵抗を示し、征服されたのはただ鉄砲類の使用によってであったのであるが、他方ペルー人は取るに足りぬ抵抗を示しただけで、ほとんど臆病無気力の証拠を提供しただけであった。

パラグアイにおけるジェスイット派の■鎮圧施設*reducciones*■は、古代ペルーのものに似た社会主義的統治の第二の例を我々に提供している。*Guaranis*というインディオはスペイン人とポルトガル人によって残酷に虐げられていた。スペイン人たちはこのインディオを、あたかも虎やライオンのような大型野獣を狩猟するかのように、狩猟の対象にしたのである。それゆえに彼らは、ジェスイット派が*reducciones*と呼ばれた施設において、彼らに提供した避難所（アジール）にかけつけたのである。より北方のウルグアイにおいては、*Chiquitos*というインディオが集まった別の*reducciones*が設けられた。このインディオは*Guaranis*よりは少しく気力があったように思われる。

Guaranis の三〇の *reducciones* は一六〇九年から一六四二年にかけて設置された。*Chiquitos* の場合は一六九二年が最初である。両方とも一七六七年まで、すなわちジェスイット派の追放の時期まで存続した。かくして最初の *reducciones* の設置からその崩壊までに一五八年間が経過した。ジェスイット派は内部組織の問題を解決しなければならないだけではなかった。*Guaranis* の *reducciones* は、ヨーロッパ人とブラジルの土着女性との関係から生まれたならず者の類であった。*Mamelucos* が彼らにしかけた激烈執拗な戦いにも抵抗しなければならなかった。しかし、ジェスイット派の指導部はあらゆる困難に打ち勝ち、その追放の時期には *reducciones* の中には一五万人以上のインディオがいた（1）。

（1）Don Isoard, *La propr.et la commun. des biens,* ■I■, p.361-362.「一八五五年、二人の学者V.Martin de Moussy氏とAlfred Demersay氏はアルゼンチン政府からRéductions（■鎮圧施設■）

が存在した広大な地方について当の現場で研究することを委託された。」…任務地域についての叙述の後でde Moussy氏は次のように続ける。「ここにはまさに次のことが示されている。すなわち、ジェスイット派は、護衛も持たず兵士も持たない何人かの司祭の単なる権威だけで統治されている数千人の野蛮人という顕著な事例を世界に提供しているのである。また彼らは、本質的に怠惰で無気力な存在を労働によって真に驚嘆すべく素晴らしいものをつくり出す存在に変えたのである。得られた結果は並外れたものであった。十万人もの人間が不自由なしに安楽に生活していた。今日ではもう荒地が残っているだけであるが…。」

小さな村はそれぞれ一人の司祭とその助任司祭によって管理されていた。この二人のいわゆる職員は野蛮な人間たちに畏怖の念を起させるために必要な、あらゆる特権を身にまとうように気をつけていた。司祭の下にはインディオの指導者あるいは酋長がいた。インディオは一般に新受洗者（ネオフィット）の名称を授けられキリスト教の教育を受けていたが、彼らがスペイン人と意思を通じ合うのを防ぐために彼らにスペイン語を教えないように気をつけていた。一七四三年の王室令は彼らにスペイン語を教えることを指示していたが、それはほとんど実施されなかったと思われる。しかし例外はあった。シャルルヴォアはラテン語とスペイン語をきわめて申し分なく読む一人のインディオについて語っている。彼らは細かな規律の下に置かれていた。起床就寝の時間も決められていた。最も細かな部分まで監督される作業、労働、子供のように扱われ罰せられる大人、種の繁殖のための世話に至るまでの生活のあらゆる行為が規則の下に置かれていた。各家族は家屋と、家族が耕す小さな土地を持っていた(1)。とは言え、土地は不足しておらず、各家族は耕作可能なだけの土地を受け取ることができた。ジェスイットはインディオに種子を提供し、収穫の時期に一定量等価の穀物を手に入れた。こうした用心なしにはインディオはその土地を耕作することはできなかったであろう。なぜなら彼らは収穫時から播種期まで穀物を保存するだけの将来に対する配慮を持ち合わせていなかったからである。同じ理由から「最初のころは、彼らが耕作するために用いる牛を彼らの自由にさせないようにしなければならなかった。ものぐさから、彼らは仕事が終っても牛を犁などから離してやる労をとろうとしなかったり、あるいは一再ならずあったことであるが、牛をばらして食べてしまい、それを叱られると腹が減っていたから、と言い訳をしたりしたからである(2)。」フィリップ五世の王室令は「財の管理におけるこのインディオたちの無能力と無気力な怠惰」を嘆いている。しかしこうしたことは大勢の野蛮人たちの顕著な特質である。ロバートソン（Robertson）は次のように指摘している。「アメリカには、未来のために何らかの準備をすることができるには余りに限られた知性しかもたない部族がいくつも存在する。彼らの予見と配慮はそこまでは行かない。彼らは自分の体験する感情の衝動に盲目的に従い、次いでそれから生じうる結果を全く気にもせず、彼らの心にただちには浮ばない結果にも気を配らない。彼らはその時点において何らかの効用あるいは快楽を提供するものには何であれ最大の価値を置き、当面の欲求あるいは願望の対象でないものは全く評価しない。あるカリブ人の場合、夜が近づいて眠りたい気になったときには、彼のハンモックを売る気にさせるような動機は彼には全く存在しない。しかし朝になって、その日が彼に告げ知らせる仕事あるいは楽しみに専念すべく起床するときには、この同じハンモックを、彼の空想を楽しませるためにのみ現れる、何の役にも立たないがらくたと交換するであろう。」さらに先の方では次のよう

に言う。「彼らは不熱心に仕事を開始し、ほとんど精力を使わずにそれを続け、そして子供のようにいとも簡単に仕事を離れる。…仕事は彼らの手のもとではきわめてゆっくりと進行し、ある目撃者（Gumilla）はそれを植生の感知しえないほどの変遷と比較しているほどである。」

（1）これは財産ではなく、単なる使用権であった。Gothein, *Der christlich-social Staat der Jesuiten in Paraguay.* ■改行■Azara によれば、ジェスイットは「インディオの各々に週のうち二日彼らが好きなように耕作する土地ないしは小作地を与え、全所有権を享受しうるようにすることによって、少しずつ個別財産というものを彼らに知らしめ慣れさせる」意図を持っていたであろう。（Citation de F. Sagot, *Le comm. au Nouveau Monde*, Paris, 1900.）

（2）Charlevoix, *Hist. du Paraguay,* ■Ⅱ■, p.57.

こうしたことからすれば、ジェスイットがインディオを獣なみに愚鈍にしてしまったと非難した論者たちは間違っていたことが了解される。*reducciones* のインディオの性格はジェスイットによって変化させられてはいなかった。その性格はジェスイットによる支配以前と同じままであったし、今日でもなおペルーのインディオのうちに観察されうるものである。

ペルーおよびパラグアイの神聖政治は社会主義体制の最大の難関の一つを回避していた。すなわち人間の選択である。いずれの場合でも劣った種族に対して自分たちの意思を押しつけていたのは優越種族の人間であり、劣った種族の人間たちは自らの指導者をその内部から選び出してはならなかった。あらゆる事柄において彼らは自らを導かれるにまかせればよかった。「何かを発明する能力は彼らには全く認められていなかった。しかし彼らが、見たことをすべて模倣する能力を最高度にもっていることはやがて認められた（1）。」彼らはジェスイットの神父たちから産業技術の手ほどきを受け、それには著しく成功したので、彼らの国家は南米における唯一の工業国であった（2）。

（1）Charlevoix, *Hist. de Paraguay,* ■Ⅱ■.

（2）E. Gothein, *Der christlich-sociale Staat der Jesuiten in Paraguay,* Leipzig, 1883.

一七六七年一月二日、スペイン王はジェスイットをパラグアイ、リオ・ド・ラ・プラタ、およびテェクマンの三つの地方から追放すること、ならびに彼らの財産の没収を宣言する命令を発した。この措置の結果として *reducciones* は崩壊した。不幸なインディオたちはその財物を略奪され、散り散りにせられ、命を奪われ、非常な多数が飢えと窮乏のうちに死亡した。追放の時期にはブラジルの七つの小さな村には三万人の新受洗者がいた。一八〇一年にはまだ一万四千人がいた。一八一四年にはもう六千四百人しかいなかった。そして一八二一年にはわずか三千人となった。

ヨーロッパのドミニコ会修道士に劣らぬ、その立派な好敵手であったパラグアイのドミニコ会修道士たちは、貧しいインディオからその生活手段であった財物を盗み取った。「これを隠すには及ばない。パラグアイは今日（一八六〇年）巨大な共同体であり、巨大な布教団であり、その中でM・ロペスとその子供たちは召使頭である。尤も団員たちは食事も

与えられず、服も供せられず、とりわけ全体の利益から何の分け前ももらっていないという、共同体との違いはあるのであるが（1）。」これこそまさにドミニコ会修道士の理想である。（ロペスの先任者であった）フランシアの独裁の下で土地に縛りつけられていたインディオは、国家の土地を開拓しなければならなかった。この土地は大部分、布教団の共有地に由来するものであった（2）。

（1）Martin de Moussy, *Description géographique et statistique de la confédération Argentine*, ■Ⅲ■, p.700. ジェスイットは*reducciones*で「行政官」によって取って代られた。この「行政官」がAzaraの言うことろによれば（*l'Amér. Mérid.*）住民を利用することだけを考え、従って不幸なインディオに食糧も与えず、衣服も与えず、彼らを労働によって痛めつけたのである。Gothein（*loc. cit.*）はこの意見に賛成している。Demersayは、*Hist.phys. écon.et polit. du Paraguay et des établissements des Jésuites*, ■Ⅰ■の中で次のことを指摘している。「それゆえ修道会（オルドゥル）の崩壊はアメリカに巨大な空白をもたらした。これは旅行者たちが一致して告発しているところである。」D'Orbignyは次のように評価している。「布教団は修道会員の統治の間は、芸術的産業的な点において、新世界におけるスペイン人の町と同水準あるいはその上の水準にあった。」Baynalは*Hist. philosoph. et polit... dans les Deux-Indes*, 1780, ■Ⅱ■, p.289. で次のように指摘している。「一七六八年パラグアイの布教団がジェスイットの手から離れたとき、それはおそらくは新しい諸国民を指導しうるほどの最も偉大な文明段階に到達していた。」

（2）Rengger et Longchamps, *Essai hist. sur la révol. du Paraguay.*

それゆえ知られているすべての事実は布教団体制はインディオにとって好都合であったことを証明している。そしてこの種族の幸福の観点に立つならば、この布教団組織の善行に疑義をはさむことは難しい。生きている種は下等分子の淘汰とは異なる方法で自らを変えることが可能であると信ずる人は、せいぜい、ジェスイットが新受洗者に対して、監督庇護が不用になるために必要な資質を少しずつ与えるという措置をとらなかったことを非難する権利をもつだけであろう。

しかし別の一観点が存在する。下等分子の淘汰除去によって獲得される利福（ビアン・エートル）の視点である。この観点からすれば、ジェスイットの追放とその結果としての*reducciones*の崩壊が有用であった可能性は存在する。なぜならそれらは多分、劣等種を滅ぼして優越種、すなわちヨーロッパ人に置き換えるのに貢献したからである（1）。

（1）　我々の問題においてはこのことは決して信頼できることではない。現実というよりもむしろ単なる可能性の問題である。

二つの観点、個人の利福の観点と種の利福の観点は社会科学のあらゆる問題のうちに見出されるものであり、大抵の場合別個に切り離されており、還元不可能であるように思われる。

庇護監督体制の消滅はそれゆえパラグアイのインディオにとっては致命的であった。類似の多くの現象が観察されている。現代における深遠な思想家の一人であるG. de Molinari

氏は、前世紀の終りから今世紀の初めの時代まで行なわれてきていた庇護監督の消滅から結果した、ヨーロッパ庶民階級にとっての不幸を非常に見事に叙述している。「もし労働者たちが先の見通しの能力をもち倹約的であったならば、また、もし彼らがその繁殖を上流階級にならって制限して自分の稼ぎだけで養育できる数だけの子供を世に送り出していたならば、労働賃金は彼らの力や健康を余り破壊しない水準にとどまることが可能だったであろう。しかし労働者たちは、彼らが解放された時代には、一般に先見的でもなく倹約的でもなく、過度の労働と給与の不足が彼らにもたらした肉体的精神的諸条件は彼らのうちに自制の能力を発達させるには全く適していなかった。…窮乏状態は労働者階級の、多分余りに早急な解放の不可避的な結果として現れた(1)。」

(1) *Les Bourses du Travail*, p.55-56.

ロシアのミール、ジャヴァ、古代ペルーのデッサ(*dessa*)、パラグアイの*reducciones*のような恒常的な共産主義組織と、しばしば暴力的革命の際に現われる本質的に一時的な組織とを混同してはならない。恒常的な共産主義組織はまさにその存続を確保するために必要な諸条件――一時的な組織はそれを免れている――の規制の下にある(1)。

(1) この章の終りおよび次章は、もっぱらV. Racca氏の仕事である。残りの部分はすべてパレートのものである。二人の協力部分はこのように区別されている。

ペルシアは非常にしばしば革命によって転覆させられてきた国である。そのうちのいくつもの革命が宗教的かつ共産主義的形態を取っていた。ササン王朝(訳注：ペルシアの王朝、三‐七世紀)の下でマステクという名の改革者は道徳全体に対して戦いを宣言し、財産と婦人の共有とともに普遍的自由と平等とを説くことから始めた。まもなく彼は奴隷と下層階級の人間を獲得した。彼の熱狂的信者はマステキエと呼ばれた。彼の成功は赫々たるものであったので、帝国のお偉方やさらには国王カバドさえその宗派に加入した。しかし強力な反動がやがて現れた。国王の息子ヌシルワナに指導された反革命は武力に訴えてこの宗派を打倒することに成功した。この宗派においては共産主義的信念が官能的快楽に身を委ね他人の財を略奪する口実として役立っていたのである。しかし、この共同体が破壊されても、それを生み出した精神、その発達を促進した原因は破滅されなかった。

二世紀半後、ババクは新しい宗教的信条を説いた。それはイスマエル派(訳注：イスラム教シーア派の一分派)から借用した事蹟を混じえたものであり、現代の論者たちの一致した見解によれば官能崇拝と放縦に身を委ね、婦人の共有を実践するものであった。同種の資料も、抑制するもののない放縦、略奪、殺人をこの宗派が容認していたことを証明している。国民のなかの屑という屑がすべて熱狂してこれに向かった。ババクの熱狂的信者は速やかに幾千を数え、カリフの王位は転覆されねばならなかった。二十年の間帝国は廃墟と死骸で覆われた。遂に八三七年ババクは捕えられ殺された。彼の同時代人が証言するところによれば百万人の信奉者が刃の下に死んだ。この宗派はババクの後生き残らなかった。しかし、この教義の精神はなおペルシアで長期にわたって拡がった。

十一世紀の始め、狂信的な新しい一宗派、カルマートの宗派がハチダンの布教に続いて

形成された。その教義は最初純粋に宗教的なものであった。ところがやがて彼は宗派信者に対して非常な影響力を獲得したので、信者のあいだでの財産と婦人の共有を確立することを企てた。信者は教義の敵対者ののど首を切って殺しその財産を略奪することが可能であった。そして彼らはその信条を実行にうつすことを知っていた。ほぼ一年の間彼らはアラビア、シリア、エジプトを血で汚し荒廃させた。これは帝国の深刻な崩壊に対して何らの治癒策も施さなかった国王たちの無能によっても促進せられていた。帝国はいくつもの小国家に細分せられた。このようにしてカルマートの宗派はその宗教的共産主義的な旗じるしが全く別の一目的を隠しもっていたことを明瞭に示した。すなわち革命という目的である。そしてその最後は成功するあらゆる革命と同じである。それはまもなくキリスト教会の変遷と類似した変遷をこうむった。その指導者たちはまず教皇権のようなものを作り、次いで王朝を形成した。この王朝は他の諸王朝とほとんど違っていなかった。昔の仲間たちも、この王朝がアラビアに対してきわめて長期にわたって課したくびきの下に拘束されていた。

一一世紀の後半にハッサム・ベン・サーバ・ホマイーリ（Hassam-Ben-Sabah Homairi）は一つの新しい宗派を樹立した。すなわち東方イスマエリ派あるいはアサッシン（*assassins*）である。その教義―その原理は「全てのことが許されている」であり、財の共有を認めた―は社会のあらゆる階級のあいだに急速に広まった。山の老人あるいは山の大師と呼ばれていたハッサムは宗派を強化するために、仲間および布教者と並んで、第三の集団をつくった。自分を犠牲にする集団であり、■ハッシシム（Hascischim / assassins）■と呼ばれたものである。彼らは強力に武装した組織であり、ハッサムの命令に盲目的に服従した。この宗派は一種の信徒団体であり、チュートン騎士団（訳注：中世ドイツに栄えた騎士修道会）、サン・ジュアン騎士団、あるいは聖堂騎士団のような、一種の修道会である。この修道会の戦術の基本則は、人々を服従させておくうえで容易なように、周辺の城を奪い取ることであった。このような形の支配は当初は宗教的目的を持ち、イスラムの教えの厳格な遵守を課することを目的としていたが、急速に他と変わるところのない、あるいはもっと悪質な世俗的支配となった。この修道会の全歴史は最初の時期から無数の殺人と掠奪とに集約される。それは最も堅固な要塞を略奪し、盛えている地域を略奪した。このようなやり方で、最初はその内部に献身と自己犠牲の生活を保持していたアサッシンの修道会は、豊かになり強力になって、腐敗の虫によって速やかに蝕まれた。アサッシンの不信心と腐敗はあらゆる限度を越えていた。親族関係あるいは友情のあらゆる絆が、信奉者を悪事の盟友関係によってより緊密に結合するために、断ち切られた。彼らは最後には、殺人を手段とし富を目的として、残忍な王朝を形成した。彼らの支配は一二七〇年に壊滅させられた。尤も修道会はまだあちこちにその活力の血の証拠を残していたが。今世紀においてもなおアサッシン修道会の名残りがペルシアとシリアで発見された。しかし共産主義及び世俗的権力に対する渇望は消滅した。宗教的信仰だけが残っている。

十五世紀世紀のはじめにジャン・フス（Jean Huss）はボヘミアである新しい教えを説きはじめた。彼は、悪用されてきた教会財産は一般信者に返されなければならないと主張した。「十分の一税については、それは純粋な施しであるとフスは主張した。このことから彼は、教会の人間は主人でもなく、財産の所有者でもなく、番人であり分配者にすぎないと結論した[1]。」このような考え方を彼はウィクリフの著作から引き出した。ウィクリフは、

全ての財産が原始キリスト教会のように共有されていなければならない福音書に適った状態を推奨していたのである。一方では貴族が教会財産を奪い取ることをたくらんで、他方では民衆がこれと同じ望みをもって、また十分の一税の免除を願って、このフスの考えに易々と捉えられた。フスの考えに対する歓迎はますます熱狂的になった。「何人もの金持ちの伝道者が自分はフス派であると宣言した。そして自分のもっている財産は保全しようとして、財産の有効利用を命じている教義を採用した(2)。」

(1) E.de Bonnechose, *Jean Huss, Gerson*, etc., 3eéd., Paris.1860, 1er vol., p.154.
(2) E.de Bonnechose, *op. cit., ibid.*, p.155.

運動はすぐに流血の革命の形を取った。貴族と聖職者に抑圧されていた民衆は反抗の機会をうかがっていたのであるが、それをフスの説教のうちに見出した。さらに、行きすぎがあったとしても彼らは全く最新の事例を模倣したにすぎなかったのである。「一三八九年、ある病人に聖体パンを運んでいた司祭を侮辱したということで、プラハのユダヤ人のほとんど全般的な虐殺が行なわれた。ユダヤ人の財産が略奪され、家屋と通りが焼き打ちされた。…一三九三年には、ヴェンセスラス(王)はボヘミアからチュートン修道会のすべての騎士を追放し、彼らの財産を奪い取った(1)。」民衆はもっと違ったやり方をした。長い年月の間ボヘミアはもはや巨大な戦火以外のものではなかった。町の労働者や農民は復讐の陽が昇るのを見てよろこび、もう共産主義的な社会をつくることを考えなくなった。彼らは修道院、図書館、古文書館を略奪し破壊し、修道僧や司祭を虐殺した。しかしまもなく教会の財産では足りなくなった。個々人の全財産を攻撃しはじめた。長い年月、土地と人間がこの戦争によって破壊せられた。かつてあれほど繁栄していたボヘミアは悲惨な状態に陥った。ついに暴動が鎮圧されたときには、農民たちは農奴の身分になって完全に隷従させられた。彼らのいわゆる解放者は彼らの暴君のうちでも最も残忍な部類に属する人間であった。彼らはすばやく支配者になっていたのである。

(1) J. Lenfant, *Histoire de la guerre des Hussites*, etc., Utrecht, 1731, 1er vol., p.49 et 50.

フス派の教義はまもなくドイツに広がった。誠実な熱狂家もそれを受け入れたが、あらゆる種類の怠け者や、盗み、強盗に慣れた山師たちは、町や田舎の貧民階級のあいだでその教義の最も熱心な使徒となった。最初の農民一揆は一四三一年、ウォルムスの周辺で勃発した。彼らの目印は彼らが日常履いていた粗末な短靴(*schuh*)であった。非常に長い間あちこちで発生した全ての農民暴動がその名称(*Bundschuh*)を得たのはこの目印からである。

一四七〇年頃、ハンス・ベーム(Hans Böhm)は民衆に向って次のように説きはじめた。神の王国が近づいている。もはや階級の違いはなくなるであろう。あらゆる権威が破棄され、税は廃止されようとしている。君主も貴族も額に汗して生活の糧を得るように強制されるであろう、と。民衆は大挙して立ち上った。ドイツのあらゆるところから農民、労働者がベームのもとに駆けつけた。ベームは一時三万人の人間を意のままに使うことができた。「大部分は(と同時代の年代記は述べている)食べるものを持っていなかった。しかし、

彼らが着いた家の者は彼らを宿泊させる責任を負っていた。その家では彼らは兄弟姉妹として呼び合った(1)。」ある日ベームが武器を手にした熱狂的信者と歩きはじめようとしたとき、彼は捕えられ、焼き殺された。共同体は散り散りにされた。しかし遠方から来た農民たちは国へ帰ったとき、とりわけスアブルやスイスで彼の教義を広めた。十五世紀の終りから十六世紀のはじめにかけていくつもの一揆が勃発したが、共産主義的体制を樹立するのに成功したことは一度もなく、最終的にはつねに略奪と殺人に帰着した。一五二四年、革命は全ドイツに拡大した。「農民戦争はこれらの騒擾に歴史家が与えたところの名前であるが、ルターの教義の刊行と普及とはいかなる関係も有してはいなかった。ルターの教義は農民が彼らの行きすぎを正当化するために用いた口実にすぎなかった。…すでにルターのずっと以前から憤激した臣下が君主に対して戦さをしかける場面は存在したし、農民が自らに課した真の目的は、租税と虐待から自らを解放し、貴族の専制的権力に対して制限を設けることであった。頻繁な夫役、過去におけるよりも重くなった貢物その他の租税、とりわけ、トルコやサラセンに対する戦争を口実にして課せられた十分の一税、これらすべてが農民にとっては耐えがたい重荷であった。なぜなら聖職者からならば世俗の領主貴族からよりも、より節度ある扱いを期待できると思われたにもかかわらず、彼らは聖職者たちからもはるかに多く虐待されていたからである。これがまさしく農民に非難の声をあげさせたものであった(2)。」しかしこうしたことのほかにこの革命は非常にちぐはぐな諸要素を含んでおり、非常に種々雑多な主張を表明せしめた。「暴徒の非常に多くは—とある同時代人は書いている—共有地権(droit communal)、彼らの昔の法制度の再興、昔の慣習の復活、租税と夫役の軽減を要求することに自らを限定していた。別の暴徒はあらゆる隷属を拒否し、今度は自分たちが命令することを欲していた。…しかし彼らの大多数は、金、財産、特権、農地、森林、牧草地を金持ちと共有することをなによりまず望んでいた(3)。」エベルリン・ギュンツブルグは暴徒の目的を次のように要約した。「富は貧乏人のために、支配は臣下のために、平等は万人のために(4)。」自らの権力を増大させようと欲していた貴族、収入を増やすことを欲していた下級聖職者、富を失うことを恐れていたブルジョアは、たとえ下層民に敵対していたとしても、彼らもまた運動に参加した。下層民は最初ほとんどどこででも非常に節度ある態度をとっていた。農民たちは、彼らが正しく道理にかなった改革を要求していたオートスアーブで起草された「公正十二箇条」(Douze équitables articles)を、封臣たちに提示した。彼らの要求は次のようなものであった。司祭の選挙と罷免とが教区所属信者によって行なわれること、十分の一税が減額され、貧民への援助救済金がよりよく支払われ、家臣農奴の財産の領主による継承権が廃止されること、狩猟、漁業、森林利用に対する領主の権利を縮少すること、同じく土地税、地代等の減額、刑罰をより公正にし、厳しさを減らすこと、最後に、領主によって横領された財産を共同体に返還し、死亡した財産遺贈権のない者の財産の一部に対する領主の継承権を廃止すること、である。第十二項は、それに先行する条項はそれらが福音書の教理に反すると認められた場合には、修正することができると規定している。見られるように、ここには共産主義のことばも威嚇のことばも一つもない。農民たちが願っていること、とりわけ長期にわたって頑強に要求していることは、彼らの惨めな境遇の改善である(5)。これより先に、イタリア北部の農民をして、領主に対して改革を要求せしめたのも同じ原因である。イタリアでは貴族が比較的にひ弱であり、農民は共産主義的渇望あるいは宗教的口実を伴った革命を経ずに望むものを獲得した。ドイツでは逆に領主たちはより強力であり、「十二

箇条」の受け入れを拒否した。これが農民たちを暴動に駆り立てたのであり、共産主義的渇望を急速に優位ならしめたものであった。暴動は野蛮残酷であった。城や修道院は焼き打ちされ破壊され、運ぶことのできるものはすべて盗まれ、このような悪事に反対した者はすべて殺害された。領主の軍隊は反逆者徒党が破壊を進めるのを止める力をもっていなかった。反逆者たちが通過した村の住民たちは彼らと妥協共謀し、「福音的兄弟関係（ソシエテ）」あるいは「キリスト教的兄弟関係」、他人の財産が共有される共産主義的な類の同盟を形成した。同時代の人の話には次のようにある。「農民たちは狂喜の状態にあり、殿様気取りをして喜び、暴飲暴食を楽しんだ。彼らは貴族になった気でおり、ズックの仕事着や半ズボンをもう身につけたいとは思わなかった。彼らは白い服を身につけ、半ズボンと服を流行風に仕立てさせ、青色の飾りをつけ、羽根のついた大きな帽子を被っていた。こうすることで彼らは自分が貴族になり、威厳あるものになると考えたのである（6）。」反逆者の軍隊が前進するにつれて、都市の下層階級は「名誉ある人々（オノラブル）」の手から権力をもぎ取り、貴族、聖職者、金持ちのブルジョアの財産の略奪によって得られた援助物資を農民に送り届けた。このようにしていくつもの都市、多数の城が反逆者の手に落ちた。いたるところで新しい「友愛同盟（フラテルニテ）」がつくられた。君主の軍隊は反逆者たちと戦って勝利した。なぜなら反逆者たちの軍隊は秩序もなく戦術もなく、十分な武器もなかったからである。しかし時に傭兵たちは反逆者と戦闘をまじえることを拒否し、彼らに合流した。反逆者たちは新たな勝利をいくつか獲得した。しかし一五二五年の春、君主たちが同盟し、流れは急速に変化した。反逆者のいくつもの軍隊が潰走させられた。シュヴァインフルトでは反逆者たちは新しい権力の基礎を堅固にかためようとした。しかし君主の同盟軍が到着したことによってそれは成功しなかった。反逆者たちの先頭に立っていた貴族たちは速やかに反逆者たちを捨てた。反逆者たちは、指導者もなく、秩序もなく、武器もなく、赦しと慈悲にすがることを好まないときには、猪の群のように狩りたてられた。処罰はすさまじいものであった。貴族たちは、彼らが被った敗北に復讐するために、農民たちの条件をかつてなく苛酷なものとした。

（1）Cité par Janssen, *L'Allemane et la Réforme*, trad. fr., 2e vol., p.425.

（2）De Sekkendorf, *Hist. de la Réformation*, abrégée et trad. en français par J. J. P., Basle, 1784-5, tome1er, p.358-9.

（3）Cité par Janssen, *op. cit.*, 2e vol., p.459.

（4）*Ibid.*, p.459.

（5）例えば一五〇八年、すなわち反逆暴動の真盛りであった年にもまだグルニンゲン（スイス）の農民は十分の一税その他の義務から解放されることを頑固に主張していた。(Latron,(?) *Histoire des Anabaptistes*, Amsterdam, 1699, p.36).

（6）Cité par Janssen, *op. cit.*, 2e vol., p.506.

ドイツで起った革命運動は、農民戦争すなわち再洗礼派の運動の時点においてさえ、似たような原因と経過をもっていた。「政治的発酵は、福音派が生み出すそれ（宗教改革）とは大いに異なるものであり、長期にわたって帝国を悩ませた。世俗的抑圧と教会による抑圧とに痛めつけられ、いくつもの国で領主の土地に縛りつけられ土地と共に売られていた

民衆は、激昂して立ち上がり遂には鎖を断ち切るおそれがあった。この不穏な動きはいくつもの徴候によって宗教改革のずっと以前から現われていた(1)。そしてそのとき既に宗教的要素は政治的要素と結びついていた。十六世紀においてはこれら二つの原理を分離することは不可能であった(2)。「政治的擾乱を生み出したのは宗教的運動ではなかった。しかし、多くのところで宗教的運動は騒擾的波乱を伴っていた(3)。」運動は一五二二年、十分の一税の支払い拒否から始まった(4)。法律、契約、慣例、教会は農民にそれを支払うように強いていたが、彼らの窮乏と、当時広まり始めていたかに思われる自由の精神は、農民を駆り立てこの重税を拒否せしめるに至った。農民たちが聖書そのものの中に十分の一税の問題が存在しないことに気付いたのは、聖書の完全な実行への回帰運動につき従うなかにおいてであった。それ以降聖書は彼らの要求の基礎であった。同時に再洗礼派の創始者であるトマス・ミュンツァー(■Th. Munzer■)の布教が始まった。彼の教義の根本原理は、原始キリスト教会が組織された基盤に基づいて社会は樹立されなばならないということであった。万人が平等でなければならず、全ての財が共有でなければならなかった。ミュンツァーへの共鳴者はすぐにおびただしい数になった。しかし問題にされていたのは、「大部分無知な人々および社会の最下層民(5)」であった。ミュンツァーとその弟子たちの布教に魅了されて民衆は蜂起した。「蜂起に加った者すべてが同一の動機によって動かされていたわけでもなく、同一の感情をもっていたわけでもなかった。ある者は、本当の意味で再洗礼派であり、ミュンツァーが約束したイエス・キリストの新しい王国以外の目的をもってはいなかった。他のある者は宗教をもたない放埒の人間であり、彼らは法も裁判官も欲せず、ありとあらゆる放蕩と退廃の中で罰せられることなく生きることだけを欲していた。またある者は、権力が廃止されることを主張することはなかったが、あらゆる負担、税を免除されることを要求していた。しかし皆が一般には福音による自由を理由としていた(6)。」暴動が勃発したとき、民衆は都市でも田舎でも、権力を掌握していた階級を追い回し、福音の国を樹立するために彼らをつかまえた。「友愛同盟(フランテルニテ)」あるいは共同体がつくられ、その中で最初のキリスト教徒たちの生き方を追求する努力が行なわれた。しかし彼らはしばしば罪に身を委ねた。神の御厚意は罪も容赦して下さる、と彼らは言った。「チロルでは(とある年代記は言う)、僅かな日数のあいだに相当数の男女が金をつくるために財産と、動物の繋駕用具を売り払い、女と子供も新しい集まりに加わることを認められた(7)。」同じようなことをした者の数はドイツのあらゆる地域でたえず増加した。あちこちで再洗礼派の使徒たちの布教とは無関係に暴動が勃発した。ムルハウゼンはチューリンゲンにおける暴動の主たる震源地であった。再洗礼派が町の権力を奪取しそこで彼らは絶対的支配者となったのであるが、そこでは全てが共有となった。ミュンツァーは昔の所有者から奪い取った全ての財を蓄えさせ、それの最高位の分配者となった。民衆はこの制度に何ら不満をもたなかった。労働者は仕事を止め、無為に身を任せ、共有の資産は汲み尽せず無尽蔵であるという錯覚を養っていた。同じ時期に使徒たちは周辺で暴動(ディシデント)の種を播いていた。武装した再洗礼派の軍団が修道院や城を破壊略奪し、金持ちや反対者を無理矢理再洗礼派に加わらせた。それを拒否した者は槍を経験した。このような略奪の収穫は、その大半はムルハウゼンの共有資産を大きくすることとなった。エアフルトでは下層民が権力を奪取して周辺の農民と友愛同盟をつくり、公共財産及び個人財産を全て破壊略奪した。彼らは痛飲乱舞のうちに時間を過ごした。完全な無政府状態が町を支配した。しかし、その時突然に君主たちは同盟して、ミュンツァーに率いられた一団が到着していたフランケ

ンハウゼンに向って進んだ。そして大戦闘の中で六千人の農民が殺戮された。ミュンツァーを含む指導者たちは斬罪に処せられた。やがて反乱は鎮圧され、旧体制が再建された。しかし反抗は抑圧されただけであった。反乱はすぐ後で勃発しなければならなかった。再洗礼派は決して死んではいなかった。新しい改宗者の大部分は結びつきと思いやりの印として一緒にパンを千切り、担保は貸付け、保証、あるいは贈与によっておたがいに忠実に助け合い、財の共有を教え、兄弟のように生活した。しかし彼らのうちの少なからぬ部分は、来たるべき革命を最大限利用することだけをもくろみ、あるいは犯罪を犯し、婦人の共有を採用していた。再洗礼派の共同体は相互に連結されており、スイス、ドイツ、オーストリアで多数を数えていた。労働者たちはもはや働くことを欲せず、自らの必要物について他人の余りものを当てにしていた。道徳がこれほど低いところまで落ちることは稀であった。神の王国は二年後に樹立されようとしていた。全般にわたる反乱はこの神の王国の到来への道を開くはずであった。そのためにはトルコ人たちでさえ戦いにやって来るであろうとされた。一五二八年再洗礼派に対する迫害がいたるところできわめて苛酷に行なわれた。そのとき彼らのうちの何人もがネーデルランド、ライン河沿岸、シンジェン、ボヘミア、ポーランドに散らばり、その考えていることを隠しつつ、秘密の小集会（conventicules）に集結し、そこから激しい布教活動を行なった。モラヴィアの共同体の起源はこのような小集会のうちの比較的穏健なものであった。しかしドイツではありとあらゆる迫害にもかかわらず再洗礼派は日々その力を増大させた。ストラスブルグがその火元になっていた。神が新しいエルサレムをつくるために選ばれたのはストラスブルグであった。しかしストラスブルグはこの名誉を得ることはできなかった。その代りにこの名誉を得たのはミュンスターであった。この町では反乱派は、財産を蕩尽した者、子供の時以来の怠け者、のらくら者から成っていた。彼らがもっていた望みはただ一つ、掠奪であった。一五三二年、クィッペルドリング（Kuipperdolling）とキッペンブロイック（Kippenbroick）という、最も重要な二人の指導者が首長に選ばれた。それ以降ミュンスターは再洗礼派に属することとなった。住民の大部分は逃げ出したが、大勢の仲間たちがこの町に各方面から駆けつけて来た。「こちらへ来い、と『改宗者』たちは遠方の両親や友人に書いた、ここではあなたたちの願いがすべて満足される。我々のうちの最も貧乏な者でもいまや最も高位で有力な人物たちと同じように贅沢な衣裳をつけて歩いている（8）。」首長の選挙の翌日から、略奪、破壊、放火が始まった。このような武勲についての喧々囂々たる議論が指導者たちのあいだで取り交された。人々は教会のものを奪ったばかりでなく、それを破壊し、そして、教会という名称も廃棄することを欲した。同じように彼らは年、日曜、祭日といった区分も廃止した。これらはすべて、過去の思い出さえも根絶させるためであった。再洗礼派たることを欲しない者は故国を去らなければならなかった。彼らの財産は没収された。このようにして、ミュンスターでは人々は「兄弟」以外ではありえなかった。それにもかかわらず、対立不和と無政府状態は反乱者たちのあらゆる行為において支配的であった。（指導者の一人であった）ジャン・マティス（Jean Mathys）は、住民の同意のもとに全権威を自分一人に集中した。住民は多分、このようなやり方の方が統治はより平穏でより公正（レギュリエール）なものになると希望したのであろう。財産はすべて司法（マジストラ）の命令によって共有にされた。この権力は絶対的であり無制限であった。些細な過失に対しても彼らは死刑を宣告した。巨大な炊事場が毎日各家族に対して必要な食糧を配給した。ジャン・マティス■がミュンスターを包囲しに来ていた大司教の軍団に出撃して死んだ後、彼を継

いだのはジャン・ドゥ・ライデ（Jean de Leyde）であったが、後者は前者を凌駕していた。彼は基本的な法（コンスティテューション）を廃止させ、彼のメガホンにすぎなかった十二人の裁判官にあらゆる権限を付与した。彼は一夫多妻を制度的に認めた。これは重大な対立を惹き起したことであった。彼も、その他の指導者たちも真のハーレムをもっていた。離婚の自由（ファキュルテ）が一夫多妻と結合して、ミュンスターは完全な雑婚（プロミスキュイテ）の劇場となった。比較的節度のある人間は武器を手にこうしたやり口に反対しようとして斬首された。何らかの方法で、多数者の決定あるいは行為に反対した者にはすべて同じ運命が襲った。このようなやり方は個人の道徳観の上にもはね返った。しばしば個々人の間で些細な過失が死刑によって罰せられた。ジャン・ドゥ・ライデは遂には精神的ならびに世俗的な全権威をその手中に収めた。彼はまず取り巻きを形成することから始めた。そして平等の信奉者たちの中で最も激しい者が、しかめつらしい称号や名誉を執拗にせがむ、最もたるんだ人間どもとなった。共同体のすべての財産は最高の華美を示した君主の所有するものと見なされた。そのために彼は、糧食と同じく、町の中にあった宝石と貴金属のすべてを自分のところに持って来させた。他方で彼は全市民に対して、最大限簡素な生活を命令した。人々は外部の「兄弟」の助けによって全世界を新たなシオン、ミュンスターの支配下に置くことを願っていた。再洗礼派は実際、周辺の国々の中できわめて強力であった。しかし革命の呼びかけはミュンスターの人々が願ったようには受け容れられなかった。原因は、革命の企ての後にやって来る速やかな弾圧処罰であった。そして突如ミュンスターで飢饉が起り、包囲された人々をまもなく大量に殺してしまった。王とその取り巻きたちは何一つ不自由していなかった。反乱は分裂しようとしていた。ジャン・ドゥ・ライデはそれを前以って防ぐために恐怖体制を開始した。不平をもらす人間は誰でも処刑された。遂に一五三四年六月、司教は急を襲ってミュンスターを占領することに成功した。王とその他の指導者たちは殺害された。残りの再洗礼派の処罰は苛酷をきわめた。

（1）十四世紀末―オランダにおける反乱。■改行■一五〇三年―Spire 周辺における Bundschu（短靴農民の一揆）。■改行■一五一三年―Brisgau 周辺における Bundschu。■改行■一五一四年―ヴェルテンベルグにおける貧乏なコンラッドの同盟。■改行■一五一五年―コリントとハンガリーにおける農民の反乱。

（2）J. H. Merle d'Aubigné, *Hist. de la Réformation du ■XVI■ siècle*, Paris, 1835-47, 3e vol., p.258.

（3）*Ibid.*, p.260.

（4）Henrici Otth, *Historia Anabaptistica*, Basileæ, p.10.

（5）著者不明（Père Catron?), *Histoire des Anabaptistes*, Amsterdam, 1699, p.2.

（6）*Ibid.*, p.19-20.

（7）Cité par Janssen, *op. cit.*, 2e vol., p.410.

（8）Janssen, *op. cit.*, 3e vol., p. 335.

共産主義的集団（ソシエテ）のこのような試みは、これ以上完璧な不成功はないほどのものであった。それにもかかわらずこれは、一五六七年にいま一度ネーデルランドで再洗礼派の新しい王国を設立しようとする試みを妨げるものではなかった。靴屋であったジャン・ドゥ・ウィ

ルヘルムセンは何年ものあいだその配下と共に殺人と掠奪に明け暮れして国中を恐怖に陥れた。しかしこの山師が再洗礼派の新しい王になることを望み、財産を共有する集団を樹立しようとしたとき、この運動は急速に鎮圧され、彼の計画が実行されることは全くなかった。

カンパネラ（Campanella）が『太陽の都（*Cité du Soleil*）』を出版した後で、ナポリ王国で革命が勃発したことを我々は知っている。カラーブル（Calabre）の陰謀の直接の目的はカンパネラの理想郷を実現することであった(1)。この陰謀は深刻なものであった。修道僧、騎士、盗賊、そしてトルコ人さえ、これに関与していた。この陰謀は知的な指導者トーマス・カンパネラと、作戦の指導者モーリス・ドゥ・リナルディ（Maurice de Rinaldi）をもっていた。武装した三百から四百人の人間が、決められた日に、まずカタンツァーロを占領し、次に民衆の味方によって王国の全体を占領し、そして「太陽の都」の体制を樹立するはずであった。しかし陰謀は露見した。事情に通じていなかったトルコ人たちが三十艘のガレー船を率いてスティロ（Stilo）に上陸しようとやって来たのである。陰謀に加担した者のうち主要な者は殺された。カンパネラは獄に入れられ、そこで二十九年間生きた。あらゆる社会階級からなるこの反逆者たちは、カンパネラの社会変革の理論と彼の権威に魅了されて、彼に従っただけであった(2)。陰謀の露見に続いて行なわれた裁判における供述の中に、カンパネラの理想郷と無関係の、それとは別の共産主義的党派の存在を確認することはできないであろう。

(1) B.Croce, *Il comunismo di Tommaso Campanella*, dans le volume *Mater. Stor. ed. econ. marxista*, p.248; trad. franç., p.284.

(2) B.Croce, *op. cit.*, p.249; trad. franç., p.284.

イギリスのチャーティスト運動は、一八三〇年から一八四八年にかけて西欧を襲った壮大な民主主義運動の中の一エピソードにすぎない。この民主主義運動を、それが起ったそれぞれの国について個々に検討する場合には、それぞれの国において異なる諸原因を見ることが可能である。しかしそれを全体として考える場合には、同じような一般的結果が同じような一般的原因をもっていなかったと考えることは不可能である。ところでその原因の一つは周知のものであって、大工業の時代が始まっていた西欧において果された、経済的変容のうちにそれを見ることができる。社会の新しい経済的構造には新しい統治形態が対応しなければならない。そしてこの視点から、ヨーロッパの大国における立憲体制の出現と、イギリスにおいて寡頭政治からますます民主主義へと変化したこの立憲体制の変容―類似の変化はスイスでも同じく生じたのであるが―は、主要な部分について説明することができる。この運動の現代版の一つとして「史的唯物論」が生まれたことは理解することができる。なぜなら、一九世紀にヨーロッパで起きた政治的変容は実際、少なくとも部分的には純粋に経済的な原因の壮大な結果だからである。

しかしながらその他の原因も無視することはできない。一八四八年におけるイタリア中南部の革命運動、あるいは同じ時期のハンガリーの革命運動を経済的原因によって説明することは困難である。そこでは民族（ナショナリテ）の観念が優越的な役割を演じている。ヨーロッパの中心部ではこの民族の観念は経済的動機と結びつき、強力なドイツ帝国の体制を準備する。

イギリスでは運動は基本的に民主主義運動であった。近代的大工業の諸特徴がはじめて現われた産業である繊維産業は、同じく労働者の強力な団体（アソシアシオン）がはじめて設立された産業でもあることは注目すべき事柄である（1）。綿の製糸労働者は全国的組合を設立した。そしてマンチェスターの綿糸工たちの書記であったドハティー（Doherty）は、イギリスの全ての賃金生活者の組合を設立するという壮大な計画を温めていた。同じくオーウェン（Owen）も、「全ての労働者階級を一つの壮大な団体（アソシアシオン）に含める全国的組織を形成し、各部署が他の部署において行なわれていることを知るようにし、個人的競争を止めさせ、全ての工場を全国的な仲間組織（カンパニー）として設立すること」（*loc. cit.*, p.135）を自らの課題としていた。一八三〇年から一八三四年にかけていくつかの革命運動が起ったが、闘争は工場主と労働者のあいだで激しかった。工場主たちは最後には勝利したが、それも束の間であった。組合は再建され、そして今度はもっぱら経済的な目的をこととしていた。彼らは経験の教えるところを役立て、ゆっくりとしかし確実に地歩を固めることを知り、現在彼らが有している巨大な力の水準にまで到達した。

（1）Sydney et Beatrice Webb, *Hist. du Trade-Unionisme*, trad. franç., p.117.

一八三七年から一八四二年にかけてチャーティスト運動が起ったとき、労働組合は少なくとも公式的にはそこから距離を取っていた（1）。この運動は基本的には急進的であり民主主義的であった。一八三八年に議会に提出され人民憲章と呼ばれた請願の六つの基本点は次の如きものであった。すなわち、普通選挙、無記名投票、下院議員への手当、納税額による被選挙権の廃止、年一回の議会、選挙代理権を平等に分配するために国をいくつかの選挙区に分割すること、であった。労働者たちはこれらの要求を一人一人の立場で支持し、チャーティストの騒動に加わった。この時期から、社会問題を解決するためのゼネラル・ストライキという考え方が現れるのが見られる。今日再び採用されている考え方である。一八三四年には八時間労働制を獲得するためにゼネラル・ストライキが提起された。一八四〇年には、チャーティストは労働者に八時間労働制を勧告した。すべての労働者たちは憲章が認められるまでは働くことを差し控えなければならないはずであった。このようなストライキが試みられた。しかしこれは全く成功しなかった。

（1）Webb, *loc. cit.*, p.180.「労働組合がいかなる時点であれ、チャーティスト運動に加わったということを信ずる理由は全くない。一八三三年から一八三四年にかけて、オーウェンの運動には参加したのであるが…。」

チャーティスト運動は少しずつ衰微した。乱暴者はますます耳を貸されなくなり、その支持者は散り散りになった。他方で平和的な手段がますます信頼を獲得した。

チャーティストの騒動に部分的に似ているのは一八三六年から一八五二年にかけてドイツに起こった騒動である。この運動は「共産主義者同盟」の運動と結びつき、そして共産主義者同盟からはインターナショナルの中の最も活動的なメンバーが何人も出ている（1）。インターナショナルは彼らを通じてパリ・コミューンにまでその影響力を拡大した。パリ・コミューンはヨーロッパで起った少しく重要な社会主義的・革命的な運動の最後のもので

ある。その不成功は結果として、最も知的な社会主義者たちを平和的な道に向かわしめたように思われる。今日では彼らは投票用紙によって権力の獲得に向って進もうとしている。そしてなお、時に革命の案山子を彼らが振りかざすとすれば、それは主として彼らの支持者の中の衝動的な人間や暴力的な人間をあまり不満にさせないためである。

（1）Engels, *Einleitung zur Geschichte des Bundes der Kommunisten.*「現在見られる労働者インターナショナルは結局はドイツにおける運動の延長である。ドイツにおける運動は国際的な労働運動の最初のものであり、『国際労働者協会』の何人もの指導者を生み出した。『共産主義者同盟』の理論的原理は、一八四七年の『共産党宣言』の中に書かれている原理、今日ヨーロッパ及びアメリカのプロレタリア運動の最も強力な絆をなすものと同じである。」

第五章　宗教システム

宗教的共同体―現象の普遍性―急速な退化―ピタゴラス学派―ギリシア・ローマの哲学者―仏教の隠修修道会―チベットにおける仏教的神政政治―カトリックの隠修修道会―カタリ派―Les Patarins托鉢修道会―宗教裁判―これらの機関は経済的観点からすれば、すべて寄生者である―生産に専念した隠修修道会―自由企業と比較した場合の隠修修道会の経済的弱点―合衆国における宗教的社会主義共同体―現代の社会的キリスト教―それは社会的な大動向の影響を蒙った―キリスト教徒はかくして権力の側に身を置く―この運動の影響範囲―それは特に過去に回帰する傾向を有する―労働者および小所有者におけるそれの結果―それの新しい戦術。

昔から、そして非常にいろいろな国民のあいだで、社会そのものの中に小社会、すなわち宗派や信徒団体が形成されるのが見られる。宗教的感情――最広義における――は一般にこのような団体にとってのセメントである。尤も、利益や、さらには快楽の追求だけが問題になっているような場合も多数存在するのではあるが。

強烈な宗教感情の支配のもとでは、この信徒団体は、彼らがその一部をなしている社会の平均的タイプから著しく逸脱することがありうる。逸脱は一般にいくつかの受動的徳性の高揚の方向において起きる。すなわち、自己放棄、この世の快楽の無視、したがって富の無視、共同体への、そして時に社会全体への個人の完全な献身、である。

かくして我々は、いくつもの社会主義システムが基礎を置く、愛他主義的理想が実現される可能性の事例を持つことになる。利己主義的感情が愛他主義的感情に場所を譲るということはありえない、と言ってこれに反論することはできないであろう。なぜなら我々はいつでもどこでもそのような事例をもっているからである。しかし愛他主義的感情の高揚という特性を示すのは極端に限定されたエリートにすぎないことは付言しておく必要がある。共同体がエリートだけではなく、大衆も含まなければならないとき、それは組織を変更することを余儀なくされる。原始キリスト教共同体は、信者の数が桁ちがいに増加したとき、共産主義的団体（ソシエテ）としては消滅した。少数のエリートだけがずっと後まで修道院を設けることによって同じ生活法を続けた。仏教においても同じような変化が確認される。さらにこのエリートたちもきわめて急速に堕落し、彼らがそこから離れていた平均的類型に復帰してしまう(1)。最後に不思議な現象が生ずる。きわめて発達した愛他主義的感情が共同体内部における反目および時に非常に強烈な敵対と共存するのが見られるのである(2)。かくしてこの問題について我々が知っている歴史的事実は、大多数の人間における感情の根本的変化の可能性を証明するどころか、平均的類型の存続力の異常な強さを証明している。

（1）　平均的類型への一般的回帰についてはゴールトン（Galton）の著作を参照。

（2）　（ベイルによって引用されている）カマルドーリ修道会の総会長アンブロワーズ（Ambroise）は一四三一年から三二年にかけて、イタリアではいくつかの男子修道院で「剣と棍棒による切り合い、殴り合いが行なわれた」ことを確認している。同一宗教の異なる修道院のあいだの敵対は時に一層激しいものがある。サン・ジュアンの修道騎士会に対する聖堂騎士の内戦はよく知られている。Fa-Hien が述べるところによれば、一五世紀セイロンでは、仏教徒の異なる修道院は相互

に傷つけ合い分裂し、二派に分かれた。これら二派のうちのいずれが政府の支持を獲得するかによって、一方が他方の修道院を破壊させ、その修道僧を迫害した。(Barthélemy Saint-Hilaire, *Le Bouddha*, Paris, 1860, p.352.)

古典古代における最古の信徒団体はピタゴラス学派のものである。それは宗教的ならびに政治的な性格を帯びていたが(1)、強烈な反感敵意をかき立てていたように思われる。それはしかしまもなく堕落腐敗した。オルフェウス教団がピタゴラス学派の残存分子を取り込んだ。プラトンはそれについて厳しい語り方をしている(2)。オリエントの影響はギリシアおよびローマ世界に対して、Métragyrtes, Sabatiens, Corybantes, その他類似の、いくつもの宗教的信徒団体を与えた(3)。Cybèleの司祭団体は中世における托鉢修道会および鞭打苦行僧との驚くべき類似を示している(4)。

(1) これはZeller (*La philosoph.des Grecs,* ■I■, p.321, de la trad. fr.) の見解である。「ピタゴラス主義の本来的基本要素は…ピタゴラスについての最も古い物語の中で最も強調されているもの、ピタゴラス学派の非常に古い大饗宴の中に現れていたもの、である。…私は道徳的宗教的要素を言いたいと思う。」p.311-312「ピタゴラス学派の中の最高位にある人間たちは、最新の情報によれば、財の絶対的共有の中で生活していた。彼らは非常に綿密な生活規則をもっていた。…彼らは厳格に独身生活を強制されていたとさえ言われている。信頼するに値する最も古い証言は、ピタゴラス学派の人間のその兄弟や友人に対する忠実さを大いに称賛しているけれども、財の共有については認めていない。…」p.314.「ピタゴラス学派の人々の独身生活については比較的最近の著作家たちにさえ知られていない。」Groteは *Hist. de la Gr.*, trad. fr., ■VI■, p.263-264で、ピタゴラス学派の会について語りつつ次のように述べている。「会の総会長は、二世紀の間ジェスイットに顕著に見られたような人間たちを利用する才能をもっていた。ピタゴラス学派の人間はジェスイット派の人間とさまざまな点で非常に大きな類似性をもっていたのである。」

(2) *Civit.,* ■II■, p.364.

(3) Phrygieからアテネにやって来たと言われるあるmétragyrteあるいはla Grande Mèreの司祭は、Cybèleの秘儀に婦人たちの入会を許したために、le Barathreに突き落とされた。しかしある悪疫が発生し、アテネ人たちはこの殺人を贖うためにCybèleの儀式教義を許した。この宗教は次いでローマに導入された。

(4) La Mothe Le Vayez, ■*Oeuvres*■, Paris, 1662; 1er vol., *Vertu des Payens*, p.624-625.ストア学派の哲学者たちは「徳が高くさえあれば人は大きな苦痛の中でも幸福であることができると主張した。そして、ストア学派がキリスト教と最も適合するのはこの点においてである。…聖Hierasmeは(*In Isa.*, cap.10)、ストア学派の教義は多くの点で、キリスト教の教義と非常によく合致するとはっきり言っている。」

この時代の宗教的熱狂錯乱は新しいものではなかったが、ただそれは、全人口に及ぶものであった。ギリシアやローマにおいてはそのような現象は下層階級や迷信的な人間に限定されていたのである。ルシアン(Lucien)の『ロバ(*L'Ane*)』や、アピュレー(Apulée)の『変態(*Métamorphoses*)』は、シリアの女神の司祭たちの風俗を、もっと後に詩人Nigellusや、さらにもっと後ではボッカチオが当時の修道士の風俗を描くために用いたのと同じ調

子で描き出している。

ギリシアの古代哲学者およびその後継のローマの哲学者たちは、宗教的修道会を形成しはしなかったけれども、カトリックの聖職者および修道会と一つならず類似点を示している。最初は最も純粋な道徳を実践し、何人かはこの原則に対する忠実を維持するが、大多数は腐敗と偽善に落ち込む。ルシアン（1）はこれについて、後にエラスムス（Erasme）やHuttenが修道士について語ったのと同じように、また一八世紀の終りに腐敗した高位聖職者について人々が語ったのと同じように、語っている。この一八世紀の終りの時代に「ディレクトゥール」が置かれたのであるが、異教ローマは既にディレクトゥールを知っていた（2）。そしてこの機能を果していた哲学者たちはその後継者たるカトリックと比較して良くも悪くもなかった。双方とも、頽廃期にあるエリートの■読めず・６８１■を吸収し（3）、彼らを滅亡に至らせる破壊の作業を急いだ。再び今日、この役割は倫理的社会主義者によってブルジョアジーに対して果されている。Appienは、権力に到達した「哲学者」について、将来も繰返されるであろう一つの観察を述べている。このような哲学者は無知な専制君主よりも厳しく権力を行使すると彼は述べている（4）。

（1）　*Icaroménippe*.

（2）　Voltaire, *Dict. Phil.* s.v. Directeur.

「彼は、起こり得るあらゆる場合について、何をなすべきか、何を認めるべきかを教示することができる。」これはまさに、大家のローマ人が自分たちのかたわらにもっていた哲学者が行なったことである。それゆえヴォルテールが次のようにつけ加えたのはまちがいである。「…我々の通常の礼節が異教的と形容している諸民族にあっては、スキピオ、トラヤヌス、などフラヴィヌス後の各皇帝がもっていたようなディレクトゥールがいない。」■改行■セネカ（Sénèque）は*Epist.*, 94で、個別の各場合になすべきことを教示する相談役について語っている。「Sic incede, sic coena! Hod viro, hoc feminae, hoc marito, hoc caelibi convenit!」■改行■Gellは彼が判断しなければならない疑問を伴なう事例の場合には友人のFavorinusのところに相談にかけつけた（■XIV■, 2）。■改行■「（ディレクトゥール）ただ一人で何人もの（女性を）支配している。彼は彼女たちの精神と記憶を耕やし、彼らの信仰を決定する。彼は彼女らの魂さえ規制しようとする。彼女たちは彼の目と顔付きをうかがった後でなければ同意も反対も称賛も非難もしない。彼は彼女たちの喜び、苦しみ、願い、嫉妬、憎しみ、愛情の預り人である。」（La Bruyère, *Les Caractères: Des femmes.*）

（3）　Renan, *Les évangiles*, p.382.「老年期に入ってから規則正しく、正統派的で、厳格潔癖になるのは、拘束とか抑制のない生活を送った貴族階級の固有の特徴である。かつて存在したなかで最も恐ろしかったローマの貴族はいまや徳、繊細、謙虚の極端な洗練以外には何ももっていない。」ルナンは偽善をもつけ加えるべきであっただろう。エリートの弔鐘を鳴らすこれらの言葉はローマ貴族階級の魂の状態や現代のブルジョアジーのそれをともに巧みに描いている。

（4）　Bell. *Mith.*, ■XXVIII■.

アジアには隠修修道会がたくさんあり、非常にしばしばヨーロッパのカトリック修道会と似たところを一つならずもっている。インドの禁欲主義は最高水準に達しており、カトリックの聖者の禁欲主義に凌駕されることはない（1）。

（1）仏教についてはBurnouf, *Introd. à l'histoire du buddhisme Indien*, Paris, 1844, t. 1er, p.159を、yanismeについてはBarth, *Les religions de l'Inde*, Paris, 1879, p.87を、シバ教についてはBarth, *op. cit.*, p.128を参照。

仏教とYanismeはバラモン教に対する、民主主義的、社会主義的、そして禁欲主義的な反動であったように思われる。バラモン教は仏教が出現したとき、甚だしく腐敗していた。仏教は道徳的社会的な革新運動であったが、見るであろうように長くは続かなかった。仏教の創始者であった釈迦牟尼は弟子たちのあいだに一切の差別を設けなかった。カーストの貴族体制に対して彼は完全平等の民主主義体制を対置した。仏陀とその最初の弟子たちの一部は教えを説き施し物で生きながら国中をまわった。しかし信者の大部分は森の中や人里離れたところで隠遁生活をしていた。毎年彼らは師の法話を聴くためにVishâraに集まった。「それゆえles Vishâraは最初一時的滞在地にすぎなかった。…しかしながら、…ひとたび僧侶たちが共同で住むことのできる固定的な住居を持つようになるや、彼らを相互に結びつけていた絆は一層緊密にならざるを得なかった。敵対者からの攻撃に抵抗する必要があったからである（1）。」僧院が生まれ、それとともに差別とヒエラルヒーが生まれた。僧侶たちは少しの間規則に従って組織された団体（コール）を形成していた。それに加入するためには特別の信任ないしは叙任が必要であり、ある生活体制・方法に従うことが必要であった。同じ規則が尼僧にも課せられていた。苦行僧は民衆に対して絶大なる影響力をもっていた。これら二つの修道会の下にただの信者がいた。

（1）Burnouf, *op. cit.*, p.285.

変化はカトリック教の場合と同じである（1）。そして仏教のヒエラルヒーはカトリックのヒエラルヒーと同じくらい強力な政治的作用を及ぼした。インドにおいては、仏教の恐ろしいほどのヒエラルヒーは、王たちと力を競うことも恐れなかった。セイロンでは仏教僧は諸侯の弱さあるいは信仰につけこんで、法外な特権を獲得するに至り、さらには王に対してさえ自らの意思を押し通すまでになった。十世紀とそれに続く幾世紀かの間、彼らは遂に王に対する反乱に味方するに至った。一七世紀には王たちは僧から特権を剥奪しなければならなかった。彼らは余りにしばしば特権を濫用したのである（2）。中国では皇帝は八四五年仏教僧の数を減らさねばならなかった。仏教僧の力が皇帝たちの力を脅かしたのである（3）。チベットでは仏教僧は君主を追放し、その位置に自らを置くことに成功した。

（1）Le Père Hucは*Voyage dans la Tartarie*, ■II■, p.103, 112.において、仏教とカトリック教とのあいだに存在する奇妙な類似を我々に示している。「ダライ・ラマが旅行の際、あるいは寺院の外で何か儀式を行なう際に身につける、上部が渦巻状になった牧杖、先の尖った高僧帽、袖の短かい法衣、長袍祭服あるいは大外衣、二つの聖歌隊の応誦（?）、詠唱、祓魔式、五連の提香炉、ラマによる授福式、数珠、僧侶の独身生活、求道的隠居、聖人崇拝、断食、行列式、連祷、聖水。これらはすべて、仏教徒が我々と共有する類似的なものである。」ダライ・ラマの衣裳は「正確にカトリック司教の衣裳である。」ラマ教の教主の衣裳はカトリックのローマ法王の衣裳と間違うほ

どに似ている。

（2）　Barthélemy Saint-Hilaire, *Le Bouddha et sa religion*, Paris, 1860, p.403.

（3）　Pautiers, *Chine*, Paris, 1838, p.326.

仏教とカトリックとの並行的変化以上に参考になるものはない。これら二つの宗教は、遠く離れたところに住んでおり、ほとんど、あるいは全く何の関係もない民族によって奉ぜられた、非常に異なる宗教なのである。

仏教僧侶の腐敗は、ある時期にカトリック聖職者について認められるものの正確な写像である。最初の時期、出身階級が低く、自己犠牲的で全く簡素な生活をしていた托鉢僧は、彼らの暮しぶりを世俗の行動やバラモンの高位僧の贅沢で腐敗した生活と比較していた民衆の好感を得た。民衆は仏教の行者を聖者と見做すようになり、以前はバラモンに与えられていた敬意と贈与の大部分を彼らに帰属させるようになった。しかし仏陀の存命中既に堕落の兆候を示していた仏教僧の生活は仏陀の死後急速に頽廃した。死後七日が経過するかしないうちに「Soubhadra と呼ばれていた老僧が会衆の中で次のように言った。『泣き給うな。なぜならこの禁欲者ゴータマ（ブッダ）の死は我々にとっては解放であるからだ。我々は押さえつけられてきたのだ。彼は絶えず、これはよろしい、あれはいけないと言ってきた。しかし今や我々は欲するところをなすであろう。そして気の向かないことは差控えるであろう[1]。』」仏教の僧侶たちはそのきわめて清潔な品性によって、バラモン教の聖職者から信者と寄付とを奪った。ほどなく彼らの品性は堕落し、彼らはバラモンの運命を蒙った。攻守はところを換えた。仏教徒の急速な腐敗にうんざりした民衆は再びバラモン教に向う。バラモン教は仏教僧の恐るべき競争者となる[2]。仏陀の死後催された何回かの会議は何千となく腐敗僧侶を追放した。しかし持続的な形で規律を固めることには一度として成功しなかった。中国の仏教僧であった Hiouen-Thsang（龍樹？）は紀元六二九年から六四五年にかけてインドを訪れ、「この時期に既にインド仏教は完全に堕落しているのを見た。H.-Thsang はいくつもの場所で見捨てられた僧院を見た[3]。」実際仏教僧のますますひどくなる腐敗は最後には非常に深くインド民衆を失望させ、バラモン教の逆襲をもたらした。仏教は敗北し、インドの主要部分から姿を消した。仏教とキリスト教との類似はここで終る。キリスト教は宗教としては異教に対して十分決定的に勝利した。そして、古典文明の流れがルネサンス時代に再び盛んになり、もはやとどまることはなかったとしても、オリンポスの神々は永遠に消え去った[4]。

（1）　Kern, *Histoire du bouddhisme dans l'Inde* (*Revue de l'hist. des relig*), 1882, ■Ⅰ■, p.225.

（2）　Kern, *op. cit.*, ■Ⅱ■, p.225.

（3）　Barthélemy Saint-Hilaire, *Bouddha*, p.273, et p.339.

（4）　Renan, *op. cit.*, p.110. Barthélemy Saint-Hilaire, *op. cit.*, ■Ⅱ■e partie.

ヨーロッパの野心的な法王が望んだ神政政治的支配はチベットで仏教僧によって実現された。福音書の教えから、クレゴリウス七世によって用いられた信条までの距離は、釈迦牟尼の教えからチベットのラマ教の実践までの距離に等しい。僧侶達は豪華な生活を送り、

その数は厖大である。ラサ（首都）では彼らの数は多分一般住民の数よりも多いであろう。ダライ・ラマは王でもあり神でもある。彼は絶対的かつ無制限の権力をもっている。彼は臣下の生活の支配者であり、あらゆる土地、動産、不動産の所有者である。夫役と課税により、この巨大な僧侶ヒエラルヒーの長は民衆を窮乏化させる。「お偉方（マンダリン）によって宣告される最も頻繁な刑罰の一つは全財産の没収である。受刑者は土地と家屋を放棄しなければならず、テントで生活しなければならず、彼らに指定された地域に行って年間少なくとも数回も乞食しなければならない。この*tchong-long*と呼ばれる人々は非常に多数なので、国家の中の全き一階級を形成する（1）。」ラマ自身も商売と金融（高利貸）に従事しており、それも国内外にわたっている。いくつかの僧院は全くの商業都市になった（2）。より多数の信者と購買者を引きつけるために、僧侶たちはさまざまの娯楽、気晴らしを提供し、僧院で生ずる乱れに目を閉じさせようとする。このようにして集められる富は莫大なものである。この僧侶たちが、仏陀の追求した清貧の理想、古代インドの宗教詩によって我々に伝えられている次のような清貧の思想から如何に遠いところにいるかを見ることができる。

■
衣三着と皿一つ。
小刀一つ、針一本、帯一本、
それと濾過道具。これら八つが
托鉢僧に要るものすべて（3）。
■

（1）Reclus, *Géogr. Univ.*, Asie Orientale, Paris, 1882, p.98. この著者については、チベットにおけるラマの行政についての、多分誇張された描写を参照。

（2）J. Moustier, *Les villes de marché sur les hauts plateaux asiatiques* (*Science Sociale*, 1899, 6e fasc.).

（3）Kern, *op. cit.*, 1882, ■I■, p.69.

もし社会主義的宗教がいつの日かいくつかの国で支配するならば、多分、それが今日宣言するところの平等原理とそれが樹立するであろうヒエラルヒーとのあいだに同じような距離を見るであろう。それはチベット仏教において起こったことである。ダライ・ラマはラマ教ヒエラルヒーの長である。彼は中国の名目的な主権の下で全チベットを支配している。彼の下に、各州を統治するLamas-Houtouktousがいる。さらにその下に、聖職ヒエラルヒーの四段階がある。次に男子及び女子の僧院があり、そこでは異なる僧院の間および同一僧院内部の構成員の間に、いくつものヒエラルヒー的な段階が存在する。聖職■階程■の最後の■階程■は、カトリック平信徒の信徒集団および修道会に非常によく似た団体によって形成される。

キリスト教の隠修修道院を我々の観点から研究すると、ある不思議な光景が目に映る。何世紀ものあいだ途切れることのない禁欲の小エリートの存在が認められるのである。彼らはしばしば、異常に才能に恵まれた個人の影響の下に、最高の道徳水準に到達しようと試み、そしてそれに到達した後、すぐさま毎世紀しばしばより深刻でさえある■世俗的■

腐敗に陥る。こうしたエリートが出現する日は彼らの堕落が始まる日からあまり離れていない。そしてエリートが構成されるやすぐ、エリートを本来の姿に戻すことが問題にされる。これはなにものも停止することのできない間断なき運動である。一五世紀の前半に、■Pakôme■はナイル河流域に修道士的な禁欲生活を導入した。修道院の数はすぐ非常に多くなった。しかし堕落は非常に速やかに始った。■Pakôme■は修道士たちの素行を元に戻そうとして彼らに危うく殺されかけた。彼の後継者 Schnoudi も同じことをしようとして、彼らから暗殺を企てられた(1)。Athanase(アタナシアス?)はローマに修道院制度を導入した。少しずつこの制度はローマ世界全体に広がっていった。しかししばらくすると毒麦が良い小麦の成長を妨げるようになった。既に三八五年にローマ教皇 Sirice は教皇教令を発し、その中で修道士及び修道女に対してあらゆる性関係を禁じた(2)。この時点から我々は非常にさまざまな著作の中で、修道会の非常に急速な堕落腐敗についての、時に誇張された証言に絶えず遭遇することになる。既に五世紀において修道士という職業は最も追求される職業の一つになっていた。聖アウグスティヌスは次のように述べている。「現在人々は、奴隷身分を免れて、あるいは元々自由な身分で、あるいは彼らの主人がその目的で彼らを解放することによって、神に仕えるためにやって来る。あるいは別の場合には、彼らは農業に、あるいは最も低い層の職人、労働者に由来する。そして、彼らがやって来たのは、神に仕えるためであるか、あるいは窮乏と労苦の生活から逃亡し、衣食を供され、さらには、彼らを常に軽蔑していた人々から尊敬されるためであるか、は分らない(3)。」あるエジプト人はアセニウス(Assenius)に、修道士の生活は牧人の生活よりも好ましいと言った(4)。同じく今日においても、ストライキ指導者の生活が労働者の生活よりも良好であるような場合は一再ならずある。

(1) Amelineau, *Le christianisme chez les Coptes* (*Revue de l'hist. des relig.*, 1886., ■II■, p.330-1); P. Ladeuze, *Etudes sur le cénobitisme* ■*pakomien*■, etc., Paris, 1898, 2e partie.
(2) C. 3, 4, D. lxxxii; cité par. L. Bocquet, *Etude sur le célibat ecclésiastique*, etc., Paris, 1894, p.102-3.
(3) Saint Augustin, *De oper. Monach.*, cap.22.
(4) Tillem., *Mém. ecclés.*, t. ■XIV■, p.679.

五世紀には Zosime が「キリスト教徒が修道士と呼ぶ人々」について次のように語っている。「彼らは—と彼は言う—正式の婚姻関係を結ぶことを差控える。彼らは町でも村でも、未婚の男性の共同体を多数形成し、戦争にも、また共和国のその他の必要にも、何ら益するところはない。その起源から今日まで徐々に勢力を拡大し、彼らは土地の大部分を奪い取り、貧者に全てを与えるという口実のもとに、いわば全ての人々を貧困に陥れた。■」(V■23)。そのやり方は早い時期から人々の財産継承権を取り上げることであった(1)。

(1) 詩人 Rutilius は五世紀末に次のように書いた。

Processu pelagi jam se Capraria tollit.
Squallet lucifugis insula plena viris.
Ipsi se *monachos* Graio cognomine dicunt,

Quod soli nullo vivere teste volunt.
Munera fortunae metuunt, dum damna varentur:
Quisquam sponte miser, ne miser esse queat?
(Gregorovius, *Hist. de Rome*, en allem., 1859, ■Ⅱ■, 18) における引用。（海を進んでゆくとカパライアという島が現われる。そこは、光を避け、ギリシア語でモナコス、修道士と呼ばれる人々でいっぱいである。そう呼ばれるのは彼らが離れて生活し、見られることを避けているからである。彼らは運命の恵みを疑い、他方では運命の苛酷さを恐れている。不幸であることを恐れて不幸になるということもありうるのであろうか。）

今日人々が熱烈で誠実な信仰を称讃する中世という時代は同時に聖職者の腐敗の時代でもあった（1）。今日と同じように、いつの時代においても人は過去の徳をほめそやし、それを現在の腐敗に対置する。

（1）別の点でもこの時代はまちがって判断されている。Felice Tocco 氏は *L'eresia nel medio evo*, p.1 で、このことについて次のように述べている。「称讃者も反対者も共に誤って融和と平和の時代として語るところの中世という時代は、我々の時代に劣らず深刻で苦痛の多い病を患っていた。一方によれば偉大な傑作を生み出し、他方によれば衰弱と倦怠を生み出した、精神のこのような統一性はつねに願望されてはいたが、獲得されたことはなかった。Charlemagne から Charles de ■Bohème■に至る諸世紀を含む三つの時代のいずれにおいても我々はこのような精神の統一性を確認できない。」

いくつもの点で現代の倫理的禁欲主義と似ており、またトルストイの考え方と特に似ている例のカタリ派の異端が出現したのは一一世紀カトリック聖職者の深刻な堕落の真只中においてである。ロシアの哲学者のはるか以前にカタリ派は、人は悪に抵抗すべからずと教えていた（1）。彼らは何物も所有してはならず、施し物も受けてはならず、全てを共有し、自らの手で労働して生きなければならなかった。彼らは節食し、動物の肉を食べず、そしてあらゆる性的交渉を禁じた（2）。しかし全ての人がこの戒律を厳密に守ることは困難であった。戒律はカタリ派の一階級すなわち完徳者にとってのみ義務的であった。もう一つの階級、いわゆる信者の方はより大きな自由を享受していた。もしカタリ派が勝利し、勝利の後もその原理にとどまっていたならば、彼らが文明を相当程度後退させたであろうことは疑いない（3）。これの方がもっと考えられることであるが、もし彼らが勝利の後その他類似の宗派すべての例に倣って原理を修正していたならば、ヨーロッパ全体が仏教国チベットのようになっていたであろう。ローマが危険を予防した。ローマの政治はつねに、あらゆる種類の行きすぎを避けること、動きをとにかくも堰止めること、それができない場合には方向転換させることであった。右の二つの場合、それから結果しうる社会にとっての悪は回避された。フランシスコ会修道士はカタリ派に似たところがいくつかあった（4）。ローマはフランシスコ会を同化吸収し、カタリ派を武力でもって破壊した（5）。

（1） Moneta, *Adversus Catharos*, Rome, 1743, p.513: 《Isti etiam haeretici omne bellum detestantur tamquam illicitum, dicentes quod non sit licitum se defendere》; p.515:

《Objiciunt etiam illud Matth., v, 38.《Audistis quia dictum est oculum pro oculo et dentem per dente. Ego autem dico vobis: non resistere malo》; p.507:《et illud》 Matth. ■v■, 44:《Benefacite his qui oderunt vobis》. Cité par Tocco, *op. cit.*, p.88-89. （この異端派は戦いを嫌悪する。何故なら自らを防衛することを許されていないからである。…彼らはMatth, ■v■, 38を引用する。「目には目を、歯には歯を、と言われるのを汝らは聞けり。されど我汝らに言う。悪に対して抵抗するなかれ、と。」さらに彼らは、Matth. ■XXII■, 7:「彼は殺人を罰する」およびMatth. ■v■, 44：「汝らを憎んだ者たちに善をなせ」を引用する。）

（2） Lettre de Everninus à saint Bernard (*op. S. Bern.*, éd. Mabillon, p.1487):《Dicunt qui se tantum Ecclesiam esse, et apostolicae vitae veri sectatores permanent, ea quae mundi sunt non quaerentes, nec domum, nec agros, nec aliquid non possidentes, sicut Christus non possedit.》 Moneta, *op. cit.*, p.451:《Et de elemosynis quaerere victum et vestitum blasphaemant… Objiciunt etiam illud.》 Matth., ■VI■, 25：《Ne soliciti sitis animae vestrae quid manducetis, etc.》《Si enim quaerimus quotidie, inde soliciti sumus》, p.453：objiciunt etiam et dicunt quod contra verba Apostoli venimus, quia non laboramus manibus nostris》; p.315：《Haeretici… credunt corpus maris et foeminae a diabolo fuisse factum. Matrimonium carnale fuit semper mortale peccatum.》(Cités par Tocco. *op. cit.*, p.88 et 90.)（彼らは自分たちだけがキリスト教徒であり、真の使徒にふさわしい生活に忠実であり、この世から何も要求せず、家も持たず、土地も持たず、イエス・キリストのように何も持っていないと言う。…彼らは施し物で衣食をまかなう資格を自分たちはもっていないとする。そして彼らは次のMatth., ■VI■, 25を引用する。「何を食せんとて心を悩ますことなかれ…」そして我々が彼らに、我々は日々何に従事すべきかとたずねると、我々は使徒たちの教えに従っていない、と言う。なぜなら我々は労働しないから、と言うのである。この異端派は男の身体も女の身体も悪魔によってつくられたと信じている。性的関係はつねに死に値する罪であった。）

（3） これもF. Tocco, *loc. cit.*, p.126における見解である。「なぜならカトリックの禁欲主義よりも厳しいカタリ派の禁欲主義が、学問、芸術、商業の復興に障害となるものであったこと、そしてもしこれが勝利していたならば、既に中世において始っていた文芸復興の多くを遅滞させたであろう。」■改行■H. Ch. Leaは、*Hist. de l'Inquis.*, tr. fr., ■I■, p.120で同様の見解を表明している。「かくして、この信仰が多数の信者を獲得していたならば、結果としてヨーロッパは原始時代の野蛮に戻ったことであろう（一一一頁）。…さらに、（カタリ教からは）カトリックの聖職者に劣らぬ特権をもった一聖職者階級が出て来たことであろう。そしてこの聖職者階級はまもなく、人間的野心の腐敗作用を深く受けることになったであろう。」ずっと後になってピアグノーニ派が現われたが、これは同じような病的で厳格な禁欲主義をもち、サヴォナローラ（Savonarole）の指導のもとにフローレンスの政府を奪取することに成功した。彼の支配は専制的で反動的であり、あらゆる知的生活、抑制的でさえあっても、あらゆる楽しみに反対した。ピアグノーニ派は遂には、彼らが道徳と宗教にとって危険と信じたすべての対象を公然と破壊するに至った。民衆は全くこれにうんざりし、反逆し、彼らを権力から追放し、教皇がサヴォナローラを焼き殺すのを許した（Villari, *Savonarola*, 1887, *passim*; id., N. Machiavelli, ■I■, p.287-301.）。

（4） P. Sabatier, *Vie de saint François d'Assise*, p.116：「聖フランソワの非常に深いところでの非教会的創造物は好むと好まざるとにかかわらず教会的な一制度となった。それはたちまちに聖職権主義的な一制度に変質せざるを得なかった。」これはありうる悪のうちで最小のものであった。尤

も、このことについては、団体の経済生活に対して関心を払うことを潔しとしない人物でも考えることができるのであるが。

（5）カタリ派は治療した方がよかったことは確かである。しかし当時の人々は心の病気についていかなる観念も持っていなかった。

教会と闘うことを欲したエリートも、教会をつくり直そうと試みたエリートもともに庶民階級から出現したことに注意しなければならない。ミラノでは、Les Patarinsは最初ローマを味方とし、最後にはローマを敵とした。ミラノの高位聖職者は頽廃しており、ローマから独立したいというかすかな望みをもっていた。Les Patarinsはその起源を下位聖職者と民衆との提携にもっており、高位聖職者の品性素行をつくり直し、彼らの権力と富を減らすことを望んでいた。彼らles Patarinsは大聖堂の大司教を武器を手に追放し、教皇ステファヌス九世はこの攻撃の張本人たちを庇護下に置いた。教皇たちは一定期間les Patarinsを保護しつづけた。しかしやがて教皇たちは、les Patarins が余りに遠くまで行くことを望んでいることに気付き、彼らを有罪（コミュヌ）とするようになった。Les Patarinsの影響は結果として、いくつかの場所で司教の権力を市に移行させ（1）、彼らの異端的思想は教皇Adrien四世によって焼き殺されたArnaud de Brescia に霊感を与えた。

（1）これは最も特徴的な例の一つである。一一世紀前半 Crémone に、ある修道院、すなわちサン・ローランの修道院があったが、Patarins の思想に全く病みつきになっていたそこの修道士はすべてブルジョアに味方した。ブルジョアたちは、伯爵司教（le comte-■éveque■?）に対する一世紀間の熾烈な闘いの最中であった。司教は修道士たちの猛烈な敵であり、一度（一〇二四年?）彼らを厳しく罰しようとして民衆の反逆を呼び起こした。《Comperimus quod Cremonenses cives... contra Landulphum ejusdem sedis episcopum eorum spiritualem patronum et dominum ita conspirassent ac conjurassent ut eum... de civitate ejecissent et bonis suis expoliassent.》(*Codice Sicardo* de la Bibliothèque Municipale de Crémone, 35.) もっと後になって司教は町に戻ったが、彼はもはや伯爵ではなかった。権力は民衆の手に移っており、彼らは幾世紀ものあいだ権力を手放さずにいなければならなかった。

托鉢修道会の腐敗はほとんどその誕生と同時に発生した。このことを早くから、そして生涯にわたって嘆かねばならなかった聖フランソワはその遺言のなかで弟子たちの品性素行の弛緩を非難している。ダンテはその『天国篇』の中で、聖トマスにドミニコ会修道士を非難させ、また Bonaventure にフランシスコ会修道士を非難させている（1）。悪は次第に増大せざるを得なかったし、最大の悪弊を生み出さざるを得なかった。

（1）Paradis, ■XI■ et ■XII■.—P. Sabatier, *Vie de saint François d'Assise*, Paris, 1889, p.325.「最初の数年間フランシスコ修道士は召使いとして働くことによって生活の糧を得るという習慣をもっていた。何人かはそれを続けたが、それは少数であった。彼らも少しずつ変っていった。仕えるという口実の下に修道士たちは高位聖職者のあいだに入って行き、彼らの信用するところとなった。一二二一年の規則が言うように、彼らは全ての人間に従順であったのではなく、全ての人間の上にいた。」

聖職者のこのような堕落が非常に深刻なものであったことは確かである。しかし、隠修修道会の富に対する貪欲と放蕩について報告されていることのすべてを信じてはならない。非常にしばしば、大きな誇張が存在するのである。宗教改革家はおのずから、彼らが矯正しようと欲する素行を鮮烈な色彩のもとに描き出そうとする。他方聖職者に対する敵対者は彼らをいやらしいものにしようと試みる。その結果、敵も味方も悪を誇張することになる(1)。

(1) それにもかかわらず悪の存在は、Montalembert や Jean Janssen といった信用できる多くの著者たちによって認められている。結局のところ、否認できない非常に多数の文書が存在する。

さらに次の点に留意する必要がある。すなわち、修道士および聖職者の素行が一般に腐敗するとき、それは単にその時代の俗人の素行に近づいているということにすぎないことである。俗人の素行はきわめて粗野なものであった。人口のある部分の道徳について判断しようとするとき、一般的道徳水準を考慮に入れないならば、重大な誤謬に陥ることになるであろう。

宗教裁判の残虐さが他のすべての刑法の残虐さと調和していなかったわけでは少しもないことはずっと昔から指摘されてきている。カトリック教会に対して厳重な取締まりを迫ったのはしばしば民衆であった。そして、異端に対する迫害の初期においては、異端を救済したのがカトリック教会であるような場合も存在した(1)。中世においては多くの国で民衆は宗教裁判に賛成していた。スペインでは民衆とカトリック教会はつねに一致していた。シャルル三世が宗教裁判の権力を制限したのは民衆の感情に反してであった。シャルル四世が宗教裁判に全面的な行動の自由を与えたのは民衆の感情を助けるためであった。

(1) H. Ch. Lea, *op. cit.*, ■I■, p.247.「一一四四年になってもまだリエージュの教会は、敗北し断罪されていたカタリ派の大部分を、彼らを焼き殺そうとしていた狂乱の群衆の手から取り上げることに、神の恩籠によって成功したことを喜んでいた。カトリック教会がこのように救済した人々は町の修道院に住まわせられ、意見を聴かれた教皇 Lucius 二世の決定を待った。」

現代の社会主義政党は他の宗教の信者のうちに恐るべき競争者をもっている。それゆえ社会主義政党があらゆる手段で彼らを攻撃しようとするのは自然なことである。かくして社会主義政党は現代のカトリックを中世の宗教裁判の行き過ぎについて責任あるものとしようとする。ところで次の点に注意する必要がある。すなわち、もし現代の社会主義者たちが仮に中世時代に生きていたならば、彼らは多分宗教裁判の味方のうちに場を占めていたことであろうという点である。宗教裁判は実際のところ、本質的に民主主義的な制度であった。それは托鉢修道会を民衆のあいだからつくり出し、富者や権力者の上にまで昇らせたのである。結局宗教裁判を恐れなければならなかったのはとりわけ金持ちであった。今日、法律によって聖化されたいくつものやり方で金持ちを収奪することが試みられてい

る。当時は罰金と没収によって金持ちを収奪した。金持ちは今日では反連帯のかどで有罪である。当時であれば異端のかどで有罪である。

「規則的かつ持続的な政策としての迫害が――とCh. Lea(■Ⅰ■, p.596)は言う――本質的に没収に基づいていることは反論しがたい。利益が出なくなるやみじめに衰弱する、信仰への麗しい情熱に対して養分を供給したのはただ没収のみであった。カタリズムが Bernard Gui の攻撃によって消滅したとき、宗教裁判の衰弱が始まり、ただ目立つだけになった。別の異端、精神主義的で、dulcinistes で fraticelles な異端は托鉢修道士であった。彼らは財産を嫌っていた。ヴァルド派は貧乏な小作あるいは司祭であった。せいぜい魔法使いか高利貸がほんのときたま獲物を提供しただけであった（1）。」富に対する軽蔑と財の共有に始まり、最も破廉恥な収奪に終る修道会のこのような変化は、きわめてありふれたことではあるが、注意すべき事柄である。他方、こうした貪欲は非常に誠実な宗教的狂信、現代の我々に観察すべく与えられている別のものに類似した狂信と、完璧に調和することが可能である。

（1）　異端審問官は、ただ理論においてのみ富を軽蔑していた。Giovanni Villani (*Storie*, ■XⅡ■, 57)は、一三四五年フィレンツェで、ある異端審問官による異端を口実としての過度で不当な収奪の結果起きた暴動について述べている。さらに彼がつけ加えているところによれば、ローマの教皇のところに派遣された自由都市の代表国は「異端審問官が異端の口実のもとに二年間に犯したあらゆる詐欺を証明する文書を持っていた。この異端審問官は何人もの市民から七千フィレンツェ金貨をせしめていた。しかしこの時代にフィレンツェには異端者が多数存在したと考えるには及ばない。逆に異端者はいるにはいたが、最も少ない時代であった。異端審問官は、冒涜的言辞あるいは『高利は霊魂の死をもたらすほどの大罪ではない』といった種類の言辞からいちいち金をせしめようとしていたのである。そして異端とされた犯罪者の財産に従って多少とも大金を支払うように言い渡したのである。登場人物の中である種のタイプの人物を描くことに熟達していたボッカチオは似たような事例について語っている。金は持っていたが頭が足りなかった一人のフィレンツェ人が冗談で、イエス様でも飲んだであろうような極上のワインを持っていると言った。異端審問官は彼を異端の廉で断罪した。『結局異端審問官は彼に非常な恐怖を与え、その結果この正直な男は第三者を介して莫大な量の銀貨をこの異端審問官に届くようにした。これは異端審問官が彼に哀れみをたれてくれるようにするためであり、修道士たち、特にフランシスコ派の修道士たちの吝嗇を治療するのに非常に有効なものであった。』(■Ⅱ■, 6.)」

修道会のこうした組織（オルガニスム）はすべて、経済的視点からすれば、それらが生活している社会の寄生者と見做すことが可能である。いくつかの場合には事情はきわめて明瞭である。全体として見れば、修道会組織は、それが生きさせてもらっている社会が破壊されれば、消滅するであろう。

博物学者プリニウスはエッセネ派について語りつつ、既に次のように述べている。すなわち、それは「孤立し、何にもまして独特な民であり、女性も愛も貨幣もなく、やしの木の群居の中で生きる民であった。それは日々新たな住人の流入によって再生産される。そ

して民衆のなかには、生活に疲れて、運命の波によってこのような生活様式を採用する気になる人間が必ずいた。かくして数千世紀もの間（ママ）、信じられないことだが、出生者が一人もいない民が存続することになる。それほどに民衆にとっては、過去における彼らの別の生活の悔恨が多くのものを産み出すのである[1]。」

（1）*Hist. nat.*, ■V■, ■XV（XVV）■; traduction Littré.

聖フランソワの仲間たちは全く何も所有してはならなかった。しかし人々はまだ食べずに生きる手段を発見していなかったので、彼らに食糧を供給する人間がいなければならなかった。もしこのような人間がいなくなれば、あるいは彼らがこれらの立派な僧侶を模倣しようと望みでもしたら、食糧は誰も生産しないのであるから、この仲間全体が消滅してしまったことであろう、

「初期の修道士（フレール）たちは—とP. Sabatierは述べている（八七‐八八頁）—、彼らが非常な喜びと共に参加した貧者たちと同じように生活していた。…彼らは出掛けるとしても、貧しい小教会堂の周辺にいることしか知らなかった。彼らの生活は、今日癩病者の救護所や教会の上り口で寝て、気まぐれにあちこち歩きまわるOmbrieの乞食と同じものであった。」我々の著者はこのような生活を非常に推奨すべきものとは考えない人間を非難する。「修道士（フレール）たちがアッシジに登り、門から門へと乞食したとき、多くの人々が、彼らは財産を失い、その後は他人の財産で生きようとしているとして非難し、与えることを拒んだ。何度となく彼らは、ようやく餓死しないだけのものを持つに過ぎないという経験をした」（九一頁）。しかし、もしすべての人間がこのように自分の財産を蕩尽し、施し物を要求したならば、誰がその施し物を作ったのであろうか。経済学的に言うならばこれらの修道士が寄生者であったことは否定しがたい。このような生活の仕方の正当化は、我々の著者はそれを「反駁の余地なき」ものと判断してはいるが、取るに足りぬものである。アッシジの司教はある日フランソワに言った。「何も所有せずに生きるという貴方のやり方は私には非常に堪え難く苦痛の多いものに思われる。」—「閣下、—と彼は答えた—もし我々が財産を持っているならば、我々は防衛のために武器を持たねばならなくなるでありましょう。なぜならその場合には反目と訴訟の発生源が存在し、神と隣人に対する愛は普通数多くの障害に遭遇するだろうからであります。これが、我々が物質的な富を持つことを欲しない理由であります」（九一頁）。司教は次のように答えることもできたであろう。もしあなたが財産なしに生き続けることができるならば、それは他の人間が財産を持っているということであり、あなたにそれを分け与えているということである、それゆえ、あなたは反目や訴訟を他の人間に委ねることによってそれらを避けていることになる、それは別に慈悲深いことではない、と。

しかし、有益な労働に従事した修道会も存在する。小さな人間集団（ソシエテ）が、それが生活している社会（ソシエテ）から独立して存続することがありうることを妨げるものは、アプリオリには存在しない。諸事実はしかしながら一般にそうではないことを示している。大抵の場合修道院の修道士は非常に単純な作業に従事している。時には修道士たちも非常に難しい作業に従事することがあるが、それは集団にとっては効用の疑わしいものである。いずれにしても彼らは彼らにとって必要なものは何も産み出さない。既に五世紀には我々は、「土をほり返

し、樹木を伐り、ナイル河で漁をし、山羊の乳をしぼり、なつめやしの実を拾い集め、ござを編む」ことに専念するテバイデ（訳注：初期キリスト教徒が隠栖したエジプト南部の土地）の共住修道士を見出す[1]。さらに彼らは織物職人であり、大工であり、皮なめし工であり、仕立て職人であり、縮絨工であった。中世全体を通じて修道士の農作業についての証言は無数にある。彼らは広大な森林を開墾した。彼らは沼沢地帯などを乾燥させ、耕作できるようにした。我々は単に農耕者を見出すのみではない。イオナ島（Jona）(J.-Colm-kill, Angleterre)の修道士は水夫でもあった[2]（五世紀）。同じくCuthbertの弟子でもあった（七世紀）。イオナ島には大きな写字施設があり、カラブル（Calabre）にはさらに絵画と稠密画の実験室まであった（六、七世紀）。同じ時代に、いくつもの修道院に、画家、彫刻家、彫金師、鍛造工、等が存在していた。中世自治都市の華麗な文明化とともに、修道院の富は一般の富と同時に増大し、そして、しばしば最高の価値を有する芸術的生産に専念する修道士の数も非常に増大した。畑仕事に従事した修道士の数も同じように増え、そして修道士の大多数は指物仕事、チーズの製造、ビールの醸造、魚類の捕獲と人工培養に従事した。その他の修道士は織物師であり、つづれ織の製作者であり、毛織物、絹織物の製作者であり、皮なめし工であり、修道院の接待係であり、学校長であったりした。近代になると、時に彼らが蓄積した富と、非聖職者のあいだでの仕事の競争とが、修道士を経済的富の生産にほとんど向かわせなくなった。しかし多数の例外が存在する。トラピスト会修道士はアルジェリアの一部とローマの田舎の一部を衛生的環境にした。ゲッセマニ（ケンタッキー）では彼らは家具を製造し、印刷工であり、デザイナーであり、香辛料を砕き、料理道具を修理し、農業に従事し、蹄鉄工、牛乳配達人、等である。最近の調査では、フランスでは日常生活のほとんどすべてのもの、そして奢侈品まで製造している修道院が多数存在することが示されている。しかしこのような生産だけではこの集団が一般に必要とするものすべてを供給するには足りないであろう（例えば修道院で機械を製造するものは存在しない）。このような生産は機構の支出をまかなうに足りない。そして最後に、このような生産は、修道士の極端に節約的な生活によってしか、自由労働との競争を維持することができない。

（1）　Montalembert, *Moines d'Occid.*, ■I■, p.70.

（2）　Montalembert, *op. cit.*, ■III■, p.228.

独身制を奉ずる共住修道院（コミュノテ）はすべて、子供を養育するための出費を避けることができる。このための出費は相当な重みをもち、自らを維持している、あるいは進歩している人間社会はすべてその資源のうちの顕著な部分をそれに充てなければならない。独身者の共産主義的団体が獲得する経済的成果を、我々の社会が獲得する経済的成果と比較しようとする場合には、このような事情を考慮に入れなければならない。独身者の共産主義的団体のいくつかは外部の他人の子供を養育するが、それは彼らの負担を少々増大させるだけである。

これらの団体が解決しえていないきわめて重大な一問題は人間の選択の問題である。我々の社会においてはそれは自動的に行なわれる。自由競争は、一定の役割を果す能力のない者を排除することによって、選抜される者を指定する。しかし競争が存在しないところではこの選択は不可能である。この場合には別の方法に訴えねばならないが、それらは

まだ競争という方法よりは不完全である。共住修道院はいく度か非常に複雑な選抜システムを採用した。例えばカタリ派は「非常に稀にしか実行されなかったのではあるが、一つの習慣をもっていた。この派は時に生まれたばかりの子供を司教に予定し、そのためにその子供を親から離して養育するために母乳を飲む前に養子にしたと言われている。その子供は動物の乳あるいはこれがむしろ好まれたのであるが、アーモンドの乳液だけで育てられた。もっと後になると彼は魚あるいは野菜だけを食べさせられた。彼が獣肉類に接することがないようにする配慮からである。分別のできる年頃になると彼は按手（訳注：祝福や叙階のために手を相手の頭の上に置くこと）を受ける。そして、生れたときから不浄の接触を一切免れてきているということから、彼は最高度に司教職にふさわしいものと信ぜられた（Addit. à Reinerius, chez Gretser, 39）。時にはこのような子供は、養子にされる以前に、よい素質をもっていることを示すことが期待された。彼は一二歳あるいは一四歳になってはじめて司祭職に就くことを予定されていた。入信を認められた後で彼は文学あるいは哲学を研究するために大学へ送られ、そして派の期待に応えた場合には司教の位を委託せられた。（例えば、Archives de l'Inquisition de Carcassone, 1243. Doat, ■XXII■, f○ 58 以降）[1]。こうした措置にもかかわらず、しかし、指導者の選択は我々の社会におけるよりもうまく行ったわけでは全くない。

（1）C. Schmidt, *Histoire et doctrine des Cathares ou Albigeois*, Paris, 1849, 2e vol., p.143.

現在我々はアメリカ合衆国、および、もっと規模は小さいがイギリスにおいて、いくつかの共産主義的団体が創設されているのを見る。これらの団体について我々がもっている情報は非常にしばしば不十分であり、また矛盾しており、時にほとんど信頼するに足りない。しかしそれにもかかわらず、我々はそれらからいくつかの興味深いデータを引き出すことができる。数字上の重要度は、一万五千人に及ぶモルモンの大共同体と七十人以上にはなったことのない「クリスチャン・コモンウェルス」とでは異なるものとなる。

所有の共産主義的性格については、この性格は小さな団体においてのみ顕著であるが、しかしその場合でも維持のされ方はさまざまであることを見ることができる。完全な財産共有が承認されているのはシェーカー教徒（訳注：一八世紀中葉イギリスのクエーカー派から起こった）―これは現在も存続している―、消滅しつつある「クリスチャン・コモンウェルス」であり、さらに、一六二一年アメリカに移住したピューリタンの共同体、les Tauflinge、モラビア教徒（訳注：一五世紀ボヘミアに起こった新教徒の一派）、分離主義者、完全主義者、Bishop Hill, Aurora, 等であるが、これらはすでに消滅した。その理由は、（経済活動として）株式会社になるためであったり、いくつもの小財産に分割するためであったり、既に分かれていたメンバーのあいだで資本分割するためであったりする。

大抵の場合、共産主義は緩和される。すなわち、多少とも大きな部分が私的所有に委ねられる。これは今日における経済活動の条件である。我々はこのように緩和された共産主義を、New-Harmony, Béthel における霊感主義者のなかに、また新生活の信徒団体等のなかに見出すことができる。モルモン教徒において共産主義は名目にすぎない。

結婚と家族については、このような共同体の大部分は古代キリスト教徒に接近し、男女の性的結びつきを非とする。Les Tauflinge, トラピスト会修道士、シェイカーズ、完全主

義者は結婚を廃止した。新生活の信徒団体は事実上結婚を廃止した。霊感主義者はほとんど完全に結婚を廃止した。結婚を最初廃止していた分離主義者は経済条件が順調になったときにそれを復活させた。モルモン教徒は反対の極端に走り、一夫多妻、複婚を認めている。他方からすればこれこそ彼らの成功の一因であったように思われる。後に述べるであろうが、オナイダの完全主義者（訳注：オナイダは米国ニューヨーク州中部の都市、オナイダ共同体は宗教的完全主義者の団体、罪は社会改革によって排除できるとする。J. H. Noyes が組織したもので、一八八一年解散して株式会社に改組された。銀食器などのオナイダ・ブランドを製造）も同じ原則を用いた。

成功した共同体はすべて例外なく非常に宗教的な一基礎を有していた。多くは精力的で狂信的な創設者をもっており、彼らは共同体を専制的に支配した。ラッピスト（訳注：ハーモニー会派の創設者、一八〇三年にドイツからアメリカに移住、キリスト再臨を信じ、厳格な独身主義を守った。一九〇六年消滅）は Georges Rapp、分離主義者は J. Bimeller、完全主義者は J. Humphrey Noyes によって指導されており、霊感主義者は Christian Metz によって指導され、Bethel の共産主義者は Keil によって指導されていた。

宗教的紐帯の抗し難い力にもかかわらず、対立紛争は生み出され、時に団体の崩壊の原因となった。Tauflinge、分離主義者、Bishop Hill、Bethel 等の最後はそのようなものであった。経済条件の改善によって生み出されたにせよ、あるいは経済条件の一層の悪化によって生み出されたにせよ、個人主義的感情の復活が原因であった。

一言で言うならば、モルモン教徒を除けば、これらの団体の大部分はもっぱら宗教的修道会の相の下に表われている。それらはその環境に適応した、昔の修道会の変形である。

現実的システムの次に、ここに我々は宗教の理論的システムを挿入する。ここでは我々はフランス革命以降のキリスト教社会主義のいろいろな種類の考察に限定することにする。

宗教的運動はつねに社会の大潮流の影響を蒙ってきた。最古代の時代からカトリック教会は、経済的社会的事象に対する国家の介入に好意的であった。カトリック教会は経済的社会的事象を神学の一部をなすものと考えていた。例えば聖トマス・アクィナスは正義の利益（des avantages de la justice）について考察している『神学大全』の章の中で、価格の理論について述べている（2, 2, q.77）。これは当時、科学、哲学、行政、世論、これらすべてがこのような政治に好意的であったことを意味している。しかし一八世紀になってある抗し難い潮流が精神と制度を自由の方向に押し流したとき、教会は本能的にこの流れに反対ではあったが、これもまた押し流されるのに身を委ね、一種の自由主義的カトリシズムの形を取ることとなった。この自由の時代は少ししか続かなかった。まずは精神が、次いで制度が社会主義に向って、社会事象への国家の多少とも大規模な介入に向って、方向転換した。教会は急いで引き返したが、それは教会にとっては容易なことであった。教会はかつての役割を取り戻せばよかったのである。かくしてカトリシズムは社会的になった。社会問題に専念するキリスト教徒の列の中で、我々は現代のほとんどあらゆる色合いの政党に遭遇することになるであろう。すなわち、自由主義者、国家に訴えない干渉主義者、国家社会主義者、社会主義者が存在する。そこに登場していない党派はただ一つである。それは生存闘争において無能力な生き物の自然な淘汰を妨げることを欲しない党派である。

キリスト教自由主義の最左翼はトルストイおよびその信奉者によって代表される。国家の起源とその機能は暴力にある、と彼は言う。被治者はつねに国家の奴隷であり、国家は

その権力を維持するために四つの手段を用いる。すなわち、民衆を脅えさせ欺すこと、彼らを頽廃させること、眩惑すること、そして被治者のなかから一部を選び出し、彼らをその他の部分の死刑執行人にすること、である。それゆえあらゆる統治を廃止しなければならない。トルストイは中央権力の側からのあらゆる強制に非常に強く反対しているので、自らがきわめてキリスト教的であることを主張しつつも、あらゆる教会の廃止を望むこともありうることであろう。

最右翼で我々は帝国主義的な社会的キリスト教徒を見出す。Stöcker および Naumann の信奉者たちである。

（言葉の通常の意味での）自由主義的カトリック教徒の集団的行動が最初に登場したのはフランス革命の初めの時期においてである。フランスでほとんどすべての人を自由に対して味方させるに至った観念の巨大な潮流は聖職者の一部、下位聖職者をも巻き込んだ。一七八八年の三部会において聖職者の自由主義的代表者は百以上の賛成意見を自由にすることができ、第三身分の綱領とほとんど同じくらい進歩的な綱領を展開した。ブルジョアジーの要求が勝利を獲得しえたのは（六月一三日以降）聖職者が第三身分に対して与えた効果的な支持によるものであったことは人の知るところである。後に革命が行きすぎに陥ったとき、聖職者は（富裕で教養ある階級の大部分の例に倣って）道を引き返した。J・ドゥ・メストルやボナール子爵はカトリックの観点からの反革命の理論家であった。しかし自由主義的思想はフランスにおいては決して死んでいなかった。逆に、自由の思想を出発点にして人々は革命を批判した。そして、王政復古はある意味では、民衆とナポレオンとの絶対主義の後における、革命当初の自由への復帰であった。Ballanche は革命の原理を、進歩の信仰およびその効果と合致させることを勧めたカトリックの最初の人であった。しかしその仕事を最良の形で完成させたのはシャトーブリアンであった。自由への愛着に満ちた彼の著作が受け入れられたその情熱は、いかに彼の思想がカトリック教徒の間に普及していたかを我々に証明している。民主的自由主義の運動は、王政復古によってもたらされた欺瞞の後、ますます強力になった。それは革命的形勢を取った。カトリックの自由主義的運動もより顕著になった。運動の旗頭はもはやシャトーブリアンではない。旗頭はラムネー（Lamennais）である。一八三〇年、ラムネーはラコルデール（Lacordaire）およびモンタランベール（Montalembert）と共に *l'Avenir* を創刊したが、その指導綱領は、結社の自由および出版の自由、県および市町村の自由、国家からの教会の独立、共和政である。彼の獲得した成功は巨大なものであった。君主制に対する攻撃とその結果としての訴訟は、教義に関するいくつかの命題と同じく、この結社に、ローマ教皇庁政府からの弾劾（回勅 *Mirari vos*）をもたらした。ラムネーだけが教会の懐から去り、残りのカトリック教徒は、自由のための運動を続けながら降伏した。

それは民衆およびブルジョアジーの一部もまた、富裕なブルジョアジーのみが獲得していた諸権利を獲得するために闘争した時代、ラマルティーヌ（Lamartine）、ベランジェ（Béranger）、V・ユーゴー（V. Hugo）、バルザック、G・サンド（G. Sand）、E・シュー（E. Sue）が改革、刷新の思想をその著作によって普及させた時代であった。この自由主義運動の最盛期は一八五〇年と一八六〇年の間、コブデン同盟の時期、いろいろの国が大幅な商業的自由体制を採用した時代であった。教皇は一八四九年（一二月八日）に社会主義および革命に反対する回勅を出した。Pressensé, Laboulaye, A. Vinet, J. Simon, de

Gérando, Montalembert、といった自由主義的キリスト教徒は、政治、哲学、科学の領域で彼らの思想を主張していた。しかしこれらの将軍たちは、この時期の後ますますその隊列がまばらになろうとしていた軍隊を指揮していたのである。「社会的」思想の影響はますます大きくなり、社会主義的潮流はますます高くなった。自由主義的キリスト教徒は、運動を与えられて慣性力によって動く物体のようにその道を歩み続けていた。彼らは社会的キリスト教徒の思想に対抗し、義務的同業者団体と社会的行政とを支持しようとしていた。カトリック教徒たちはフランスで『政治経済学及び社会経済学カトリック協会』(la *Société catholique d'économie politique et sociale*) を設立し、Ch. Périn, Cl. Jannet といった人々が自由主義思想を擁護し広めた。しかしこの努力は有終の美を飾ることはできなかった。一方では民衆が自由主義思想を捨て（この時期自由主義諸政党はヨーロッパの到る所で衰退していた)、他方では教皇もそれを放棄していた。既に一八六四年にピエ九世（Pie ■IX■）は回勅 *Quanta cura* によって宗教的自由主義を弾劾していた。一八九一年にはレオン一三世（Léon ■XIII■）も政治的経済的自由主義を弾劾した。まだ自由主義的キリスト教徒は存在していたが、彼らはもはや党派としては行動しなかった。既に見たように、自由主義的キリスト教徒のあいだにはさまざまな漸次的推移が存在するが、それらとは別の漸次的推移も存在する。例えば、社会的行政は欲しないが、保護主義的措置は要求する自由主義的キリスト教徒が存在するのである。イタリアでは上院議員ロッシがそれであった。

いまもし我々が、社会的問題において自由主義的な思想と解決とを拒否するキリスト教徒に注目するならば、さらにいくつかのカテゴリーを見出すであろう。まず最初に、社会的事象を手直しし、キリスト教道徳に由来する正義と秩序の原則にそれを当てはめるために介入が行なわれることを欲するキリスト教徒が存在する。彼らはこのような機能のための特別の機関が存在することを欲するが、しかしその機能を国家に委ねることは絶対的に拒否する。もっぱら自らの支配下にある諸制度によって社会的問題を解決するための手段にひとり取り組まなければならないのは教会である。これは Mgr. Ketteler の理想である。彼は現代社会の批判をラッサール（Lassalle）から借用したが、その救済策についてはラッサールのものを採らなかった。（最も多数を占める）社会的キリスト教徒のもう一つ別のカテゴリーは、その議論を社会主義者から借りているばかりでなく、その提案の多少とも大きな部分をも借用しており、いくつかの希求を社会主義者と共有してもいる。経済の領域では、節度ある国内産業保護政策から出発してほとんど集産主義に到るキリスト教徒が存在する。道徳の領域においては、国家社会主義による介入を支配的たらしめ、道徳と社会生活全体の専制的規制を推奨するに至るようなキリスト教徒が存在する。

社会的キリスト教の歴史を一瞥するだけでも、我々が述べたこと、つまり、宗教的運動は社会的大潮流の影響を蒙むるということの真実性がいま一度示されるであろう。カトリック派の外部では一八三〇年と一八四〇年とのあいだの時期にはヨーロッパで社会主義思想に好意的な一つの一般的運動が姿を現わした。フランスではビュール（Buret）とヴィレルメ（Villermé）がシスモンディによる自由主義経済の批判を普及させた。ルイ・ブランは庶民階級のための国家による非常に広範な介入の支持者であることを宣言した。こうした思想はカトリック教徒のあいだに支持者を見出した。ラムネーの『未来』は労働者の保護措置を勧告した。ヴィルヌール・バルジュモン（Villeneuve-Bargemont）子爵は、国家介入の原理を採用して「キリスト教的政治経済学」についての論文を著した。同じ時期にイ

ギリスではプロテスタントのF. D. Maurice, Ch. Kingsley, シャフツベリー卿が社会的プロテスタンティズムの宣伝を開始し、それは労働者のための協会および組合の設立を結果した。これはまさしく社会主義者たちが行なっていたものであった。後年、社会主義思想は大きな進展を続けた。

ドイツでは非常に進歩的な思想をもった大勢のプロテスタントの頂点にいた牧師ヴィッヒエルン（Wichern）が『内的使命（Mission Intérieure）』を創立したが、それは労働者の条件を向上させることを課題にしていた。フランスではサン・シモン主義者の運動が教養ある階級のあいだで、さらに民衆のあいだではなお一層、急速に広まった。カトリック教徒はその運動に追従した。彼らのもつ慈善制度、社会問題の研究団体、宣伝によって、彼らは多数の賛同者を獲得した。一八四八年の革命が近づくと、カトリック陣営においても社会主義陣営におけると同じく人々の熱気は過熱した。これら二つの党派のあいだの境界はほとんど消滅し、カトリック教徒たちは社会主義者の希求するものと革命的方法とを採用したほどであった。カトリック教徒たちは社会主義者たちと同じように、一八六四年の法律規定を急いで利用した。それはフランスにおいて、結託の罪（le délit de coalition）は残しつつも結社の権利を承認するものであった。

一八七〇年と一八七一年にはこの国で社会主義者の権力が大いに増大した。マン（Mun）伯爵とトゥール・デュ・パン（Tour du Pin）伯爵が■Oeuvre■ des Cercles（諸団体著作集）を創刊したが、これは非常に多くのカトリック教徒の称讃を博した。一八六九年、ドイツの司教たちは社会主義の非常な進展に驚き、フルダ（Fulda）の大会に結集して、社会問題についての議論に積極的に参加することを決定した。一八七一年からカトリック教徒たちは政治闘争に参加し、ほとんどすべて社会主義者から借用した綱領を擁護した。一八七八年からプロテスタントも、社会主義者たちがますます急速に勢力を拡大していくのを見て、非常に精力的な社会行動を開始することを決定した。トッド（Todt）はその理論家であり、シュテッカー（Stöcker）とナウマン（Naumann）はその指導者であった。アメリカ合衆国では、社会主義的労働者組織がますます強大になりつつあったが、他方司教たちは、教皇庁との長い闘争の後、「労働騎士会（*Chevaliers du travail*）」の大連合の指導者になることに成功し、それをカトリック教会の教義に従わせることに成功した。

最近十年のあいだに、ポーランドおよび、特にベルギーの社会主義者たちが獲得した重要性はよく知られているところである。ところで、聖職者の一部が労働者を社会主義者に倣って組織するようになって以降、彼らの教義の帰結を最も遠くまで推し進めたのはこれら二国においてである。現在フランスでは社会主義者が大きな地歩を獲得している。そして一方では、社会的カトリック教徒がその活動をさらに激化させ、彼らの利益を支持する者の数を増やすのに役立ちさえすれば、戦術と同盟を次々に変えるのを見る。他方では、社会的プロテスタントが「連帯（*Solidarités*）」[1]の最大数を確保するのに努力しているのを見る。双方とも社会主義者をまねているだけである。社会主義者が多数おり、しかも彼らが大胆であるオーストリアでは、社会的カトリック教徒は民衆を組織することを試みており、しかも、しばしば社会主義者の方法を羨まねばならないようなものは何もないような方法、時にはそれよりはるかに先を行きさえする方法によって民衆を引っ張っている。イタリアでは最近、社会主義者が大いに勢力を伸ばし、カトリック教徒も同様である。彼らは行政的ならびに政治的選挙においてきわめて積極的な役割を演じ、いくつもの都市の

行政を行ない、非常に積極的に宣伝し、労働者と小所有者を組織している。さらに彼らはその活動を亡命者の保護にまで拡大している。

（1）プロテスタントは彼らの社会行動のセンターをこのように呼んでいる。

このような社会的模倣、社会の大潮流への宗教的運動のこのような適応の主要な理由の一つはタルド(Tarde)氏によって非常に見事に研究されたところのものである。すなわち、我々の生きている環境についての、意識的というよりも無意識的な模倣、である。

しかし別の理由も存在する。過去の数世紀、王や貴族に支えられていたカトリック教徒は今日では主に民衆に呼びかけている。主権者がただ一人であったときジェスイットは彼に対して一人の聴罪師と一人の妾を与えた。主権者が市民の半数プラス一人である現在では、社会的キリスト教徒は自らを好ましい民衆にしようと試みる。彼らは自分たちがこのようにして宗教をより生き生きとしたものにしていると言う。「我々の民主主義の時代にあっては、宗教的理念が他のものすべてと同様、勝利を収めることができるのは、ただ民衆によってのみである（1）。」宗教改革以降「教皇たちは—と、イタリアにおけるキリスト教民主主義の指導者の一人であるトニオーロ（Toniolo）氏（2）は言う—諸皇帝および諸王と、すなわちカトリック教会に対してその宗教的市民的統一を再び与える仕事において教皇たちを助けることを約束したすべての者と結びついていた」（一六二頁）。しかし彼ら教皇たちは望むところを得なかった。四世紀の間「カトリック教会は社会的事業において巧妙かつ解放的であったにもかかわらず、その実行において妨害されてきた。カトリック教会は、集団および特に民衆を犠牲にして、君主や特権階級と共謀関係にあったとさえ言われてきた。

（1）G. Goyau, *Autour d't catholicisme social,* ■Ⅱ■e série, p.4.

（2）Toniolo, *Indirizzi e concetti sociali all'esordire del secolo ventesimo.*

今日ではカトリック教会は住民、社会諸制度、民衆の真只中に位置しており、キリスト教の正義と慈悲の法の下にすべての社会階級を再び導き入れるために、より率直に、新たな熱意をもって、イエス、使徒、中世の司教および教皇の使命を継続している」（四三頁）。そして「キリスト教的秩序の敵がすべて神に敵対して団結し、カトリック教徒から特に民衆や若者を引き離すからには、我々は新規加入者を最大限加入させることを急ぎ、彼らを昔の部隊に合体させ、あらゆる部隊において彼らの活気と情熱とを行きわたらせることを急がねばならない」（二五頁）。ブリュンティエール（Brunetière）氏はカルヴァンが宗教を知性化し、個人化し、貴族化したとして非難する。「仮に彼が別の時代にならば適合することがありえたとしても、仮に彼が何らかの貢献をなしえたとしてさえも、仮に彼を歴史的にはまだ弁護することが可能であったとしても、この『貴族主義的』構想が我々の『民主主義』の時代に適合すると考えることができるであろうか」（■*L'oeuvre* ■ *de Calvin,* ■Ⅱ■）。しかし事態を客観的に検討するならば、宗教的党派はつねにその目的のために権力者を利用しようとしてきたことが観察される。それゆえ、民主主義国家において宗教的党派が民衆の側におもむくのは自然なことである。既に教皇庁は一八四八年に初めて、フ

ランスの革命政府を承認することを急いでいたとき、民主勢力に働きかけていた。現在、一方では教皇は枢機卿 Rampolla の政策に従ってフランスにおける共和制を受け入れており、他方では彼は労働者の聖地巡礼にとりわけ敏感であることを示している。彼は回勅を出し、手紙を書き、社会的カトリシズムの運動を励まし指導するために弁舌を振っている。そして彼は、「カトリック会議及び委員会事業団」（■Oeuvre■ des congrès et comités catholiques）に活動全体の最高監督権を委託することによって、社会的行動のための、ほとんど一省庁を樹立している。

社会的キリスト教は、理論的には、そして時には実践的にも、さらに遠くまで行く。我々が先に引いたイギリスの三人の改革者の社会的理念は、聖書の唱句で表現された社会主義であった。フランスでは一八五〇年以前、カトリック教徒の C. F. Chevé と Segrétain はほとんど社会主義者であった。『新時代（*l'Ère Nouvelle*）』およびその他いくつものカトリック雑誌は社会主義的綱領から汲み出された理念のほとんどすべてを支持していた。カトリックの潮流とサン・シモン主義は Buchez の弟子たちの著作の中で混じり合った。ドイツの司教たちはフルダの会議（一八六九年）で社会主義者の言葉遣い、理念、命題を採用していた。（司教座聖堂参事会員 Moufang によってものされた）一八七一年の有名な選挙綱領は社会主義綱領の大部分を含んでいた。同じ年、政府は社会主義者の協会を擁護したのと同じように、Wespthalie におけるカトリック農民の協会を擁護した。カトリック教徒はただちに協会を建て直し、その活動を倍化した。一八七八年、Todt は社会主義綱領の大部分を横取りした。アメリカ合衆国では労働者騎士団が土地の国有化およびその他の社会主義的措置を要求した。神父 Daens と Stojalowski はその信奉者たちにほとんど社会主義的な原理を説教していた。ベルギーには現在もなお神父 Daens の原理と行動指針に従う社会的カトリック教徒が少数ながら存在する。現在、マルクス主義者の最小限綱領と国家社会主義者の綱領はいくつかの細部を除けば、ほぼ完全に社会的キリスト教徒の綱領の中に再現されている。

フランスの社会的プロテスタントは富裕階級および教養階級の行動を導くべき理念を次の如き綱領（1）に要約した。すなわち「一．我々自身は日々の糧を得ているのであるから、全ての人のパンに対する権利を要求する。二．我々は夜間以外の時間にも家族を見て家族というものをよく知っているので、家族に対する全ての人の権利を要求する。三．我々は週休をもっているが故に、休息に対する全ての人の権利を要求する。四．我々は病気の時間をもつが故に、病気に対する全ての人の権利を要求する。五．我々は書物をもっているが故に、教育に対する全ての人の権利を要求する。六．我々は教会によって魂の平和を得たが故に、慰安、安全、エゴイズムと死の克服、一言で言えば救済に対する全ての人の権利を要求する。」

（1）*Revue du Christ. soc.*, 15 juin 1897.

社会的キリスト教徒の中にマルクス主義者がいることも同じく確認されうる。その他に、いくつかの宗教的概念を、社会的行動を容易ならしめるために修正しようとする社会的キリスト教徒が存在する。例えば Wilfred Monod 氏は多くの社会的プロテスタントと共に、

社会を救済し、社会に対して宗教的感情を持ち続けさせるためには、神の王国という我々の伝統的概念を修正し、キリスト教布教の方法を変える必要があると考える。同じくまた中世における過剰な迫害を繰返そうと望んでいるように思われる反ユダヤ主義者（とにかくもカトリック教徒であり、根本的な社会改革を推奨している反ユダヤ主義者）も存在する。ときにはキリスト教的な宗教理念は後方に退き、消滅し、社会的な宗教理念に取って代られる。キリスト教徒の生の至上目的はつねに個人的救済であった。この点はカトリック教においてつねに根本的であった。宗教改革はなお一層この点を強調した。しかし現在では、「個人的救済への専念が少しずつ宗教団体において全てを占めるようになり、神の支配とその正義のための原初的、使徒的な情熱に取って代った」のが見られる。「ある種のキリスト教徒を理解するうえで重大な問題は、大多数の人間が破滅させられても、自分たちは救済されることである(1)。」「社会的キリスト教はこのような傾向に対して連帯の名において抗議する。我々の多くの同胞が奇蹟によってでなければ自らの魂を救済し人間的かつ神的な生に到達することを不可能ならしめる、世襲的および社会的運命の網の目の中で我々すべてに役割を与える、不幸における連帯、『罪にあふれていたところに恩寵を満ち溢れ』させ、『天上のものも地上のものもすべてをキリストに結びつける』にちがいない、復興と贖罪における連帯、である。（聖 Paul から Ephés.への書簡、■I■、一〇）。いや、我々は世界の歴史が、いくつかの *rari nantes in gurgite vasto* は驚くべき特恵によって免れてきた、悲しむべき破綻に帰着するに違いない、とは信じないし、また信じたいとも思わない(2)。」

（1）H. Appia, *Le christianisme social*, Genève, 1900, p.70.

（2）*Ibid.*, p.75.

しかしながら一般に、社会的カトリックと社会的プロテスタントが最も社会主義者に接近する場合でも、彼らの理念は過去への回帰である。一般に彼らが要求するのは、中世におけるような義務的同業者組合の復興、工場における婦女子の労働の禁止、大企業の廃壊と、小工業、小商業、小所有の保護と拡大、である。ドイツの社会的プロテスタントは遂には奢侈取締り令を要求するに至っている。労働者保護のための一八九三年のチューリッヒの大会において社会的カトリックが工場における婦人労働の廃止を提案したとき、ベーベルは社会主義者の名において次のような反対意見を表明した。「カトリック教徒たちが資本主義体制を破壊しようと欲するのは、それにプチ・ブルジョアジーの社会を代置するためである。我々はと言えば、我々は新たな、より高度な社会秩序を欲している。もし貴方がたが婦人労働一般の反対者であるならば、それは貴方がたの社会秩序が過去に根をもっているからである。」これらの数行は二つの大きな党派、社会主義者と社会的キリスト教徒それぞれの立場を明瞭に要約している。しかし社会的キリスト教徒が社会主義者からその考え方の多くを借用したとすれば、他方では彼らは、社会主義者の一部に対して中世に対する愛着を伝染させた。

社会的カトリックとプロテスタントの社会的活動の結果はいかなるものであったか。立法的観点からすれば、社会的カトリックはオーストリアおよびベルギー以外では直接的な

影響をもたなかった。ところで、オーストリアにおいては（一八八三年と一八九七年の）義務的同業者組合の復興と大工業に対するいくつもの措置は、ベルギーにおける複数投票制と同じく、現実にカトリック派の刻印を帯びていた。しかしカトリックが長い間権力を握っていたベルギーにおけるその他の改革は何ら宗派的特殊的なものをもっていない。労働省の創設（一八九五年）、作業場の規則に関する法律（一八九五年）、労働契約に関する法律（一八九六年及び一八九九年）、労働災害に関する法律（一八九九年）、労働契約および老人年金に関する法律（一九〇〇年）、これらはカトリック的でも社会主義的でもない改革である。

直接的な意味で、すなわち国家の介入がないという意味で、社会的行動と呼ばれるものについては、社会的キリスト教徒は何も新しいことをしなかった。彼らは時にいつもの博愛の制度をより上手に組織したが、大部分の場合において彼らは社会主義者のやり方を採用した。社会主義者が労働者の団体を樹立するや社会的キリスト教徒が類似の制度をつくり出している。社会主義者が協同組合を開始するや、社会的キリスト教徒も協同組合をつくっている。要するに労働者に対する宣伝と組織における手段と方法において彼らは社会主義者を模倣したのであるが、同じような成功は収めなかった。一九世紀の初期に社会的プロテスタントによってイギリスで設立された労働者の団体は惨めな経過をたどり、普及することはなかった。フランスにおいては一八六四年以降カトリック教徒によって設立された労働者の団体はうまく行かなかった。それらは一般に最後には王党その他の党の選挙事務所になった。ドイツではシュテッカー（Stöcker）によって開始された労働者の運動は社会主義者の隊列を大きくすることになった。ベルギーでは大成功と共に開始された労働者団体を樹立する運動は突如停止し、将来進展する運命にあるとは思われない。

このような不成功の原因は多様である。まず第一に、社会主義者は労働者の目には、社会的キリスト教徒が約束するものよりも魅力的な未来を磨き上げた。さらに、社会主義的な団体においては労働者は自由な人間としての感じをもっているのに対して、社会的キリスト教徒の団体においては、労働者は指導者のおせっかいな活動によって彼らの個性が絶えずそがれ押しつぶされると感じている。結局のところ労働者は本能的に彼らの階級の利害を貫くためには、団結しなければならないと感じている。ところで、社会主義的労働者とカトリック的労働者とのこのような分離は企業家の勝利を容易ならしめる。かくして、イタリア、フランス、スイス等における多数のストライキが成功しなかった。このことは人々の精神を刺激した。社会的キリスト教徒によって与えられた不出来な組織の結果が不成功の一原因となった。同じような考えをもったであろう多くの労働者が、社会主義者の復讐を恐れて、カトリックの団体に加入を控える。最後に、社会的カトリック教徒が労働者にストライキを宣言させたとき、彼らは一般に、労働者を指導し、労働者が暴力に訴えるのを防止することができなかった。これは、社会主義者が労働者に彼らの権利について、そして部分的には義務について教え、彼らが抵抗、ストライキを準備できるように彼らを組織しているのに対して、社会的キリスト教徒は組織の才を持っているとは思われず、宗教、道徳等について説教するだけであるからである。このようなやり方を受け入れることができるのは弱い労働者だけである。

社会的キリスト教徒はただ一つの社会階級に対して効果を発揮しただけである。すなわち小地主の階級である。彼らに対しては社会主義者の教義は何の効果も及ぼさない。この

階級についての成功、とりわけベルギーおよび北イタリアにおける成功は完璧であり、この階級の運命の目に見える改善を結果した。これらの国における社会的カトリック教徒は何ら新しいものを生み出さなかった。ベルギーにおける社会主義者の成功が、最初に協同組合を創設して労働者の生活条件を改善することに専心した事実に由るのと同じように、ベルギーおよびイタリアのカトリック教徒、ドイツにおけるプロテスタントの成功は、最初に宗派別の農村貸借金庫、保険協同組合および互助会、購入販売組合、社会的地下酒蔵、社会的酪農、ビール醸造および蒸溜酒の創設、近代耕法の宣伝、等に従事したことに主として起因する(1)。

(1) 我々の言っていることの証明は、(例えばイタリアにおけるように)自由主義者たちが同じような制度を創設しはじめた場合にも彼らは同じように満足すべき成果を得たという事実に見られる。

社会的キリスト教徒は社会主義者が行なったことを模倣して、工業労働者のあいだでは大きな成功を収めることができなかったので、最近、迂回作戦を取って彼らの見解と願望を隠して、よりよい結果を得ようと試みている。多くの国で彼らはナショナリズムあるいは反ユダヤ主義の旗印の下に政治的観点から大衆を煽動している。これはドイツでシュテッカーに指導されて社会的プロテスタント派が行なったことである。社会的プロテスタント派は民衆的基盤を失ったとき、反ユダヤ主義の中に別の一基盤を求めたのである。シュテッカーはこのようにして地主の一部を引きつけた。ナウマンは同じ綱領を守りながらもそれを少し民主主義的にして、小ブルジョアジーおよび民衆にも影響力を及ぼすようになった。オーストリアでは、三党派すなわち社会的カトリック、封建的反ユダヤ主義者、デマコーグ的反ユダヤ主義者がもはや一党派を形成するに至っている。フランスでも同様にカトリックの社会的行動は時にデマゴギーの手法を借用している。我々はかくして、宗教的社会的諸党派をますます政治行動の方向に引っ張っていく一運動に遭遇している(1)。

(1) この場合まだこれらの党派は別の党派に追従しているだけである。議会制の下では、状況の主人は選挙民を最も引きつける党派である。それゆえさまざまな党派の間の闘争が■■陣地に向けられるのは当然のことである。

第六章　理論的体系

宗教的、形而上学的、科学的体系への分割—現実的体系が見出されるのは主として宗教的体系においてである—主観的事象の研究および改革者の中心的議論—貴族主義的議論—指導者選択の難しさ—「適格人間」(hommes compétents) という詭弁—ソクラテス、プラトン、そしてオーギュスト・コント—統一の議論—生産の「無政府」は我々の無知の結果である—生産の統一は「無政府的」生産から結果するものよりもはるかに大きなものの喪失に至りうる—統一はあらゆる進歩を破壊した—サン・シモンとオーギュスト・コント—統一に達するための強制—統一の議論における真実なもの—新しいもの嫌い—社会的問題は質的であるよりもむしろ量的である—この真理の忘却から生まれる詭弁—統一は宗教感情の助けによってしかほとんど獲得されえない—利益と不都合、宗教と迷信との貸借対照表—感情を変えるための効果的措置の難しさ—政府はしばしばでたらめに行動する。

大多数の社会主義的システムは実践的適用法をもたない、単なる精神における構想にとどまってきた。そして時に現存する体制のなかに社会主義的システムのいくつかを確認したいと思ったとしても、より徹底的に検討すると、自然に発展した組織が問題になっていることがやがて明らかになる。人はそうした組織を理論的考察によってアポステリオリに正当化しようとするのである。それゆえ我々が主に研究しなければならないのは、心的事実、人間精神の産物である。

我々は既に序論においてこの問題について容易に生じうる一幻想に注意するよう読者に促した。ある考え方、構想についてその論理的価値を検討するために長い時間を要したからといって、その価値が大きな実践的重要性をもつと信ずるいわれはない。この研究においては我々はホメロスの言語形態を研究する文法学者のように振る舞うであろう。要するにこの形態学は、幾世代もの人々を喜ばせてきたホメロスの詩の美しさ—これは何か別の言語形態の使用といったこととは全く異なる理由による—とはほとんど関係をもたない。

我々は、社会主義組織は私有財産を最小限にするということによって特徴づけられてきたことを見た。社会主義組織はその形態によって三つの大カテゴリーに分けることができる。一．宗教的体系、二．形而上学的体系、三．科学的体系。こうした分類は言うまでもなく科学上の分類の大多数と同じく何ら絶対的なものではなく、その一部はあるカテゴリーに、他の一部は別のカテゴリーに属する、といった体系が多数存在する。

宗教的体系は、神意に適うと想定される生活様式、より一般的に言えば、ある種の宗教感情と調和した生活様式を樹立することを目的としている。しかしこの感情は、独自の神という具体的な形式を対象としてもたなくとも存在しうるということに留意する必要がある。仏教はその一例である。A・コントがその晩年に構想したような実証主義はもう一つの例である。この実証主義はカトリシズムと共通する特徴を一つならず持っている。他面それはかなり込み入った儀式(カルト)を持ってもいる。他方それはしばしば形而上学的概念作用に訴える。それは混合的体系であり、人それぞれの観点によって、我々の挙げたカテゴリーの第一にも第二にも位置づけることができる。

宗教的体系は形而上学的体系と同じく、組織の経済的側面、人々の地上における幸福を二次的な位置に置く。このことはこの地上における幸福が達成されえないということを意味するのではなく、付随的にのみ達成されるということ、それは一方で全く別の目的を追求しているなかでのことだということである。

昔の形而上学者は、幸福と、彼らが理解する限りでの叡智との、一致を証明しようと試みた。叡智が不幸であることは彼らによればありえなかった(1)。アリストテレスは、最良の国家運営は全ての人に最大の幸福を保証するものであること、幸福は留保付きの徳ではなく単純な徳、美と善を目標とする徳を行使することを明らかにしようとした(2)。

(1) プラトン『共和国』第一巻全体を参照。そこでソクラテスは「正義は幸福であり、不正の人は不幸である」という結論に到達している。p. 354, a. ■（ギリシャ語一行）■、セネカ、『賢者の堅忍不抜について』*Sapiens nullius mali est patiens.* キケロ『パラドックス』、II.（ギリシア語二行）、*In quo virtus sit, ei nihil deesse ad beate vivendum.* やや異なる意味で、アリステレス『政治学』VII、一、五.（ギリシア語二行）「各人は徳と叡智を持つに応じて幸福を受け取る。」

(2) 『政治学』VII、一二，三. 本文では単に（ギリシア語二行）とあるだけである。この言葉は数語による言い換えなしには訳すことができない。基本的な概念は美ではあるが、善、誠実、名誉、栄光、適切、といった付随的観念が加わっており、これらが、フランス語の中には等価語をもたない一語の中に溶け込んでいる。

宗教的な社会主義体系のタイプとして、仏教僧のもの、カトリック修道士のもの、シェイカーズのもの、等、我々が既に見た多数の体系を挙げることができる。

形而上学的体系は、宗教原理と同じく、経験による制裁を免れているいくつかの原理に従って人々の行動を規制しようとするものである。しかし、形而上学は理性に訴えるのに対して、宗教は感情に語りかける。プラトンの『共和国』は形而上学的体系の原型である。

科学的体系は地上における人々の幸福を探求し、観察、経験、そして論理を行使する、あるいは少なくとも行使しようと試みる。勿論こうした方法をたどるにおいても間違うことはありうる。観察が不完全であったり誤っていることもあるし、論証が不正確であったりするのであるが、こうした場合、方法の適用における誤謬が問題なのであって、方法そのものの誤謬が問題になっているのではない。このタイプの体系は少なくともその理論的部分においてはマルクス主義の社会主義である。実践においては理性はしばしば、多数の宗教感情のために用いることも可能な諸感情に場所をゆずる。

いま当面国家社会主義を別にすれば、また我々が既に述べた三つの部類にのみ関心を集中するとすれば、これらの体系のうちで宗教的体系が最も実践的な適用性を有するものである。これは非常に注目すべき事実である。これは、一つの社会組織を変革するためには人々の性格もまた変革しなければならないという観察を確証するものである。ところで、宗教的情熱はこのような変革を可能ならしめる最大の力の一つである。宗教的情熱は、その効果が、逆の方向においてではあるが、人をして最小の努力でもって最大量の享楽を得しむべく突き進ませるエゴイスティックな本能に匹敵する、唯一強烈な情熱である。この点については性愛のみがこれと比較しうる。性愛はしかし他の点では宗教的情熱には著し

く劣るものである。なぜなら、その範囲が時間的にも空間的にもはるかに小さいからである。それが作用するのは実際人生におけるかなり短い期間だけであり、一人の人物あるいは少数の人物のためにのみ犠牲を課するにすぎない。この領域からは、大多数の動物において、母性愛も顕著に発達する。しばしば宗教感情と混同される祖国愛、ある集団への献身、自尊心、虚栄心といったその他の情熱もエゴイズムの感情に勝ることがありうる。しかしそれらの効果が何人かの個人にとって、そして多少とも長い期間、強烈なものであることがありうるとしても、それらが一国のすべての人間に一時代全体を通じて拡がるということは例外的なことにすぎない。

形而上学的体系は実践的適用例をもたない、あるいはほとんどもたない。この体系はせいぜい国家社会主義の場合のように、全く別の原因による適用例を正当化するのに役立つだけである。形而上学は非常に少数の哲学者のみを引きつける情熱、大多数の人間には絶対に影響しない情熱の表現である。

科学的体系については、マルクス主義の大きな進展によってまどわされてはならない。近くで観察すれば、マルクス主義の大衆の中でのこのような進展は、科学的説得よりもむしろ宗教感情のカテゴリーに属する軽率な熱狂に大部分は起因していることが分かる(1)。マルクス主義者を自称する人物のうちのどれだけがマルクスの『資本論』を読み理解したであろうか。その比率は多分、カトリックを自称する人々の中で聖書を読み思索した人々がどのくらいいるかを調べた場合に得られるであろう比率と余り変わらないであろう。

(1) イタリア社会党の指導者の一人であるPhilippe Turatiは、もっぱら政治的な理由で一九〇〇年十二月にジェノバで勃発したストライキに関して次のように考察しているが、それは我々の観察を間接に確認するものである。「人々を巻き込んで社会を刷新するのは—と彼は言う—周囲の状況の力によってである。…『資本論』を誰一人として読んだこともなく、マルクスの『共産党宣言』Manifesteの綴りを言うこともできないこの粗野な港湾労働者たちはいかにして理解し、一つの魂、一つの心になったのか。彼らにとっては、社会の血液を止めるためには、首をたてに振るだけで十分であった。」(*Critica Sociale, 1er janvier* 1900.) さらに非常に多くの社会主義者が次のように言っている。「社会主義は近代における偉大な宗教である。」

かくして我々が客観的事象を考える場合には、全ての、あるいはほとんど全ての社会主義体系はきわめて広い意味における宗教体系である。この命題はおそらくより一般的な命題の特殊事例にすぎないであろう。なぜなら宗教感情は現存するすべての社会システムの基礎であるからである。我々が主観的現象を考える場合には、形而上学的社会主義体系と科学的社会主義体系は理念的体系の観点からのみならず、実践的体系の観点からも、非常に大きな重要性を獲得する。なぜなら、現実には宗教感情に屈服している人々も、形而上学的体系あるいは科学的体系から一つを選ぶに際しては自らを理性によって導かれているものと考えるからである。

先の諸章において我々は現実的体系を検討した。つまり我々の関心は客観的現象にあった。いまや我々は主観的現象を検討することにしよう。

たとえ改革者たちの論証が著作としてはさまざまに見えるとしても、それらは根本においては大きな統一性を有しており、すべて少数のジャンルに入れることが可能である。そ

れゆえ各体系について検討する際に同じことを繰返さなくとも済むように、原理的なものを検討するのが好都合であろう。

人の選択の問題―この問題は新たな社会組織体系のすべてについて提起される。新しい組織体系の創始者たちは一般に、彼らが改革したいと望んでいる社会における選択が不完全であることを示すのに骨を折る。とはいえ彼らの仕事は容易である。なぜならこの点について完璧の域に近づいている社会は誰も知らないからである。しかし彼らは彼らの提案する選択体系の方が取り替えようとしているものよりもよいということの証明はおろそかにする。かくして彼らはほとんど自明のことについては長々と論証し、逆に怪しげな、信用できない事柄については、軽くさっと走り抜ける。

改革者たちが専念するのは主として統治組織についてである。これは、無政府主義者を除けば、彼らのほとんどすべては国家行為の境界を後退させることを狙っているのであるからには当然のことである。

貴族主義的議論という表現で、「最も秀れたる者」が統治すべきである、あるいはより一般的に、社会組織においては各職務は「最優秀にして最も有能な者」に委ねられなければならない、と主張する議論を意味するものとしよう。この言葉が明確にされることはほとんどないが、論者の批判する体系は提起された目的を達成していないということが長々と論じられ、彼らが推奨する体系はそうした目的を達成するであろうと断言されるのであるが、その論証はおざなりであり、提案は大抵の場合自明のこととして呈示される。このような議論は今日ではやや時代遅れになってはいるが、現在まできわめて大きな重要性をもってきたのであり、多分将来において再び重要性をもつことになるであろう。

この種の議論についてなさるべき最初の観察は―しかもこれは他のほとんどすべての議論についても繰返さなければならないことであるが―、それが多義語によって表現されていることである。これによって人は一般に、事柄の表面にとどまるかぎりは、それに同意させられてしまうのである。

最良かつ最有能の人間とは何であるのか。もし、それはある職務を果すのに最も適した人間のことであると答えるならば、この命題は同義反復になる。この命題は、最も適した人はより適していない人よりもある職務をよりよく果す、と断言するのであるが、これは我々に全く何も教えない。もしこの命題が自明と思われるように表明される場合には、それは別の意味で用いられることになる。すなわち、「最良にして最有能」という概念は、不確定の形のもとに同意を獲得した後では、明確に規定されたものとなり、一定の財産、出生、教育を有し、一定の手続き等によって選択された一人物、という意味を帯びるようになる。かくして、最良にして最有能の人物は劣等にして無能の人物よりもある職務をよりよく取り仕切るということが認められたことになり、さらに言葉の手品によって、例えば貴族であり裕福でもある人物は、生まれの卑しい貧乏な人間よりもその職務をよりよく取り仕切るであろうということを人々は認めたことになる。

貴族主義的議論は人の選択についての困難を解決しない。それは問題をずらせるだけである。問題はいまや、最良、最有能、その他類似の用語の定義にある。

知的道徳的に他よりも優れた人々が存在するという事実から、優れた人々が他の人々を指導することによって、有用性の総体を増大させることができるかもしれない、と結論す

ることは正当である。しかし、条件命題を肯定命題に取りかえ、このような効果が現実にも生ずると言明することを許すものは何もない。

いくつかの問題を観察しなければならない。一・人は無知によって罪を犯すことがありうるが、また、利害によって罪を犯すこともありうる。技術的能力は最初の罪を避けさせることが可能であるが、第二の罪を避けさせることは全くできない。パン屋の同業者組合は—多数の留保をつけなければならないではあろうが—、多分可能な最良の条件においてパンを製造する能力を有するであろうが、同じく、可能な最高の値段でそれを売る能力も有するであろう。最初の事情はパンを食する人々にとって有利でありうるが、第二の事情は全くそうではない。このようにして生み出されうる悪弊を十分に理解するためには、薬屋に与えられている保護の結果を検討するしかない。この場合、職務を取り仕切る能力の有用性と必要性は自明である。一人の無知な人間のあやまちは一人の人間の死を招来しうる。不幸にしてこの能力は企業の経済的部分にまで拡大され、遂にはまさしく病気の市民からの税金の先取りにまで至った。薬屋は公権力によって、有利な協定料金を与えられていたか、あるいは彼らの独占によって容易になっていた協約によってそれを設定した。こうして彼らは儲けを増やしたのではあるが、薬屋の営業が自由なところではこの儲けが新たな競争者を出現させ、結果としてこの儲けは著しく減少することとなった。儲けを増やすためには、再び薬屋の特権を強化しなければならなかった。このようにして特権は儲けの恒久的な増大ではなく、特権階級の人員の増大を生み出した。この特権階級はいくつかの地方では絶対的に過剰であり、ごく稀に処方箋をつくる以外には一日中ほとんど何もせず、社会の真の寄生者として生きている。

いくつかの地方では医者も多くなりすぎた。これは医者達がその見識の名において要求する措置から生じたことではない。うわべでは、病人の利益のために、実際のところは彼ら自身の金銭的利益のために要求する措置に起因するのである。大部分の国において医者たちは外国人の医者を排斥するために保護主義的措置を獲得した。もし貴方がX国にいて、貴方の利益は当然X国の免状をもつ医者の治療を受けることを必要としており、同じくY国の免状をもつ医者は貴方を確実に死なせてしまうとしても、数キロメートル移動して国境を越えれば、状況は変わってしまう。その場合には、唯一治療することができるのはY国の免状を有する医者であり、X国の免状をもつ医者は一人の無知な人間にすぎなくなる。イタリアでは、処方箋は薬局で一回しか用いないように要請されてきた。薬を新たに出すために医者を二回訪れることを病人に強制する目的である。ところで、医者が病人に対して二日続けて下剤を摂るようにと処方する際の医者の見識に疑問を呈する人は誰もいない。しかし人が医者に疑問を感ずるのは、病人がそのために二回医者を訪れなければならないと決定する際の能力についてである。Ne sutor ultra crepidam.（靴に加えて靴屋までかかえ込むなかれ？）

一般に支配者は、自らを欠くべからざるものと信じ、その職務のために非常な高額を支払わせる傾向を有する。そこで一定の状況においては、あまり有能ではないがあまり要求がましくもない人間の方が結局のところ国にとって有益であるということもありうる。

二・別の種類の能力が存在する。しばしば企業において、技術的能力は財政的能力とは異なるばかりでなく、それに対立する。中国の体系は最も有能な高官を各地位に配するこ

とを目的としている。ただこの能力は純粋に文学的な能力であり、必要とされるであろう実践的能力とは非常に遠い関連を有するにすぎない。バカロレア試験を官吏募集の基礎としているヨーロッパ諸国の体系は、大してではないが、いま少し道理にかなっている。いくつかの国では政治家は普通選挙によって選ばれるが、彼らは選挙における策謀、群衆に喜ばれ彼らを引きつけることのできる弁舌を喋々することには、一般にきわめて有能である。しかしこのような能力が経済的社会的諸問題を解決するのに必要とされるであろう能力に対して有する関連は、料理術が天体力学に必要とされる能力に対して有する関連とほとんど変わらない。

三．技術的能力はしばしば定型行動（ルーティン）と結びついている。同業組合とかアカデミー、学会、政治団体等のような人為的に構成される団体は、一定の信条に閉じこもり、芸術科学の活動を停滞させ、革新をいずれにしても排除する、非常に顕著な傾向を有する。これはまさに人間精神における最も確認しやすい傾向の一つである。その証拠は豊富であり、ここでいちいち挙げるには及ばない。それゆえこのような組合とか団体に属しておらず、無資格者とされている人々が、ルーティンによって作り出された障害を時折蹴散らしに来ることは非常に有益である。偉大な発明者の大部分は「無資格者」の隊列から出たばかりでなく、しばしば、あまり分別がないと見做されていた。一般に人がある種の事柄について有能であるとして大きな信用を享受するようになるのはまさに彼の頭脳が新しい観念を受け入れるのには余り適さなくなる年代においてである。

四．道徳的良質性は、社会組織が問題になる場合には、能力についてよりも一層把握が難しい。それを理解する方法はほとんど党派の数と同じだけ存在する。最良者が統治しなければならないと言ってみても人々の選択については何の足しにもならない。なぜなら各党派が最良者は彼らのリーダーであると主張するからである。

五．この場合、最後に、形而上学を基礎とする命題の場合と同じく、幸福というものは本質的に主観的なものだということが忘れられる。あるヨーロッパ人が夕食のために非常に有能な中国料理人をもつことは、彼が中国料理を好まない場合、何の意味があるのか。近代の禁欲家が少しく忘れすぎていることは、人に幸福であることを力ずくで強いることはできないという点である。ピュルゴン氏が哀れなアルガンを、消化不良その他の病気にするぞと言って脅したように、彼ら禁欲家が、ワインを飲んだり、肉を食べたり、あるいは若い女性の素敵な可愛らしい顔を眺めたりするほどに不謹慎な人間のあり方に対して、ありとあらゆる種類の罪でもって脅している限りにおいては、我々は笑っていることができる。しかし彼らが憲兵隊と罰金徴収官の助けを得つつ彼らの考え方を押しつけようとするときには、彼らははっきりと有害になる[1]。このような人物たちがこのような形で自らの同胞の幸福に専念するとき、子供が悲しげで不幸な雰囲気をもっていると指摘された母親が次のように答えたという逸話が思い出される。「おっしゃるとおりです。私はそんな感じが子供たちからなくなるように一日中彼らを鞭で叩いていますが、まだ成功できないでいます。」

（1）　一九〇一年ソールスベリー卿は上院でこの問題について卓抜な演説をした。司教や大司教といった宗教界の大立物によって強力に推されていた「禁酒」法案が問題になっていた。カンタベリー

大司教は獲らぬ狸の皮算用で、議会は発酵性アルコール飲料の小売に関する決定的な措置を取ろうとしていると言明した。ロンドン司教は上院における「禁酒」法案の偉大な勝利を予言していた。しかし上院はこの法案を廃棄した。ソールスベリー卿は、市民を子供として扱う「父権的」政府をイギリスに設けるという考え方に強力に反対して立ち上がった。飲むのが好きな人には飲ませておけばよい、人のことに口出しするな。よく知られている言葉を使えば、イギリスは free better than sober、禁酒しているよりは自由な方がよい、のである。

ソールスベリー卿の言葉は市民各自の自尊心、独立心、個人責任に訴え、あたかも市民は自分にとって望ましいものを、国家主義のこちこちの信奉者や法律を制定する政治家と同じようには知らないかのように、食べること、飲むこと、はては些細な罪のない楽しみに至るまで規制しようとする、こうした人々の泣き言の我々の国における響きをを少々変化させている。

クセノフォンが証明するところによれば（*Mem.*, III, 9）、ソクラテスは最優秀者を選択すべきことを説いた。ソクラテスは、統治者は命令しなければならず、被統治者は服従しなければならないと述べた。船の上で指揮することのできる人間が一人いる場合、操縦者とその他の船乗りは彼に服従しなければならないとすれば、このことは、農業における土地所有者、病気の場合における病人、等についても同じである。この同一視においてソクラテスが忘れていることは、人が農業経営者あるいは医者の指示処方に従うのはそれらが正しいと納得している限りにおいてであること、しかるに統治者による指示の場合には力ずくで従うことを強制されるという点である。医者の忠告に満足しない個人は医者を変えることが可能である。しかし彼は、単独では政府を変えることはできない。彼は自分の医者をいずれにしても部分的には経験によって選ぶのであるが、彼が服従する政府は、多数者、伝統、状況のめぐり合わせ、等によって彼に押し付けられているものである。

ソクラテスの考え方は非常にプラトンの気に入り、プラトンはそれを『共和国』の議論の中心に据え、彼にとってはどんな種類の困難を解決するにもそれで十分であった。各市民はそれぞれその本性によって適した仕事のみをもつべきであると彼は繰り返し述べている（Rep.,p.433a）。「正義は自らの仕事に没頭することにあり、他人の仕事に首を突っ込むことにはない」（p.433b）。こういう風に言うことによってプラトンはただ分業のみを考えていたと信じてはならない。彼が欲しているのはそれ以上の何かである。それは、各個人が一定の職業領域に隔離され、社会がカーストに分割されていることである。彼は主要な困難を言い抜けている。それは人々をアプリオリに選択し彼らを各カーストに配分する困難である。それを彼は寓話によって切り抜ける。市民を作った神は一方の組成のうちに金を混えた。それが統治者たちである。他方の組成のうちには銀を混えた。それが戦士たちである。さらに別の組成のうちには青銅を混えた。それが労働者たちである（III, p.415）。彼は各種族は永続するであろうと想定する。しかしある種族が別の種族に属する子供を生んだ場合には当局はその子供を一方の種族から別の種族に移行させるであろう。この理論はドゥ・ラプージュ（de Lapouge）氏の理論に類似している。この著者にとっては金の種族とは金髪長頭の種族のことであろう。もし本当に、頭蓋骨の形状とか、髪や眼の色といった外的徴表によって人々の性格や適性を認識することができるのであれば、最良の社会組織という課題は容易に解決されるであろう。不幸にしてこうした理論は現実との関係においていまだ不明確なところがあり、さしあたり人間を選ぶ手段として彼らがよく知って

いる方法、相互に競争させるという方法以外には我々は知らない。これはかなり不完全なやり方においてではあるが我々の社会において起こっていることであり、また歴史は、我々の社会の進歩がこの競争の習慣の拡大と密接に結びついていることを示している。

こうした人間の選択の問題においてソクラテスとプラトンの傾向は顕著に反民主的である。彼らはアテネの民主主義による不見識な選択に強い印象を受けていた。そして操作運営の難しさは考慮しようとせずに、別の制度ならば、本質的に最良の選択をもたらすであろうと想像した。これはまた、まさにありふれた誤謬でもある。社会的問題に従事する人々の大多数は、不都合について制度や法律に責任ありとするのであるが、不都合は逆に人々の性質、彼らの情念、彼らの無知によるのである。もしこうした人々が制度Xのもとに生きているならば、彼らはこの制度が示す欠陥に強烈に印象づけられ、別の制度Zならばこのような欠陥をもたないであろうと、あまり十分な検討もせずに認めることになるであろう。言うまでもなくもし彼らが制度Zのもとに生きていたとするならば、推論は逆になり、欠陥を免れているものとして援用されるのは制度Xとなるであろう。彼らはダンテの病人に似ている。彼らはベッドの中で何度も寝返りを打つ。

Che non puo trovar posa in su le piume, Ma con dar volta suo dolore scherma.

民衆がこのような感情に引っ張られるときにそれから結果するのは革命である。革命の最も明瞭な効果は一方の政治家たちによる支配に他方の政治家たちによる支配を代置することである。実際のところアテネ民主主義による選択は近代の民主主義による選択に比べてはるかに不見識ということではなかったし、後者も一般に、寡頭制、君主制、あるいは貴族制による選択よりもはるかに不見識ということではない。ニューヨーク市における統治者の選択、ロシア官僚制のそれ、中国官僚制のそれ、これらは本質的に異なる基準によって行なわれているのであるが、それにもかかわらず、多くの点で類似した、そしてその徳と廉潔心が余りに強固すぎるとも思えない同業者団体を作り上げるに至っている。

プラトンに作用したのと同じ原因が今日ではオーギュスト・コントに作用し、彼を同じ結論に導いた。自由主義的でほとんど宗教的要素をもたない理念が流行していた時代に生きたオーギュスト・コントは、驚くべくカトリシズムに似た体系に、反動によって帰還し(1)、この体系から、彼自身の権威において教皇を作り出す。フランス民主制の、実際非常に凡庸な選択の目撃者として彼は民主主義の敵対者となり、想像しうる限り最も完璧な専制主義を樹立すべき選択体系を構想する。さらに原理については彼はほとんど何も新しいものは生み出さず、しばしばプラトンの理念を水増しさせているだけである。プラトンは、彼の「共和国」は哲学者たちが支配者になるときに実現されるであろうと言う。そしてコントは哲学者たちによって行使される至高の精神的権威を樹立しようとする。彼は公的権力を判断するためにその理性を大胆に行使する人々に対して、あまり軽蔑心をもたない。「否定的形而上学—まず第一にはプロテスタント、次には理神論の形而上学—は、たしかに非常な混乱をもたらすことがありえた。…我々のさまざまの形而上学的諸制度は、全ての市民に対して社会的評価のための一般的方法を提供するように思われる一体系を…直接に公認した。この方法によれば、特殊な判断者は不要になるであろう。(2)」幸いなことに実証的教義が秩序を与えにやって来る。その教義は「二つの社会的権力の正常な分離をもたらす」(I, p.149)。オーギュスト・コントは「公的権力は今後は、命令しようとする学者、教育しようとする支配者をすべて、攪乱的でもあり時代遅れでもあるものとして、枯

死させるであろう[3]」と書いたとき、プラトンによって立てられた原理―各人は他人の専門に首を突っ込むことなく自らの専門に没頭しなければならぬ―を適用したすぎないことを自覚していたであろうか。

（1）これはジョン・スチュアート・ミルが十分に見ていたことである（*A.Comte et le posit., trad. franc.*, p.153）。「コント氏は習慣的に、道徳文化についての思想の大部分をカトリック教会の規則から引いている。」
Association catholique, I, p.117 以降における Laurent Justinen の見解も参照することができる。

（2）*Syst.de polit positive*,I,p.202.

（3）*Syst.de polit positive*,I,p.146-147.

コントの徒の一人はその師の学説を要約して次のように言う。「人はもはや幾何学を知らずして測量士たることはできないし、超越的数学を研究することなく天文学者になることもできない。…それらが依拠している抽象科学の最初の言葉さえ知らずに、…おせっかいにもそれらについて人が議論したり書いたりするのは、政治や教育の場合だけである。（1）」

（1）*La sociologie par Auguste Comte*, Résumé par Rigolage, 1897, préf., p.III.

ソクラテスの言ったこととしてクセノフォンが残しているものをほとんど文字通りに再現しているこの観察は、ある事柄について語る前にそれについて研究することの必要性を教えることのみを目的としているのであれば、卓越したものである。そしてこの観察はすぐさまコントにもあてはめることができるであろう。彼は政治経済学の最初の言葉も知ることなく経済的諸問題を敢えて論じているのである。しかし、この観察は実証主義者においてもソクラテスやプラトンにおいても、全く別の射程を持っている。それはいくつかのことを強いて、一社会階級を別の階級に従属させることを目指しているのである。ところで、この局面においては、この観察は数学や物理科学について与えられる事例としてさえ妥当ではない。

これらの学問において有能であることはいかにして証明されるのであろうか。それらに関係のある研究をなし公表することによってである。従って、このような研究をするためには既に「有能」であることが必要である。これは悪循環であろう。一八二六年一〇月三〇日アーベル（Abel）はパリ科学アカデミーに「超越関数の極限拡張類の一般的属性について」という覚え書を提出した。当時アーベルは無名であった。彼がこの覚え書きを公表する以前は人々は彼を当然のことながら無能者のうちに位置づけていたはずである。ルジャンドル（Legendre）とガウスが楕円関数については最も「有能な」幾何学者であった。アーベルは敢えて彼らのような「特別の判断者」、A・コントが「否定的形而上学」と呼ぶところのものによって侵された精神に訴えることをせずに、自らの頭で考え、楕円関数について書いた。すぐさま彼は並ぶ者なき者としてあらわれ、彼の名は数学が存在する限りは人々の記憶の中に生きつづけるであろう。ルジャンドルはクレル（Crelle）に次のよう

に書いている。「そのときまで知られていなかった二人の若い学者（ジャコービとアーベル）の成果は我々において満足と同じくらい称讃をもたらした…。この成果によって私は、我々がここ何年ものあいだほとんど専心して取り組んできたこの理論を彼ら二人がそれぞれに完成させたことを確認した。…」科学理論であれば権威を有すると想像することは夢想である。科学理論は逆に、有能無能を問わずあらゆる人からの攻撃にさらされている。科学理論が科学の世界において勢力を獲得するのは、そうした攻撃に抵抗し勝利する限りにおいてのみである。

さらには既に述べたように、我々は測量師の権威に服するわけではない。各人はその土地を測量するために、自らが信頼する測量師を選ぶ。天文学者が抽象的理論を語っている限りにおいては、無学の者は彼に好きなことを言わせておくであろうが、しかしこの天文学者が「私の超越数学は無学の者はその財産の一部を私に提供しなければならないと啓示した」と主張するならば、この無学の者は彼に対して要求されたものを差し出すのがよいのかどうかを知るために「あらゆる方向に縦横に議論し書くこと」に完全に首を突っ込んでくるであろう（1）。

（1）アリストファネス『鳥』の中で、ある占者が新しい町のためにBacisの神託をもってやって来る。この神託によればこの占者にマント、靴、その他の物を与えることが必要とのことであった。占者から話をされたピスヘテロスは神託を読み解く占者の「能力」を認めないわけではないが、占者に与えたくないと思うものがちょうど占者の欲するものであり、ピスヘテロスはその占者を追放する。

リゴラージュ（Rigolage）氏は言う（*loc. cit*.,p.8）。「天文学、物理学、化学…には良心の自由は存在しない。それはこれらの科学において有能な人々によって確立された諸原理を安心して信じないことは誰でも愚かしいことと思うであろう、という意味においてである。」彼はまちがっている。科学の観点からすれば、最大の発見の出発点は、まさに発見をするまでは無能と判定されていた人々が、「有能な人々によって確立された諸原理」を安心して受け入れなくなる時にあったのである。善良なロドヴィコ・デレ・コロンベ（Le bon Lodonico delle Colombe）はガリレオが全く哲学を理解せず、絶対的に無知であるはずの事柄についてガリレオが語ることを非難する（1）。しかしこの場合もまた、正しかったのはその当時の「無知者」であったのである。

（1）自分のことを学問があると信じているこのタイプの無学者は実際非常におもしろい。今日でも幾人もの著者たちが、天文学に数学を用いることに対してロドヴィゴ・デレ・コロンベが行なったと同じ反論をそれとは知らずに繰り返しながら、政治経済学における数学の使用に反対して、このようなタイプの無学者を模倣している。この著者は言う。《Altri,in niuna filosophia avendo fondamento, si danno alle matematiche, e quelle predicano per sovrane sovra tutte le altre facoltà(a). E laddove ai tempi di Aristotile, esse erano in credite di scienze da fanciulli e prima di tutte apparate, come appo noi l'abbaco…（b） non dimeno questi tali moderni e solenni matematici dicono che quel divinoingegno di Aristotile non li intese, e che percio disse pazzie (c)…》次のノートはガリレオのものである。《(a) E per tali somo predicate

da tutti, eccetto che da alcuni che non sanno quello che le sono; uno dei quali è il presente scrittore. (b)Tanto è maggiore la vergogna di questo autore. Perchè e'non sa(volendo fare professione di filosofo) quello che era il primo studio dei fanciulli che dovevano poi attendere alla filosofia. (c) Hanno ragione di cosi dire, poi chè ei commete molti e gravi errori in matematica, sebbene nè tanti nè cosi solenni, come fa questáutore ogni volta che apre la boca in questi propositi, palesandosi sopra tutti gli ignoranti ignorantissimo.》

これは今日においても、政治経済学者の精密かつ科学的な方法に対する批判に答えることのできるすべてである。

実践的観点からすれば、無関心な人は、学者原理に重要性を付与しそれについて議論する人々によって呈示される原理を受け入れる。しかし、誰ももしその原理の名において彼から何かを略奪しようというのであれば、あくまでその原理を「安んじて信ずる」ということはないであろう。本当のところを言えば、我々が政治的および社会的理論に関心をもつのは、それらの実践的適用を考えてのことである。もし支配者たちが抽象的理論をつくり出すことで満足していたならば、被支配者たちはそれに口出ししないことに喜んで同意したことであろう。しかし全く別のことが問題になっているのである。支配者たちが狙っているのは被支配者たちの金と自由であり、被支配者たちは可能なかぎり自らを防衛するのである。

A・コントは過去、現在、未来における最大の学識家であったが、しかしこのことは彼が樹立しようとする実証主義的宗教の滑稽な虚礼に耽ることを多くの人間が拒否することを妨げるものではない。我々は「日々の祈りにおいて心情吐露が死者記念よりも半分だけ短い（1）」ように定めるコントの能力に異を唱えるものではない。しかし実のところ我々は心情吐露にも死者記念にも関心はないのである。

（1） Syst. de polit. dosit.,I, p.115.

人間の選択についてコントはプラトンの理論から一歩も進んでいない。彼は貴族主義的組織の主要な困難をなすものについては出来うる限り軽く、立ち入らずに通り過ぎている。そしてこの困難を解決することができず、もっぱらそれを覆い隠そうとしている。

資本家階級は必ずというのではないが主として財産相続によって補充されるであろう。コントの体系においては官公吏およびすべての人々が、その後続者を選択することができる。「しかしそれにもかかわらず社会組織は絶えず無政府的傾向に従属しており、この無政府的傾向は、カースト制度の必然的な廃止以降、正当にも調整的聖職者集団の中心的な懸念事項になっている。実際、人間分類の自然法則は直接的には職務の上下関係にしか関係せず、家長間における職務の事実上の配分は規制しない。この個人間の配分はもはや単なる出生からは結果せず、各人は、それを恣意的と判断する場合には、通常それに不満を持ち、しばしばそれは正当である。…人間制度の完成がこのような自然的悪弊をますます減らすにちがいないとはいえ、それらは精神権力の絶えざる介入を必要とするに十分な重大性を依然としてもち続けるであろう。」（II,p.327）。

プラトンの裁判官（マジストラ）は「各人の子供の魂を形成する金属資質にとりわけ注意しなければならない。そしてもし彼ら自身の子供が鉄と青銅の混合を受け取っていたならば、彼らはその子供たちに同情心をもってはならず、彼らを職人労働あるいは農業労働に送り込まなければならない。逆に労働者や農耕民が金や銀を含んだ魂をもった息子をもった場合には、彼らは監視者や裁判官（マジストラ）の身分にその息子たちを進ませ、尊重する。」（*Civit.*, III, p.415）これは正にコントが提案していることである。但し、コントはプラトンが裁判官（ギリシア語一語）と呼んでいるものを「精神権力」と呼んでいるのであるが。いくつかの細部においてさえ一致は存在する。コントの資本家も、もし彼らの息子が無能である場合には、つまりプラトンの言うところの鉄あるいは青銅を含む魂を持っている場合には、彼らの財産を他人に委ね、金あるいは銀の魂を持つ者を自分たちの階級に移行させなければならない。プラトンの裁判官は神話（ファブル）によって市民に自らの状況に満足するように説得しなければならない。「（コントの）精神権力は市民及び諸階級に対して絶えず、社会的調和の必然的な不完全を前にしての賢明なる諦念を教え込まなければならない。(1)」剽窃は明白であるが、しかし、オーギュスト・コントが立ち至っていた誇大妄想からすれば、この剽窃はほとんど確実に無意識のものである(2)。

（1）Syst. de polit. Posit., II, p.329.

（2）コントは自らが剽窃する著者に対してほとんどの場合好意的ではない。ソクラテスについて論じつつ彼は次のように言う。「その良識と誠実さにもかかわらずこのまずまずの駄弁家は、とりわけその才能の狭さに基づく誤った構想に因るさまざまの逸脱にたしかに陥った。その才能の狭さは道徳についてのあいまいな固定観念のもとに、盲目的に、科学的発展の可能性を排除した。それにもかかわらず、このような局面の最終的非難はとりわけその輝ける後継者に集中させなければならない。この後継者は、その一神教への移行によって一時的栄光を受けるに値したとしても、今日に至るまでその壊滅的な影響を及ぼしている。」（Syst. de polit. posit.,III,p.343.）同一宗教におけるセクト間の憎悪は一層熾烈であることを見ることができる。

ソクラテスに対してコントによって非難された態度は、コント自身が取っている態度と一致していることに注意する必要がある。彼ほど「攪乱的知性」を厳しく非難した人はいない。そしてしかもツァー・ニコラス（Tzar Nicolas）への書翰では、彼は次のように述べる。すなわち実証主義が「科学を聖別するのは、ほとんどすべてのアカデミックな仕事を無益さらには有害でさえあるものとして追放し得るように、学者たちを訓練するかぎりにおいてのみである。」（*Loc. cit.*, ■III■, préf.P.XLVI.）これはソクラテスが、コントの時代の「アカデミックな仕事」に該当した仕事について考えたことでもある。このような非難の動機はソクラテス、コントの両者について同じである。すなわち「道徳についてのあいまいな固定観念」である。

サン・シモン主義者も人間の選択の問題についていかなる新しい解決も与えていない。ただ彼らはプラトンが裁判官（マジストラ）と呼びコントが精神権力と呼んだものを社会制度と呼んでい

る。「新しい世界に行ってみよう。そこにはもはや、習慣的に産業労働に縁がなく、企業の選択と労働者の運命を規制する、土地所有者や孤立した資本家は存在しない。社会的制度は、今日のところ余りうまく働いていないが、「こうした機能を果たすべく権能を与えられている。(1)」

(1) Doct. Saint-Simon, *Exposition*, p.139.

従来からの階級に戻ってみよう。これに属する自称改革者たちが改革するところはきわめて僅かである。サン・シモン主義者も三つの階級を挙げている。すなわち、司祭、学者、産業家、である。より正確には次のものを考察しなければならない。「一般的あるいは社会的司祭、科学の司祭、そして産業の司祭である(1)。…人間の活動の目的を決定すること、この目的が達成されるための作業を指令すること、目的に併せてこれらの作業を分配し調整すること、人々を分類し、結合すること、まさにここに宗教的政治的機能があり、この機能は聖職的機能に全的に帰着するのであり、それ以外の目的はなんらもたない。社会的司祭、統一のための司祭は人類に対してその一般的使命を開示し、その使命を達成することができるのは科学と産業の統一された作業を通じてのみであることを絶えず想起させる。この二つの種類の作業を結合する際に彼を助けることのできる人物たちを選択した後で、この司祭は科学の司祭と産業の司祭を任命し、科学あるいは産業のそれぞれに従事する適性にしたがってその他々の個々人をすべて双方のあいだで分配する。」(P.478.)

(1) この特異な強調の仕方は原文のものである。これは全く児戯に属する。こうしたことに熱中する人間の精神状態を十分理解するためにはこの点を考慮に入れておくことは無駄ではない。

モレリー(Morelly)は彼の共産主義協会(Société communiste)の指導者たちを選ぶために交替制を構想した。彼の目的はギリシャの小さな民主主義国家が目指していたものである。すなわち、各市民が順番で権力に就くようにすることである。近代の民主主義国家はこのような目的を達成することを望むにはあまりに多人数である。近代の民主主義国家は公職を増やすことによって可能な限り多数の欲望を鎮めることで満足しなければならない。これはしかし結局のところ抽選と同じように信頼性からは程遠く、そして、ある種の不誠実■(ギリシャ語一語)■を伴っている場合には特にそうであり、ある種の場合には、普通選挙よりも悪くはない程度の選択さえもたらさないであろう(1)。しかしそれは選択から、政治家による陰謀その他のいかがわしいやり口を排除する利点をもつであろうし、多分、国庫金の掠奪を少なくするであろう(2)。

(1) かくしてアテネでは、いくつかの職務を果たすべく抽選によって指名された、あるいは選挙された市民の検査が要求された。それは職業的適性を対象とするものではなく、戸籍、品行、その他の条件を対象とするものであった。新しい裁判官はほんとうに市民であるかどうか、彼は両親を尊敬しているかどうか、国民の神々を敬っているかどうか、軍人としての義務を果たしたかどう

か、税金を払ったかどうか、等が確認された。■（ギリシャ語一語）■が取り仕切らなければならなかった宗教儀式は、都市国家執政官すなわちアルコンテに対して彼が結婚したときにその妻が処女であったかどうか、彼女が夫以外の者と関係をもたなかったかどうかを尋ねることを必要たらしめた。このような異常さは驚くに及ばない。これらは当時の人々にとっては道理に適ったことだったのである。

（2）Aristote, polit., V, 2, 9.「Hérée では選挙から抽選に代えられた。選挙は陰謀家を生み出しただけだったからである■（ギリシャ語数語）■。」

人間の選択システムに関する改革者たちの想像力の貧困には顕著なものがある。我々は絶えずこの点に立ち帰るであろう。我々自身も人間の選択問題を解決する力はないので、この仕事を、偶然、交替制、特殊な団体あるいは一個人、すなわちプラトンの裁判官、サン・シモンの社会的司祭、オーギュスト・コントの精神的権力、等に委ねるとしよう。しかし誰が、これらの人々は我々には欠けている知識光明を有していると保証するのか。そして、そうした知識を持っているとしても彼らはそれを善用するであろうか。Sed quis custodiet ipsos custodes?

「倫理的国家」の信奉者は人間の選択問題をより一層完璧に、巧みにごまかす。彼らにおいては物理的現実全体が消滅し、国家と名付けられた抽象的かつ形而上学的なある実体が登場するのが見られる。ロードベルトゥスにとってはそれは「社会的摂理」である。彼は「国家」があらゆる社会的活動を卓抜に規制するであろうことを苦もなく証明する。なぜなら彼の定義が認められさえすればこの命題は結局のところ摂理は摂理であると言明することに帰着するからである。しかし彼はこの同語反復によって解決されたと自ら称する問題とは全く別の意味で重要な一問題が存在するのではないかと疑っているようには見えない。すなわち、この「摂理」を地上に降臨させ、この形而上学的抽象を何か具体的なものに変えるための手段を発見することこそが問題だということに気付いているようには見えないのである。換言すれば、団体あるいは機関としてこの「摂理」に奉仕しなければならない人々を選択する問題である。

たしかに全知を授けられ、無限に有徳で、無限に善良な個人、あるいは幾人かの個人が存在し得ると認めるならば、なすべき最上のことは全権力を彼らの手に戻すことである。そして社会組織体系の説明はこのほんの数語で完全に要約されるであろう。

しかし現実の問題は全く別である。現実問題は、不完全な人間、すなわち多少とも無知であり、多少とも邪悪である人間、要するに我々が知っている人間でもって、出来る限り間違っていない選択を実行する方法を発見することにあるのである。

統一性についての議論—ある問題についてもし我々が最良の解決法を知っているとするならば、我々としてはその解決法を採用し、単一の手順を取り、この方法に変種を導入すべきでないことは自明である。かくして例えば、長方形の面積を得るためには底辺と高さとを掛ければよいということを我々は知っている。それゆえ、もし我々が底辺が六センチで高さが四センチの長方形の面積を知りたいのであれば、我々はこれら二つの数を掛けさえすればよい。しかしもし逆に一辺が一センチの小さな正方形の紙でさまざまに試しはじめたとすれば、最後にはこの長方形の中にその紙が二四入ることを発見するであろうが、

結局のところこの「無政府的」やり方では莫大な時間の浪費をもたらすだけであろう。

しかしもし我々が、計算の場を離れずに、四次以上の方程式の根を発見しなければならない場合には既にして、我々は試行に訴えなければならない。そして三次方程式の場合でさえ、知られている公式は用いずに、試行によって方程式を解く方が便利な場合がありうる。

技芸の具体的な場においては、我々は常に、あるいはほとんど常に、何が最良の解決法であるかについて知らない。かくして解決法の統一性のための条件は満たされず、統一性は有利性をもたない。ある商品Aをつくるために「生産の無政府的組織」がいくつかの方法Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳを採用すると仮定しよう。簡単のために、これらの方法はいずれも一〇〇キログラムの商品Aをもたらすが、費用については第一が八五、第二が九〇、第三が九五、第四が一〇〇を要するものと仮定する。これが商品Aを生産するための最も経済的な方法でないことは明らかである。これらの雑多な方法に代えてある単一の方法を代置したとするならば、そしてこれが肝腎な点なのであるが、もしこの統一的な方法が最初の方法Ⅰであったならば、商品Aの生産量全体は一〇〇キログラムごとに八五しか費用を要せず、「無政府的生産」よりも三〇の節約を実現することであろう。しかしこの結論が有効性をもつためには、選択された方法が第一のものであることが必要である。もしそれが最後のものであったならば、統一的生産は「無政府的生産」を上回る利益を挙げる代わりに三〇の損失をもたらすであろう。「無政府的生産」はそれゆえ最も経済的であることからはほど遠いのではあるが、それが我々にもたらす損失は我々の無知の代償であり、無知が消滅するとともに損失も消滅することがありうる。もし、さまざまな方法を選択した人々が、誤りを免かれえない存在でなかったならば、彼らは全て方法Ⅰを選択したことであろう。そして方法の統一が自然に生じるであろう。

この統一も競争の作用によって生じる傾向がある。競争はアプリオリな選択にアポステリオリな選択を代置する。換言すれば、実験的方法を適用する。九〇、九五、一〇〇の費用で生産してきた企業は競争によって滅ぼされ、八五の費用で生産する企業に有利となる。これは確かに不完全な方法ではある。なぜなら後に破滅させるためにまず企業を創始するということはしないほうがよいだろうからである。企業を破滅させることは富の破壊をもたらし、人々を精神的肉体的に苦しめる。しかしより完全な別の方法、より少ない代償でもって同じ結果を獲得しうる別の方法が存在するであろうか。

この問いに対して改革者たちは「存在する」と答える。それは彼らが選択ということの難しさについて知らないからであり、生産あるいはその他の社会組織の統一ということが■利益になるについて■不可欠の条件を除外して考えているからである。彼らには一般に、謙遜の過剰によって目立つということは一切なく、そして少なくとも彼ら自身の見解によれば彼らの学識はとてつもなく広大であるだけに、彼らはこのような断定をしがちである。このように異常に才能に恵まれた人々がどうして個別の問題に与えるべき最良の解決を知らないということがありえようか。プラトンも教育のあらゆる細部について長々と、そして細かく我々に教えているし、A・コントは我々の道徳的完成に対する涙ぐましい配慮を押し進めて、散文でのあらゆる重要な文章の構成は、章の各三分の一はそれぞれ「現行の段落法によって分けられた、それぞれ七つの文章（フラーズ）群から成る七つの節」に分割されねばな

らないことを我々に教えるに至っている。コントの言うところを続ければ「通常の構成であれば、節は七つの文章（フラーズ）から成る中心的一群を含み、これの前後に五つの文章からなる三つの文章群が置かれる、等（1）。」彼の念頭にないのは、彼が自らに課した問題には別の解決もありうるということ、そして、モンテーニュ、ヴォルテール、ラプラス、クーリエといった、文章の「正常（ノーマル）の」構成を知らない著作家たちの明晰な文体を、『実証的政治体系』（Système de politique positive）よりも好むほどに悪趣味な人々もいるということ、である。

（1）　Synthèse subjective, I, p.755.

新たな改革者たちはいずれも次のことを十分には考えなかった。すなわち、もし彼らの先人たちが社会組織の統一に成功していたならば、彼らは自らの体系をつくり出すことはできなかったであろうという点である。もし社会がプラトンの望んだような形で結晶化されていたならば、我々はルソー、モレソー、フーリエ、A・コントといった人々の著作をもたなかったことであろう。このことは多分大きな不幸ではなかったであろうが、しかし、同時に我々は、ガリレー、ニュートン、ラヴォアジュ、ワット、ダーウィン、といった人々の著作ももたないであろう。そしてこのことは確かに我々の利益ではなかったであろう。改革者たちはお互いにいくつかの点について意見が一致しているときでさえ、激しい敵意とともに闘っている。今日、社会主義者の大会においては彼らは時にひどい悪口を投げつけ合い、理性を失って殴り合いさえする。ブリュヌティエール（Brunetière）氏は、A・コントを引き写しているのであるが、統一への愛と「攪乱的個人主義」に対する憎悪とを共有している。A・コントと同じように彼はギリシア人の思想の自由に対する旺盛な反感をもっており、権威に対するローマ人の尊敬と対置している。しかし、もしA・コントがまだ生存しているとして、ブリュヌティエール氏と一緒に監禁したならば、我々はこれら二人の著者が遂にはお互いに喰い合うのを見なければならなかったかも知れない。彼らが好きなだけ書くことができたのは社会組織の多様性と自由のおかげであり、社会にとっての損失がいくばくかの紙と印刷費だけに収まったのもそれらのおかげである。

我々の社会における、最近までいた旧改革派、中国の改革家たちは、彼らは刷新しているのではなく、彼らの同時代人たちが逸れてしまった昔の統一に復帰させるだけであると論じた。近代の改革家たちは異なる議論をする。彼らは進化の概念によって支配されており、自らの教義に多少ともしばしばそれを適用する。過去の教義はそれがつくり出された時代にとっては良いものであった。改革者Xの教義はこの改革者が生きている時代にとっては良いものである。さらにこの考え方は進化について頻繁に語られるようになるかなり以前にも用いられていた。以下はサン・シモン主義者の物言いの仕方である。「世界は一人の救世主を待ち望んでいた。…サン・シモンが現れた。—モーゼ、オルフェウス、Numaは物質的労働を組織した。—イエス・キリストは精神的労働を組織した。—サン・シモンは宗教的労働を組織した。—かくしてサン・シモンはモーゼとイエス・キリストを要約し

た。」そして一層凝縮されると次のようになる。「モーゼは人々に普遍的友愛を約束した。イエス・キリストはそれを準備した。サン・シモンはそれを実現した(1)。」実証主義者の場合には、進化はサン・シモンではなくオーギュスト・コントにおいて結実すること、一定数の社会主義者の場合には、進化はマルクスあるいは集産主義(コレクティヴィスム)において結実することはつけ加えるまでもない。

(1) *Exposition*, p.40. 九七頁には次のようにある。「…今日人類は最終的状態に向かって進んでいる。…そこでは進歩が中断もなく危機もなく…行なわれうるであろう。」

今日では人々はモーゼよりもはるかに遠い時代にまでさかのぼる。太陽星雲仮説以降の進化をたどり、集産主義の不可避的出現による進化の荘厳なる完成に到る。それゆえ静的統一からある種の動的統一に変化する。統一は空間において拡大するのであって時間においてではない。各時代は統一された組織をもたねばならないが、一時代の組織は別の時代の組織とは異なるものであることが可能であり、さらにはしばしば異なるものでなければならない。しかしながら、改革者たちによって望まれた組織に到達したときには、このサイクルに終止符が打たれる傾向が存在する。封建体制はブルジョア体制を生み出さねばならず、ブルジョア体制は不可避的に集産主義体制に変わらなければならない。しかしそこに到達すれば、それでもって停止する。世界がその努力をするならば、世界は休息するであろう。実証主義者によれば、社会は三つの段階、すなわち神学的段階、形而上学的段階、そして実証的段階を経過したことには異論の余地はない。しかしこの最後の段階のその先に何か存在するようには見えない。それは大建造物の完成である。さらに、細部においてさえ、永遠の生成運動を停止させたほうがよい。例えば、「宗教は人間の持続の全体に関係しなければならないとはいえ、その歴史的部分は顕著な成長を決して見ないであろう。このことが今日宗教を最終的に確立することを可能ならしめるのである(1)。」かくしてA・コントにおいては歴史は停止する。進化は我々を実証主義に導く上では素晴らしいものであった。その成果が達成されれば、我々は進化をわきに置くことができる。進化は、もし世界がプラトンの教えを歓迎していたならば、はるか以前に停止していたことであろう。この作者は全てが不易不変であることを欲していた。法律や習慣ばかりでなく、子供の歌や遊びさえも不変でなければならなかった。青年男女にふさわしい歌や遊びが確定されたときには—と彼は言う—法律によって規定されたとは異なる方法で敢えて新しいやり方をし、歌い、遊ぶ者は誰であれ裁判官によって罰せられるであろう(2)。こうした規定は「倫理的な」現代人のお気に召さない性質のものではない。「個人主義」から、それが遊びの中に見出しうる避難所まで取り上げることは、個人主義を一掃するためのしかるべきやり方である。

(1) *Syst. de polit. Positive*, IV, p.141.

(2) *De leg.*, 800a.

モレリーは十八世紀になってプラトンの思想から霊感を与えられる。彼は言う。「裁判官たちは、子供の教育のための法律及び規則があらゆる所で正確に遵守されるように、また所有の精神に傾きうる少年期の欠陥が賢明に矯正され防止されるように、絶えず入念に配慮するであろう。彼らはまた精神が低年令時において、いかなるものであれ寓話、コント、あるいは愚かしいつくり話などによって侵されることを阻止するであろう(1)。」進化はモレリーの体系においては勿論停止しなければならない。「あらゆる科学について一種の公共規範が存在するようになるであろう。この規範においては、形而上学にも道徳にも、法律によって規定された限界を超えてつけ加えられるものは何もないであろう。」「物理学、数学、あるいは力学における」発見だけは許可される。

(1) ベルトロー(Berthelot)氏はコントで子供を楽しませることを欲しない。Science et morale, P.33.
「歴史の始まり以来、そしてまだ六〇年前までは最初の幼年時代はおとぎ話や幽霊話とともに乳母に揺られ抱かれていたものであった。そしてそうしたものの持続的なイメージは後の人生に絶えずつきまとっていた。今日では、少なくとも教養ある階級の間では、こうしたお話はもはやなされなくなっている。人喰い鬼も吸血鬼も天使も、そして悪魔も…もはや現代の人々の想像にとりつくことはない。それでも現代人の精神や道徳性が弱められることは全くなかった。このことは、虚しい夢想や神学的信念の主張が教えられなくなっても同じことであろう。」
しかし我々の著者自身も、おとぎ話と同じようにもはやほとんど現実性をもたないお話をつくり上げることが嫌いではない。以下は彼の『紀元二〇〇〇年』(En l'an 2000)という論説のなかのものである。彼が言うところによれば、「各自が栄養を摂取するために窒素を含む小さな錠剤と脂肪分の小さなかたまりを持ち歩く日が到来するであろう…これらはすべて我々の工場で経済的かつ無尽蔵につくられるであろう…その日には穀物で覆われた農地も、ブドウ畑も、動物でいっぱいの牧草地も存在しないであろう。」(loc.cit.,p.513)彼の知識は非常に広大であり、従ってその日の到来の節には次のようになることを正確に知っていることになる。「人間は柔和さと道徳性の点で向上するであろう。その理由は、人間が生き物の殺戮と破壊によって生きることをやめるであろうからである。大地は流出する地下水を注がれた広大な庭となり、人類は伝説の黄金時代における豊饒と喜びの中に生きるであろう。」(loc.cit.,p.514)。この化学的神学には新規さという功績さえもない。

一九〇〇年フランスでいわゆる「学校学習期間」(stage scolaire)と言われる法律が要求された。この法律によれば、国立の教育機関で三年間を過ごさなかった者は誰も国家ポストには就けなかったであろう。このような法律によればラプラスのような人物も、もし彼が不幸にして学校学習期間をもっていなかったならば天文学を教えることができないことになるであろう。この法律の正当化は斉一性(uniformité)の議論を用いてなされてきた。全てのフランス人は彼らが国立機関から汲み取る原理を持っていさえすればよい、という議論である。珍しい自己矛盾であるが、このような国立機関で「階級闘争」の原理が教えられるにまかされている。これは実際これらの階級を統一する(unifier)最良の方法とは思われない。
今日しばしば斉一性(uniformité)の議論は「個人主義」に反対する議論の形を取っている。個人Aは自分の都市の市民あるいは同胞すべてにあるシステムXを課したいと欲し

ているとする。別の個人Bはこのシステム X を望まず、抵抗し、そしてこの抵抗という消極的行為に積極的行為が加わり、個人Aに対してこんどは別のシステムYを課そうと欲することは稀なことではない。抵抗の事実に驚き個人Aは、Bは「個人主義者」である、と宣言する。そしてこれはある意味ではまちがいではない。なぜならBの反対は実際個人的な一見解だからである。しかしAの見解も同じく個人的な一見解ではないのか。ブリュヌティエール氏はカトリシズムによって実現される道徳的宗教的統一がフランスの救いであると信じており、この斉一性の名において共和主義的自由主義思想家、ユダヤ人、そしてフリーメイソンを迫害することを欲している。しかしこの共和主義者たちは彼にしっぺ返しをする。彼らはまさにこの「道徳的統一」を、学校学習期間を経なかったであろう市民、修道会に属していたであろう市民、要するに彼らの気に入らない市民を公職から排除するために用いるのである。彼らは自由の名においてブリュヌティエール氏のシステムを拒否するのであるが、彼ら自身のシステムを課すことが問題の場合には彼らの自由主義的原理を急いで忘れるのである。同じようにブリュヌティエール氏も、自分のシステムに対する障害を自由のうちに見るときには、自由を軽蔑するほどではないのであるが、敵対者のシステムを拒否するためとあらば自由を引き合いに出す。強硬なカトリックとジャコバンのうちどちらが「個人主義者」であるかは、どのように決定すればよいのか。この言葉がよりよく定義されない限りは基準なるものが全く欠けている。

結局のところこの問題においてなされる論議はある暗黙の前提をもっている。Aにとってその前提とは、システムXは非常に正当かつ優れたものであり、ただ何人かの不穏分子がそれに反対しうるだけというものである。Bにとってはこのような資格をもつのはシステムZである。それぞれが自らの採用する見解こそが最良のものであると信じており、これは自然なことである。なぜならそうでなかったならばそれを採用しないであろうからである。ここから、この見解を力ずくででも強要したいと思うところまではほんの一歩しかなく、結局のところ自分は真実であり正当であり優れたことを課そうとしているにすぎないと考えるときには、この一歩は簡単に乗り越えられてしまう。通俗の人々の見解の大部分、そしてこの通俗の人々は、人間種族の膨大な多数派を形成しており、宗教となる。信仰は一般に非寛容なものであり、信仰が科学と対立するのはこの点においてである。直角三角形の斜辺の二乗についての定理を信ずることを拒否したという理由で迫害された人はかつて一人もいないが、不思議な了解できない事柄について、力を行使する人物と同じ見解をもたなかったことが唯一のまちがいであった人物たちが投獄されたり、絞首刑にされたり、焼き殺されたりしたことはあったのである。万有引力の法則は、宗教裁判が多くの人々をその名において殺したところの聡明な愚行（イネプシー・シュプティル）（注が必要）よりはいくらか確実である。それにもかかわらずニュートンやラプラスのような人がこの法則への信仰を力ずくで強制するようにと要求したことは決してなかった。他方ボシュエは「君主は自らの国において誤れる宗教を撲滅するためにその権威を用いなければならぬ」と言明するのである。言うまでもなく真の宗教はボシュエの宗教であり、他の宗教はすべて間違っているのである。これは狂信家がすべて自らの信仰について断言することである。ボシュエの言葉はジャコバンの教義を要約している。この言葉は今日でもなお繰り返されている。「君主」の代りに「共和国防衛の政府」が指名されている。そしてこの言い方はボシュエにとって大事

であった宗教に向けられている。現在も擬似科学的な一宗教が形成されつつあり、それも他の宗教と同じように排他的で非寛容であることをつけ加えておく必要がある。「科学」が神格化され、その名において独断的な意見が述べられ、実験的科学的研究のための確立された規則が甚だしく侵害されている。

多くの国で、その著作によって個人所有の原理に攻撃を加えた著者を法律で罰していた時代はまだ余り昔のことではない。いつかこの同じ国々で集団的所有を大胆に悪く言う著者が法律で罰せられることもありうるであろう(1)。今日人々はいずれについても自由に語ることができる。かつてミラノの三一三年の王令は次のように述べている。コンスタンティン及びリキニウス皇帝にあっては「キリスト教徒であれ何であれ、どのような個人も、彼に最も都合のよい宗教を信ずる自由を拒否しないことは立派な、道理に適った措置である」と思われた、と。しかし知られているように、この寛容は長続きせず、かつて迫害されていたキリスト教徒はすぐさま自身が迫害者となった。迫害されている現在は自由を要求している社会主義者も同じように、将来においては、支配者になるやたちまち敵対者から自由を取り上げずにはいないであろうということも予測されるのである(2)。

(1) ジョレース氏は次のように言う。「嘲笑を浴びることなく、また劣等性の刻印をこうむることなしに、国を前にして個人的所有の維持について語ることは誰にもできなくなる時が近づいている。」(Cité par *Les Débats*, 19 septembre 1901)

(2) 中世における宗教裁判の非寛容のゆえに現代のカトリックを非難することをやめないある雑誌は、コンペーレ(Compayré)氏が「民衆の大学を創ることに最も激しく抵抗した」ことを非難した後で次のように付け加える。「大学の新学期の総会で彼は敢えて(ママ)次のような話をした。「ディドロは思い切って次のような大胆な定義を下した。『大学とはその門戸が国民のすべての子弟に無差別に開かれている一つの学校である。』しかしこれこそまさにパラドックスに満ちた一精神の妄想にほかならない。…何年間か世間の好評を博した後で消滅した学校の大群の経験を別の分野で繰り返さないようにしよう。兵隊ごっこはやってきた。学者ごっこはしないようにしよう。自分自身の職務の名誉さえ笑いものにする公教育公務員について文部大臣はどのように考えているのであろうか。」

このことから、幾人かの自由主義者によれば、民衆の大学という問題についての正統的な一見解—それから逸脱した場合、人は当局に告発され、一般世俗裁判権に委ねられる—が存在することは明らかである。この新たな異端者を告発する際にあまり正確でない場合さえ許されている。コンペーレ氏は尊敬に値する民衆の大学のなかでいかなる職務も有していないのであるから、彼が「自分自身の職務を笑いものにしている」と言い切るといくらか真実から離れることになる点には実のところ注意する必要がある。コンペール氏の話が正確に伝わっていなかったとも思われる。このあたりは我々の観察にとってあまり重要ではない。我々はただ、人々が著者に反対すべくそこから引き出そうとする結論に注目しているのである。

統一についての議論はこのように呈示される場合には、明らかに愚かな議論となる。し

かし我々は事態の表層にとどまってはならず、その根底に達すべく試みるべきであり、このような統一の原理の徒が行なう誇張のうちに何らかの真実が隠されていないかどうかを吟味する必要がある。

まず第一に主観的真実が存在する。多くの動物のうちには、そして人間のうちには、一個人の生存の様相あるいは様式と大多数者のそれとのあいだのある種の相違を極度に苦痛に、あるいは不愉快に感じさせる一感情が存在する。もし白いめん鳥を赤に染めて鶏の仲間の中に入れるならば、その鶏はまわりからくちばしで激しくつつかれるであろう。犬は異なる服装をしている主人を認知するに十分な知性を持っているが、牛類に属する動物は服を変えたばかりの主人をしばしば攻撃する。文明の進歩の最も確実な基準の一つは新しいものに対する寛容であるように思われる。この寛容はまさにアテネとその他の後進都市とを分かつものであった。野蛮な民族というものは非常に些細なことであれ、いかなる新しさも変異も許容しない。そしてこの点において動物に著しく接近する。文明化された国民はいくつかの事柄について新しさと変異を容認する。とはいえこのような文明化された国民においても、大衆というものはいまだ新物嫌いの感情をかなり激しくもっている。しかも、これが共通類型からの逸脱に対する敵意感情の力を証明するものなのであるが、この感情はまったくどうでもよいつまらぬ事柄について執拗に続くのである。例えば政治的見解の自由は今日イギリスでは絶対的である。この君主国においては、最良の政府は共和制の政府であるということを発言し印刷することが可能であるが、ロンドンの通りを過去の世紀の紳士のような身なりをして散歩する人物はまちがいなく民衆にいびられるであろう。ペチコートを着て訪問する淑女は社交界から排除されるであろう。習慣というものは守らなければ同胞の悪意の的になる恐れがあり、各人が守らなければならない多数の規則を課する。

このことのなかに、見るべき論理は何もない。そしてこの嫌悪感に屈服する人は、頭を下げて赤い布きれに突進する牡牛と同じく、考えるということをしない。人はもし理性を用いるならば、ピエールが神を礼拝するに際してポールにお気に入りのものとはやや異なる形を採用しなければならないと信じているからといって、ポールにどんな迷惑がかかるかを検討しようなどとはしない。しかしながら、これこそまさに最高度に人々の嫌悪を惹起する素質を有する相違の一つなのであり、何百万という人間がこの憎しみの犠牲となって非業の死を遂げたのである。この憎しみを正当化するための論証は一分間の検証にも耐えられぬものである。ポールの信仰は神に背いているとピエールは言う。しかしこの見方を認めるとしても、全能の神に対してなされた罪のかたきを取る責任を負うのが何故にピエールであるのかはまだ分からない。このような論証は行為を決定するためどころか、行為を正当化するために後になって考えられたにすぎないというのが本当のところである。

かくして我々は、我々が既に行なった観察に戻ったのであるが、さらに一再ならずこれを想起しなければならないであろう。主観的現象のほかに、しばしばこれとは非常に異なる客観的現象を我々は見出す。

統一（ユニテ）をめぐる議論には、in necessariis unitas, indubiis libertas, in omnibus charitas というカトリックの教えを生み出したある客観的真実が存在する。ある種の事柄においては統一性はほとんど欠くべからざるものであり、また別の事柄においてはそれはきわめて

有用である。この点が斉一性（ユニフォルミテ）についての一徹な支持者に論拠を与えるであろう。しかし、別の事柄においてはこの斉一性はどうでもよいつまらぬことであり、また別の事柄においてはそれは決定的に有害であることもつけ加える必要がある。それゆえ難しいのは有用性を認めることにあるのではなく、この有用性がどの点で停止し、斉一性がどの点で有害になり始めるかの限界を正確に知ることにある。問題は量であって、質ではない。

社会科学および経済科学の問題の大多数を検討すると我々は右と類似の結論に到達する。質ではなく量であることを忘れることが広く普及している詭弁や無駄な際限ない議論の原因である（1）。事態を一般的に述べよう。最大限の裕福さ（ビヤン・エートル）を獲得するために人間社会にとって一定の割合のAとBとが必要であると仮定しよう。Aの支持者はAが必要であることを証明するのに何の苦労もない。これは真実であるが、しかしこれは真実のすべてではない。Bもまた必要であることを追加する必要があるだろうからである。同じように、Aの支持者がBは裕福さの最大限を与えることはできないことを証明する批判的部分は一般に優秀であるが、ここでもまだ我々は真理の一部を手にしているだけであって、真理全体を手にするためには、Bだけでは裕福の最大限を得ることはできず、一定の割合においてAと結合されなければならないことを述べなければならない。Bの支持者も必要な変更を加えれば同じ誤謬に陥ることはつけ加えるに及ばない。かくして議論は全く前進しない。なぜならこの議論は決定することが肝要な唯一の点、すなわちAとBの割合の決定を対象としないからである。

（1）リスト（List）が我々に好例を提供している。彼はアダム・スミスが個人の節約が富を創造すると言ったとして彼アダム・スミスを非難する。この非難の理由は、節約は必ずしも我々を富ませないというにある。この論理に従えば、雄の兎は兎の子供をつくると言うこともはや許されないであろう。なぜなら、一．子供をつくるためには雌の兎が必要であり、二．たとえその雄兎が雌兎をもっているとしても、彼は常に必ず子兎をつくるとは限らないから、である。リストの論証の大部分はこのようなやり方である。

我々を誤らせるのに貢献するものは、社会組織のとてつもなく複雑な諸問題を解決すべき絶対的ないくつかの原理が存在するという誤れる考え方である。ある理論的現象において一つの原因を随意に他の諸原因から切り離すことがたとえ可能であるとしても、具体的な現象全体の中にはきわめて多数の原因が存在しており、それらの効果が錯綜していることが忘れられる。

プラトンは統一の原理を個人にまで拡張する。彼は鉄を扱う労働者が同時に木材を扱うことを欲しない。もし誰か外国人が二つの仕事を同時にしている場合には裁判官は懲罰でもって彼に「複数の人間ではなく単一の人間」であることを強いなければならない（De leg., 847b）。このような誇張の裏には分業という優れた原理が存在しているのであるが、この場合も問題は量であって質ではない。

人間社会は個々の無数の原子ではなく、それに違反すればとてつもなく重大な不都合が

生ずる、ある種の規則が必ず共有されていなければならない、有機的な一全体である。アリストファネスが Acharniens の中で、Dicéopolis がその全市民が戦争を続けていた Lacédémone と単独で休戦を締結すると想定しているのは、心地よい虚構である。現実には事態はこのようには進行しえなかったであろう。そして、平和状態と戦争状態はある国民全体にとって普通のことであり、またそうであるに違いない。同じく法律にも一定の斉一性が必要である。多分今日ではこの斉一性は行きすぎているであろうが、いずれにしても各人は自分ひとりのための特別の法を持つことはできない。斉一性が明らかに有用なケースから、感知されないほどの推移を経て、斉一性が同じく明らかに有害な別のケースへと移行する。例えばすべての人々に同じ時間に同じ質の同じ量の食料を食べることを強制しようと欲することは馬鹿馬鹿しいことであろう。中間的諸ケースのなかに、一種の貸借対照表を作成しどちら側にバランスが傾くかを観察する必要のある多数のその他のケースが存在する。

ここにきわめて重要な一観察がはさまれる。歴史および日々の経験は次のことを示しているように思われるのである。すなわち、斉一性が必要なところでは宗教感情に訴えることなくしては斉一性を樹立しそれを維持することはほとんど望みえないということである。もし国家が賢人ばかりから成り立っているのであれば—と Polybe は言う（VI,56）—宗教感情は必要ではないであろう。この制限条件は多分余計なものであろう。なぜなら我々は Polybe が語るところの賢人なるものがいかなる人たちであるか、その賢人たちから成る社会の体質構造がどのようであるか、を知らないからである。それゆえ我々は、もし慎重であろうと欲するならば、研究を現実に存在しているままの人々に限らなければならない。

しばしば必要であり時には欠くべからざる斉一性を樹立し維持するための宗教感情—この語はきわめて広く受け入れられている—の必要性はオーギュスト・コントの場合のようなたわ言をある程度までは許容する。知性というものは、特に大多数の人においてきわめて限られたものであるからして、実に攪乱的なものである。大多数の人々に対しては、理性でもって彼らに働きかけることが不可能である以上は、感情でもって働きかけることが必要である。この相においては、最広義において理解された宗教は実に、あらゆる社会に不可欠のセメントであると言うことができる。アテネのためにペプロン（婦人用の袖なしの寛衣）を織ること、Iuppiter optimus maximus に犠牲を捧げること、あるいはもっと進んだ進化状態ではこうした神々の代わりに「人類」とか「社会主義的進歩」とかの抽象を立てること、こうしたことはある点では余り重要ではない[1]。人々がこうした手段によって共通のある行為に導かれれば目的は達せられたのである。しかしながらそれを濫用してはならない。大麻は山の老人に優れた執行者を供給するかもしれないが、将軍も学者も、そして近代工業が必要とする知的な労働者さえ一人も提供することができないであろう。スキピオは Carthage-la-neuve を襲撃する前に、その兵士たちに対してネプチューンの援助を約束した。スキピオは Carthage-la-neuve が知っていなかった潮の満干を知っていたので、潮が引きはじめる瞬間を待って、兵士たちに対して、彼らを都市の城壁から隔てていた池の中に飛び込むことを命ずる。兵士たちはそれに従い、水が引いていくのを見て驚嘆し、神の介入が起きたことを納得し、奇跡的な働きを示し、都市を占領した（2）。その時は兵士たちが信仰したことは有用であった。しかし、彼らの将軍が潮汐現象を知っ

ていたことはなお一層有用であった。

（1）多分これにベルトロー（Berthelot）氏の「科学的合成」をつけ加えることができるであろう。しかし、この新しい神の、人々の感情と情熱を喚起する能力はかなり疑わしいと思われる。

（2）この事実を報告しているPolybe（VI,56）は、ローマにおける宗教の重要性を強く指摘した。

人々は現実の領域から離れ証明不可能の領域に遠出する欲求を絶対的にもっている。彼らに宗教が不可欠であるのはそのためである。この意味においては「科学の挫折」について語ることには根拠があった。しかし、挫折した科学なるものは、科学本来の領域から離れることを欲し、人々の非論理的かつ非実験的欲求を満足させると主張した科学であることもつけ加える必要がある。科学は経験と論理の外部には見るべきものは何もないのである。

思想家の大部分は人間存在の宗教的欲求を確認したが、この事実からしばしば誤れる帰結を引き出した。

最も流布している詭弁の一つは、ある種の信仰の実験的論理的現実性を証明しようとし、その証明としてそれらの信仰が人間にとって為になり有用であるということを呈示することにある。この後の方の命題は真実でありうるが、先の命題と論理的には何の関係もない。

ギリシア人が植民地を設けたいと望んだときにデルフォイの神殿に伺いをたてることは有用であった。しかしこのことはアポロンの存在を証明するものでもないし、アポロンの神が託宣を下したことを証明するものでもない。実際デルフォイの神殿には、事情をよく知ったうえで植民地の設立を決定することを可能ならしめる大量の情報が集中していた。我々を領している詭弁の起源は、ある種の人々をしてある別の意味で科学は宗教に取って代わることができると想像せしめる、すなわち科学的に真なるもののみが人間にとって有用でありうると想像せしめる考え方のうちに見出される。「真なる」(1)ものと有用なものとのこのような一致が打ち立てられれば、そこから、異なる二つの方向の結論を引き出すことが可能である。一．有用なものが科学的に真であるからには、ある事物の有用性を証明すれば、我々はそれが経験と論理によって正しいということも証明したことになる。これは我々が指摘したばかりの詭弁である。二．科学的に真なるもののみが有用であるということであるからには、論理と経験によって証明されえないものはすべて人間にとって有害であり、そして宗教の本質はまさに経験の彼岸にあるから、宗教はすべて有害である。かくして人は十八世紀の哲学者たちや現代の「唯物論者」の取りとめもない愚論に陥る。

（1）しばしば、単に科学的真理のみが存在するのではなく、いま一つ別の真理も存在する、と言われることがある。これによって、科学的真理は主観的にも客観的にも全てではないということを理解するならば、それは完全に正しい。不可知なものが我々を取り巻いており、知り得るものは大海のなかの小島にすぎない。しかし、経験によって検証されうる命題と経験による検証の余地のない命題のように異なる二つの事柄に同一の名称を与えてはならない。それらに同一の名称を付することは、これらの命題の一方に対して、他方に属するとされた命題を不当に拡張すべく、当の混乱を利用しようとすることである。

非現実と現実とを同一視することの欲求は人間にあって強力なものである。そして非現実のものは時に有用であることから、右のような同一性が存在しないことを完璧に理解している人物でさえも、社会にとって有用な感情を攻撃し破壊することのないようにと、あたかもそのような同一性の存在を信ずるかのような意見を述べることを余儀なくされることがある(1)。これとは別の人々は、このような状況にあって最後には自分自身をだます。ある事物が科学的に真であることは有用なことであろうし、したがってそれがそうであることを認める必要があるというのが、多少とも明示的に示される彼らの考え方である。これが、教養もあり知的でもある、ある種のマルクス主義者たちが現在価値論に関して陥っている精神状態である。論理的観点からすれば彼らが間違っていることはたしかである。彼らの大義にとっての有用性という実践的観点からすれば、多分彼らは正しいのであろう。肝腎なことは、一定の限界内では人類にとってためになりうる事物を濫用しないことである。そして特に理解しなければならないことは、人々のあいだにはこの点について大きな相違が存在すること、一方の人々を惹きつけるものが他方の人々を全く納得させないこと、一方の人々には強力に作用するものが他方の人々に対しては、一定の状況の下では、微弱にしか、あるいは全く作用しないことがあること、である。群集心理の研究はこの事実――これは群衆に限らず一般的なのであるが――の事例を提供してきている。

(1) こうしたことが困難になる時代がある。例えばギリシアとローマのある時代には、知的な人々は多神教における神々の冒険の実験的論理的な馬鹿馬鹿しさを理解していたのではあるが、しかし彼らの多くは、国家の安寧のためにはそれを信じているようなふりをすることが不可欠であると感じていた。しかしこれは辛いことであり、際限なく続けることは難しい。それこそ多分人間社会の不幸の主要な原因の一つであろう。

人間は様々に異なっているが、同じように見えることを欲する。人間は同じ形では感じないが、感情の共同性を持ちたいと欲する。人間は同じことを信ずることはできないが、信ずるものの統一性を持ちたいと欲する。より包括的に言えば、社会は異質的(エテロジェーヌ)であり、しかも人々は社会が同質的(オモジェーヌ)に見えることを欲する。

ローマ人は宗教の使用において、解決すべき量の問題が存在することを理解していた。彼らは明瞭に superstitio と religio とを区別していた。前者はその起源においては今日我々が迷信と呼ぶものを決して指してはいない。ローマ人は神々に対して明確に規定された義務をもっていた。彼らは借金を払うようにその義務を正確に果たしたのであるが、しかしただそれだけであって、それを越えて進ことは superstitio であった。老カトーはいずれにしても宗教的人間であったが、田舎の領地についてはこの量の問題を解決した。「villicus は――と彼は言う――四辻や炉辺で、compitalia 以外の宗教勤行にふけらないこと、villicus は卜占師にも占星術師にも相談しないこと(1)」。

(1) *De re rus.* V. Gell., は IV,9 で古代詩人の一行を引用している。
Religentem oportet esse: religiosum nefas.

彼はこれに Nigidius Figulus の注釈をつけ加えている。Vinosus, mulierosus, religiosus, nummosus,significat copiam quamdam immodicam rei supet qua dicitur. Quocirca religiosus is appellabatur,qui nimia et superstitiosa religione sese alligaverat,eaque res vitio assignabatur.

あらゆる社会的・宗教的組織において religio と superstitio とのあいだに一つの闘争が生じる。大衆の一部は常に後者に陥る傾向を有する。指導者たちはより賢明であり、彼らを religio に立ち戻らせようとする。Religio と superstitio のあいだのこの問題は何よりも重要である。これはキリスト教会の最初から提起されていたものであり、公会議や高位聖職者を大いに煩わした。ローマは常に中庸を保つことを試み、過度の信心の表われを阻止し、そうしたものが育たないようにし、必要な場合にはそれを抑圧した。

人間の本能の大部分は動物の中にも再び見出される。しかし本能の一つ、禁欲主義の本能は人間のうちにのみ存在するものであって、その起源を解きほぐすことはきわめて困難である。禁欲主義は未開人のあいだ、少なくとも最も貧しい人々のあいだではほとんど見られず、裕福さと共に急速に発達する。安楽の中にあって人は自らに苦痛を課することを愛する。このような行為を正当化するために彼自身が与える理由は二次的な重要性しかもたない。そこには、我々が「序」で述べたアポステリオリな説明のあらゆる特徴を認めるとができる。ある古代ギリシヤ人は、神々や余りに幸福な人間がもつ嫉妬をなだめるためには自らに何らかの苦痛を課することが必要であり、Polycrate の環の歴史を引用した。インドの托鉢苦行僧、キリスト教の禁欲者その他は天上における永遠の至福を地上における一時的苦痛とひきかえに購いうると信ずるであろう。犬儒派の哲学者は幸福のためには徳で十分であり（1）、社会の習慣や利益には何ら配慮する必要はないと言明した。ストア派の哲学者は、苦痛は少しも悪ではないと言い、賢人のみが幸福であり彼は鉄鎖に縛られていても自由であると、言葉をもてあそんで説得しようと欲した。近代の倫理的禁欲家は、自らの苦痛と、そしてとりわけ他人の苦痛を提供すべきペルソナとしての神をもたないので、それを人類に提供し、罪もない何かの楽しみを同胞から取り上げることによって、人類をその苦痛の効果で満足させようと考える（2）。

（1）Diog. Laert., VI, 1,11■上ローマ数字かもしれないが判読がつきません■：（ギリシヤ語六語）．一二五九年と一三四九年の鞭打苦行者の蔓延は最高度に昂揚した禁欲主義の情熱を我々に見させてくれる。十四世紀の鞭打苦行者たちは「一定の時間に自らを鞭打った。彼らは腰まで裸になり四本の釘のついた皮ひもで自らを打ち、それがあまりに激しいので、ある目撃者の言うところでは、皮膚から鉄釘を離すのに時には二回ほど振る必要があったほどである。彼らは、この修行は、三三日半継続されたのであるが、魂をあらゆる穢れから浄化し、悔悛者を誕生の日と同じように穢れなきものとすると申し立てた。」*H.C.Lea, Hist. de l'Ing.*, trad. de s. Reinach,II, p.457.

さらに、現在起きているのと同じように、禁欲主義は他人の財を横領しようとする欲望と相容れないものでは決してない。鞭打苦行僧の宗教的熱情は、ユダヤ人の、そして一般に富裕な人間の、略奪にも同じように表われている。

（2）ルナン、Renan, *Marc-Aurèle*, p.234：「司教団の勝利はこの状況においては寛容と人間性の勝利であった。稀な良識によってカトリック教会は過度の禁欲を神の創造に対して向けられた一種の部分的弾劾、そして、神の作品に対する侮辱とみなした。」さらに二三五頁には次のように言う。

「どうしても平均的な徳しかもたない信者が指導者に従った。凡庸が権威の根拠となった。カトリシズムが始まる。」

十八世紀の終わりには痩せて貧弱な人間に関するカトリック教会の要請を人々は十分に無視していた！ところが今日でも「禁欲主義者」は次のような種類の問題をたてている。「白ワインで料理された魚、料理の途中でボルドーのワインを加えた野兎のシチューを人は良心の苦責なしに食べることができるであろうか。」厳格主義者たちは否定的である。Nil novi sub sole.

この場合にもまた程度、割合の問題が存在することは明らかである。最も粗野な感覚の快楽の為にのみ生きることと、精神的肉体的に自らを虐めることのみを目的として生きることとのあいだ、またある種の未開人がやるようにたらふく食べることと餓死することとのあいだに、個人と種の幸福をよりよく保証する中間の道が存在する。

カトリックの神権政治（テオクラシー）ははっきり異なる二種類の戦闘を始めなければならなかった。一方でそれは、それから離れライバルになるかも知れない知的学問的エリートと闘わねばならなかった。他方ではそれは、四方八方から現れていた過度の狂信、迷信、禁欲主義を抑えなければならなかった。

これは遠い昔にまでさかのぼる。既に二世紀キリスト教の再臨近しとするモンタニストの時代に教会の支配階級は我々が superstitio と呼びうるものの行きすぎを厳しく非難していた。ヴォルテール以降、人はカトリックの神権政治に対して不公平である。なぜなら先入観によって人はこの神権政治の業績の半分しか見ず、また見ようとしないからである。たしかに、科学を信じた人々、あるいはただ自由に考えることを欲しただけの人々の迫害はいかなる社会的有用性ももたなかったし、またもちえなかった。逆にそれはとてつもなく有害であった。とは言え、きわめて幸いなことに、ローマは科学迫害という部分においては完全に失敗した。狂信や迷信の排除というもう一つの部分についてはもっとうまくいき、恐ろしい狂信家のくびきから我々を解放した。ローマの影響力なしでも同じ効果が獲得されることはありえたことであろうが、それは我々の知り得ないことである。しかしいずれにしてもこのローマの影響力は少なくとも諸原因のうちの一つであったとは考えられるのである。

カタリ派の陰惨な禁欲主義の専制の下にあったらヨーロッパはどのようになっていたであろうか（1）。我々をそれから免れさせることによってローマは幾千万もの人々の生活に一筋の陽光をもたらしたのであった。もしローマがアシッジの聖フランソワやその仲間たちの事蹟に表われているような禁欲主義的潮流を堰止め得なかったならば我々の経済的未来はどのようになっていたであろうか。鞭打苦行者は我々によい未来を準備したであろうか。十五世紀の過激フス派であったタボル派は、あらゆる文学的ないしは科学的研究はキリスト教徒を異教徒の水準まで引き下げるものであるとみなし、聖書およびその模倣詩を除いてあらゆる書物を焼こうと欲していたのであるが、彼らは文明の進歩に貢献したであろうか。

（1）F. Tocco, L. eresia nel medio evo はカタリ主義の傾向をきわめて見事に描き出している。「真のカタリ派は—と八八頁で彼は言う—神の如き指導者キリスト（divin Maître）に倣えば、家も持たず、

土地も持たず、その他いかなる富も持たない。真のカタリ派はその財のすべてを他者と共有し、その手による労働によって極貧のうちに生活する。」筆者は聖 Bernard 宛の Erervinus の書翰を引用している。Dicunt qui se tantum Ecclesiam esse et apostolicae vitae veri sectatores permanent, ea quae mundi sunt non quaerentes, nec domun, nec agros, nec aliquid possidentes sicut Christus non possedit. もっと後の方で別の引用は彼らをトルストイ主義の先駆者のように描き出す。 Isti etiam haeretici omne bellum detestantur tanquam illicitum, dicentes quod non sit licitum se defendere(*Moneta*, p.513).

この文明の進歩とは無関係に、不幸な人々にとってたしかに何ものかに値する生の魔力（le charme de la vie）が存在する。バックル（Buckle）は大家の筆跡で陰惨な禁欲主義がスコットランドに実際にもたらすことのできた不幸を描写している（1）。幸いにもイタリアはそれを免れ、世界にルネサンスの奇蹟をもたらした。今日でもイタリア人はある種の逸脱から距離をとり、救いようもなく陰惨な魔術師たちの宣言に対して陽気に微笑んでいる。

（1） Hist. de la civil. en Angl. , chap. XIX. 「この時代から遠く隔たって生きており、異なる思想のうちに生きている我々は、このおぞましい考え方が人々のうえもたらす効果を不完全にしか想像することができない。…このような不完全な観念とともにしばしば理性が国民を見捨て、宗教的狂気が精神を支配し、その狂気の影響の下に、陰鬱な絶望の中でその犠牲者が自ら命を絶ったことは驚くべきことであろうか。」さらに先では、「…自然なあらゆる愛着、社会の各種の楽しみ、あらゆる娯楽、人間の心の愉快の本能、これらすべてが根絶すべき罪であった！」「それゆえ、あらゆる楽しみが、それ自体としてはいかにかすかなものであっても、あるいはいかにそれが許されうるもののように思われようとも、それを注意深く避けねばならなかった。」今日のある種の倫理家たちは生についてのこのような考え方に接近している。

かつて、教会を含めて法定（コンスティテュエ）の権力は、それらが現実にはいかに非道徳的で非禁欲的でありえても、公式には道徳と禁欲主義を代表すると了解されていた。自由主義者（リベロー）は「放蕩者（リベルタン）」であった。彼らは権威に対して集中砲火で突破口をつくるべく感覚的快楽に訴えた。猥談が一七八九年の革命を準備したフランス文学の欠くべからざる部分であることは誰もが知っている。一九世紀始めのフランスではベランジェ（Béranger）がまだ、「えせ信心家（カゴー）」を邪魔するためにワインと愛の歌をうたっている。もっと後になってもイタリアではまだ「不穏な詩人（1）」がうたうのはワインと愛である。しかし場面は少しずつ変化し、一九世紀の終わりころには革命派は禁欲主義に転換し、倫理的になった。ここにはかなり奇妙な現象が存在し、その説明は次のようにでもなろうか。宗教的でいささか狂信的な党派以外に真に活動的な党派は存在しない。良識、理性は控え目な役割しか果たさない。あらゆる狂信の弱点はそれが人間の本性と矛盾することである。狂信は理性に対立するばかりでなく、感覚的快楽と対照をなす。ところで大部分の人間はこうした快楽に無

感覚どころではない。適切な程度においてそうした快楽を強く感ずることは肉体的精神的に健康な人間の特徴でさえある。それゆえここには、人が人々に対して働きかける際に訴えることのできる、ある力が存在するのである。良識ある著作家はそれを軽視することはしない。なぜなら一定の点まではそれは我々を現実へと立ち帰らせるからである。しかし理性と現実の言葉を語る著作家はほとんど何も創り出さない。彼らはただ権力の座にある宗教的党派の破壊の主体でありうるにすぎない。この仕事において彼らは自発的にか否かはともかく別の宗教的党派の同盟者の立場に身を置くことになる。この別の宗教的党派は破壊される先の宗教的党派に比べて一般に非常に優れているというわけではなく、彼らが権力に到達した場合には前日の同盟者の決定的な敵の立場に身を置くことになるであろう。ヴォルテールはちょうどよい時に死んでいる。もし彼がもっと生きのびていたならば、彼が激しく闘った連中よりもはるかに恐るべき狂信家を経験することになったであろうし、そして彼は「危険思想家」から「保守主義者(2)」になったであろう。そして結果として言うまでもなく昔の彼の同盟者たちは彼をギロチンに追いやったことであろう(3)。社会的あるいは政治的システムの転覆に従事する人間の大部分は、彼らが破壊しようとするものについては知っているが、その代わりに打ち立てようとするシステムについては最大の幻想をつくり出しており、もし彼らがそれを想像できたならば彼らのうちの多くが茫然自失し恐怖を覚えることであろう。

(1) カルドゥッチ(Carducci)は、「危険思想家」であった頃、フランス共和国の記念日に際して次のように書いた。

Vino e ferro vogl'io, come a'begli anni Alceo chiedea ne'l cantico immortal :
Il ferro per uccidere I tiranni, Il vin per festeggiarne il funeral.

次は彼の言うところのキリスト教徒である。「maledicenti a l'opre de la vita e de l'amore,...」

(2) J・ジャンセン(J.Janssen)が宗教改革時代のユマニストに対して不公平なのは、彼が、自分が動いていると信じていた方向とは全く異なる方向に引っぱられていた人々の失望を考慮に入れていないからである。

(3) ローラン夫人(M^me^Rolland)は一七九〇年六月三〇日ランテナス(Lonthenas)に次のような手紙を書いた。「…ですから教会財産を売却させて下さい。私共は野獣どもの巣を壊さない限り、彼らを追い払うことは決してできないでしょう。律儀者よ、さようなら。私は蛇のシューシューいう音は無視します。蛇どもは私の平穏を乱すことはできないでしょう。」実際、小さな蛇どもは彼女の平穏を乱さなかった。別の「野獣」がそれを引き受けた。そしてローラン夫人は別のシューシューいう音、すなわちギロチンの刃のそれを聞いた。

religio と superstitio との間の問題は社会主義者の教会 ecclesia にとって現在も立てられているものであり、指導者のそれについての苦労は多分、今後ますます増大するであろう。今日までのところ社会主義者大会はこの問題をかなり賢明に解決した。彼らは倫理家たちの superstitio から距離をとっており、また、完全にではないが少なくとも部分的には衛生学者の superstitio からも距離をとっている(1)。正統派社会主義者は節酒をすすめてはいるが、いくらかの感覚的快楽を楽しんだという罪のある人物を破門したりはしない。ドイツでは、社会主義者の代議士たちは la lex Heinze の最も断固たる反対者であった。

フランスでは、古典作家の大部分を捨て、ホメロス、ダンテ、シェイクスピアの不穏当箇所を削除することを義務づける法律が提案されたのは社会主義者からではなく、ベランジェ（Béranger）氏からであった。

（1）一九〇一年リュベックで開かれた社会主義者大会は、次の大会における決議事項にアルコール中毒の問題を入れることを拒否した。

しかし最大の困難は社会主義の勝利の日から生まれるであろう。その困難は別の一原因によるであろう。確かに社会主義者のなかには博愛主義者がいるし、純粋な隣人愛に動かされている人々もいる。彼らは、たとえ彼らの religio がそのすべての約束を守らなくとも、期待を裏切られた至福千年を信ずるキリスト教徒たちが諦めたと同じように、諦めることであろう。しかし、集産主義の学説の意味が、貪欲、他人の財産を横取りし享受しようとする「個人主義的」願望が目下取るところの形態にすぎないような連中も、同じようにきわめて多数存在する。今日、このような欲望に屈服する人間は「連帯」あるいは集産主義の原理を引き合いに出し、集産主義的体制の下での無政府主義の原理あるいはその他類似のものを引き合いに出すであろう。彼を満足させることのできる唯一の体制は、彼は全く労働せずにしかも彼にありとあらゆる享楽を供給するような体制であろう。既に現在、社会主義者と無政府主義者とは殴り合いを始めており、社会主義者のあいだには深刻な対立が表われている。これは彼らが権力の全責任を負うようになるときにはずっとひどくなるであろう。彼らは一方では無能な人間、怠け者、規律を守らない性質の人間と闘わねばならないであろうし、他方では強い人間、有能な人間、知的で精力的な人間と—彼らは彼らに与えられる分け前に不満であろう—闘わねばならないであろう。

彼ら社会主義者の社会において統一を維持するために、今日までのところいくつかの政府によって採用されてきた手法を社会主義者が模倣するということが大いに考えられる。ところでこの手法はほとんどつねに非常に限定された効果しかもってこなかった。先入見をもたずに科学的に歴史を研究するならば、ゼロかほとんどゼロに等しい結果を得るために政府によって費やされた大量の精力、被支配者に課せられた無数の苦しみに驚かされる。ガリレーに対する迫害は何の役に立ったのか。天文学は今日イエズス会の学校においてさえ教えられている。ジャコバン派は多くの人々を殺したが、それでもってしても共和制がナポレオン一世の長靴に踏みにじられるのを阻止できなかったし、ルイ一八世の王政復古が皇帝制に続くのを阻止できなかった。この世紀のはじめ、ほとんどすべてのヨーロッパ諸国において社会主義者は迫害されたが、それでも社会主義者が増大し増殖するのを阻止しえたであろうか。イタリア半島の昔の諸政府はカルボナリ、マッツィーニ派、国の独立を夢見るあらゆる個人を投獄し、絞首刑にし、銃殺刑に処した。最も罪のない著作も容赦なく差し押さえられた。これはローマ王国の樹立を阻止したであろうか。より最近では一九〇〇年までイタリア政府は社会主義者を迫害していた。まさにその結果として社会主義者は分裂することができなくなり、彼らには殉教者としての名声が与えられた。実際イタリア政府は社会主義者の成功の張本人である。フランスでは、聖職者は政府の特恵を享受するときには影響力を失い、政府が迫害するときには影響力を獲得するようになるのが観

察された。Jules Ferry の有名な政令は何の役に立ったのか。ドイツでは社会主義に対抗するための特別法の効果は、社会主義政党を著しく強化しただけであった。カトリックに対する文化闘争 Kulturhampf は結局のところカトリック中央部を帝国議会における支配政党たらしめた。

要するに社会生理学も社会病理学もいまだ幼年期にある。もしこれらを人間の生理学や病理学と比較するのであれば、さかのぼる必要があるのはヒポクラテスまでではなく、はるかそれ以前までである。政府は、薬屋で全く行き当たりばったりに薬を選びそれを患者に投与する無知な医者のごとくに振る舞っている。

さらには、科学がその法則を知っている現象についてさえ、政府は盲滅法に振舞っている。経験は政府に何も教えていないように思われる。彼らは絶えず同じ誤ちを犯している。例えばグレシャムの法則、これによれば悪貨は良貨を駆逐するのであるが、これは政治経済学の最も確立された法則の一つである。何と全く最近イタリア政府は補助銀貨が外国に流れたとき憲兵を使ってその補助銀貨の移動を阻止しようと試み、その失敗に驚く苛立った。ヨーロッパで最も文明化しており教養ある国の一つ、スイス連邦政府は、金属貨幣が不利な為替相場（シャンジュ）によって駆逐されている国では金貨が流通しつづけていると信じて、金貨を鋳造した。しかし逆に、予測することはかなり容易なことだったのであるが、新しく鋳造された金貨は鋳造されるや否や、既に摩耗して新しいものと同じ重みはない金貨よりもむしろ好んで輸出されたのである。政府はグレシャムの法則のこの効果に苛立ち、職員に通達を出して新しい貨幣を銀行家に売ることを禁じた。同じく通貨発行銀行は、その資産を固定資産化し、為替相場（シャンジュ）を有利にする唯一の方策に訴えようとせず、彼らの銀行紙幣を両替するために莫大な出費でフランスからエキュ銀貨を輸入している。次に彼らが驚き苛立つのは、このエキュ銀貨が流通するや否や輸出されることである。山に降った雨が谷に流れるのに驚き苛立つほうがましであろう。

ある公式委員会が、為替相場がスイスに有利になるためには中央銀行が必要であると厳かに宣言した。そして不思議な運命の皮肉によって、この報告が発表されるや否や為替相場は全く中央銀行なしで有利になった。この現象はしかし容易に予測できたはずであった。なぜなら、それは周知の経済法則の結果にすぎないからである。その後すぐ、為替相場を有利にした原因、すなわち外国資本の輸入は作用しなくなり、再び為替相場は不利になった。このような表裏現象が存在したのである。

集産主義的政府が、統一を樹立するための努力において、これまで続いてきた政府よりも有能で幸運であろう謂れは存在しない。それゆえ、集産主義政府が別種の努力をせず、社会主義者が現在装っている統一が単なるユートピアにとどまることは十分に考えられることである。

第七章　理論的体系（続）

観念連合による詭弁—論争は曖昧さをつくり出すために一つの語に付随するさまざまの意味を利用する—真の自由—ケトラー—真の自由の曖昧さはそれを言う本人をいかに裏切るか—倫理家の自由—それはいかにして制限を意味するにいたるか—自由の創造—自由とは言われるところによれば「事物に対する権力」である—獲得されたのではない富—この理論の漠然たる意味と自己矛盾—生産物の中で生産の各因子に帰着する部分を分けることはできない—剰余価値、剰余労働、労働の搾取度—これらの用語によって隠された詭弁—価値という用語の曖昧さ—それから引き出された詭弁の豊かな成果—ジャコバン、社会主義者、連帯、等の用語によって呼びさまされた観念連合—いわゆる歴史法則—近代における改革者の、自らを歴史法則の啓示者であるとする傾向—一般にいわゆる歴史法則を樹立するための経験的演繹が立証されることを妨げる困難—サン・シモン主義者—彼らの歴史理論の曖昧さと矛盾—オーギュスト・コントの歴史理論も似たりよったりである—社会主義者の帰納—利子（アンテレ）に関する議論—客観的動機（モティーフ）—それらが論証に付与する形態—経済的考察に混入せられた倫理的ならびに感情的考察—バスティアとプルードンの論争—利子の「正当性」に関する問題—経済的利益（ビアン）の変換と利子の起源—資本—「資本」という用語は社会主義者にあっては、経済学者の場合とは全く別のものを意味する—社会主義者は経済学者の中に発見した誤れる考え方を発展させた—言葉についての口論の不毛性—「資本は歴史的カテゴリーである」ということ—実際的実現と科学的不可能性—人は何故に、社会主義者の言う「資本」と経済学者のそれとを混同することに執着するのか—それは大部分、生産手段の社会化によって消滅したかもしれない資本の金利（ロワイエ）形態にほかならないのはどうしてか—貯蓄義務の割当て—社会主義的自治体と資本—生産のための貯蓄の割当て—価格—価格は生産手段と生産物の最良の配分を獲得するための機構としてどうして役立つのか—プルードンと彼の言うところの「資本」—種々に異なる定義のあいだで一つの用語を漂わせるやり方—富と同一視される貴金属—文字通りの換喩（メトニミー）—労働の各種のジャンル—空虚なもの（ヴェーヌ）とみなされた金（きん）—貨幣経済—分業—貨幣についての誤謬と利子についての誤れる理論との関係—貨幣流通に関する学問的誤謬と通俗的誤謬

観念連合による詭弁—このカテゴリーは、その最も一般的な意味において理解するならば、ほとんどすべての誤れる論証を含むであろう。実際、観察あるいは論理における欠陥によって誤ちに陥っている命題は、そこに用いられている用語が示唆する観念連合によってのみ受け容れられるのである。しかしここでは我々は、このカテゴリーを、その誤謬が主として、あるいはほとんどもっぱら、観念連合に依存しているところの論証に限定する。

通常の言語において用いられる用語は一般に、その主要な意味（ノタシオン）のほかに、付随的意味の

一総体を有しており、その中には称讃あるいは非難を暗示するものが含まれている。自らの命題を有利にするためには称讃の観念と結びついている用語のみを採用することが論争における良策である(1)。用語の意味を、定義によって変化させることによって、そうすることが可能である。この目的のためには、最も漠然とした定義が最良である。このような定義はきわめて深いものに見え、大多数の人々は、彼らの想像の中にしか存在しないすばらしい事物をそこに現に見ていると信ずる。これは全く単純に自己暗示と幻覚の事態である。

(1) この種に属する詭弁については以下を参照。*Tactique des assemb. Lég. Suivie d'un traité des sophismes politique*, par J.Bentham, II, liv. V, chap.VII, §1.

二つの用語AとBとが相互に対照をなすと想定しよう。そしてAは称讃の観念と結びついており、Bは非難の観念と結びついているものとする。もしある人物がBが表現する事物の支持者であるならば、その事物をそれ本来の用語によって命名することは用心したほうがよい。彼はAがその事物を表現することになるようにAの定義を変更し、一挙に、Aに結びついている称讃をその事物のために獲得することになるであろう。明晰と科学的厳密性を愛する少数の人々の反対を取り除くためには、彼らの精神の狭隘さ、Aについて与えられた深みのある定義を理解し、評価することを妨げる狭隘さについて軽蔑とともに語るのがよいであろう。そうすれば知的と見なされることを望む人は誰でも低俗な連中といっしょになることを警戒し、目を閉じ、理解することなく、その定義を受け入れることであろう。

例えば、人は一般に自由を願望し、拘束を恐れる。自由は快適な観念と結びついており、拘束は不快な観念と結びついている。それゆえ、人々に拘束を受け容れさせるためには、拘束に「自由」という名を付けるのがよいであろう。

とり急ぎつけ加えなければならないが、このような仕事に従事する人物たちは一般に誠実である。彼らの論証は論理的観点からすれば責められるべきであることもありうるのではあるが、道徳の観点からは責められるべきものではなく、彼ら自身が確信していることのみを説得しようとしているのである。

自由という言葉の意味を変えるための旧式でやや素朴なやり方は、真の自由と偽りの自由とを区別することである。真の自由とは善(ビアン)をなす自由であり、偽りの自由とは悪をなす自由である。

この区別は今日ケトラー(Kettler)氏によって新たに繰り返されている(1)。彼は自由という言葉が発揮する異常な魅力をまず指摘することから始めることによって、おそらくやや手のうちを明しすぎているであろう。

(1) *Freiheit, Autorität und Kirche*, Mainz, 1862.

解くべき問題は、自由でなければならない事柄はいかなるものであり、拘束が加えられ

なければならない事柄はいかなるものであるかを確定することであるから、右のような命題は何の役に立つのか理解できない。それは困難な問題を移転させただけであり、この問題は現在では、何が善であり何が悪であるかの研究のうちにすべて再確認することができる。実際右のようなケトラー氏の命題は一つのこと、すなわち観念連合によって拘束に対してある種の快適な観念を付着させることのみを目的としている。この命題は一石二鳥でさえある。なぜならそれは、自由と善に帰着すべき称讃の観念を拘束に対して付与しようとするからである。

ポールが自分自身悪であると判断していることをやることについて自由であるかどうかを知る問題は、例外的なものにすぎない。はるかに重要な問題は、ピエールが悪と判断していてポールが善であると判断していることを行なうについてポールは自由でなければならないかどうかを知る問題である。もしケトラー氏が一人のイスラム教徒に、真の自由とは「善にして真実なるもの」についての自由であるという考え方は望ましいかどうかと尋ねるならば、そのイスラム教徒は、善と真はコーランの中に含まれているものであるから真の自由とはコーランの命ずるところに従う自由である、という命題に同意しなければならないと考え、肯定的に答えるであろう。しかしケトラー氏にとっては「善と真」はカトリック教会の教えの中にのみ見出されるのであるから、我らがイスラム教徒は自覚もすぜ望みもせずに、真の自由はただカトリック教会の命ずるところに従う自由であるという命題に、偶然同意したのである（1）。

（1）フンク・ブレンターノ（Funck-Brentano）は、La Politique, p.292 で我々に次のように教えている。「人間はその隣人同胞に対しては悪の自由を全くもたない。」これはけだし大いに名言ではあろうが、しかし、いま問題なのは、何が悪であるかを知るための一基準を獲得することである。ソクラテスの弾劾者たちは、人々はこの哲学者に「悪の自由」を与えたと考えた。ソクラテスが若者たちに、抽選による裁判官の選出は最良のものではないということを教えるのを人々が許したからである。さらにまた、ローマの神学者たちがガリレーを非難し、彼が地球の運動について表明した不穏な命題を非難したのは、「隣人同胞に対する悪の自由」を防止するためである。「共和国防衛」の政府はいまも、そして常に、悪の自由を避けるためにフランスのカトリックを迫害している。さらに、法律を発布するに際して、その法律が悪を防止することを目的としているということを確認しない立法者とはそもそもどういうものであろうか。それゆえ、問題なのは原理そのものではなく、それの適用の仕方である。

ある労働者の給料が不十分であるとき、悪は明瞭であると人は言うであろうか。しかしこの場合も解くべき問題は全く別である。問題は、一定の経済条件を所与として、この労働者の給料の名目的のみならず実質上の増額が可能であるかそうでないか、を知ることにある。そして、一つの悪を避けるためにもっと悪い別の悪に陥ることがないかどうかを知る必要がある。

さらにまた、仮定的な場合に訴える必要はさらさらない。ここに一つ、現実的な事例が存在する。フランスのジャコバン派は既に、「真実と善への自由」という論法を逆用してケトラー氏の信奉者に反駁した。ジャコバン派は、彼ら自身が主張し依拠している自由、彼らが「人間の権利の宣言」において尊敬すると主張している自由を甚だしく侵害している

ことを指摘された。ジャコバン派の意図は、市民がその生涯において一度でも不幸にして修道会に所属したことがある場合には彼から教育を受ける権利を剥奪し（1）、また国家機関における三年間の学校期間（stage scolaire）をもたなかった場合には彼らから政府ポストに就く権利を剥奪することにあったという理由によってである。ジャコバン派は、自分たちの尊敬しようとしている自由とはただ真実と善への自由であって、誤謬を教え悪をつくり出すカトリックの自由では全くないと反論した。

（1）　本書の印刷中に可決された法律は、この権利喪失が今はもはや修道会に属していない個人には該当しなくなることを認めているように思われる。しかし、還俗して他の市民と同じようにあらゆる権利を回復したと信じていた修道会員に対しては法的告訴が執り行なわれた。この迫害の正当化のための口実は余り重要ではない。我々が指摘したいのはもっぱら迫害の事実そのものである。

「倫理主義者」と近代のある種の社会主義者は、束縛に対して自由の名を与えるための手品をやるためにより微妙で巧妙な一手段を用いている。彼らの詭弁の起源は自由という言葉の曖昧語法的意味にある。社会組織について論ぜられるとき、自由という言葉の比較的一般的な受け取られ方は、法律あるいは公権力による拘束束縛の欠如のことである。例外的には自由によってある種の行為を実行する権能（ピュイサンス）を意味することもできる。ある農奴がその縛りつけられている土地を棄てるについて自由でないと言われるとき、それが意味するのは、その農奴が物理的に動き回る能力がないということではなく、法律がそれを禁じているということである。この場合、自由な、とは、その一般的意味において理解されている。しかし、これはやや不自然な作られた意味になるが、もし、人は空中を飛ぶについて自由ではない、と言うとすれば、それは物理的不可能性を意味するであろう。同じような曖昧語法的意味は権力（pouvoir）という言葉の中にはるかに明瞭に見出される。できる（peut）という言葉の意味は、次の二つの命題において本質的に異なっている。すなわち「農奴はその縛りつけられている土地から離れることはできない」「人は空中を飛ぶことはできない」という場合である。成年に達した人間はその財産を処分するについて自由であると言うとき、それが意味するのは、法律はそれを妨げないということだけであり、もしある人間が財産をもっていなかったならば、公権力が彼に一定の財産を提供して、彼がそれを処分できるようにすることだと、これらの言葉を理解したものはいまだかつていない。旧ナポリ王国においては国民はヴォルテールを読むについて自由ではなかった。すなわち公権力が国民に対してヴォルテールを読むことを禁じたということである。ナポリの国民の中にはヴォルテールを読む能力のあった（pu）者もいたし、例えば盲目であるとか読み方を知らないとかによって読む能力のない（ne pas pu）者もいたであろう。

自由という言葉が観念連合によって快適な感覚を生み出し、自由の欠如がきわめて不快であるのは、その言葉の一般的な受け取られ方においてであることに注意する必要がある。

倫理主義者たちはまさにこのような状況を利用しようとしたのであり、彼らが自由の定義として、この言葉がただきわめて例外的な場合にのみ持つところの意味、受け取られ方を与えたのはそのためである。もしあるフランス人がイタリア語を知らないという理由でダンテを原文で読むについて自由でないとすれば、この状況はそのフランス人にとって不幸なことではありうるが、社会組織という問題については観念連合によっていかなる不快な印象ももたらさない。しかし、もしこのフランス人がイタリア語を知っていてしかもただ政府がそれを禁ずるからという理由でダンテを読むについて自由でないとすれば、それは、このような濫用が起こりうる社会組織に対する非難の感情を生み出す。いまや問題は、後者の場合にのみ観察される感情を前者の場合に移し替えることである。そのためには、我々は倫理主義者とともに次のように言うであろう。つまり、真の自由とは人間が事物に対して有する力能（pouvoir）である、と。この定義が認められれば、イタリア語を知らないという理由でダンテを読むことのできないフランス人はこの著作に対する「力能」をもたないのであり、自由でないのである。そして彼を自由にする真の方法は彼がイタリア語を理解するように強制する（contraindre）ことである。なぜならそうすれば彼は『神曲』Divina Commedia と名付けられているこの事物に対して「力能」をもつようになるだろうからである。このように、本質的に異なる、そして同一の用語によって示される二つの事物のあいだに意図的に混同をもち込むことによって、一方の事物にのみ属する質が他方の事物の方に自然に移し替えられることになる。もし定義によって象に対して二十日ねずみという名称を与えるならば、次には、二十日ねずみは地上における最大の哺乳動物であるということもできよう。

「倫理主義者」は結局のところは、完全に道理ある一命題を述べようとしてはいる。彼らは自由は人間にとって一手段であって目的ではないと言おうとしているのである。複数の選択対象が欠如しているならば、選択が自由であることはあまり意味がない。私の夕食について鱒か若鶏かを自由に選ぶことを私に委せてくれて、しかも私はそれらのいずれをも手に入れることができない。このような自由は私にとって役に立たない。私は、強制が確実にこれらの食べ物の一方を供給してくれるのであれば、強制のほうを好む。

この推論は全く非の打ちどころがなく、事実、かつて重大な反論に遭遇したことがない。しかしこのような形で提示された場合この推論は、自由だけでは人間の幸福にとって十分ではなく、それとは別にいくつかの条件を追加しなければならないという結論に至る。ところで「倫理主義者」の目的は全く別である。彼らは自由に何らかのものをつけ加えるだけでは満足せず、自由を別のものと取り替えようと欲する。彼らが大抵の場合自覚せずに自由の定義を変更することになるのはこのためである。

Ch・アントラー（Andler）氏[1]はこの自由についてヘーゲルの定義を要約して次のように書いている。「自由とは、究極的現実の意識としての自己意識を有する精神である。そして自由は存在しなければならない。それなくしては真の存在はないであろう。存在への思考の順応（conformité）を自由と呼ぶことは、自由についての正しい定義を与えることである。しかし、人は通常、この定義について、それを歪める常軌を逸した意味において理解する。存在への思考の順応は、それらの同一性を通じてしかありえない。真理は思考

と存在とのきわめて深い一致、同一性であり、従って真理は思考する存在である。

（1）　*Les origines du socialisme d'Etat en Allmagne*, Paris, 1897, p.25

自由は国家によって実現されなければならない。しかしこの言葉によって何を理解すべきであろうか。ヘーゲルはそれを次のように言うであろう。「国家は道徳的理念の現実性であり、実体的で明瞭な、それ自体において明らかな意志としての道徳的精神であり、この意志は自らを思惟し、自らを知り、自らの知っているところを、その知る度合いに応じて遂行する。(1)」。たとえこの文章が十分明瞭でないとしても、次の文章を追加することができる。「国家は、それが実体的意志の現実性である限りにおいて、一般性の感情にまで高められた特殊的存在の意識のうちに存する現実性である限りにおいて、即自的かつ対自的に合理的であるものを代表する。(2)」要するに、「国家は即自的に道徳的全体であり、自由の実現である。そして、自由が現実に存在することは、理性の絶対的目的である。(3)」（訳文再考）。我々も随分物知りになったものだ。

（1）　Hegel's Werke, VIII Band, Grundlinien der Philosophoe des Rechts, §257：《Der Staat ist die Wirklichkeit der sittlichen Idee,—der sittliche Geist als der offenbare, sich selbst deutliche, substantielle Wille, der sich denkt und weiss, und das er weiss, und insofern er weiss, vollführt.》

（2）　Loc. cit., §258,《Der Staat ist als die Wirklichkeit des substantiellen Willens, die er in dem zu seiner Allgemeinheit erhobenen besonderen Selbsthewusstsein hat, das an und für sich Vernünftige》

（3）　Loc. cit., p.319：《Der Staat an und für sich ist das sittlich Ganze, die Ver wirklichung der Freiheit, und es ist absoluter Zweck der Vernunft, dass die Freiheit wirklich sei.》

私は、ヘーゲリアンたちがこれらの文章に与えた別の解釈を読者の目に忠実に提供しなければならないと信ずる。余り語義通りではなく、（もし何らかの意味があるとすればであるが）意味そのものに迫ろうとした翻訳には次のものがある。一：「国家は、実現された、目に見える、それ自体において理解される道徳的理念であり、この理念は自己を思惟し、理念の中に存在するものを知っている。そして理念が知っているものを、その知っている度合に応じて、遂行する。」二：「国家は即自的対自的に合理的なものである。なぜなら国家は実体的理念の実現であり、普遍性の水準にまで高められた個人的意識において成就された実現だからである。」三：「それ自体としての国家は道徳的全体であり、自由の実現である。そして自由が実現されるようになることは理性の絶対的目的である。」

このような解釈は原文と全く同じように分かりにくくなる可能性がある。読者には、「それ自体において理解される道徳的理念」とは何であるかを私が説明するのを期待しないでいただきたい。私としては、この化物について全く、かすかながらも理解できないことを謙虚に白状する。この「自己を思惟する道徳的理念」のお偉い代表者たちが「自己を思惟する理念」というエキュで課する税金で満足しているならば、人は容易に彼らと折り合いをつけるであろう。しかし彼らが望んでいるのは正真正銘の金銀貨によるエキュなのである。彼らの出発点は形而上学の雲の中にあるが、到着点は可触的財という堅固な地盤の上にある。ここには非現実から現実への移行が存在

するのであるが、それでもやはりその費用を負担しなければならない人々にとってはかなり不安なものたらざるを得ない。

これらはすべて理解不能であり、夢のなかのうわ言に似ている。ところで注意しなければならないのは、ヘーゲル主義は「倫理主義的」経済学者の大部分および、マルクスを含めて社会主義者の一部の思考を支配したという点である。このような定義からは人はお望みのものを引き出すことができる。論理的命題はすべて主語Aと述語Bの一致の関係を打ち立てる。もしこれらの項の一つが理解不能の形で定義されているならば、人はこの命題を拒否することができないであろう。例えば私がAの何たるかを知らない場合、私はいかにして述語Bが主語Aに一致することを否定できるだろうか。国家と名付けられたある実体（アンティテ）が、「道徳的理念の現実性」あるいは「自由の実現」、あるいはさらに明瞭に「自己を思惟し自己を知る道徳的理念」と定義される場合、これは肘かけ椅子の倫理主義者や社会主義者のありとあらゆる戯言を正当化するのに十分である。なぜなら、「自己を思惟する理念」あるいは「実体的意志」に遭遇した人の数はきわめて限られており、かつてこの「道徳的理念の現実性」を見た人は誰もおらず、それが何であるかを正確に知っている人は誰もおらず、ある何らかの述語がこれらに一致しないということを証明することは不可能だからである。このような未知の実体が含まれている推論は、それらが引き起こす多少とも曖昧な感情に助けられた観念連合によってのみ効果を発揮することができる。

雲をじっと見つめていると動物とか景色等のありとあらゆる形象をその中に見ることができる。雲の曖昧でふわふわした輪郭はその形をいろいろに変えて見させるのにすばらしく好都合であり、人はそこに自ら望むものをすべて見ることができる(1)。これと類似の効果が右のような曖昧で理解不能の推論によっても生み出される。多くの人々がそこにあらゆる種類の事物を見、その推論の含むものが少なければ少ないほど、驚くべく多くのものを見出す。

（1）先に引用したヘーゲルの文章の中に、進化の観念を見ることができるように思われる。あらゆる進化に出発点が必要であり、最初には何か進化するものを、最後には現実的で意識的なあるもの、その意識に宇宙全体を含むあるもの、宇宙的意識となる何かあるものを構想する。国家はこの進化における一段階である。

同様に謹厳で慎重な人物たちも、ダンテは veltro（俊敏な猟犬）について語りつつイタリア王ヴィクトル・イマニュエル一世の治世を予言したと信じた。

『神曲』のこのような解釈はヘーゲリアンの注釈と全く同じ程度に確信的であるが、少なくとも前者のほうが分かりやすいことは認めなければならない。

このような妄想に耽る人間たちが、あくまで現実にとどまろうとする人物についていかに高慢尊大に語るものであるかを見る必要がある。アントラー（Andler）氏は次のように言う。「人々が自由を創造することを考えるということはフランス的感覚にとっては驚くべきことである。…自由を創造するためには放任で十分である、と経済学者は我々に言う

(1)。フランスの民法家も同じく、自由とは法によって定められた一定の越えることのできない限界内であらゆることをなしうる権利以外のものではないと理解していた。正義とはこの限界内に自己を保つことである。…ラッサールが茶化した夜警国家Nachtwächterstaatはまさしくフランスの法律家によって定義された国家である。ドイツの哲学者の目には、これにしてすでに凡庸で消極的な自由である。このような自由は持てる者のためにのみ存在するのであって、その他の者にとっては形式的で虚しいものである。真の自由とはドイツの哲学者からすれば、事物に対する支配力であり、現実的所有なしの自由なるものは存在しない。」(*loc. cit.*, pp.20-21)。

(1) もし彼ら経済学者がこのように言うとすれば、彼らは大いに間違っており、表現が大変拙く、経済科学の領域から全くはずれている。経済学は経済的事実とそれが示す斉一性を研究するものであって、天文学が星占いに凝る必要がないのと同様、「自由の創造」にかかずらう必要は全くない。ケプラーが星占いをやっていたことは事実であるが、それをやっていたときにはケプラーは占星学者であったのであって、彼が天文学者であったのは、火星その他の惑星の運動についての驚嘆すべき研究に従事していたときだけである。

ここで、一見したところでは、そして論理というものにはあまり配慮せずに観念連合によって推論する人々にとっては等価と思われるかもしれないが、実のところは本質的に異なっている二つの命題のあいだの移行に注意する必要がある。彼らはまず我々に、自由とは事物に対する支配力(プヴァール)であると言い、次いで突如、この支配力はつまる所、ある一種類の所有物に還元されると言い、この所有物の質も量も示さない。ある小僧の所有物は十分であろうか。あるいは一平方メートルの土地は十分であろうか。もし自由がいろいろの事物に対する支配力であるならば、一種類の所有物しかもたないものは全く自由をもたない。なぜなら彼はそれ以外のすべての事物に対して支配力をもっていないからである。

われらが著者は次のように続ける。「権利なるものは効力ある担保設定に存する。それなしではいかなる人物も自由ではない。人格はその全てを展開しうること、そして物質的現実性において身体(コール)となることが必要である。正義とはその場合、所有物と人格とのあいだの合理的関係(un rapport rationnel)ということになるであろう。そしてまさにこれこそ社会主義が主張するところのものである。」(*loc.cit.*, P.21)何の担保であるのか。「所有物と人格とのあいだの合理的関係」とは何か。そして、それは非合理的な関係といかに区別されるのか。これらはまさに何かを意味しているように見える言葉であるが、その言葉の背後には何も存在しない。

非常に多数の国民のあいだで結婚は一定の血縁関係のある人間のあいだでは禁ぜられており、それ以外の関係では自由である。先に言われているところに従えばこれはまさに不正確な表現であるように思われる。結婚は「効力ある担保設定」が存在する場合にのみ自由である。かくしてもしAがBと結婚したいと欲するならば、国家はBの同意を獲得することを引き受けなければならない。しかしもしBがAを欲せずCと結婚することを欲する

場合にはどうなるのであろうか。国家はこれらの人々に「効果的に担保する」ためにどのように振舞うであろうか。これは「自由の具体的現実性」と名付けられている知られざる神でも解決することのできない問題であると思われる。

自由という言葉の意味のこのような変更は起源としてはある理論的意図をもっており、単に言葉の残存にすぎない、類似した意味変化と混同してはならない。

十八世紀の終わりから十九世紀の最初の三分の一の時期にかけて、民主主義政党は固有の意味における自由を要求していた。すなわち庶民階級が苦しめられていた制限規定の廃止を要求していた。「進歩」と呼ばれる運動はこのような方向において起こったのであり、それに味方した政党は、当時は矛盾なく自由と「進歩」に訴えることが可能であった。しかし庶民階級の自由に対するあらゆる侵害が消滅したとき、運動は庶民階級の利益の方向において継続されたのであるが、彼らの利益はもはや彼ら自身のために自由を要求することにはなくなり、この要求はもはや対象をもたず、むしろ他の人間たちからこの自由を剥奪することに利益があるようになった。要するに当時も現在も問題になっているのはもっぱら一階級の利益であり、そして、この利益においてまずこの階級に有害不利な制限規定を廃止し、次いで彼らに有利な別の規定を設けるよう要求することは完全に論理的である。「進歩」という言葉は一方の事物にも他方の事物にも同じように当てはめることのできる、十分曖昧な意味をもっている。しかし自由という言葉はもはや現今の要求に適用することはできなくなっており、現在、強制拘束に味方する政党が自由主義的と呼ばれるのはただ言葉の残存によるのである。この種の残存の事例は他にも多数存在する。

自由という言葉の語義変更はこのような残存の正当化を目的としていたと考えることもできなくはない。いくつかの場合にはそれが正しいかも知れない。しかし一般には、庶民大衆はこのような理論的に微妙な点を気にするそうした習慣はほとんどなく、凋落しつつあるエリートのほとんど一部の者に限られている。この種のエリートは自らの属する階級—彼らはこの階級の没落を準備しているのであるが—を裏切っていると多少とも漠然とながら感じつつ、詭弁と、自らの良心を安心させるための口実とを貪欲に追求し、他方、彼らがそれでよしとしている論証の論理的価値は余り気にかけない。

不労所得unearned increment の理論においても観念連合が同じように大きな役割を果たしている。unearned increment という言葉を用いることによって人が目指しているのは特に経済上の金利所得（rente）である。しかし結局のところこの言葉は労働（トラヴァユ）の果実でないあらゆる富に適用されうるものである。

この言葉の使用の目的はある種の理論を要約すること、それも厳密な分析は免れうる程度に曖昧な形で要約することにある。厳密に分析すればその空虚さが見えてしまうのである。この理論は労働の果実であるところの富のみが合法であると言明する。この起源をもたない富は働いて獲得されたものではないのであり、その結果として unearned increment という用語によって示されるものは合法でもなく、また正当に獲得されたものでもないのである。

まず第一にこの理論は、受容される場合の意味と適用される場合の意味とが別であることを指摘しなければならない。この理論は道徳的意味において受容される。人は労働につ

いて語るけれども、彼が念頭に置いているのは努力である。この努力を敢行する人間は報酬に値する。いかなる努力もしないならば彼はいかなる報酬にも値しない。人はこの理論を経済的意味においても用いる。すなわち獲得された成果を、労働、努力に取って代わらせる。この獲得された成果なるものは努力、労働とは決して同じものではないのであるが。不器用な靴屋あるいは気の入っていない靴屋が、預けられた皮をむだ使いすることはありうることであり、他方別の靴屋が立派な靴をつくることもありうることである。ところで、人が支払うのはこの靴の代金であり、努力のことは気にかけない。

少しくこの点を考えれば、さらに次のことに気付くであろう。すなわち、理論は量的形式を取らなければならないということである。そうでなければ理論は全く何ものをも意味しない。既にF・フェラーラ（Ferrara）が指摘したように、労働とか努力が全く欠如していることでは決してないが、ただしかし、受領権利証を現金に換えに行く苦労だけをすればよい金利生活者のような場合が存在する。この場合努力は最少であり、その努力がもたらす所得の総額とは絶対的に釣り合わない。それゆえ、ある努力をする人間はある報酬に値すると言うにとどまってはならない。この報酬はなされた努力に比例しなければならない、あるいは、なされた努力と何か別のある量的関係のうちになければならない、とつけ加える必要がある。こうしてこそ理論はより正確になるのであるが、しかしこの理論は適用不可能である。なぜなら我々は、さまざまに異なる人間によってなされる努力を測定し比較するいかなる手段も持ち合わせていないからである。さらに、人間はすべて似たようなものであると仮定し、その努力を概算することによって右の困難を取り除くとしても、unearned increment を非難する人々が狙っているものとはほど遠い結果に、我々はまたもや到達することであろう。かくして例えば、不器用な労働者は腕の良い労働者よりも多く支払われなければならないことになるであろう。なぜなら一般に、仕事というものはそのやり方をよく知っていればいるほど苦労が少ないものだからである（1）。

（1）　第一〇章を参照。

次に、この理論はある誤謬に立脚している。そしてこの誤謬は他の多くの類似した理論の起源のところにも見出されるものである。人は暗黙のうちに、生産物の中で、生産の各因子それぞれに帰着する各部分というものを分離することが可能であると想定している。しかしこれは成り立たないことである。

光を得るためにはランプ、灯心、油が必要である。光の強度のどの部分がこれらの要素のそれぞれに帰着するかを言うことは絶対的に不可能である。仔牛を得るためには種牛と雌牛が必要である。仔牛のどの部分が種牛に帰着し、どの部分が雌牛に帰着するかを決定すべく少しく試みてみるとよい。ある経済的生産物を得るためには、土地、動産（可動）資本、労働、の使用が必要である。生産物におけるこれら各要素部分を決定することはできないであろう。そしてこの方向において行われた試みはすべてもっぱら詭弁に立脚している。

他方、我々がいま単独の用語で示したもの、土地、可動資本、労働は、現実にはきわめて複合的であり、種々の要素からなるものであることに注意しなければならない。例えば

単一の労働が存在するのではない。きわめて多数の労働が存在するのである。

ある人物が衣服を裁断し、別の人物がそれを縫う。服の中でそれぞれの部分をどのように区分するか。ところでもし貴方がこの区分を正確に行なうことができないならば、そのことから必然的に結果するのは、一方の人物が自分に帰着する以上のものをとり、他方の人物がそれ以下のものを受け取るということであろう。前者は unearned increment を享受することになるであろう。

さらに、生産物の価格は労働とは絶対的に無関係の非常に多数の状況に依存する。このことから結果するのは、あらゆる報酬の中に unearned increment—この言葉が何らかの意味をもつとすればのことであるが—が存在するということである。

パリの博覧会の準備のために働いていた指物師たちは一日八フランを稼いでいた。少なくとも等価の労働をしているイタリアの指物師たちは一日四フラン稼ぐだけである。実のところ誰もできないことであるが、しかし仮に我々が、これらすべての指物師が同じ努力をしているものとし、さらに、報酬の基盤としてイタリアの指物師が得ているものを採用するならば、我々はフランスの指物師の報酬の中に四フランの unearned increment を見ることになるであろう。もし我々がフランスの指物師の努力を、イタリア南部の一日一二時間働いて七五サンチームを稼ぐ不幸な農業日傭い人夫の努力—これは少なくともフランスの指物師の努力と同等であると想像される—と比較するならば、さらに大きな unearned increment が存在するであろう。

ある種の収入を指すのに不労所得という名称が用いられるのは、まさに、この右のような研究をすべて手短かに打ち切り、そこに観念連合から生まれる曖昧な印象を代置するためである(1)。

(1) 労働の積分的産物については、第一〇章の類似の例を参照。

以上のような考察は剰余価値 Mehrwerth という術語の使用とも無縁ではない。マルクスその他の論者の場合、剰余労働やその他類似の術語についても事情は同じである。マルクスの論証の大部分はまさにこうした術語のもたらす観念連合のおかげで人を説得しているのである。

「剰余価値の生産はそれゆえある点を越えて延長された価値の生産にほかならない。もしも労働過程が、資本によって支払われる労働力の価値がそれに等価の新しいものによって取って替わられる点まで、続くだけであるならば、単純な価値の生産が存在するだけである。労働過程がこの限界を越えるときには、剰余価値の生産が存在する。(1)」剰余労働とは剰余価値を生産するために必要な労働である。「必要労働と剰余労働の総量、労働者がその労働力の等価物と剰余価値を生産する時間の総量、この総量が彼の労働時間すなわち労働日の絶対量を形成する。」(*loc.cit.*, p.98)「可変資本」に対する剰余価値の割合が「労働の搾取の度合」を表わす。このようなやり方でマルクスは、一つの事例において次のことを発見する。「農業耕作者 (le laboureur) は、さまざまな人間がさまざまの口実の下に相互に分割し合う剰余価値の生産にその労働日の半分以上を使っている。」(*loc.cit.*, P.94)。

（1）Marx, *Le Capital*, I, trad. franç., p.83, chap.VII.

剰余価値、剰余労働、労働の搾取率、これらの術語はすべて観念連合によって「資本家」に対して非難を投げつけるために計算される。資本家はこの剰余価値を掠奪し、剰余労働を強制し、そうして労働者を搾取するというわけである[1]。

（1）マルクス主義者自身もマルクスの論証の中にこの種の内容を確認している。ベネデッド・クローチェは Sulla concezione materialistica della storia, p.17 で次のように書いている。《Lo stesso concetto di sopravalore non è force un concetto morale…? E senza il presupposto morale, come si spiegherebbe non chè l'azione politica del Marx, quel tuono di violenta indignazione e di satira amara che si sente in ogni pagina del Capitale?》これはたしかに正しいが、感情に訴えるときには、理性にのみ訴えようとしているといった風を装おうとしてはならないであろう。後にB・クローチェは右の見解を修正した。これについては先で述べる。

しかしこの論証は容易にひっくり返すことができよう。例えば生産物協同組合（une société coopérative de production）は節約貯蓄した人々から金を借りる。この協同組合は、貯蓄が形成されそれが資本に転換されるために必要な一定額を、貯蓄に対する金利として支払う。この協同組合に所属する労働者はそれゆえ「資本力」を買ったのである。これは資本家が「労働力」を買ったのと同じことである。この金利をつくり出すためには資本を使用し—概念を唯物論化したければ、貸し出された貯蓄で購入された機械を労働させ—、一定時間たとえば一日四時間使用すれば十分であろう。労働者は逆に、資本を使用し、機械を一日八時間労働させる。それゆえにここには機械の剰余労働、資本の剰余使用（sur-emploi）が存在するのであり、これは先に労働者の剰余労働が存在したのと同じである。そしてこの協同組合の労働者は、機械の剰余労働あるいは資本の剰余使用から結果するところの剰余価値を掠奪し、資本を搾取しているのである。これは先に資本家が剰余価値を掠奪し、労働者を搾取したのと同じことである。

さらに、同じような用語法を労働者の協力にも用いることができる。二人の個人AとBとが花びんをつくるために協力する。Aは形をつくり、Bは炉で焼く。彼らは毎日総額四フランを製造し、それを仲良く分ける。つまりAは二フランを取り、Bも同じく二フランを取る。

もし我々がいまこの二人のうちの一人例えばBを憎たらしい人物にしたいと思うならば、まさに同じ事実を別の用語法によって表現するであろう。一日に二人の提携者は四フラン分の花びんを生産するのであるから、そしてAは二フランしか受け取らないのであるから、彼が生産物の価値の半分、換言すれば半日分の生産物の価値しか受け取らないことは明らかである。それゆえ半日の間に彼がした労働は、Aが受け取る報酬分を生産するために必要な労働である。別の半日分の労働は「剰余労働」であり、これはBによって掠奪される「剰余価値」をもたらす。Aに対する「搾取度」は必要労働に対する剰余労働の割合であり、この仮定の場合、比率は一〇〇対一〇〇である。

このようにBは憎たらしい人物にされ、Aは同情に値する人物となる。しかしBはそれをあまり嘆くことはない。例によって的確賢明な言葉づかいが生み出す観念連合によって、まさしく類似の推論で、Bを搾取し剰余価値と剰余労働を掠奪しているのは逆にAであることを証明することができるからである。

「資本」は労働者によってつくり出される剰余価値を掠奪するという命題をある人が支持しても、彼はBがAによってつくり出された剰余価値を取得すること、しかしBの介入は花びんの製作のために必要なのであるから何も掠奪しているわけではないということ、を明らかにする論証に対して言い返すことはできないであろう。なぜなら、陶工のろくろとかまどを提供する「資本家」の介入も同じように必要であることが指摘されうるからである。資本家による剰余価値の掠奪が問題になる場合において真の対応はマルクス自身によって与えられているところのものである。彼は、価値はもっぱら労働によって創造されるということを証明することから立論しているのである。この点が確認されさえすれば、この価値の一部分が労働者以外のところに行く場合には、それは純粋の寄生者のところに行くのであり、掠奪されるのだということは、実際明瞭である。この形式のもとに証明は論理的になり、もはや単なる観念連合に訴えるということはなくなる。検討すべき点はただ論証の前提が正しいかどうかということだけである。

本当のところを言えばマルクスは観念連合を利用することを少しも嫌がらなかった。剰余価値を計算するとき、彼は次のように言っているのである。「これらの数字はただ説明上の価値をもつだけである」(I, p.94)。かくして彼はこの少しくいい加減な数字に対して出されうるあらゆる反論から避難するのである。しかし彼はすぐに数の差はあまり大きくはないはずであるとほのめかす。彼は次のようにつけ加える。「実のところ価格は価値に等しいと仮定されていた。ところで、第三巻では、平均価格についてさえこのような等置はそれほど単純な形ではなされえないことを読者は見るであろう。」しかし、誤差の別の原因が多数存在するのである。単にこのような説明から結果する差異とは別の差異が多数存在するのである。

しかしさらに重要なことがある。「これらの数字はただ説明上の価値をもつだけである」としても、マルクスは、剰余価値が相当なものに見えるように、数字の選択に大いに配慮している。ある紡績工場の場合については彼は剰余価値を一五三%としている。必要労働は三時間と三三分の三一時間、剰余労働は六時間と三三分の二時間（6heures 2/33）である。読者は観念連合によって労働者に対するこのような破廉恥な搾取に憤慨する。我々が述べた耕作労働者の場合には剰余労働は一〇〇%台である。このようなやり方によって、これらの数字は実際には単なる説明上の価値とは全く異なる価値をもつことになる。これらの数字は読者のなかにまさに著者の命題に好意的な感情を生み出すのに協力する。他方では、もし貴方がこれらの数字は現実とは関係がないということを指摘することによって右のような印象を打ち壊そうと試みるならば、貴方の反論は意味がない、これらの数字はただ説明としてのみ与えられているのであるから、といつでも切り返される可能性がある。

価値という術語はしばしば、厳密に定義された意味においてではなく、もっぱらそれの暗示する観念を目的として用いられることがある。この術語には非常に多数の異なる定義があり、その結果人は遂には途方にくれてしまい、最もよいのは多分、政治経済学におい

てはこの術語の使用を拒否することだということになるだろう。スタンリー・ジェヴォンズ（Stanley Jevons）はこの道を選び、交換価値の代りに交換比率（taux d'échange）という術語を用いることを提案した。

経済的均衡は人々の嗜好（グー）とこの嗜好の満足を手に入れるについての障害とのあいだの対比（コントラスト）から生ずる。経済的均衡の理論はすべて交換価値あるいはそれの相当語を用いなくとも説明することが可能である（1）。

（1）*Giornale degli Economisti*, Rome, Septembre 1901

この価値という言葉は我々のうちに非常に多数の感情を生ぜしめる。もし我々の関心がより特殊的に我々の嗜好に集中しているならば、価値あるものとは我々にとってはその嗜好を満足させるもののことである。経済学者が使用価値を定義したのはこの方向においてであり、この見方を分離することによってである。しかしもし我々が障害のほうに関心を集中するならば、価値あるものとは、障害を克服してでなければ獲得することのできないもののことである。この意味においては、水は泉のそばにいる人物にとっては何の価値もなく、他方先の意味においては水はこの同じ人物にとっても大いに価値がある。障害の存在は我々に不自由と苦痛の感情を惹き起こし、それを克服するためには、それが可能であるとしても、ある種の努力をしなければならないので、価値の観念は苦痛と努力の観念に結びつく。観念連合によって生まれるこうした考え方を明確化するための擬似科学的なある種の試みは価値と労働とを同一視するに至る。

障害はしばしば我々に対しては、それが現実に取る形とは別の形で表われる。そしてこの別の形のもとに我々は交換によって障害を克服する。ダイヤモンドを手に入れるについて存在する困難は、それを欲する御婦人にとっては、このダイヤモンドを獲得するのに必要な労働という形では、また動産ならびに不動産資本の使用という形では表われない。ダイヤモンドの価格、これらすべての困難を総合する価格という形で表われるのである。このことから、観念連合によって価値という言葉に結びつく、第三の意味が出て来る。ある一人の人物は金（キン）を直接に使用することについては何の嗜好も有していないが、たまたま莫大な宝石の所有者である。第一の意味においてはこの金は彼にとって何の価値もない。第二の意味においては何ら、あるいはほとんど全く価値をもたない。第三の意味においてはその金は大いに価値がある。なぜならそれを手段として用いることによって彼は望むものをすべて手に入れることができるからである。このことはもちろん、その金が、彼の望むものが金と交換で獲得されうる市場に、のっている場合のことである。もし彼が砂漠のまっただなかにいるのであれば、この金はあらゆる意味において何の価値もないであろう。

価格は何らかの意味において障害を総合するという事実から、観念連合によって、かなり素朴な次のような幻想が依然として生ずる。すなわち、価格に対して人為的に働きかけることによって人は障害を減らすことができるという幻想である。このような幻想は次のような人物に似ている。彼はパリからロンドンへ行くについて実際にたどらねばならない距離を、地図の上で実際よりも小さくすることによって減らすことができると考える。あるいはまたこのような人物は、写真に手を入れることによって写真の人物をも美しいものにできると考える。猿の銭（訳注：monnaie-signe—猿に芸をさせて橋の通行料を支払わなかった話にちなむ）の考え方も部分的にはこのような誤った考え方に結びついている。

価値という用語の数多くの受け取られ方に含まれるものとして、効用という用語にも注意しなければならない。ある人物が「茶を飲むことは私には何の価値もない」というとき、価値という言葉の意味は我々が既に指摘したところの意味とは異なっている。これが意味するのは、茶を飲むことはこの人物の健康にとって良くないということである。茶は彼にとって好ましい（第一の意味において価値がある）ことがありうる。それを手に入れるのに困難がある（第二の意味において価値がある）こともありうる。それを交換することによって望ましいものを獲得する（第三の意味において価値がある）こともできる。価値という用語の右のような第四の意味は、使用価値を定義した経済学者によって明らかに除外されてきたのであるが、これを除外することは容易ではない。「空気と水はとてつもなく効用が大きいのに何故に全く価値がなく、ダイヤモンドはほとんど効用がないのに何故に大いに価値があるのか」という問いのうちに含まれている詭弁は、使用価値が価値という言葉に与えている曖昧さによって説明されうる。

同一の用語についての多数の、そしていくらか曖昧なこうした意味が、政治経済学において絶えず再燃する誤謬の過去現在における一源泉として、非常な不明確さを生み出している。

その起源は多少とも科学的であるところの観念連合に加えて、情熱によって強制される、より粗野な別の観念連合を挙げなければならない。そうした事情で一九世紀の始めには自由主義はすべてジャコバンと呼ばれ、次に、自由主義の反対者は共産主義者あるいは社会主義者と呼ばれた。現在ではいくつかの国、たとえばフランスでは、逆に、非常に多くの人物が社会主義者たることを切望している。他方では真の社会主義と偽りの社会主義、良い社会主義と悪い社会主義とが区別されている。人々が所属するのを名誉と思うのが真の良き社会主義であることは言うまでもない。ガリフェ(Gallifet)将軍でさえ議会において、自分はこの意味における社会主義者であると宣言したのである。

このように、流行の用語が存在する。一八世紀の終わりには「敏感（サンシブル）」であることが必要であった。フランス革命の真只中においてはサン・キュロティスム（過激共和主義）が人々を分類するための基準であった。一八四八年には「友愛」が大いにもてはやされたが、今日ではそれは流行遅れになり、全く権威を失っている。我々の時代にあっては、「連帯的」であることが必要である。この言葉とは全く無関係と思われる意味でこの言葉を用いると

いう、まことに喜劇的な熱狂が存在する。フランスにおいてはあらゆる公的議論は一回ないしは数回は「連帯」という言葉を含まなければならない。この言葉は単なる商業的広告宣伝の中にさえ見られる（1）。この言葉を用いる政治家は多少とも曖昧で、社会主義という言葉が呼びおこすのと類似の観念を目的としているように思われる。連帯は、マルクス主義およびその他の社会主義党派と競争したいと思っている政治家向けに和らげられた一種の社会主義である。

（1）人は遂に「超自然的連帯」を発見するに至った。これは冗談ではない。Georges Goyac, *Autour du catholicisme social*, 1re serie, p.74.「カトリックの教義は実際、超自然的連帯の真の組織を我々に洞察させる。」p.76.「なおさらに、諸聖人の通功のおかげで、またその結果である超自然的集産主義のおかげで…」我々はこの集産主義がマルクス主義的なものであるのか、Benoît Malon のそれのように「統合的（アンテグラル）」なものであるのかどうか知らない。著者はこの重要な点について読者に知らせることを怠った。

「平等」について忘れないようにしよう。これについては少なくとも理論上は若干の称讃を与えなければならない（1）。

（1）実践上は別である。一九〇一年パリで上演された面白い小喜劇「階段」L'Echelle は、上位者に向かっては平等を要求し、下位者に向かうときには奇妙にもそれを忘れてしまう人物たちを登場させている。「それじゃ一体我々の父たちが八九年にやったことは何の役に立つのか」こう彼らは上位者に向かって言う。しかし、下位者といっしょにいるときにはこれは別の言葉になる。各人は自分より下にいる者をすげなく扱い、もはやその優位性を行使する場をもたない乞食に至っては自分の犬をののしる。

いわゆる歴史法則―昔の社会主義体系は普通、祖先の賢明な制度への回帰として、あるいは論証によって発見されたものとして提示されたものであった。近代的体系の著者たちのあいだには、その作用を逃れようのない歴史法則の啓示者として自らを示そうとする傾向が存在する。この著者たちは単に、起きるにちがいないことを言明する予言者にすぎない。彼らの予言が一人も信者を見出さないとしても、このことは事態の進行をなんら変化させないであろう。改革者たちにこの方向の考え方を取らせたのには多分多くの事情が影響したことであろう。まず第一に現代では、実証科学の偉大な進展がある。この改革者たちはその苦心の迷論を、尊重されている諸科学の方法と成果によって覆おうと願い、化学や物理学の見事に証明された法則を否定しようと企てるような人物が免れえない信用失墜を、自らの敵対者の上に及ぼそうとする。かくしてアテネでは、多くの法律がソロン―この立法者は考えもしなかったのであるが―によるものとされていた。我らが改革者たちは、いわゆる個人の権利、伝統、感情的形而上学的発想を彼らに対置する反対者たちと格闘している。彼らは科学を自分たちの味方にする振りをしようとしたのである。しかしこのことは彼ら自身がその敵と同じくらいに形而上学的論証をすることを妨げるものではなかっ

た。

次に、現在の改革の運動は民主主義的であるので、改革者にとっては、外見上控え目な役割を引き受け、新しい体系の創造者たることを主張するのではなく、自然法則の予言者たることで満足するほうが有利であるという事情に注意しなければならない。

サン・シモンの徒は、彼らの師が歴史法則を発見したと信じている。オーギュスト・コントはこの名誉は自らの手に落ちて来るものと考え、マルクスとエンゲルスもこの同じ名誉を要求している。これらの論者たちのあいだで同意が成り立つとは考えにくく、必然的に彼らのうちの誰かがまちがっているはずである。あるいは彼らすべてがまちがっていたということも考えられうる。

「ところで—とサン・シモン主義者は言う—歴史のこの新しい見方[1]、言わば過去形で人類の未来を語らせるこの新しい方法とはいかなるものか。それゆえこのような証明、未来への我々の夢を支えとしてもたらされた証明はどれほどの価値をもつのか。一つの新しい科学、その名に値するすべての科学と同じように実証的な一科学がサン・シモンによって構想された。その科学とは人類の科学である。その方法は天文学、物理学において採用されているものと同じものである。諸事実はそこでは、一連の同種的項目によって分類され、一般化と特殊化の序列によってつなぎ合わされ、それらの傾向を浮き出させる、すなわち諸事実が従っている増大と衰退の法則が明らかになるようにする。」

（1） Doctrine Saint-Simonienne, *Exposition*, Paris,1855, p.18. この引用部分に見られるような用語を強調する著者たちが存在する。これらの著者は語を強調するという方法を著しく濫用する。興奮高揚したある種の人間がこの悪癖に陥ることは周知のことである。

これが実際になしうることであるならば、この方法は卓越したものであろう。しかし不幸なことに現在までのところそれは大いなる困難を呈している。

難点は二種類ある。まず第一に、これはこの方法の使用が最も好都合な場合についてであるが、明確に定義され測定可能なある現象を研究しなければならないと想定しよう。この場合に問題になるのは数学者が内挿と呼ぶところのものを限界を越えて行なうことである。その結果がいかに不正確でしばしばまちがったものであるかはよく知られているところである。もし社会現象が均一的に増大（あるいは衰退）してきているのであれば、過去から未来を推論することは容易に可能であろう。ある現象がその強度を従来増大させてきたことが観察されたとすれば、このことからこの現象は未来においてもなお強度を増大させるであろうと推論される。しかし社会現象は一般的に波動的推移を示すものである。強度が増大する諸時期があり、それが減少する諸時期がある。現在までのところ観察されている増大の時期が遅かれ早かれある衰退の時期を従えているかどうかを判断することは実に難しいことである[1]。

（1） *Cours*, II, §578.

観念を明確にするために一つの例、人口の増加の場合を考えよう。この場合現象は明瞭に定義されており、測定可能であり、内挿という数学的方法が適用可能である。なんとこのような場合でも、多少とも離れた未来において起こることを過去から推論することはできないのである（1）。一八〇一年から一八九一年までのイギリスの人口数を内挿すれば、過去によって検証されたなんらかの法則を得ることができる。しかしイギリスの人口が将来においてたどるであろう法則をそこから引き出すことができるどころか、確実なのはただ一つのことだけである。すなわち、イギリスの人口がこの法則に従って増大しつづけることは絶対的に不可能だということである。「イングランド及びウェールズの面積は三七二三万九三五一エーカーである。もし一八〇一年から一八九一年まで観察された増加の法則がさらにこの最後の年から六五八年近く続きうるとすれば、そのときには一メートル平方につき一人の住民がいることになるであろう。ところで経済的進歩がいかなるものであれ、かくも稠密な人口が生存することは不可能なことがたしかであるのと同じように、一八〇一年から一八九一年までに観察された増加の法則が六五八年という期間について立証されつづけることはあり得ないこともたしかである」（*Cours*, I, §211）。

（1）　*Journal de la Société de statistique de Paris*, novembre 1897.

さらに次にははるかに重大な一困難があらわれる。それは、人が内挿しようとする現象が測定可能でもなく、さらには明確な定義さえもなされていないことにある。この場合、過去の観察から推論される、いわゆる法則なるものは大抵の場合、純粋な幻想にすぎない。その法則は、過去の研究が我々のうちに生み出すところの、ほとんどつねに非常に曖昧な諸感情のあいだに存在する、いくつかの関連を表わしているにすぎない。

サン・シモン主義の教義の要約は次のように続く。「この科学の最初の適用は、普遍的結合、換言すれば、継起的に家族、排他的階級、都市、国民、『人類（ユマニテ）』ということばによって表現される、敵対の減少への人類（エスペス・ユメーヌ）の傾向を検証しようとする。そこから、最初は戦争のために構成されていた諸社会が一つの『普遍的』平和的『結合』へと融合するという結果が生ずる。（1）」

（1）　*Loc. cit.*, p.18-19.

以上はすべてが無根拠というわけではないが、曖昧で首尾一貫していない。この方法をもっと正確に判断するために、これを過去に適用してみよう。ローマ帝国がその栄光のさなかにあり、パックス・ロマーナが地中海地方をその恩恵によって満たしていた時代にはまさに右と同じような推論をなすことが可能であったであろう。しかしこの同じ推論が数世紀後には、すなわち蛮族の侵入の時代には最も顕著明白な否認をこうむらなければならなかったであろう。続けよう。戦争状態が一般的になっていた封建制の時代に到達すれば、先とは逆の推論をなすこともできたであろう。そして、事実による検証としてこれ以上の

ものはなかったであろう。

ギリシアとローマで王政が消滅していた時代に生きていた一個人を想定し、彼には、必要な歴史知識と、先に指摘したような種類の推論に従事する傾向があるものと仮定しよう。彼が壮大な歴史法則を発見することは容易であろう。蛮族を除いて、到るところで王政は消滅するか、あるいは著しく弱体化し、ギリシアにおいては専制君主の時代がほんの僅かしか続かず、寡頭政治と民主政治が異論の余地なく支配する。それゆえこれは明らかに人類が進む方向である。しかしすぐさまギリシアにおいてはアレクサンダーと共に、次いでローマにおいてはアウグストゥス（Auguste）と共に、この方向は完全に変わるであろう。再び、サン・シモン、オーギュスト・コント、あるいはマルクスのそれと全く同じ実証的一科学によって新たな一歴史法則を引き出すことが可能であろう。そして再び諸事実はその歴史法則を裏切る形で変化することであろう。アウグストゥスの時代に、あるいはトラヤヌスの時代に、人は合理的に封建制を予見できたであろうか。

ルクレティウス（Lucrèce）は宗教に対する唯物論の勝利の讃歌を次のように謳っている。

Quare Religio, pedibus subjecta, vicissim Obteritur, nos exaequat victoria coelo.(1)

（1）De rerum natura,I, 79-80.「かくして今度は宗教が踏みにじられた。そして我々の勝利は我々を天に比肩せしめた。」

この詩についても、もっと先に（I,102）引用されている詩についても、大部分の翻訳者が読者を憤慨させないために、religio を superstition と訳しているのは奇妙なことである。しかし、これはルクレティウスがこの言葉に与えている意味ではない。彼が言いたいと思っているのはたしかに宗教のことである。

これこそまさに当時のローマ世界が歩んでいた方向であった。そしてルクレティウスの予見はサン・シモンのそれと全く同じように事実によって証明されていたのである。しかしまもなく風向きは変わるであろう。東方の宗教（キュルト）がローマに侵入し、次いで宗教戦争と中世の暗黒が到来するであろう。当時人々が次のように言いえたのはもはや単に過去についてではなく、まさしく現在についてである。

Tantum Religio potuit suadere malorum.

アリストテレスの哲学以降、あるいはキケロの対話 De natura deorum(1) 以降、人々はどれほど後退したことか。そしてキリスト教の聖者伝作者の馬鹿正直な軽信、ホメロスの模倣者に見られるもの以上でさえある軽信に到達するのである。

（1）キケロの懐疑的精神は消滅したが、幾世紀もの後再生する。《Ex quo existit et illud, multa esse probabilia, quae quanquam non perciperentur, tamen quia visum haberent quemdam insignem et illustrem, his sapientis vita regeretur》(*Loc. cit.*, I, 5). そして神々に関して人々がもちうる見解について語りつつ、次のようにある。《Profecto eos ipsos, qui se aliquid certi

他方こうしたいわゆる一般法則なるものはしばしばきわめて限定された不完全な観察に基づいている。サン・シモン主義者は我々に対して次のように言う。「ユダヤ教の一神教、ギリシア及びローマの多神教、現在に至るキリスト教を含む人類発展の一般的情景は明らかにこの「進歩」(1)の法則を浮かび上がらせている。エルサレム、シーザーのローマ、キリスト教世界のローマ、これらは人類の草分け的三大都市である。モーゼ、Numa、イエスは、今日では既に死滅した、あるいは死滅しつつあるいくつかの民族を産み出した」(p.19)。

(1) このことばは非常に大きな文字で印刷されている。これはこの言葉が指示する新しい神に対する敬意であり、少し後ではサン・シモンを指すようになる父(PÈRE)という言葉もこの敬意を共有している。

この人類発展の一般的情景は地中海の一部を含んでいるだけである。それは中国、仏教、イスラム教、を無視している。古代エジプト文明に至っては言及の栄にも浴していない。Numaについての示唆は、十分に厳格な歴史批判に属するとは思われない(1)。もしサン・シモン主義者の科学が「その名に値するあらゆる科学と同じように実証的」であるとすれば、少なくともこの事例においては、この科学はまだあまり知識経験を積んではいないと言わなければならない。

(1) サン・シモン主義者の教義についてのこの解説がなされた一八二八年はニーブール(Niebuhr)の *l'Histoire romaine* 第三版が出た年である。

オーギュスト・コントは社会進化の一般法則を発見したと自ら信じ、そして多くの人々が『実証哲学体系』*Système de philosophie positive* の中で示されているこの業績を賞讃した。後の著作の中で彼は次のように繰返している。「現在の主要な思想家たちの認めるところであるが、私が社会的ならびに知的な人類の進化の一般法則を樹立することによって、自然哲学の全体を完成させ整序した基本構想の、二重の目的は以上の如くであった。ここでこの大法則に立ち戻る必要はない。これにはもはや反論はなされなくなっている…。この法則は、我々の何らかの思弁はすべて必然的な継起的三段階を通過することを闡明するものである。まず神学的段階、そこでは全く証明されない、心のままの虚構が明確に支配する。次は形而上的段階であり、それを特徴づけるのは擬人化された抽象あるいは実体の習慣的支配である。最後は、常に外的現実の正確な評価に基づく、実証的段階である。(1)」

（1）　Syst. de pol. posit., I, P.33.

この法則は多くの論者が既に指摘したように、人類の思考（思弁）の法則としてのみ考えた場合でさえ、正確とはとても言えない。コントの言うそれぞれ異なる段階は、彼の理論が主張するような規則的継起において現れてくるものではない。神学的思惟（思弁）が完全に形而上学的思惟の後に続くということがありうる。オーギュスト・コントは、彼自身は無意識のうちに、このような過去への回帰の奇妙な例を我々に供している。彼の著作は純粋に形而上学的な考察で満たされているのみならず、彼の最後の諸著作は物神崇拝あるいはそれとほとんど変わらない状態へと我々をいざなっている(1)。大地は偉大な物神（フェティッシュ）となる。「惑星の生命の基本法則の作用を絶えず蒙ることを余儀なくされていたので、地球は、それが知性を備えていた時には、主要係数を変化させることによって天文秩序を完成させるべく、その物理化学的活動を展開させることが可能であった。かくして我々の惑星は、彗星が発生するのに類似した長期の一連の爆発を最良の仮説に従って調整することによって、軌道の偏心度を低め、それによって居住性を高めることができた。この同じ振動は、叡智によって再生産され、他方では植物的運動によって補佐されて、地軸の勾配を偉大なる存在（Grand-Etre）(2)の未来における必要に最もよく適合するように調整することもできた。いわんや、地球はその際その一般的形状を修正することも可能であった。(3)…」ヘシオドスによって物語られた地球の冒険も全く現実的であった。しかし我々には比較的心地よい一つの読み物のように思われる。コントはこうした迷論珍説が虚構であることを認めるにやぶさかでないことは本当のことであるが、しかし、「このような通常世界に還元されてしまうと、共感を発展させることによって、相乗作用を堅固にする形で主観的総合を樹立すべく、物神性（féticité）と実証性とが競合することになる…。(4)」

（1）　コント自身、物神崇拝はいくつかの面で実証主義に近いと認めている。

（2）　この言葉は人類（ユマニテ）を指している。別の物神、きわめて偉大な物神、実証主義的物神のゼウス。

（3）　*Synthèse subjective*, p.10-11.

（4）　*Synthèse subjective*, p.12. プラトンも同じように、その共和国の最大幸福のために、作り話（フィクション）を綿密に統制している。

次に、三段階の法則が実際に人間の思惟の法則であると認めるとしても、我々はまだ「人類進化の一般法則」をもったことにはならないであろう。これら二つは非常に異なるものでありうる。

最後に、極端に妥協して、我々がまさにそこに人類進化の法則の一般的表現があると認めるとしても、この法則はあまりに一般的で曖昧であり、人はそこから社会の具体的組織について何も引き出すことができない。そしてもしコントが社会の具体的組織を彼の言う一般法則に結びつけることができると錯覚しているのであれば、それは彼が論理を無視し

ていることであり、厳密に論証する代わりに権威を振りまわしているということである。

現代の社会主義者たちは人々のあいだの相互依存ということについて大いに強調する。人々の連帯（ここではこの連帯という言葉はその本来の意味において用いられている）はますます増大するのであるが、社会主義者はそのことから集産主義の到来を結論する。事実は確かであるが、それに由来する結論は論理的ではない。分業は相互依存（連帯）を増大させる。全体の中の一小部分のみを分担する企業あるいは人々は、相互依存の状態にあり、他の部分を分担する企業あるいは人々と連帯している。しかしこの現象は個人企業であるか集産主義的企業であるかとは無関係に起こりうることである。分業と協同とは同一事象の二つの異なる局面に他ならない。もし我々が生産の結果を考えるならば、我々は協同を見る。もし我々が生産の配分、各作業者の分担を考えるならば、我々は分業を見る。

マルクスとエンゲルス、そして彼らに続く非常に多くの集産主義者たちは、一歴史法則が短期間で、不可避的に、ますます大きくなる富の集中とますます強度を増す経済的危機をもたらし、その結果として現在の組織の崩壊と集産主義の到来をもたらすにちがいないと信じた。「ブルジョアジーは自らの墓堀り人を何よりもまずつくり出す。彼らの没落とプロレタリアートの勝利は共に等しく避けがたい。(1)」このような事態が起きる時期については、いまや人は予測がまちがっていたことを確認することができる。エンゲルス自身、その生涯の終わり頃に、マルクスの著作『フランスにおける階級闘争』等の序言の中でこのことを認めた。目下のところ、信仰的な社会主義の多くは千年王国信者をまねて、単純に、予言の実現を少し遅らせている。

（1）*Manifeste du parti communiste*, publié en 1848. この『共産党宣言』のいま一つ別の予言はあまり見事には成就していない。「共産主義者はドイツにその主な注意を向ける。それは、ドイツがブルジョア革命の前夜にあるからである。また、ドイツが、十七世紀のイギリスや十八世紀のフランスよりも、いっそう進歩したヨーロッパ文明全体の諸条件のもとで、またはるかに発展したプロレタリアートをもって、この変革をなしとげるので、ドイツのブルジョア革命はプロレタリア革命の直接の序幕となるほかはないからである。」五三年が経過したが、ブルジョア革命はまだ起きていないし、いわんや「直接の序幕」はまだ終わっていない。マルクスとエンゲルスはどう考えてみてもすぐれた予言者ではなかった。

しかしながら、この場合、誤謬は科学的推論も免れえない性質のものであることを指摘しなければならない。史的唯物論という理論も同様に全面的には受け入れ難いものではあるが、これも一つの科学的理論ではある。

利益についての議論—持たざる階級が持てる階級の富を自分のものにしたいと願うのは当然である(1)。そして持たざる階級はつねに、少なくとも見かけの上では彼らの行動を正当化することのできる論証を、出来、不出来はともかくとして、見つけようと試みてきた。

（1）何人かの社会主義者はこのことを率直に告白している。かくしてフランスでは、修道会財産の没収に関して彼らは次のように言う。「我々は修道会の十億フランから始めて、ロスチャイルドの十

億フランでもって終わる。」

このための論証は主として二つの方向に展開している。一方では、彼らは社会の中で生きている人間にほとんど必然的に存在する憐憫の情、平等、正義といった漠然たる感情、宗教的原理、邪悪と想定される無為の金持ちと正直者と想定される働く貧乏人との比較、に訴える。要するに豊かな感情の鉱脈を開発するのである。他方では彼らは社会的異質性—これのおかげで、生産のために貯蓄を利用する人物と貯蓄を所有する人物とは別人になるのであるが—は一般的幸福にとって有害であると証明しようとする傾向をもつ。これは科学的に真でありうる命題である。そしてこれに対してはいずれにしても、アプリオリにはいかなる反論も存在しない。しかし、彼らはそこで止まらない。情熱に引っ張られて人はより遠くまで進む。彼らが非難するのは単に貯蓄の所有者に対してではなく、貯蓄そのものに対してでもあり、貯蓄の利用がある価値を生み出しうることを否定する。もし我々の社会においてこの価値が存在するとすれば、それはもっぱら生産者を生産手段から人為的に分離したからであって、この価値が消滅するためには、生産手段を「社会化する」ことによってであれ、あるいは他の方法であれ、生産者と生産手段とを結合させればよい。

いま挙げた二つの方向のうち、一般には第一のものが優勢である。このことの説明は容易である。彼らの行なう論証は何よりもまず宣伝という実践的目的をもっているからであり、彼らが人々を説得するのは主として感情に訴えることによってであることを忘れてはならない。時に彼らは明瞭に、純粋に科学的な論証を回避することがある。例えばこれは「労働の総合的（アンテグラル）産物に対する権利」の理論の信奉者の立場である。しかし注意すべき興味あることは、経済的問題のみを扱おうとしているかに見える論者さえも遅かれ早かれつねに最後には、経済的問題に倫理的および感情的考察を混えるという点である。

この点についてはバスティアとプルードンの論争が典型的である。この二人の論者が経済学の領域に出向くのはただできるだけ早くそこから離れるためである。彼らの関心が別のところにあることは明らかである。議論の目的は、とバスティアは言う、次の問題を解くことである。「資本の利益（アンテレ）は正当（レジティーム）であるか。(1)」この二人の敵対者のいずれも、資本の利益、正当という二つの言葉を厳密に定義する必要を感じない。二つの言葉のあいだに、適合性が存在するか否かについて、一方は肯定し、他方は否定する。

(1) *OÉuvres compl.* de F. Bastiat, Paris, 1854, V, p.133.

彼らが利益（アンテレ）によって正確には何を意味しているかは分からない。両者とも貯蓄の金利（ロワイエ）と資本の利益（ロワイエ）とを混同している。資本の利益（ロワイエ）の中で、資産（レント）に由来する部分を彼らは区別していない。バスティアは次のように言う。「一つの家屋、一袋の小麦、一つの鉋、一定の貨幣、一隻の船、一言で言えばある価値を一定時間貸代する者は、一定のサービスを提供してい

る。それゆえ彼は支払い期日におけるこの価値の返還の他に、等価のサービスを受け取らねばならない。彼は実際になにかを受け取らねばならないことに人々は同意する[1]。…これが我々が利益（アンテレ）と呼ぶところのものである。」プルードンは利益（アンテレ）の起源を謄本契約（le contrat à la grosse）に求めようとする。「その生産物ないしは資金―これらは商業においては全く同じものである―を投入する資本家ないしは産業家の関与（participation）が表現される、儲けの中の寄与部分は、ラテン語のinteresse.すなわち関与（participation）、利子（intérêt）の名を与えられた[2]。」こうした事情から保険料（prime de assurance）は利子の中に含められることになった。かくして我々は少なくともくじ引きの危険periculum sortis を見ていた聖トマス以前に後退することになる。正当（légitime）という用語に関しては、その考え方は我々の論者においてさらに一層曖昧である。バスティアはその最初の書翰において正当性の基準として借り手の受け取るサービスを採用しているように見える。鉋を借りる者はあるサービスを受け取る。それゆえ彼はその鉋の使用について何かを負うている。しかしプルードンは正当性の基準を貸し手の蒙る苦痛においている。ところで彼は次のように言う。「貸し手という職業の通常の条件において貸すところの者は、彼が貸す資本を奪われるわけではない。逆に彼が資本を貸すのはまさにその貸付が彼にとって喪失ではないからである。彼が資本を貸すのは、資本を十分に持ってさえいれば、貸付けることが彼にとってもっぱらためになるからである」(p.125)。次に補助的基準として新たな基準が現れる。貸付けは「労働せずに生きることを資本家に可能ならしめる儲けを生み出す。ところで労働せずに生きるということ、これは経済的にも道徳的にも矛盾した命題であり、不可能な事柄である」(p.125)。バスティアは最初の議論に対して、貸手は資本をまさにそれを貸すために自らの労働によってつくり出したのだと答える(p.138)。正当性の基準はそれゆえこの場合意図に依存することになる。これは不利な立場であり、プルードンは勝ち誇って言い返す。「最初の回答で私は貸し付けする者はその資本を奪われるわけではないことに貴方に注意してもらうよう述べた。それに対して貴方は答える。もし彼がその資本を、貸し付けるためにわざわざ作ったとしたら、それがどうしたというのだ、と。これによって貴方は貴方自身の立場を裏切っている。このように言うことによって貴方は、昨日は正当な利子による貸付であったものが今日は正当ではなくなってしまう秘やかな理由とは、貸付そのものは剥奪喪失をもたらさないということにある、という私のアンチテーゼに同意していることになる。私は貴方のこの告白を銘記しておく」(p.158)。そこでバスティアはしばらくの間自分のもとの考え方に戻り、次のように繰返す。「私は利子の正当性を、貸付けはサービスであるということから結果させた…。」(p.158)。しかしプルードンからの新たな回答の後に、バスティアはその立場が維持できないことを納得したように思われる。彼はいま一度正当性の基準を変え、この問題についてはプルードンの見方に接近する。しかし彼はプルードンに反論する。「貴方自身次のように言っている。『もし債権者の苦労がゼロであるならば、利子はゼロでなければならない。』だとすれば我々は何を追求すべきであろうか。それは、資本は苦労なしに形成されること

がありうるか、ということである。もしそれが可能ならば私がまちがっている。信用貸付けは無償でなければならない。もしそれが不可能であるならば、まちがっているのは貴方であり、資本は有償でなければならない」(p.194)。

(1) Loc. cit., p.113. このことを認めたのはシュヴェ(Chevé)である。シェヴェの一通の書翰によって開始された論争は、プルードンによって引きつがれた。

(2) *Loc. cit.*, p.174.

これは厳密に定義されたことのない用語についての論議の難点を示すよい例である。このような言葉についての争いは、正当ということで何を意味するかということから始められていたならばすべて避けられていたであろう。

しかし我々はまだ曖昧という問題の終わりには来ていない。バスティアの言い逃れの理由は、価値についての彼の一般理論の誤謬にある(1)。誤謬はそこでは質的な意味で用いられた苦労という言葉に表われているのであるが、この言葉は量的に用いられなければならないであろう。プルードンが債権者の苦労について語るとき、彼がたとえいかに小さなものであろうともある一つの苦労を意味しているのではなく、利子が供給する儲けに厳密に比例的にではなくとも、少なくともそれに比較可能な苦労を意味していることは明らかである。それゆえ、この苦労という視点に立とうとする場合にはある資本が苦労なしに形成されるかどうかを検討するのでは不十分であり、資本の所有者がそれから引き出しうる儲けにほとんど比例する苦労をしなくともその資本が形成されるかどうかを検討する必要がある。しかしこの場合、正当性の基準としてこれが採用されるならば、誤っているのはバスティアである。貸付においてであれ、またその他いかなる交換形態においてであれ、交換される対象がもたらした苦労とその取引から引き出される儲けとの等価性が達成される段階が来るであろう。

(1) 第九章を参照

経済的財が蒙る変換は次の三つの部類に分かれる。一・物質的変換、二・空間的変換、三・時間的変換。最初の二つの変換は我々の感覚によって比較的容易に捉えられるものであり、人々はこれらをもっぱら考察してきた。これらだけがある報酬に「値(メリテ)する」ように思われるものである。第三の部類は、空虚な取るに足りぬものとして、およそ何にも値しない(1)。

(1) アーヴィング・フィッシャー(Irving Fischer)氏はこの時間的変換についての卓越した所見をその著書の中で呈示している。

事実はこのようなものでは全くない。ベームーバヴェルク(Böhm-Bawerk)氏はこの点についての真実を闡明するに非常な功績のあった人であるが、時間的変換は最も重要な

経済的変換の一つである。生産方法の改善は直接的手段手順に対して間接的手段手順を代置することによって獲得される（例えばある所の水を別の所にもって来るのに、人は、バケツで水を汲ませに人々を派遣する代わりに、導水管を敷設する）。ところで間接的手段はまさしく、経済的財の変換時間を長くする。

既に我々が指摘したように、経済的変換の理論は資本の概念を用いなくとも構築することが可能ではあるが、しかしこの資本概念の導入は、数学を使わずに日常語で説明しようとする場合には、とくに、事態の説明を大いに容易ならしめる。

水を汲み上げる蒸気機関を考えてみよう。その機械が役に立つ期間―それを超えると機械は屑になる―を考えれば、獲得される生産物は一定の高さにまで汲み上げられた一定量の水であろう。それを獲得するためには次のものが消費されたことになる。すなわち、蒸気機関、一定量の石炭、オイル、その他の必要供給品、労働、等である。経済学的には、こうした物すべてが生産物に変換されたと言うことができる。

しかしかなり短い期間だけ、例えば一年間だけを考えるならば、事態を説明するためには、変換される物の二つのカテゴリーをつくるのが便利である。一方のカテゴリーには、一日、一月、一年後にもまだ余り消費され切らずに残っている機械があり、他方のカテゴリーには、該当期間内に完全に消費されてしまう石炭、オイル、労働等がある。第一のカテゴリーに属する対象を指すために一つの用語をもつことは便利であるので、それらは資本と呼ばれる。このカテゴリーには同じく一定額の貯蓄―これは資材と労働をまかなうために必要である―も含まれる。この貯蓄―これは貯蓄資本と呼んでよい―は、絶えず支出によって消費され収入によって再生される。これは一産業の回転のための資金（フォンド）である。

現実には第一のカテゴリーと第二のカテゴリーとのあいだに十分明瞭な境界線が存在するわけではない。なぜなら、一方の消費領域から他方の消費領域への移行の段差は感じ取れぬほどのものだからである。ある対象を、例えば消費物資のカテゴリーから資本のカテゴリーに移行させるといったことは、会計が確立されているかどうかによって、いくらか恣意的になる。毎年シャベル一本をすり減らす庭師を考えてみよう。彼は貸借対照表を作成するに際して、このシャベルの価値を消費の部に算入することができる。あるいは彼は、シャベルは一資本であると考えることも可能である。その場合には、毎年この道具を購入するために彼が行なう支出は、この資本の維持費に含まれるであろう。貸借対照表の結果は明らかにいずれの場合においても同じことであろう。

資本のうちには、貯蓄の変換によって獲得されるもの、例えば機械、が存在する。また貯蓄の変換によっては獲得されない、あるいはそれが難しいもの、例えば地面がある。前者を獲得するためには、次のことが必要である。一・まず貯蓄を持つこと、すなわち最初の時間的変換を行なうこと、二・この貯蓄を資本に変換すること、これは物質的ならびに空間的変換を意味し、すべての経済的変換と同じく時間的変換を伴う。

以上の考察はすべて客観的である。これらは社会の組織体系とは無関係に変換される対象にかかわるものである。

資本および生産における資本の役割についての考え方は経済学者のあいだで非常にさまざまである。しかし彼らの多くは我々がいま説明したものに接近している。

しかし近代の社会主義者のあいだでは、資本の概念は全く別のものである。彼らは分類

基準としてもはや事物の客観的質を取るのではなく、事物とそれを用いる人々との関係（ラポール）を分類基準とした。生産手段は、それが所有者によって作動させられていないか作動させられているかに従って、資本であったりなかったりする。かくして、我々が先に述べた機械がそれを動かす労働者に属する場合にはその機械は資本ではなく、もしそれが労働者とは異なる別の一人物に属するならば、それは資本である。

この分類は完全に認め得るものである。各論者は自らの理論を説明するのに最良と判断するやり方で対象を分類する権利を有する。ただ次のことは必要である。すなわち、もし彼が理解されたいと欲するならば、各用語が何に対応するかを読者が正確に知ることができるということ、同じ用語が別のいろいろの事物を指すといったことがないこと、が必要である。

政治経済学ということでは社会主義的論者たちにおける創造性の欠如には顕著なものがある。労働によって測ることができると想定された価値の場合と同様、この資本についての場合にも、彼らは経済学者たちのあいだで見つけた誤れる概念を発展させただけである。

アダム・スミスは客観的基準と主観的基準とを混同する。彼は次のように言う（1）。「社会がいまだいかなる分業も存在しておらず、またほとんど交換が行われておらず、さらに各人が自らの欲求をすべて自分自身でまかなっていた幼年状態にあったときには、社会の問題をうまく運営するためにあらかじめ蓄積され集められた資金（フォンド）の存在は必要ではない。…しかしひとたび分業が一般的に確立されるときには、一人の人間はもはや自分自身に生ずる欲求のごく一小部分にしか自らの労働を充てることができなくなる。彼は自らの労働の産物によって購なわれた他者の労働の産物でもって、その欲求の大部分をまかなうことになる。…それゆえ、彼を生存せしめ、養うためにあらかじめ集められた様々の種類の食料の貯え、さらには彼の仕事に必要な材料と器具が、さしあたりどこかに存在していることが必要である。（2）」

（1）Rech. *Sur la nat. et les causes de la rich. des nations*, trad. franç., Guillaumin, 1881, liv. II, p. 323-324.

（2）これらはすべて一人でいる人間にも必要である。分業は同時併在的（コンコミタント）な出来事（フェ）であって、原因ではない。

時間的変換にとって必要である蓄積という客観的状況がここでは、社会組織、すなわち分業および、資本所有者とその資本の利用者との分離、に依存する状況とごちゃまぜにされている。

アダム・スミスの後継者のあいだでは資本の客観的性格は強調される。リカードーは生産手段を、それらがその所有者自身によって使用されている場合でも、資本と呼ぶ。J・-B・セー（J.-B.Say）は、その賞賛すべき明瞭さで「器用（アンデュストリュー）な人物でも既に存在してい

る生産物を所持すること」が必要である、「それがなければ、彼の器用さは、それをいかに際立ったものと想定しようとも、活動させられないままにとどまる」と指摘している。この資本のカテゴリーの中に彼は次のものを入れている。一・道具、器具、二・「働く（アンデュストリュー）人間が生産物におけるその労働部分を完遂するまで、彼を維持するために充当すべき生産物」、三・原材料。「これらすべてのものの価値は、生産資本（capital productif）と呼ばれるものを構成する。さらに不動産の上に広く分布している、年間の生産物を増加させるためのあらゆる建造物、改築物の価値、家畜の価値、その産業に必要な機械群であるところの工場の価値も生産的資本と考えなければならない。(1)」バスティアは―彼に対してラッサールは激しい論戦を挑むのであるが―また資本という用語にも同じくこの意味を付与し、ロビンソンのような人間の資本について語る。最後に現代の一論者ポール・ルロワ＝ボリュー（Paul Leroy- Beaulieu）氏は次のように言う。「これらの資材、道具、設備は…資本と呼ばれるところのものである(2)。」それゆえ客観的基準は経済科学において最後に主導権を握るものである(3)。

（1）*Traité d'écon. polit.*, Guillaumin, 1861, p.65-66

（2）*Traité theor. et prat. d'écon. pol.*, I, p.123.

（3）ジョン・スチュアート・ミルにはなおいくらかの混乱がある。彼は第一巻Chap.IV,§3 で次のように言う。「資金（フォンド）の所有者がその資金を減らしたり浪費したりすることなく、収入を引き出すことのできる資金は、その所有者にとっては、資本と等価である。」それゆえここには、新たな一カテゴリー、すなわち客観的に資本であるのではなく、ただ誰かにとって資本であるところのものが登場している。ミルはすぐ後で、自らが犯したばかりの混乱を修復しようと努力する。「しかし、個人に該当する一命題を一般的観点にまで無分別に拡張することには注意しなければならない。これこそ広く流布している多数の経済学的誤謬の非常にありふれた原因である。右の場合、個人にとって事実上（virtuellement）資本であるところのものは、資金―我々の例においては、この個人はこれを浪費しなかったのであるが―が別の誰かによって浪費されたかあるいは浪費されなかったかに従って、国民にとって資本であったり、資本でなかったりする。」ここにはさらに第三のカテゴリー、国民にとっての資本！が登場する。

言葉についての論争ほど不毛なものはない。それゆえしばらく社会主義的論者たちの用語を採用して、資本Sという術語によって、所有者とは別の人間によって作動させられている生産手段を指すことにしよう。いまや、これまで我々が資本と呼んできたものを指すための一つの用語が必要である。弓矢はそれが所有者とは別の狩猟家に貸与されている場合には資本Sであるのだから、そしてその所有者が直接にそれを用いている場合には資本Sではないのであるから、そした状況とは無関係に、これら弓矢に当るものを指す用語が必要である。資本という用語は別の人々に独占されているので、一定の対象を指すためにアルファベットの一文字を用いることで満足し、我々がこれまで資本と呼んできたものをXと名付けよう。あるいはこうした起源を想定するためにそれらを資本Xとしてもよいか

も知れない。我々は事物に即してのみ推論するのであるから、用語如何は我々にとっては全く重要性をもたない。我々としてはただ正確に表現することを望むだけであり、同一の用語でもってさまざまに異なる事物を指すことによって、言葉の曖昧さを利用することは拒否したいのである。

経済的財は生産においてさまざまの役割を演ずる。これがまさに客観的質であり、経済学者たちが資本と呼んでいるもの、我々がさしあたりXと呼ぼうとしているものの概念はこの質の考察に起源を有するものである。さらにこの経済的財は主体に対する関係の側面からも考えることが可能であり、その財を生産のために作動させる人物がそれらの所有者であるか否かに従って区別される。ある種の論者たちが資本と名付けるもの、我々がさしあたり資本Sという用語によって示そうとしているものの概念の起源はここにある。

このような表現方法は便利ではない。我々としては、資本Sとは何であり、資本X（短くは単にX）とは何であるか—さらにまもなくいま一つ別の資本、すなわち資本Pが加わる—を思い出さねばならないという読者の面倒さを避けたかったのであるが、このような用語法が必要になったのは、既に意味が固定してしまっている一つの用語を好きなように使いたいというある種の人々の強情さのためである。一方ではこのような用語法の問題にあまり拘泥するのは無益なことであり、ある論者が資本という用語によって彼の望むもの、適当と判断すれば一羽の鵞鳥さえも資本という用語によって指示するのを我々が阻むこと不可能であるからには、これは絶対的に何の役にも立たないであろう。他方では、同一の用語がいくつもの異なる事物を指す場合には、曖昧語法を避けて、これらの事物のいずれか一つが他から区別されうるために、この用語に少なくともいくつかの記号をつけることが不可欠である。

右の定義が措定されたならば、我々はラッサールの、資本Sは一つの「歴史的カテゴリー」であるという命題を何の異論もなく承認しなければならない。実のところを言えばアダム・スミスは、慣用語法を除けば、この用語についての所有権を少しは要求することができるであろう。なぜならラッサール以前に、資本Sが分業から生まれること、を指摘していたし、この「歴史的カテゴリー」が形成される経過を強調していたからである。さらに言えば別の論者たちも同じようにこの概念についての権利を主張できた。

我々はまた、我々の社会の生産は資本主義的生産であること、そして、資本Sは生産手段が「社会化」される日には消滅するであろうことを承認しよう。これは資本Sの定義そのものから結果するものであり、いかなる形であれ反論はありえないであろう。

経済学者たちはこの点について一戦を交えるという大きな誤りを犯した。彼らがその方向に押しやられたのにはいくつかの理由がある。第一には、人々が持つところの、言葉について論争するという悪癖がある。人は、資本とは何かを知るために議論する。あたかも我々は好きなものにこの名称を付与することができないかのごとくである。しかしながら、経済学者たちが、この用語を定義した後ではさらに新たな一定義をつけ加えないように人々に要求する権利をいくらかもっていることをも指摘しなければならないであろう。化学者は自分の発見した新しい物質にお好みの名称を付与することが可能である。しかし、彼が酸素や硫黄を鉄とか水銀とかと呼びたくなるきまぐれを起こしたならば、他の化学者

たちはこれぞまさに言葉の争いと思うことであろう。この道理は社会主義者たちによる定義についても否応なくあてはまる。たとえ彼らがその定義を昔の経済学者たちの構想そのものから引き出したのでなかったとしても。

次には功利的目的がある。これは今日まで政治経済学がもってきているものであるが、結果として、倫理的、法学的、実践的考察ともっぱら科学的な考察とを混ぜ合わせることになった。実践的実現の困難性、あるいは不可能性はしばしば、科学的不可能性と混同されることになる。この科学的不可能性は、ある事物が、経験が我々に認識させるところの斉一性（法則）と矛盾するということから結果するものである。事態をよりよく理解するために別の学問領域における例を取り上げよう。一辺と一角だけが知られている三角形の構成諸単位を確定することは不可能である。つまりもしそれを確定するとすればそれは幾何学が立脚する極めて一般的な斉一性に矛盾することになるであろう。これは科学的不可能性である。他の二辺に比べて極めて小さい一辺と、その一辺の両端の角がそれぞれ直角に極めて近い三角形の構成要素を確定する際には、実践的困難あるいは実践的不可能性というものが存在する。地球上における底辺とその両端における二角の測定という方法によって太陽の視差を測定することが不可能であるのはこの実践的困難性あるいは不可能性のためである。

功利的観点からすれば、この不可能性が確認されるときに全てが語られたのである。科学的観点からすれば、このような実践的不可能性と、一辺と一角だけが知られている三角形を確定することの幾何学的不可能性とのあいだには本質的相違が存在する。前者の困難を取り除くためにはより精密な測定手段を持つだけで十分であろう。後者の困難を取り除くためには、我々が住んでいる世界とは全く別の世界に住することが必要であろうが、これは人知の及ばないことである。硫化鉄を用いて作られる商業用の硫酸から完全に砒素を含まない硫酸を取り出すことは難しいことである。その困難はきわめて大きいではあろうが、しかし、硫黄を含まない物質から無水亜硫酸を取り出すことの不可能性とは本質的に異なるものである。

政治経済学に戻ろう。人は自由競争という条件を存続させたままで、最大値の法則によって価格を固定しようと欲する。これは可能なことであろうか。実践的困難が存在する。論者の大部分が拘泥するのはこの部分である。彼らは別のところを見ない。この場合、実践的困難以上のものが存在する。論理的不可能性が存在するのである。余分な条件が一つ与えられているのである(1)。それはあたかも一労働者に向かって次のように言うようなものである。「同時に立方体でもあり球体でもあるような石をつくってくれないか。」ここには論理的不可能性が存在することが明らかである。

（1）問題のなかの未知数は既に自由競争に関する方程式によって確定されている。価格を確定する方程式を加えると、未知数よりも多くの方程式が存在することになる。*Cours*,§595.

生産手段を「社会化する」については莫大な実践的困難が存在する。しかし我々がいま上げたような種類の科学的困難は何も存在しない。それゆえラッサールが資本Sは「歴史的カテゴリー」であって、「論理的カテゴリー」ではないと言うのには根拠があるのである。

しかしながら、経済学者たちが資本という用語に付与している意味を変えようとする主張にはややいかがわしいところがある。この意味変更には、我々が「自由」という言葉の意味変更に付随しているのと同じ利益がないであろうか。事態は検討に値する。

生産手段の「社会化」が一つの「歴史的カテゴリー」が消滅するのを見る楽しみを手にすることだけを目的としているのでないことは明らかである。人々はいま少し具体的な利得を目的としている。

資本Sの消滅は、この資本Sの利益（ロワイエ）の消滅を伴う。それゆえ一見したところでは、働く人間はこの利益の全てを獲得するように見える。資本Sと、我々がさしあたりXと呼んだところのもの（経済学者（エコノミスト）の言う資本）とを混同することに人々がこれほど執着するのは多分このような見方を強化するためであろう。

「歴史的カテゴリー」すなわち資本Sの消滅は「論理的カテゴリー」に対して、あるいはより正確には客観的Xに対して何ら影響しないことに注意する必要がある。生産手段を「社会化」してもしなくても、ひな鳥を持つためには、一羽の雌鶏と一羽の雄鶏がつねに必要であろう。そしてこれらの動物を準備するためには、それらを貯蓄したということ、それらが小さなひなであった時に食べてしまわなかったということが必要である。資本Sの消滅ということは、雌鶏と雄鶏が、ひな鶏を生むようにさせる人物その人の所有物でなければならないという帰結、あるいはこの雌鶏と雄鶏が「社会化される」という帰結をもたらすにすぎない。

ところで、資本Sの利益（ロワイエ）は、Xにとっても同じく必要な経費（デパンス）を含んでいる。そしてXが存続する以上はこの経費も同じく存続するであろう。まず第一に償却と保険料のための経費がある。雌鶏と雄鶏は「社会化」されたからといって不死身にはならないであろうし、動物性疫病にかからなくなるわけでもないであろう。「社会的」家屋も私的な家屋と同じように修理の必要があるであろうし、火事その他の偶発事故によって消滅を余儀なくされることもあるであろう（1）。それゆえ粗利益（loyer brut）からこれら保険料（プリム）を削除しよう。残った部分からさらに、資本Sの制度のもとで、生産手段を増やし改善するために使われていた部分を差し引かなければならない。新しい体制のもとではこれらの生産手段は共同体（コミュノテ）に属することになるであろうが、生産手段のための費用は消費のためには使えないこと、働く人間がそれを使ってしまうことはできないことは依然として真実である。これらすべてを差し引くと、残るのはただ、現在資本Sの所有者が消費しているものだけである。彼ら働く人間が現在の資本所有者から賠償金なしで財産を接収するとしても、彼らが享受できるのは現実にはただこの部分だけである。

（1）貯蓄の利子（ロワイエ）が問題になるときに、保険料は貯蓄の「社会化」とともに消滅するであろうと考える

論者がいる。今日、もしピエールがポールに貸付けをするならば、ピエールは保険料を必要とする。なぜならポールが金を返さない可能性があるからである。しかしもし我々が社会をその全体において考えるならば、ピエールが失うものはポールが得ることになる。それゆえこの場合には埋め合わせが存在することになる。

この推論が仮定しているのは次のようなことである。即ち、貯蓄が返還されない場合、現状においては、それはただポールがそれを返還する気がないからだ、と仮定しているのである。しかしそのようなことはまさに例外的な事例であって、一般的には返還することができないから返還しないのであり、そして返還できないのは、貯蓄がなくなってしまったか、浪費によるか、あるいは注意していたにもかかわらず不幸にも失ってしまったか、いずれにせよ貯蓄が壊滅的な被害を受けたからである。

ところで貯蓄が「社会化」される場合にも、なお人々はそれを失うことがあるであろう。難破する船もあるであろう。人々が万能にならない限り、彼らはまちがうであろうし、例えば原油層を探索して何も発見せず、多額の貯蓄を費してしまうといったことに遭遇するであろう。それゆえ、貯蓄のための保険はなお存在するであろう。

しかしながら、なおさらに控除しなければならないであろう。現在の資本家はXをさまざまな生産分野に配分している。彼ら資本家が消滅した場合にも、この分配機能を果たす人々が存在することがたしかに必要であろう。それは社会主義国家の職員であろうが、彼らの給与は、現在は資本Sが消費している部分から出さなければならないであろう。しかしこの点はしばらく措くことにしよう。

資本Sの利益（ロワイエ）の消滅はそれゆえX（経済学者の言う資本）に原因する出費の消滅をもたらすものではない。これら二つの用語についてなされがちな混同がそう信じさせる傾向があったのではあるが。そして資本Sの廃止から働く人間が引き出すであろう利益は、現在の資本家の消費総額を超えることはできないであろう。勿論これは新しい体制が生産量に影響しないものと仮定する限りにおいてである。

以上は、現在の体制のもとで形成され賠償なしで接収されることになる旧資本Sについてのことである。新しいXについてはどのようなことが起こるか見てみよう。このXは貯蓄の変換によって獲得されねばならないであろう。

例えば新しく鉄道を建設しなければならないとしよう。そのためには一．一定量の経済的財を貯蓄し、二．それを鉄道に変換しなければならない。

一．貯蓄が各市民が彼に分配されたものの一部を実際に貯蓄することから結果するか、あるいはこの部分が分配されないことから結果するかは余り重要ではない。いずれにしても各市民はその部分を奪われるのである。社会主義国家はいかにしてこの貯蓄義務を分配するのであろうか。もし社会主義国家が各人から平等の割当て分を要求するならば（それが各人についての平等割当て分を減らすとしても）、幸福の最大値が達成されないであろうことは確実である。この負担の重みは市民達に対してそれぞれ非常に異なって作用するであろう。人々は平等であるどころではない。彼らは同一の喪失をさまざまに異なる形で感ずるであろう。例えば老人たちは、彼らが決して見ることがないであろう鉄道建設のため

に、分配される取り分が減るのを見ることにはあまり満足しないであろう。もし国家が住民に対してそれを認めるならば、住民たちは国民の幸福を増大させる新しい配分に自分たちで着手するであろう。例えばある老人は若者に向かって次のように言うであろう。「今年は、鉄道を建設するというので、各市民について二〇キログラム肉の配分が少ない。私はこのような犠牲を払うよりも、私が死ぬまで毎年一〇キログラムだけ配分が少ないほうがよい。今年私に要求されている余分の一〇キログラムを貴方が負担することはできないか。来年から私が死ぬまで、私は貴方に私の分から毎年一〇キログラムをあげましょう。」その若者は受け容れる。そしてもしこの老人がなお三年生存したならば、若者は彼が提供した一〇キログラムの肉の代償として二〇キログラムの肉を受け取ることになるであろう。若者が提供した一〇キログラムという量が生産において用いられたとする。例えばそれは鉄道で働く労働者を養うのに役立った。若者はそこからある利益を得る。若者が老人に対してではなく提供したこの一〇キログラムの肉はそれゆえ、大いに資本Sに似たものである。もしこの若者が長生きし、同じような操作を何度も繰返せば、その生涯の終わり頃には働かずに生活することができるようになり、そうしてその時にも存在しているであろう立派な倫理学者を憤慨させることであろう。老人の方は、彼が若者に与えると約束した肉一〇キログラムを「彼の労働の統合的産物」から毎年天引きしなければならないのであるから、悲しいかな、この「統合的産物」を受け取ることはないであろう。それを確立するために大変な苦労をした新しい権利はどうなるであろうか。

人々の求める物質的幸福の単なる最大値を取るだけで、こうした形而上学的倫理学的な不幸をすべて避けるための一手段が存在するとすれば、それは、温度計が気温を測るように、人々の感覚を測定することのできる一手段を持つことであろう。その場合には人々は利得（ベネフィス）と負担金（シャルジュ）とを相互のあいだで分配し、結果としていかなる交換ももはや彼らのあいだで得になるということはなくなるであろう。不幸にして我々はこのような手段について全く思いつかない(1)。

（1）このような手段があるとしてそれを使ったとしても、偽経済学者たちを大いに驚かせることなのであるが、価格そのものにほかならぬある種の比関係（ラポール）が出現するのが見られるであろう。さらに、この比関係あるいは価格のうちにはX（資本）用のもの、そして現在利子（アンテレ）と呼ばれているものに完全に対応するものが見出されるであろう。

仮説的なケースに訴える必要はなく、社会主義当局が存在しているところで起こっていることを見てみよう。この社会主義当局が、その営もうとする産業を「社会化する」のに必要とするものを調達するために一般に訴える方法は借金である。彼らはそれゆえ、一方では資本Sを創出しており、他方ではそれを廃止している。社会主義国家は莫大な需要をもち、満足すべき多くの欲望をもつであろう。人間が現在我々の知っているものとは全く異なるものになるのでなければ、未来における支払いを約束して現在における享受を愛好

する人々も多数いるであろう。それゆえ社会主義政府はその選挙人によって、貯蓄が見いだせるところにそれを求め、この貯蓄を生み出す少数の人々を奨励金によって励ます方向に押しやられるであろう。要するに一言でいえば、それは借金する方向に推しやられるであろう。資本Sは僅かながら異なる形式、すなわち公債の形で再生するであろう。労働者はその「労働の統合的産物」を受け取らないであろう。なぜならこの産物から、公債の総額（le montant du serviece de la dette）を天引きしなければならないだろうからである。人はなお、不労所得（unearned increment）を受ける人々を見ることになるであろう。この「歴史的カテゴリー」は一時的には除去することが可能であるが、その再出現を阻止することは容易ではない。

二．しかしこの「歴史的カテゴリー」の除去に成功したものと仮定してみよう。社会主義国家は毎年一定量の貯蓄をX、すなわち生産手段に変換する。社会主義国家はこの一定量をさまざまな用途に分配する際にどのようなやり方をするであろうか。

この貯蓄の量は無限ではないであろう。もしそうであるならば、すべての人間が経済的財を飽きる程持つことになるであろう。それはきわめて幸福な事態であり、もはや解決しなければならない経済的問題は存在せず、経済問題に取り組むことは無駄なことである。貯蓄の量が限定されているとすれば、一つの用途に向けられる分が別の一用途からは取り上げられることになる。例えばベルギーが社会主義国家になったと仮定しよう。ワインを手に入れるためには、ベルギーでブドウ園を栽培するかどうか、あるいは、ボルドーまでワインを調達に行く船を建造するか、を決定しなければならない。ベルギーでのブドウ栽培は温室で可能である。実際温室でブドウが栽培されており、大量のブドウが収穫されている。集産団体（コレクティヴィテ）にとって、汽船を建造するのにその貯蓄を使うのがよいか、あるいは温室をつくるのにそれを使うのがよいか、を判断することが問題となる。集産団体にとってその貯蓄をでたらめに使ってもかまわないと主張する人はいないであろう。それゆえ、選択することが必要であろう。

一般にワインを調達するための二つの手段として、A、B二つがあるものとし、問題の単純化のために、AとBとがそれぞれ毎日同じ数の労働者、時間を用いるものと仮定しよう。もし加えて、AとBとが同量の貯蓄を必要とし、また、AがBよりも多くの量の製品を生み出すものとすれば、採用すべき手段はAであろう。すなわち貯蓄はBよりもAに使われなければならないであろう。もしBが従来の方法であるとすれば、それを捨ててAに換えなければならないであろう。このことから得られる利益、すなわちAがもたらす剰余産物とは、次の二つの事実の結果として集産団体が獲得するところの利益であろう。一．集産団体は自由に使用することのできる貯蓄を持っていた。二．集産団体はその貯蓄をAに用いた。貯蓄がこの集産団体に属する以上は、この利益も同じく集産団体に属することが正しいように見えることがありうる。しかしこの場合、Aにおいて労働した労働者は「彼らの労働の統合的産物」を受け取らないであろう。彼らは剰余労働を遂行し、集産団体のところに行き着く剰余価値を生産するであろう。

（1）マルクスがある生産にとって「社会的に必要な時間」を考えついたのは、このように問題を単純化するためである。その場合、採用するべき生産手段は技術的に決定されると仮定されており、それを経済的に決定しなければならないという問題は除去されている。■文中の注がありません■

右の事態を避けるためにできることは、貯蓄をBにではなくAに用いたことがもたらす利益を直接に労働者に分配することである。その場合にはこの労働者たちは、彼らの労働の統合的産物を手にすることになるであろう。しかしこれはこの集産団体のその他の構成員の犠牲においてであろう。彼ら他の構成員は貯蓄をしてしかもその働きの報酬は増えないということである。

問題を単純化するために我々がいま行なったような単純化は実際はきわめて稀にしか起こらない。全く起こらないと言ってもいいくらいである。現実には、Bによる生産条件はAによる生産条件とは全く異なるものであろう。最も単純な場合の一つは、Bの方がAの場合よりも、より多くの貯蓄とより少ない労働（1）を必要とする、という場合である。社会主義国家が解決しなければならない問題は次のようなものであろう。「私がこのような余剰貯蓄によって住民に課すであろう苦労は、労働の減少から彼らにもたらされるであろう喜びと比べて小さいか、あるいは大きいか。」

（1）この言い方は実は不適当である。なぜなら一般にさまざまの異なる種類の労働が必要であり、しかもそれを合計することはできないからである。次のように言わねばならないであろう。通貨で算定された労働のより少ない支出、と。

後続の叙述では我々は一般に、一集産団体の労働、喜び、苦労の総量について語られる際の通常の観点を受け入れる。（しかし）これは厳密なものではない。なぜなら異質的な量が総計されるからである。*Cours*, §642 et suiv. 経済的均衡についての数学的考察が導入されれば論証は厳密なものとなりうる。

この比較は特異な形をとっている。一度に引き受けられる苦労を、遠い未来まで我々が享受するであろう無数の小さな喜びの総計と比較することが問題となっている。例えば、社会主義国家はその住民に対して言うであろう。「我々は今年度は、港に埠頭を造成するために、現在キャベツを栽培している人々の一部をそれに使いたいと思う。今年は諸君のキャベツが例年より少ないであろうことは確実である。諸君には埠頭造成に使われる人々が生産するであろう分だけキャベツが少なくなるであろう。その代わり、多年月にわたって諸君は港に着く商品の陸上げに際しての苦労が少なくなるであろう。埠頭の修理工事を計算にいれても、年度の終わりには諸君の労働量は減少することになるであろう。かくして集産団体は、例えば一〇〇〇キログラムのキャベツがもたらす楽しみを一年間失うことになるであろうが、しかしそれは代償として、長期にわたって毎年、より少ない労働で済ますことができるという利益を得るであろう。これは諸君にとって都合がよいか、あるいは否か。選択せよ。」

住民は大いにとまどうであろう。要求されている比較は、キャベツを食う人々が新しい埠頭によって仕事がしやすくなる人々とは別の人々であるに従って、その分難しくなる。

この問題を解決するための一つの方法があるであろう。それは、新しい埠頭のおかげで少ししか働かなくともよくなるであろう人々を一種の協同団体に構成して、そして彼らに次のように言うことであろう。「もし諸君が埠頭をつくってもらったならば、諸君は毎年どのくらいの額をキャベツを食う人々に対して支払うであろうか。」この場合には比較は相対的に容易になるであろう。なぜなら各人は自らの感じる苦労と喜びとを比較すればよくなるからである。

しかしこのようにして資本Sが再生するであろう。そして港湾労働者は「彼らの労働の統合的産物」を手にすることはなくなるであろう。彼らは剰余価値を生産し、キャベツを食う人々はそれによって懐を肥やすであろう。港湾労働者は剰余労働をすることになるであろう。それゆえ別のものを探そう。

港湾労働者は埠頭がもたらす利益を直接に享受することはないであろう。彼らは依然として昔のように働き続けるであろう。埠頭の利益は陸揚げされる商品に向けられるであろう。商品の価値が低下し、この商品を用いる人々すべてがこの低下によって利益を得るであろう。これはまだ問題の半分にすぎない。キャベツを食う人々の一部、すなわち右の商品を間接的にさえ使用しない人々を残している。この商品を間接的に使用する人々については、もし彼らがこの商品の価値低下が彼らの幸福に及ぼす影響を理解するに至るとすれば、彼らは確かにすばらしく知的で物識りであろう。ホテルを建築するには鉄筋の梁が用いられる。もしこの鉄筋の梁が安くなればホテルも同じく安くなり、ホテル経営者は部屋代を安くするであろう。もはやホテル経営者なるものが存在しないとすれば、部屋代を安くするのは社会主義国家であろう。このことを知った上で、鉄筋の梁の陸揚げを容易ならしめる埠頭建設のおかげで年度末に貴方が手にするであろう利益を計算すべく若干の努力が試みられる。そしてもしそれに貴方が成功したならば、貴方は、全世界が貴方の学識手腕を賞讃すべしと要求する権利を有するであろう。

この困難を回避するための一つの方法が存在するであろう。このような計算を気にしないようにしよう。我々はみな「連帯」しているではないか。一方が獲得し、他方が失うものを苦労して追求して、それが何になるのか。国家は自由にできる貯蓄を、今日は埠頭のために、明日は防波堤のために、明後日は鉄道のために、といった形で使うであろう。最後にはこれらの仕事から利益を得る人々のあいだにほぼ補償関係が成立するであろう。そして仮にこの補償関係が正確ではないにしても、その差は「連帯」のために無視するであろう。

このような議論をする人士が理解していないことは、解決すべき問題は多少とも完全なやり方でこのような補償関係を樹立することではなく、集産団体にとって最も利益になる貯蓄の利用法はどのようなものであるかを確定することであるという点である。彼らが絶えず念頭に置いている権利と道徳の問題に麻痺幻惑せられて、彼らは別に解決すべき経済学的問題が存在することをもはや理解しえなくなるに至っている。

もし社会主義国家が右に想定したように、今日は埠頭をつくり、明日は防波堤をつくり、明後日は鉄道をつくり、等したとすれば、これらの仕事によって利益を得る人々のあいだに完全な補償関係が樹立されることも可能である。しかしそれにもかかわらず、これらすべての仕事が集産団体にとって別の仕事よりも効用が小さいということがありうるであろ

う。もし貴方がピエールには一羽のつぐみ鳥を与え、ポールには一羽の黒歌鳥を与えるならば補償関係が存在し、貴方は二人をほとんど同じように扱っている。そしてもしこれが「社会的正義」についての貴方の基準であるならば、社会的正義は満足させられていると貴方は言うことができる。しかしピエールとポールがそれぞれ一頭の牛を受け取った場合には、社会的正義が満足させられているということでは同じであろうが、彼らの物質的幸福は著しく増大するであろう。それゆえ、「社会的正義」という条件だけでは経済現象を決定するには不十分であること、決定できないことは非常に明瞭である。さらに、もし貴方がピエールには一羽の鵞鳥を与え、ポールには一頭の牛を与えた場合には貴方の「社会的正義」はもはや満足させられないであろう。しかしそれにもかかわらずピエールとポールの幸福は、ピエールが一羽のつぐみを、ポールが一羽の黒歌鳥を得た場合に比較して増大しているであろう。

すべての商品、すべての労働、すべてのX（経済学者の言う資本）を自由に使う社会主義国家は、住民の最良の利益になるようにこれらのものを利用するためには、とてつもなく複雑な問題を解かねばならないであろう。この混沌に若干の秩序をもたらすためには、社会主義国家は、多少とも貴重なものを指示するためにこれらに少なくともいくつかの評価をつけることを遅かれ早かれ余儀なくされるであろう(1)。このような評価の体系は現に存在している。それは価格によって構成されている。

(1) このような表現のあいまいさは、数学を利用することによってのみ厳密になりうる命題を日常語によって説明しようとしていることによる。

この評価のうちには、貯蓄の使用がどの点までは価値があるかということを示すものがなければならないであろう。このような指標を手にするためには、少なくとも次の二つの事情を考慮しなければならないであろう(1)。一．現存の貯蓄量及びそれについて可能な用途、二．新たな貯蓄をつくるに際しての多少とも大きな困難。

(1) この列挙は説明的なものであって、限定的なものではない。

全てがこれからなされなければならない新しい国においては、同じ量の貯蓄でも、既に施設道具の大部分を有している国におけるよりも、貴重である。作動させられるために大量の貯蓄を必要とする新たな発明は、現存する貯蓄をより貴重なものたらしめる。同一の国においても、状況が同じであれば、貯蓄の量が増大するにしたがって、貯蓄の価値は小さくなる。

新たな貯蓄の形成のために必要とされる苦労は、この貯蓄形成に際しての状況に依存する。例えば、ほとんど似たような人々から成り、同じような労働に従事する人々から成る農業共同体を想定しよう。今年は収穫が不足しているとする。この共同体の構成員は貯蓄することよりもむしろ労働することを選好するであろう。貯蓄は労働に比べてきわめて貴重であろう。次の年は収穫がきわめて豊富であるとする。共同体の構成員は苦労なく貯蓄するであろう。貯蓄は労働に比べて価値が小さくなるであろう。

貯蓄の評価にはこれらすべての状況および、さらに他人の貯蓄度合を考慮に入れること

が必要である。それゆえ、貯蓄の用途についてなされる評価を示すある種の数字が貯蓄の評価には書き込まれるであろう。この評価は現在貯蓄の利子と呼ばれているものに該当するであろう(1)。

(1) 我々は大いに問題を単純化した。現実には単一の種類の貯蓄が存在するのではなく、きわめて多数の種類の貯蓄が存在する。例えば、長期の貯蓄と短期の貯蓄とを区別する必要がある。

これと同じようなランク付けが他の商品についてもなされるであろう。そして最後には価格体系が樹立されるであろう。

もし時に人あって、そうしたものなしでもすますことができると考えるならば、それは問題が不当に単純化されたということであり、そうして量的ランク付け(価格)を質的ランク付けに置き換えるに至ったということである。完全に量的ランク付けなしにやれると考える人は誰もいない。

存在するどのような社会組織も、蒸気機関の製造のために金や青銅をでたらめに用いることはしないであろう。サハラ砂漠の真ん中に宮殿を建てるために社会の貯蓄を用いることはしないであろう。このような極端な場合においては、ある種の質的ランク付けで十分であり、量的ランク付けなしでも、ほんの少しの良識で十分である。しかし中間的な場合の方がはるかに多数である。そして実践が解決しなければならない問題は、はるかに複雑である。鉄道のレールのために鉄ではなくて金を用いるべきかどうかという問題が立てられたことはいまだかつてない。しかし鉄の代わりに鋼鉄を用いるべきかどうか、そしてどのような種類の鋼鉄を用いるべきか、は問題にされてきた。人々は日々、新しい鉄道の敷設、新しい運河の開鑿、新しい工場の建設等のために貯蓄を用いることが適切かどうかを問題にしている。

このような問題に対応するためには、たとえそれが会計上の手法としてだけにすぎなくとも、商品の価格体系と、X(経済学者の言う資本)の用途についての体系とをもつことが必要である。社会主義国家はかくして強制的にその行政の計算を確立することを余儀なくされるであろう。価格体系は、集産団体にとっての幸福の最大値を獲得できるように経済的生産を配置する問題を解決するための手段である。

この命題は数理経済学の理論を用いればもっと簡単に、一般的に、そして厳密に証明することが可能である。価格が存在するのは、人が信じようとするように、ただ売買契約が存在するからではないことを十分に理解することが必要である。この売買契約なるものが完全に廃止されたものと仮定しよう。その嗜好が知られている人々が存在するとして、その集産団体はその構成員にとっての幸福の最大値が結果するように生産と分配とを組織するためにはどうしなければならないか、が問題となるであろう。

この問題を解くために数理経済学は一連の方程式を提供する。これらの方程式に現れる未知数を確定することが問題となる。ところでそのためには、一連の補助的未知数—これこそ価格にほかならない—を利用するのが有効であることがわかる。かくして、この問題を解くために契約を考える場合には固有の実在性を有する価格が、この場合には、一連の方程式を解くための代数的手段として現れる。

見かけの上でこれほど異なっている、価格と代数的手段というこの二つはいかにして同じものになりうるのか。この場合、きわめて異常に見える偶然の一致がただ存在するだけであろうか。

偶然の一致は存在しない。契約による価格と、均衡の方程式を解くために導入される補助的未知数とが一致するのは、自由競争における値引き交渉が経済的均衡の方程式を実践的に解くための一手段であるからであり、また、この手段が、補助的未知数に訴える場合に使われる手段とほとんど同じだからである（1）。

（1）これら全ての命題の証明については、*Cours*および*Giornale degli economisti*, *mars et juin*, 1900, を参照されたい。

我々は一八九二年（*Giornale degli economisti*, mai）以降、機械的均衡についてのラグランジュ（Lagrange）の方程式（仮想速度の原理）と、経済的均衡の方程式との類似を証明した。

理論力学との顕著な類似が存在する。もし貴方が相互につながった質点体系の均衡条件を問うならば、力学はそれを解く一連の方程式を与えるであろう。その方程式から未知数を引き出すには、つながりの張力であるところの一連の補助的未知数を使うのがよい。ところで、政治経済学の方程式に価格が導入されるそのされ方はまさにつながりの張力が理論力学の方程式に導入されるされ方と同じである（1）。

（1）*Cours*, II, p.411-412

経済的問題の解決は、往々人が立てようとする傾向のある法律的、道徳的その他の問題について、予断を下すことは全くしない。すなわち、もしこの後者の問題を解決することによって分配についての一定の規則を定式化することに成功したならば、次に経済学理論が我々に教えることは、これらの規則と適合的な最大限の幸福をいかにして獲得するかという問題を解決することである。

プルードンも我々がいま考えたのとは異なる、ある明確な実体をもっており、それに資本という名称を与えている。異なる事物に同一の名称を付与するこのやり方は、容易に理解されるように、諸観念を明晰たらしめ、真理の探求を容易ならしめる上で並外れて適切である！

既に述べたように、我々が解かなければならない諸問題を曖昧語法によって不明瞭にする意図は毛頭ないので、我々は敢えて、プルードンが「資本」と呼んだものを特別の名称によって指示することとし、資本Pで示すことにする。この資本Pは我々が既に述べた資本Sとは異なるものであるが、それぞれが理論の中に導入された目的は同一である。資本Sあるいは資本Pと名付けられるものと、我々がXと名付けたその他のもの（経済学者の言う資本）とがあるとして、前者については比較的容易に証明される、あるいは証明されうると想像される命題を、後者にも拡張しうるためには、相互のあいだの混同を明らかにすることが必要である。両者を混同した論者たちが人を欺そうという意図をもっていたと我々が主張するものでないことは言うまでもない。大抵の場合、序で説明したように、彼

らは自ら思い違いをするのである。

勿論プルードンは、あたかも彼の研究において必要となったある種の実体を定義したかのようには見せていない。かれは他の論者と同じように、資本とは何かを追求している。「資本とはセーの言うように単に生産物の集積ではない。さらにはロッシの言うように、後における再生産を目的とした生産物の集積でさえない。これらはすべて資本の概念には全く対応していない。資本が存在するためには、生産物が、敢えて言えば交換によって公認されていることが必要である(1)。」このことが一つの例によって説明される。「かくして皮革は、屠殺場を離れれば、屠殺業者の生産物である。たとえ貴方がそれでもって大きな建物をいっぱいにしたとしても、それはあくまでも皮革にすぎないであろう。それは価値とはならないであろう。私としては成就されたる価値(une valeur faite)という言い方をしたい。それは全く資本ではないであろう。それは依然として生産物にとどまるであろう。この皮革が製革業者に買われると、製革業者はすぐさまこの皮革を、あるいはより正確にはこの皮革の価値を、前貸しの形で営業資金とし、その結果これは資本と見なされる。製革業者の作業によってこの資本は再び生産物となる。この生産物は、今度は長靴製造業者によって申し合わせ価格で買い取られ、再び資本状態に移行し、次いで長靴製造業者の作業によってまた生産物となる。」(P.244)。

(1) *Lettre de Proudhon à Bastiat, Oeuvres comp.* de Bastiat, V, p.244, 245.

それゆえこの資本Pは、客観的カテゴリーであるXとは異なるものである。プルードンは次のように自分の考えをはっきりと説明する。「もし世界に、全く自分一人のためにだけ生産する一人の人間、ただ一人の働き手だけが存在しているのであるならば、彼の手から生まれる生産物は、ただ生産物であるにとどまるであろう。それらは資本とはならないであろう。彼の精神は次のような言葉、すなわち、生産物、価値、資本、前貸し、再生産、消費資材、運転資本、等のあいだの区別を設けないであろう。こうした概念は単一の孤立者の精神の中には決して生まれないであろう(245頁)。このことは、「資本」という用語をいま定義されたばかりの資本Pで置き換えるのであれば明らかであろう。実際、交換ということが定義上資本Pの特徴の一つであるからには、一人の人間しかいないところでは交換は存在し得ないのであるから資本Pも存在しえないということが結果する。しかしX(経済学者の言う資本)が存在するであろう。この孤立した男も、彼が燃やすための木と納屋を建てるための木とを完全に区別するであろう。価値、前貸し、消費資材、運転資本、については、たしかにその意味を変え、新しい定義によってそれらに交換の特徴を付与することが可能であるが、しかし、もしこれらの用語が通常の意味を保持するならば、孤立した人間にとっても完全に諸価値が存在するであろう。この孤立人は、彼が毎年種子として保存する小麦がパンを作るための小麦とは全く異なるものであること、前者は小麦の栽培に欠かすことのできない運転資本、前貸しであること、消費資材とは全く別のものであることを知っているであろう。

他方、資本Pは、我々が既にのべた資本Sとは別のものである。なぜなら後者はその所有者とは別の人間によって活用されるのをその特徴とするのに対して、前者はそれを利用する人物に帰属することがありうるからである。重要な点は彼がそれを購入したということであり、もし彼が自身でそれを生産したのであるならば、それは資本Pとはならないであろう。

これまでのところはこの概念はきわめて明瞭なのであるが、プルードンの次のような発言によってやや曖昧になることを付言しておかなければならない。プルードンは言う。「それゆえ私は、土地、作業具、商品、糧食、あるいは金銭の形でつくられている全ての価値、そして生産に役立つ、あるいは役立つ可能性のある全ての価値を、資本と呼ぶ」(p.247)。先に見たところでは、成就された価値とは、交換に付された価値、と解されねばならないように思われるであろう。しかしプルードンは次のようにつけ加えるのである。「設立されるあらゆる企業において、金銭の代わりに道具あるいは原材料をその業務に投ずる企業家は、まず自分自身でそれらについての危険(risques et perils)を評価する。この評価は言ってみれば一方的であるが、これが彼の資本あるいは出資を構成する。」(p.247)これは今しがた我々に言われたこととは違っている。先には我々は現実の交換について語られ、ここではもはや一種の潜在的交換しか見られなくなっている。そしてこれはある種の対象を評価するかしないかということであり、その如何はそれらを資本Pに分類するかしないかの基準となる。その少し先でプルードンは最初の定義に立ち戻り、バスティアがそれを理解しないことを嘆いている。「商業において、例えば現実的な法的根拠を有し、法定の形式を備えた為替手形は、成就された価値と呼ばれている。…類推によって私は、家具、短靴、その他すべての生産物が成就された価値と認められるのは、それらの製造が終わったときではなく、…それらが討論によって評価され、その価値が決定され、引き渡しが実行された後である、と言う。しかもこれはただそれらを購入した者についてのみ言えることである。…彼にとって、そして彼にとってのみ、生産物は成就された価値、一言でいえば資本となる」(p.302-303)。

一つの用語をさまざまに異なる定義のあいだで漂わせるこのやり方には注意する必要がある。なぜならこれは現在の習慣だからである。このやり方を用いるときには、人は決して不自由することはない。寓話の中の蝙蝠のように、人は自分のことを状況によって鳥だと言ったり、ねずみだと言ったりすることができる。

プルードンの定義は二つの極端のあいだを揺れ動いている。一方ではある種の結論を避けることが問題であり、他方では定義を下した目的を見失わないようにすることが問題である。その目的とは次のことを証明することにある。すなわち、流通のために適当な組織があれば、資本Pと混同されているXの金利(ロワイヨ)を解消することができるということ、である。資本Pの諸特徴の中で特に交換に優越的な役割を付与する必要性はここに由来する。

プルードンの論証を厳密な形式のもとに置くためには、次のように表現する必要があるだろう。すなわち、交換という行為は一生産物を資本Pに変換し、この資本Pの時間単位の生産費は、この交換を実行するための費用に等しく、資本Pの使用のために支払われ

る金利（ロワイエ）に等しい。ところで現状においては交換は金属貨幣を使って行なわれており（1）、それゆえこの貨幣の所有者のみが生産物を資本Pに変換する能力をもつことになる。このことのゆえに貨幣所有者は自分に対してその代価を支払わせることになる。資本Pの生産費をなすもの、したがってこの資本Pの金利の起源はこの代価である。もし我々が金属貨幣に代えて使用が無料のある媒体（メディウム）を置くことができるならば、資本Pの（時間に比例する）生産費はゼロになり、結果としてその金利もゼロになるであろう（2）。

（1）*Lettre de Proud. à Bast., Oeuvres comp.* de Bast., V, p.222-223.「家屋が賃貸しされ、農地が賃貸され、期限内に売却された商品が利益（アンテレ）をもたらすということは何に由来するのか。これはまさに貨幣に由来する。あらゆる取引きにおいて税務官のように介入してくる貨幣、家屋や農地が賃貸しされるかわりに交換されることを妨げ、商品が現物で販売されるのを妨げる貨幣に由来するのである。それゆえ、追加的資本としていたるところで介入する貨幣、流通の主体、保証の手段としての貨幣、我々が支払わなければならないのはまさしくこうした貨幣に対してであり、貨幣からの返礼は便宜（セルヴィース）であり、我々が報いなければならないのはこの便宜に対してである。」

（2）*Loc cit.*, p.130.「商業上の、および抵当による信用、換言すれば貨幣資本、流通がもっぱらの機能であるところの資本、がもし無料であったならば、家屋資本もただちに無料になるであろう。家屋はもはや現実に資本ではなくなり、商品となるであろう。…」p.170.「貨幣の利子（アンテレ）、その結果として、地代、家賃、資本による収入、を廃止することが可能であるのか、可能でないのか…」。

この証明が厳密なのは資本Pについて与えられた定義のおかげである。この定義は先入観によって、現在の財と未来の財との価格の相違という考え方を無視し、資本Pという念をもっぱら交換の事実に立脚させている。

もし我々がこの概念をこのようなやり方で呈示するならば、我々はこの概念を設けた目的を達しないであろう。まず第一にこの概念が扱っているのは資本Pであり、他方現実に我々が見ているのはX（経済学者の言う資本）である。この不都合に対処する方法はすでに示されている。すなわち我々は資本PとXとの双方に同一の名称「諸資本」を付与することによって両者の混同を敢行するであろう。そうすることによって、前者についてのみ妥当な結論が全く自然に後者に対しても拡張されるであろう。明快にして厳密なる証明の主要な欠陥は、第二に、前提条件から出てくる取るに足りぬ問題に注意を集中させることである。もし我々が交換という行為にあまりに固執するならば、我々が説得しようとする人物でさえ、遂には資本PはXとは異なるものであると知覚するようになるであろう。それゆえ、定義によってひとたびこの点が確認されたならば、読者の関心をわきにそらす必要がある。これはプルードンがきわめて巧みにやることである。彼は利子（intérêt）の歴

史を物語り、その語源を探り、フランス銀行を非難し、そして力の限り、泥棒！と叫ぶ。彼は道徳的政治的考察に耽る。最後には彼はあらゆるものをごちゃまぜにし、もつれさせる。これは論争においては卓越した一つの方法ではあるが、科学的には悲しむべき手法でもある。

富と同一視される貴金属―ノヴィコフ（Novicow）氏は「金を我々の享楽の源泉とみなす、換言すれば、金を富と混同する誤謬」(1)に対して黄金快楽の（chrysoédonique）の幻想という名を与えている。この誤謬は昔からのものであり、単に換喩の文字通りに解されたものにすぎない。人は表現する際に、意味されるもの（la chose signifiée）の代わりに記号（le signe）を用いる。そして最後にはこの記号をその意味されるものと同じものとみなすに至る。用語の意味の同様な変化は、金あるいは貴金属について起こっただけではない。Pecunia という言葉は、家畜群が主要な富であった時代に我々をつれ戻す(2)。

（1）*Les gaspilages des sociétés modernes.* Paris, 1894, p.67.

（2）M.Bréal et A. Bailly, *Dict. étym. Latin.*, s.v.pecus：「古代人たちは最古の貨幣に刻まれている家畜の頭数によって pecunia（財産、所有物）を説明した。しかし、pecunia が最初は「家畜の形における富」を意味し、次いで一般的に「富」を意味するようになるということも考えられる。逆方向の意味の変化によって、近代ギリシア語の（ギリシャ語一語）は、家畜、運搬用の動物を意味している。ゴート族においては、pecu（家畜）に相当する語は faihu であり、これは「家畜」と「財産」を意味する。ドイツ語の Vieh は「家畜」、アングロ・サクソンの feoh は「家畜、価格、褒償」（ここから英語の fee「賞与」が出て来る）を意味する。サンスクリット語の paçu-s（男性）および paçu（中性）は「家畜」を意味する。」

ヴェルギリウスの次のような怒りが繰り返されるとき、すなわち

Quid non mortalia pectora cogis,
Auri sacra fames?

一般に念頭に置かれているのは貪欲である。とは言え、金、金属、あるいは貨幣に対する渇望と全く同じことをしているとしか見えない人々が存在する。これは最近トランスヴァールの戦争で繰り返されたことである。ところで事実、人々はいつの時代にも、どのような形で存在するものであれ富を奪い取るために戦ってきた。銅、錫、石炭等の鉱山は金あるいは銀の鉱山に比べてその貴重さにおいて変るところはない。勿論、輸送費に影響するような状況、また法定の価格として石炭のほうが銅よりも、銀よりも銅の方が高価であるといった状況がなければのことであるが。ボーア人がトランスヴァールに侵入したとき、金鉱の存在はまだ知られていなかった。彼らがカフィール人に対して戦争をしかけ、きわめて多数の人間を殺戮したのは、土地、すなわち別の形態における富を略奪するためである。さらにカフィール人を征服したあと、彼らを一種の奴隷とした。これもまた一種の富の形態、すなわち人間労働としての形態である。これを彼らは奪取したのである。古典古代における戦争の多くは、まさに敵方の土地を略奪し、奴隷にするためにその土地の男女をできる限り多く奪うことを目的としていた。遊牧民族は家畜群を奪い合って戦争をした。結局、人々が狙うのはあらゆる形態における富であって、ただ一つの形態における富では

ないことを全てが証明している。

Tibulle は、彼が次のように叫ぶとき、詩人としての自由を行使している。「エメラルドの緑を集め、羊毛の雪を Tyr の緋色で染めるものは誰であれ滅びるがよい。そういう人間は貪欲を生み出す（1）。」しかし、単純な良識は、人々をある種の貴重品の探求に突き動かすのは人間の美的感覚と情熱であることを我々に教えている。

（1）II, 4 :

O pereat, quicumque legit viridesque smaragdos, Et niveam Tyrio murice tinquit ovem!
Hic dat avaritiae causas……

金を富と同一視する理論は、同種の他の理論と同じように、厳密な形で表現されているものではない。この種の理論の最も明瞭な形は重商主義理論であるが、理解のされ方は一般に、大いに曖昧な状態にある。多少とも論理的な推論が表明されているというよりも、むしろある種の感情を生じさせることを目的とした用語が使われる。この点では、観念連合による詭弁に関する節でこの問題は扱わねばならないであろう。

社会の悪を金（きん）に帰するときに最初に想い起こされる観念は、我々が述べたばかりのもの、すなわち強欲と貪欲である。これこそまさに、この種の事柄における推論と論理の絶対的な下らなさの著しい例である。このような観念連合を拒絶するためには、全く科学的知識がなくとも、少々の考察があれば十分であろう。文士や小説家はしばしば、農民の土地に対する情熱、農民が土地を欲する際の強欲、土地が農民の中に吹き込む貪欲、を非常に生々と描いているのである。次に、もし人々が推論ということについて、まことに僅かであっても努力しようと決意するならば、彼らは、紙幣が金に取って代わった国々では、強欲と貪欲が消滅したかどうかを問うであろう。そうなれば彼らは、強欲や貪欲の観念と金の観念とを分かちがたく結びつけることが馬鹿々々しいことだということを悟るであろう。

次にやって来るのが富の観念である。金を持っている人間は豊かな人間である。それはマルクスの「エキュ金貨の人間」(l'homme aux écus) である。この観念は、この人物には不利な、そして彼が「搾取する」貧乏人には好意的な一系列の概念を伴う。ところで、多くの金を持つ人間は豊かであるということは本当であるが、逆の命題はまちがいである。豊かな人間は多くの金を持つということ、「エキュ金貨の人間」、あるいはルイ金貨の人間であるということ、これは真実ではない。かつては、豊かな人間とは家畜を持つ人間であり、土地を持つ人間であったが（1）、今日ではそれは、現代社会で使われている信用機構のおかげで、大量の経済的財を自由にすることのできる人間である。この機構が最も完成されているイギリスのような国では、裕福な人間は彼の財産のうちのほんの一部を貨幣の形でもっているだけである。「エキュ金貨の人間」はエキュ金貨を持たないのである。勿論彼は所有している経済的財を金属貨幣に換えようと思えば、それを持つことはできるのであるが、それは彼がしないように大いに心掛けていることでもある（2）。

（1）*Cic., De rep.*, II, 9,16 : Tum res erat in pecore et locorum possessionibus, ex quo pecuniosi et locupletes vocabantur.

（2）一国で循環する貨幣の総量はその国の富の小さな一部分にすぎない。例えば第一四章を参照。

ある個人が貯金金庫（訳注: caisse d'épargne, 日本の郵便貯金にあたる）あるいは銀行に一定額を預金した場合、その額が金属貨幣の形でそこにとどまると想像する人々がいる。時折新聞は銀行の当座預金が到達した高い数字を引用し、その金額が銀行の金庫の中で「眠っており、不稔状態にある」ことを嘆いている[1]。

（1）以下は共同資本銀行（Joint-Stock Banks）の比較的最近の統計の一つである。

一九〇一年六月三〇日にこれらの銀行の保有している額

金庫中　五九八七万（英ポンド）

利付き当座預金　三億八三六三万八千（〃）

このように手持ちの現金は預金総額の六分の一から七分の一のあいだである。

金を保有する人間の考え方はしばしば「投機家」のそれに接近する。人々はこの不可解な怪物が正確にどのようなものであるかについて余り明瞭な観念はもっていない。一つだけ確実なことがある。すなわちその怪物はあらゆる人が追跡し壊滅させなければならない背徳的で嫌悪すべき存在だということである。それを破滅させるためには蝮を殺すための場合と同じように、奨励金を支払うのがよいであろう。しかし不幸にして「進歩」がいまだそこまでは到達していないからには、少なくともそれに辛い人生を送らせ、中世のユダヤ人が扱われたのとほとんど同じようにそれを扱わねばならない。その上に、多少とも曖昧な形でではあるが、絵の内容をつくり上げるために、資本の利子、「労働」によって獲得されたものではない富、労働者の「搾取」等に対するあらゆる偏見が現われる。

その他に、金の生産を目的とする作業を質的に劣ったものとみなす傾向が存在する。金を生産する人間はその同胞たちの恥ずべき情念に奉仕し、人生にとって有用なもの、必要なものは何もつくり出さない。我々に食糧を供給してくれる農作業は明らかにより高尚な性質のものである。金鉱については我々は次のような一節を読む。「人間の欲求は彼を大地の耕作に向かわしめ、人間の悪徳は彼を鉱山の開発に向かわしめる。」

かくして人は、金が唯一の富であったと主張する結論とは逆の結論に到達する。いまや金は全く無駄で役に立たないものとみなされる。このような命題が相互に矛盾しながら同時に存在し、同じ人物たちによって同じような確信とともに表明される。しかしこれは少しも孤立した事象ではない。「群衆」の論理においては、矛盾する二つの命題が同時に真でありうるのである。

我々はアリストテレスでさえ、我々がいま述べた誤謬と共通するところをもつ一つの誤謬に陥っているのを見て驚く。これこそまさに、精神の最も卓越する資質、天才そのものでさえ、一科学の体系的研究の代りをすることはできないということのよき証明である。かくして現在でも強力な知性の人物たちが、その政治経済学において主張した命題の不条理さにおいて、際立っている。アリストテレスは政治経済学を研究することはできなかった。彼の時代にはこの学問は存在しなかったのである。しかし我々の同時代人は、この学問の扱う問題を一刀両断する前に、この学問の内容を検討することはできたはずなのであ

る。

アリストテレス『政治学』第一巻第三章の一四節と一六節のあいだには矛盾が存在する。前者においては貨幣はそれ自体において有用なものとして説明され（1）、後者においては絶対的に無意味なものとして説明されている。「実際―とアリストテレスは言う―ある人間は、いかに金があっても生活必需品に事欠くことがあり得ないであろうか。また、どれほど沢山あっても餓死を防ぐことができないような、おかしな富が存在しないであろうか。それは、貪婪な欲望が食卓の料理をすべて金に変えてしまうという、神話の中のMidasに似ている（2）。」

（1）コライ（Corai）は、文章の意味を変えてしまう一つの否定辞をテキストの中に挿入し、矛盾をなくしている。しかしこの訂正は恣意的であり、受け容れがたいものと思われる。

（2）Barthelemy-Saint-Hilaire の仏訳

アリストテレスに見られる矛盾は、貨幣が経済現象において実際に二つの役割を果たすということに由来する（1）。そして恐らくアリストテレスの天才は、経済科学がずっと後になって確認したことを漠然とながら見抜いていたのであろう。そして彼は、二つの観点を述べるその方法から結果するところの矛盾を消滅させようとは考えなかったのであろう。他方では、アリストテレスが第一四節で述べているように、貨幣がそれ自体で有用なものであるということ、すなわち、交換を便利にするのに役立つ一つの商品であるということ、これは正しい見方であることに注意しなければならない。またアリストテレスが第一六節で述べているように、富裕は金の多さにありとすることが誤謬であることも正しいのである。アリストテレスにおいてまちがっているのはこの第二の命題の論証であり、それから第一の命題との矛盾が生まれるのである。富裕は単一の商品の潤沢とその他の商品の欠如にあるのではない。Midasは、全てを金に変えたが故に餓死したのであるが、しかし、もし彼が全てのものをワインに変えた場合にも同じく彼は死するであろう。我々の社会においては、ワインを沢山もっている一人物は交換によって、彼の欲する他のすべての財をまかなうことができ、しかも法律によってワインに貨幣としての性質を付与する必要は全くない。同じくこの人物は、たとえ金しかもっていなくとも、金のもので身を飾ることの好きな人々からその他の財を獲得することによってそれらを調達することが可能であり、しかもこれは法律によって金に対して貨幣としての性質を付与しなくとも可能である（2）。

現実に、金属貨幣は富の全てではなく、富の一小部分である。金属貨幣は全てではない。しかし、それは経済現象においてもはや無ではない。それは経済現象において、財の生産と分配を容易にすることによって相応に重要な役割を果たしている。「道徳家」諸氏には申し訳ないことであるが、大地から金を採取する人間、小切手をつくる紙を準備するために働く人間、機関車、電信線、郵便局、汽船等をつくるために働く人間、彼らはそうとは知らずに、我々に日々のパンを供給すべく、また、急不急の必要を満足すべく、協力してい

るのである。経済科学はそれがどのようにして起こるのかを我々に説明する。それは別の一科学が、我々が太陽や星の出入りと信じていることが一つの錯覚にすぎないこと、太陽が毎晩海に沈むというのは全く真実ではないことを我々に説明するのと同じである。

別の誤謬はより微妙であり、少なくとも見かけの上では正しいところをもっている。我々は貨幣について語る場合、観念連合によって、貨幣が登場する経済組織、「貨幣経済」を思い出させる。この貨幣経済は諸々の社会悪について責任ありと主張され、働く人間を生産手段から切り離し、彼らを搾取することを資本家に可能ならしめたとされる。

この場合、こうした発言のうちには何か考えるべきものがある。実際、貨幣経済が支配している社会で観察される現象はそれとは別の社会で観察される現象とは異なっていることは議論の余地がない。さらに、そうした現象が貨幣経済とどのような関係にあるか、またその関係は因果関係であるかどうか、を検討しなければならない。

さらに別の問題がある。二系統の事実がたまたま随伴的である。すなわち分業と貨幣使用の拡大とである。そしてそのことによって、貨幣の使用は、働く人間を生産手段から切り離し「資本家」(1)を出現させるいくつかの事実と実際に関連するようになる。誤謬はこうした現象の原因が貨幣経済であると想定することにあり、もし現実に一つの原因なるものが存在したとすれば(現実に問題となるのは、相互依存関係であるが)、それを探すべきところはむしろ分業体制のうちにある、あるいはもっとさか上るとすれば、私有財産体制のうちにある。

(1) ここで問題になっているのは資本Sである。

(2) Cours, §276.

分業は、たしかに、働く人間が生産手段から切り離されていない組織についても考えることができる。一人の農民はその土地で小麦のみを生産し、別の農民は羊毛のみを生産する。彼らは自分の生産物を交換する。分業は、働く人間が生産手段から切り離されることなく存在する。ついでながらこのことは、この生産手段から分離の「原因」は貨幣経済ではないことを証明するものであることを確認したい。なぜならいま我々が想定した状態においても、交換を容易ならしめるために貨幣が使われるということがありうるからである。

少しくこのことを考える場合、我々は分業という言葉に余りに限定的すぎる意味を付与したかもしれない。社会は異質的な要素から構成されている。そして分業は、生産においてこの異質的な諸要素を、各要素が最もよく果たしうる役割に用いることによって成り立つ。ところで、ほんの少し観察すればわかることであるが、すべての人が節約ということについて同じ能力をもっているわけではない。社会のなかには守銭奴もいれば浪費家もおり、これら両極の中間にさまざまの水準がある。私有財産体制のもとでは、貯蓄を活用することにおいて最も有能な人間が、貯蓄をつくることにおいて最も有能な人間ではないということがしばしば起きるであろう。分業は、このような人間のそれぞれに対して、生産にとって最も適切な位置を占めさせるであろう。同じく、すべての人間が一企業をうまく管理するに必要な資質を同程度にもっているわけではない。私有財産体制のもとでは、大量の生産手段を所有する人間がそれらを活用するうえにおいて最も有能な人間ではないということがありうるし、諸事実はそれがしばしばであることを証明している。そしてその

逆も同様である。このような事情にあっては、裕福ではあるが平凡な指揮能力しかもたない人間にとっても、また、貧乏ではあるがそのような能力をもつ人間にとっても、双方がそれぞれ有している生産手段から離れることに相互的利益が存在する。社会一般にとっても利益があるであろう。なぜならそのほうが生産が増えるからである。資本家S、請負人、企業家、労働者、が登場する。このように人々の諸能力のあいだには無限の差異が存在する。そしてこの諸能力は私有財産制度のもとでは経済的財の配分には対応せず、また対応することもできないので、これを最大限利用するためには、生産において人間をその所有する財から切り離すことが必要である。さらに、よく知られていることであるが、商品の大部分について、その生産は、生産が一定数の企業家に集中しているときに、より容易になり費用がかからなくなる(1)。このことから、人をその所有から分離する、新たな、そしてきわめて強力な原因が生じる。ところで分業がこのように生産を分け、いろいろな中心にそれを集中させるにつれて、並行的に資本と生産物の配分手段が発展することが必要であり、かくして道路、運河、船舶等の輸送手段が非常な重要性を獲得し、各種の工業団体や商業団体のような配分機構が生まれ、貨幣の使用が拡大する。しかし金属貨幣は経済的財の配分を実行するについて高価な一手段である。従って最も文明的な諸国民は大部分、金属貨幣を、はるかに経済的な別の手段に換えている。すなわち銀行振替や手形等の方法である。金属貨幣はもはや売買の保証、流通の調整手段としてしか作用していない。

(1) とは言えこの集中が無制限に有利であると考えてはならない。一般に各企業分野について、集中の利益が最大になる一定の点が存在する。*Cours*, §719.

分業の利益を保持し、しかもある人間が他の人間の生産手段を利用する状態を避ける(すなわち資本Sをを廃止する)ことを欲するとすれば、ある問題が生ずるのであるが、その解決の一つは、協同団体(des sociétés coopératives)を生産全体に拡大すること、あるいは生産手段の集団的所有の樹立、つまり生産手段の「社会化」といってよいであろう。このような組織は「貨幣経済」と完全に両立することが可能である。そして現在に至るまで、何らかの種類の貨幣をどのような形であれ使用しない配分機構は見出されていない。生産手段の集団的所有は分業と共存することも可能である。貯蓄については、貯蓄者が直接に生産において貯蓄を使うことは禁ぜられ、貯蓄者は国家に貯蓄を預けなければならないであろう。彼らは専売制下の商品生産者に類似した状況におかれるであろう。例えばいくつかの国では、貴方はタバコの栽培を許されるが、収穫物は政府に売却しなければならない。

協同団体も、生産手段の社会化も、生産手段と、それを用いる人間との分離をなくすことはないということ、この点を見ることが肝要である。集団的所有の一部と私有所有とを同一視しようとすることは言葉の曖昧さを利用することである。鉄道の株を買っている一個人は鉄道の集団的所有者のうちの一人となるが、この所有は、彼が所有している農地が彼に抱かせる感情を、彼に抱かせないことは確実である。そしてまた、この所有は、鉄道を経営する人物たちの要求する煩瑣な手続きやさらには彼らの不正から彼を護るものではない。自分の仕事のためには、自分が株をもっていない別の一銀行を利用する、銀行株の所有者というものが存在する。彼らは利益配分を受ける銀行の方針とそりが合わないから

そうするのである。

すべてじうした問題はそれぞれ個別に研究されなければならず、またそれらの解決はもっぱら貨幣経済の存在によって規定されているわけでは決してない。

利子（アンテレ）と流通に関係する誤謬の多くは、我々が述べた貨幣の本性についての誤れる考え方から論理的に演繹することができるであろう。このような演繹の論理的可能性について我々は一つだけ述べよう。なぜなら実際このような演繹的誤謬は、しばしば固有の独立的存在性を有しており、理性の欲求よりもむしろ感情の欲求に応えているからである。

もし貨幣が富であり、本性上不活性で自動性をもたず、不稔性の物質であるならば、利子なるものは、何ら客観的な経済関係に基礎をもたない、合法的詐取にすぎない。Nummus non parit nummos. 「銅や金の産物、不毛のものを追い求める勿れ」と聖 Grégoire de Nysse は言う(1)。このような考え方は必ずしもつねにこれほど明瞭に表明されるわけではない。それはほとんど隠されている。そしてマルクスの場合には、この考え方はもはや、単純な観念連合に喚起されて、絵の下地にあらわれるだけであり、示唆されるだけであって表明されることはない。我々は、利子の理論のそれぞれについて、右のような考え方の影響を探ることによって、おもしろい研究ができるであろう。

（1） *Cours*, §430, note.

貨幣は富である。しかし他方、それは流通する際に消費されない。僅かな摩耗を除けば、貨幣はつねに同じ状態に維持される。ところで、富が我々にとって有用であるのはもっぱら「流通」によってである。この考え方については、一方でその学問的理解があり、他方でその通俗的な理解がある。学問的理解は、政治経済学をいくらかかじっている多くの著作家のなかに見られる。その最も完成された形は多分プルードンがそれに付与したものであろう。彼はその形を真に巧みで微妙な詭弁において展開する能力をもっていた。その例についてはもっと先で見るであろう。

通俗的形態としては、この考え方はバスティアにそのパンフレットの主題を提供した(1)。彼はそれを次のように表現している。「蓄財すること、それは人民の血管を細らせることであり、お偉方の贅沢は下層民のゆとりをつくり出す。—浪費家は自らを滅ぼすが国家を豊かにする。—貧者のパンが芽ばえるのは富者の余り物の上である。」類似の形として、気前の良い浪費家を弁護する弁護士の口頭弁論の中にもこのような考え方が見られた。弁護士は恐らく、弁護士なるものはその依頼人の利益のためにはまともな理屈もいかがわしい理屈もともに言わなければならないという原理に従っただけなのであろうが。最近も行政によって行われた差し押さえに同じような考え方が見られた(2)。経済科学についての行政の有する知識はなかなかどうして、広く大したものと思われる。

（1） *Sophismes Economiques ; Epargne et Luxe.*

（2） シャトー・ティエリーの裁判所の裁判長は、浪費家への法的忠告を与えている法規定を自らの権限によって廃棄して、裁判所による差押さえを次のような前文でもって彩っている。「一般の幸福のためには、資本が、とりわけそれが相当な量である場合には、同じ手に集中されず、固定され

ず、迅速な流通の中に置かれることが重要であることに鑑み。このことが現在、最大多数者を公共財産に関与せしめ、幾世代にもわたって一人の人物の利益になっていたものの大衆への回帰を容易ならしめる唯一の手段であることに鑑み。法的忠告が、全くあさましい耐乏生活をしている吝嗇家にも、さらにそれにもまして重大なことであるが、人間集団が自らの労働あるいは稼業によって生活しているその構成員のために、資本等のせめて正常な流通から権利として必然的に期待してよい幸福を、その人間集団から奪う吝嗇家にも、よく理解されるであろうことに鑑み。」

ある「吝嗇家」が企業の株式を引き受けて、その「資本」を鉄道を建設させるために、運河を開鑿させるために、あるいは工場を建設させるため、等に用いるとき、あるいは農業を改善するために用いるとき、あるいはそれを国家に貸付けるときには、これらの「資本」は流通しているとは見られない。それらが「流通している」ためには、それらを、浮かれ騒ぐことに費すことが不可欠である。

一九〇一年九月二一日付の『デバ』(*Débats*)は、結局のところは吝嗇家に法的忠告を発することになった、この新たな判決を愉快そうにからかっているのであるが、これが恐らく人がこのことについて語る場合の唯一可能なやり方であろう。吝嗇家への忠告は、「最も確実かつ強力なやり方で、その該当者がまずはその収入を、そしてやがては資本をも消尽するようにもっていかなければならないであろう。…忠告は、該当者に賭博の習慣と趣味を伝授するであろう。忠告は該当者を資本の賭博場の主だったところへ案内するであろう。…忠告は最後には、これが決して易しい仕事ではないのであるが、美しいドレスや宝石を自分のために作らせる愛すべき人々のなかから、吝嗇家の宝庫を雲散霧消させるのに最大の適性を証明した人々を発見することに専心するであろう。…」

このような誤謬の普及は、人々の意見形成において理性が占める割合がきわめて小さいことの新たな証明である。気前のよい依頼人を弁護するために詭弁に訴える弁護士の場合のような、問題に関係のない場合は措いても、このような見解が固有に有しうる論理的実験的価値の検証に限定すれば、少し考えただけでも誤謬を明らかにするには十分である。もし人々が自らの欲求と楽しみのために彼らが生産したものをすべてつねに消費したとするならば、文明は決して存在しなかったであろうし、人々は野生動物とほとんど変わらない状態で生きているであろう。土地の開墾と耕作、武器と道具の製造、船舶および航海に必要なものの生産、そして動物の家畜化さえ、貯蓄の形成と存在を前提している。文明が進歩するにつれて、文明が必要とする貯蓄の量は増大する。文明と貯蓄は、我々には分かちがたく結びついていると思われる。大量の貯蓄なしには、近代諸国民は道路も運河も鉄道も船舶も工場も、そして排水設備をもち土地改良され、あらゆる方法で改善された農地も持つことはできなかったであろう。

貨幣流通に関する誤謬で、過去についてはある程度大目に見ることを許す事情は、昔は貴金属を貯め込む守銭奴が存在したという事実である。実際、貴金属ばかりでなく、何らかの経済的財を蓄蔵する人々が存在するときには、こうした人々は、それとともに彼らを含む社会は、そうした財が生産に用いられたならば提供しうるかもしれない生産物を失うことになるのである。

しかし今日においては、そして文明諸国民にあっては、財産の安全のおかげで、個々人による蓄蔵はもはや存在しないか、あるいはあまり重要ではない例外にすぎない。そして

今日、吝嗇家あるいは一般に富裕な人々が金あるいは何らかの貨幣を蓄積し、それらを流通から引き上げていると考えるためには、経済現象について最低限の、最も迂遠な知識も持たずにいることが必要であり、経済現象について、あたかも盲人が色彩について語るがごとくに語ることが必要である。

第一部　完